
アンゲルとエレノア

川上彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンゲルとエレノア

【Nコード】

N5457Q

【作者名】

川上彩

【あらすじ】

ある囚人の口から語られる物語。

祖国の宗教に違和感を感じ、自由主義イシユハの学校に進学することになったアンゲル。

異国の両親、歌の才能をもち、音楽の勉強のためにアルターに向かうエレノア。

二人はアルター行きの列車で出会い、同じ学校に向かっていることを知る。アンゲルはエレノアに一目ぼれするが、エレノアはあま

り気にしていない様子。二人がそれぞれ男子寮と女子寮に向かうと、
そこで待っていたのは変なルームメイト達で……。

* 異界のお話ですが、魔法も戦闘もでてこない淡々とした学園もの
?なので、アクションが好きな人には向いていません。カテゴリー
は文学です。

牢獄 囚人11番

窓がある。

両手に抱えられるくらいの大きさで、外をのぞき見ると、灰色の塀が三分の一、残りが青い空。

子供がてきとうに描いたクレヨン画のような風景だ。

ただし、窓には鉄格子の黒い縞模様がかぶさっているのだが。ベッドと呼ぶにはお粗末なマットレスが載った台。

机代わりの木箱。

希望どおり支給された数冊のノートと鉛筆。

ここにあるのはそれだけだ。

ここは独房だ。私の名前はここでは、囚人11番という。

独房の番号が11番だからだ。

名前で呼ばれる囚人は、ここにはいない。

自分の名前など、思い出したくもない。

それにしても、私は運がいい。

他の囚人と一緒に大部屋に入れられていたら、2、3日で気が狂っていただろう。

一人でいられるということは、なによりもすばらしい。

ここなら、好きなだけ旅ができる。

ノートと鉛筆があれば、見たものをすべて記録することができる。

過去、未来、現実、空想も、とほうもない映像……。

私の知っている人々を、物語を、これからここに書き記そうと思う。

しかし、どこから話し始めればいいだろう？

あまりにも膨大な、エピソードの断片。

そうだ。

あの二人から始めよう。

明るく、美しい（あくまで、私が知っている中ではの話だが）二人の物語だ。

これを読む人間にも、私の話に慣れてもらうにはちょうどいいだろう。

時系列にも沿っている。

1 - 1 エレノアとその両親 レハルノーサ

一人の女性から、この物語を始めよう。

ここは北国イシュハ。

女神アニタをたたえて管轄区から独立したこの国は、外国からの移民を無尽蔵に受け入れて発展してきた。もうすぐ建国500年を迎える。公用語はイシュハ語だが、町にはさまざまな言語が飛び交い、肌の色も髪の色も目の色もみんな違う。宗教も価値観もバラバラだ。

そんなイシュハの東方の街レハルノーサ。

公演を終えた芸人たちが、一斉に旅支度を始めていた。テントをたたみ、囲いや骨組を撤去し、馬や象を追い立てる。ほとんどの芸人は、商業の盛んな北のセカンドヴィラか、首都か、港町ポートタウンに向かう。

ミゲル・フィリとヤエコ・ノルタの芸人夫婦も、別な大都市に向かうために荷物をまとめていた。

しかし、娘のエレノアは違った。

「アルターの学校から入学許可が下りたわ！」

エレノアが、ぶあつい封筒を持って、半ばスキップするようにうきうきしながら部屋の中をぐるぐると回った。まだステージ衣装を来ていたので、長いスカートのすそが大きく広がり、エレノアが父ミゲルに書類を見せようとしやがみ込んだ時、スカートが大きなかぼちゃのように丸くふくれた。

アルターにはイシュハで一番大きな、歴史ある高校があり、そこからほとんどの生徒がストレートで、アルターが首都の大学に進学する。規模は世界一で、イシュハ中の優秀な子供はすべてそこに送られてくると言っても過言ではない。

そんな高校から、途中入学の許可が下りたのだ。

「ここでちゃんと勉強すれば、音楽大学に行けるの」エレノアが父の顔に書類を押しあてた。「成績が良ければ、学費も出るのよ！」

「でもお前、歌なんかは」ミゲル・フィリは娘のうれしそうな顔を見つめながらつぶやいた。「大学なんか行かなくなつて、勝手に覚えりゃいいもんじゃないか」

「まだそんなこと言ってるの？」

エレノアは立ち上がり、自分のスーツケースを引っ張りだして、目についたものを適当に詰め込み始めた。ほとんど自分が集めていく大きな帽子だったが。

世界中を旅する芸人のもとに生まれたハーフの娘エレノアは、だれもが驚くほどの美貌と、驚くべき音感を持って生まれた娘だった。黒髪は母ヤエコ・ノルタから、青い目は父ミゲル・フィリから受け継いだものだ。

ヤエコは東方のアケパリ人。そして父ミゲルは西方のドウロソ人。3歳から歌い始めたエレノアは、他の旅芸人の誰よりも確実に、顧客の心をとらえた。美しい声。父も母も曲芸専門で、娘に歌など大して教えてもないのに、エレノアの歌は音程も表現技法も完璧だった。

「大学で音楽の修士号を取れば、学校で教えることができるし」エレノアは最後に残っていたシャツをスーツケースに無理矢理押し込んだ。「オペラハウスに入れるかも」

「そんなもんに入らなくても、お前は一人でもやってけるだろう」「いつしよに世界を回つてりゃ食うに困らないのに」

母ヤエコが、アケパリ風の蔦模様の弁当箱を持って部屋に入ってきた。中には『ノルタ風手抜き料理』が詰まっている。

「わざわざ余計な苦労しに行くなんて、やっぱりあんたに似たんだよ、ミゲル」

アケパリなまりの強いドウロソ語で、ヤエコが夫にささやいた。「俺がいつ余計な苦労なんかした？」

にやつくヤエコに向かってミゲルが、ドウロソなまりのアケパリ

語で抗議した。

「流れ者のアケパリ芸人を妻にしたこととか？」

エレノアはイシュハ語で、ふざけてそんなことを言った。

「流れ者なんて言うんじゃない。私も立派な芸人だ」ヤエコがエレノアの頭を指でつつついた「大いに勉強しておいで、そして大成功しなさい。でも、男にはまっちゃんだめよ」

「俺もそれが心配なんだ」

ミゲルが娘を見つめながら目を細めた。

ほんとうに、なんとという美しい娘だろう……女神が芸術のためにこの世にお遣わしになったのかと思うほどだ。きつと、女神アニタの祝福を受けたに違いない。

今までだって、父ミゲルは思い出した。娘が大きくなるにつれて、旅先でたくさんのお男たちがうちの娘を追いかけたもんだ。うまく追いついた奴もいるし、しつこく次の旅先までついてきた奴もいた……。

まあ、ヤエコがレッドタイガーを放したら逃げに行ったが……。

「大丈夫よ」エレノアが自信ありげに笑った「私、男になんか興味ないわ。歌が恋人なの。よく知っていますよ？」

エレノアは父親に抱きついて頬にキスをした。ミゲルは笑ったが、とても寂しそうだ。

まあいい、変な男がいたら、虎のえさにでもしてやろう……。

そう思っていたのだが、もちろん娘には内緒だ。

1 - 2 アンゲルとその両親 管轄区の小さな町

同じころ。

イシユハの南、教会管轄区。

厳格な女神フアナテイの信者が暮らす国だ。人々は女神の戒律に従って暮らし、週に一度教会で祈りをささげ、罪深い行為を絶対に許さない。他の神を信仰することも認められていない。

その管轄区の、人知れぬ田舎町の、ある小さな家の中。

「イシユハは文明の進んだところだ、そこで暮らすことはいい勉強になるだろう。でもな」アンゲルの父は深くしわの刻まれた眉間にさらに重い懸念を足し、これ以上ないほど深刻な顔で息子に忠告した。「お前はフアナテイ教会の敬虔な信者だ。それを忘れずに正しく生活しろ。アニタ教のやつらはおそろしく怠慢で放蕩だというが、決して流されるな。金の貸し借りはするな。放蕩者に近づくな。酒の誘いは断れ。女にも手を出すな。真面目に勉学に励め」

隣では母親が、心配そうな顔でアンゲルを見つめている。
言葉が通じるとはいえ、違う神を信仰する異国の学校に息子を送るのは、心配でたまらないのだ。

「わかつてるよ」

そう答えて、わざとらしいほどにこやかに笑いながら家を出たアンゲルだが、内心穏やかではなかった。

家を正面から見上げる。両親は見送りには出てこない。管轄区の習慣では、子供が巣立つときに見送るのはいけないことなのだ。一人前の大人になるための儀式である。

玄関から数歩歩き、振り返る。

今にも崩れそうな屋根（実際一度台風で崩壊した）と、玄関に飾られている、女神をかたどった古ぼけたレリーフを見つめながら、アンゲルは、

『俺は敬虔なフアナテイ教徒なんかじゃない！』

『女神の存在なんか信じられないから、イシュ八に行くんだ!』
そう家に向かって叫びたくなった。でも、それはできなかった。
この国で『女神を信じていない』などと口走ったらどういうことにな
るか、アンゲルはよく知っていた。

同じ学校に通っていたある少年が『女神なんているとは思えない』
と教室で言った。

教師が憤慨して少年をどこかへ連れて行った。

その後、少年の姿を見た者はいない。

アンゲルの頭に、懲罰室とか、退学とか、宗教裁判という文字が
浮かんだ。

あわてて頭を振った。そんな単語とは縁のない国にこれから行く
のだ!

とにかく、あのけちな……いや、清く正しく貧乏な両親が、狂信
的な……いや、敬虔なるファナティ教会の信徒が、あの放蕩女神ア
ニタの国イシュ八の学校に行くことを許可してくれたのだ。これだ
けで奇跡だ。

そのことだけは、ファナティ様に感謝してもいいだろうとアンゲ
ルは思っていた。

しかし、別な女神を信仰している国というのは、いったいどうい
うものだろう? 新聞や本でその存在を知ってはいたが、アンゲルに
は『別な信仰』というものがどんなものか、想像もつかなかった。
神話では、女神アニタは毎晩パーティーを開き、騒ぎ、飲み、食い、
音楽を愛し、地上から人を招いたというが(それで厳格なファナテ
イとは仲が悪いらしいが) そんな女神アニタの信者というのは、ど
ういうものだろう?

俺自身たいした信仰なんてもってないからな。なおさらわかるわ
けがないな!

まあいい。行けば分かるだろう。

アンゲルは力強く歩き出した。未知の国に向かって。

駅まで10kmほど歩かなくてはいけない。車もバスもない。

土埃が風に舞う。最近晴れた日ばかり続き、
空気が異様に乾燥している。

まずポートタウンへの列車に乗らなくては。

1 - 3 ヘイゼル・シュツティファント シュタイナー邸

「エブニーザは絶対、イシュハの学校に行かせるべきです！」

同じく管轄区の、大富豪シュタイナーの豪邸の一室。

ヘイゼル・シュツティファントが、スポーツの宣誓のような口調で宣言した。

彼は北の国イシュハの大富豪の息子であるが、アルターの学校で問題を起こし、停学になったため国を抜け出して、シュタイナーのところへ『経済のお勉強』と称したバカンスにやって来た少年である。

全ては父親のコネがなせる業である。

「そうかな？」ヨシユア・クルツ・シュタイナーは、デスクの上で華麗な革表紙の本をめくり、愛用のモノクル（片メガネ）をいじりながらつぶやいた。「私は、ここにおいたまま、家庭教師をつけようと思っていたんだが。なんせあいつは音やら声やら、他人を怖がるだろう？監禁の後遺症で」

「だからこそですよ！シュタイナーどの！」

ヘイゼルが書斎の机にバン！と両手をたたきつけて、シュタイナーを覗きこんだ。

シュタイナーはこの呼びかけ方が気に入らなかつたのか、顔をしかめた。

「確かにあいつは何にでも怯えるし、時々妄想めいたことをしゃべったり、勝手にパニックに陥ったり、困った奴ですよ。可哀相な奴です。さんざん暴力をふるわれたんだから仕方ありません。でも、今のうちに普通の、世間というものに慣れておかないと、本当に将来は危うい。今やみんな競争しているのですからね。甘やかしていたらあつという間にどん底に落ちちまう。それに、あいつは素晴らしい才能を持っているのですぞ！難解な本も簡単に読むし、学校に行つてない癖に何ヶ国語も読めるし（しゃべるのは母国語でも苦手

なようですがね！）株の暴落も、世界情勢の行方もぴたりと当てて
らんです！予知能力というのか洞察力と言うのか、とにかく、ここで
いつまでも被害者扱いしていたのでは、せつかくの才能がつぶれま
すよ。これはあいつだけじゃなく、あなたにとっても損失じゃない
ですか？」

シュタイナーは、選挙演説のように勢いよくしゃべるこの少年を、
うさんくさそうな顔で見つめていた。

「ご心配なく。俺もアルターの学校に戻る決意をしたのです（ほん
とは二度と行きたくないんですけどね、あんな古臭い年寄りだらけ
の監獄にはね！）あそこの寮は二人部屋だ。俺があいつと同じ部屋
に住んで面倒見ますよ」

「そこまで君がエブニーザに入れ込む理由は何だね？」

「あいつは使えるからですよ」

ヘイゼルは、策略を含んだ、そして、それを隠さずに前面に押し
出した上目づかいで、目の前の大富豪の顔を覗き込んだ。

「他に理由が要りますか？」

不敵に笑うその顔つきは、とても十代の少年には見えなかった。

壮年期を過ぎて経験を積んだ策略家の顔だった。

「いかにもシュツテイファントらしい発言だな！」

シュタイナーが人を呼んだ。執事が入ってきた。わざとらしくモ
ノクルに手を当てながら、何か書類を見せて指示を与えているよう
だ。

小声で話していたのではつきりは聞こえなかったが、ヘイゼルは、
事態は自分の希望どおりに動いていると思った。なぜなら、シュタ
イナーの小声の端々に「アルターの学校……医者は近くに……
そついう子供のサポートは……」というフレーズが聞こえたからだ。
「いいだろう。費用は出そう」執事が去ったあと、シュタイナーが
表情を変えずに言った「ただし、エブニーザ自身が行きたいと言っ
たのであれば、の話だ」

「行きたいに決まっていますよ」

ヘイゼルが自信ありげに笑った。

1 - 4 エブニーザ ヘイゼル シュタイナー邸の図書資料室

「僕はここから出たくない」

シュタイナー邸の図書資料室。

端正な顔の少年がテーブルの下にもぐりこんで震えている。ほとんど真っ白に近い灰色の目は不安げに瞬きを繰り返し、両手は美しいブロンドの髪をぐしゃぐしゃと引っかき回している。

誰が見ても、病的に神経質だとわかる動きだ。

「なーにを今頃わけのわからんことを言ってるんだ!?」ヘイゼルはエブニーザの肩をつかみ、勢いよく彼をテーブルの下から引きずり出した。机の本が床に落ちた。「お前が言ってたんだろっが! エブニーザ! 学校に行ってる自分が見えたっつてよ!」

「確かに見えましたけど」エブニーザは震えながら目を見開いている。「そんなの、ずっと先の事だと思って……急すぎますよ。来週? せめてもう一年くらい」

「アホ! お前の年じゃもう学校に行くのが当たり前なんだよ! (俺は例外だ。イシュハのバカ学校が性に合わなかったんでな!) 一年も遅れを取ってたまるか」

「無理ですよ……たくさん人がいるところに入っていくなんて」

エブニーザがまた机の下にもぐろうとしたので、ヘイゼルが足で彼の前をふさいだ。

「無理もくそもあるか! もう決まったんだ!」ヘイゼルはせせら笑うような笑みを浮かべた。「シュタイナーもその気だ」

「えっ」

エブニーザの顔から一気に血の気が引いた。今にも死んでしまいたいそうさ。

「ここにいたらお前のためにならないから、学校に行つて才能を生かさせてよ」

明らかなる嘘であるが、ヘイゼルはこういう策略が大好きである。

「で、でも、そんなこと」

「ドゥーシンも言っただろうが、早めにシュタイナー爺さんのところからは出たほうがいいってな」

ドゥーシンというのは、二人の共通の友達である。

「確かに言っていたような気がしますが、それは、僕がもつとまともになつたららの話で」

「安心しろ！お前がまともになる日なんか一生来ない！」

ヘイゼルが裁判所の判決文を読み上げるように宣言した。

エブニーザは凍りついたように動きが止まってしまった。

「……ここにずっといたら、の話だよ。そんなに動揺するなよ」

エブニーザがあまりにもショックを受けたようだったので、ヘイゼルはあわてて優しく付け足した。

「それに、いつもお前が夢に見てるあの女の子、いるだろ？」

エブニーザの目がぱつと輝いた。顔色はまだ最悪だったが。

「お前がまともになって、少なくとも生活できるくらい収入がないと、彼女を助けられないぞ？そのためにも学校で勉強しろよ。才能は活かすもんだろ？」

「それは……」ためらいつつも心が動いたようだ。「そう、かも、しれませんが、ね」

「そうそう。それじゃ俺、学校と家に電話すつから」

「えっ？」

呆然と床に座り込んでいるエブニーザに背を向けて、ヘイゼルは部屋の隅に置かれている、金色の装飾が細かく入った年代物の受話器を取った。

そして彼はまず両親に『エブニーザと同室じゃないと学校に戻つてやらないぞ！』と脅しの電話をかけ、アルターの学校の事務に『部屋を一つおさえる！シュツティファント様のご帰還だ！』とやり脅し（いや、本人は普通の事務連絡のつもりだったのだが）の言葉を贈ったのだった。

1 - 5 アンゲルとエレノア ポートタウン

なんだここは。車だらけじゃないか！

国際都市ポートタウンで列車を降りて外を見たたん、アンゲルは都会の風景に圧倒された。

どこまでも連なる真新しい家、信じられないくらい高いビルの連なり、地面を埋め尽くすように密集しているアパート……そして、無限に走っては消えて行く大量の自家用車。空気からは排気ガスのくぐもった匂いがし、遠くの地平線近くの空気も黒っぽく淀んで見える。

ポートタウンは南半分が管轄区領、北半分がイシュ八領で、駅はその境界線に建っているのだが、アンゲルが見ているのはイシュ八側だ。

アンゲルが育った小さな町では、車はめったに通らず、持っている人間も、教会の関係者が公務員くらいだったので、この、だれもが車に乗って移動している光景は、アンゲルにとってかなりの衝撃だった。乗り換えの時間も忘れて、しばらく外の光景を呆然と眺めていた。

こんなところで、やっていけるんだろうか……？

ホームの人の多さにも圧倒されていた。列車の発車時刻が近づくと、アンゲルが今まで見たことのある人間の総数よりもさらに多い人の列が、一斉にホームに現れる。そして、列車が到着すると、入れ替わりにもっと多い数の人間が列車から吐き出される。

いや、とりあえずアルター行き列車に乗らないと。

アンゲルは頭を振って、額に手を当てた。頭の芯が締められるように痛みだした。ふらふらと外に出るための通路を探し、駅員に『アルター行きはどこですか』と聞き、あと5分で発車すると言われて、あわてて全力疾走して4番ホームまで走り、ドアが閉まるぎりぎりのところで列車に飛び込んだ。

疲れた……。

そのまま通路に座り込んでしまいたかったが、ドアの横に立っている客が、不審なものを見る目でこちらをうかがっていることに気がついたので、座席を探すことにした。

急に走ったせいで、荒くなった息がなかなか落ちついてくれないとにかくどこかに座りたかった。3つほど車両を通り過ぎたが、混んでいて、開いている席がない。

次がだめだったら通路で倒れてやろうと思って4両目のドアを開けると、二人掛けの椅子の背もたれから、帽子らしきものが出ているのが目に入った。

隣の席には誰の頭も見えない。

「ここ、空いてますか？」

前に回って女性にそう聞いた時、アンゲルは驚きで息が止まった。なんとという美人だ！

そこにいたのは、アンゲルと同じ年頃の女性。しかし、全く別の世界から来たかのように美しい。だった。頭には古風な、花飾りのついた、紺色の、つばの広い帽子をかぶっている。黒髪は美しいつやをもっていて、肩の周りにゆるやかなウェーブを描いている。目は快晴の空のような濃い青だ。肌は光を放っているように見えるほど白い。黒髪と青い目という組み合わせをアンゲルは初めて見た。それに、穏やかな笑みを浮かべているその顔は、まるで聖女のような。服装は変わっていた。昔の絵本や芝居で見るとような、古びた、乗馬服のようなスーツを着ている。まるでこの座席だけが、何百年も前に戻って、貴族の令嬢と向かい合っているようにも思える。

「空いてるわ……どうしたの？」

アンゲルは、女性が不思議な顔つきで『座れば？』というしぐさで手を動かしているのによく気がついた。それまで彼女の顔を見たまま動けなかったのだ。

「すみません」

アンゲルは真っ赤になって席に着いた。隣の女性から何か、嗅い

だ事のない香りがただよってくる。香水か？化粧か？アンゲルは女性の横顔をじつと見つめた。美しい。

「私の顔に何かついてる？」隣の美女が彼に笑いかけてきた。「人の顔をじーつと見るの、失礼じゃありません？」

「いや、あの、すみません」アンゲルはその微笑みにすっかり心を奪われた。「どこに向かっていているんですか？」

「アルターの学校に行くの。入学許可が……」

「俺もアルターの学校に行くんです！」アンゲルは頬を紅潮させて叫んだ。「これはすばらしい偶然だ！何を学ぶんですか？いや、大学までは専攻なんてないか、俺は心理学をやるんですよ」

「心理学？」彼女は、アンゲルの興奮した様子を怪しんでいるのか、目元を引きつらせて苦笑いをした。「人の心を読むの？」

「ああ、みんなそう言うんですけど、ちよつと違うんですよ。人の行動を分析して『こういう傾向がある』っていうことを探る。べつに心を読むわけじゃないんです。それに、俺が目指しているのは心理療法士、臨床心理士っていうんです。聞いたことがないですか？」

「殺人事件の被害者のカウンセリングをしてる人？」

美女が少し首を傾けた。ますます可愛らしく見える。

「そうそう、でも、ほんとうはもっと一般的な悩みも扱うんですよ。離婚とか浮気で悩んでいる人とか、仕事上のストレスとか、試験前にうつ状態になった学生とか、そういう人を援助するんです。そういえば、学校にもカウンセラーが配置されているでしょう？」

「そうなの？」

「そういう時代なんですよ。病気を治すだけじゃなくて、心のほうもみてやらないといけなくなった。特にイシユハは精神病患者が激増してるらしい。だから学問も進んでいる。これはたぶん急激な近代化の弊害……あ」

アンゲルは、自分ばかり延々としゃべり続けていることに気がついた。

「しゃべりすぎたみたいだ。君は何を学びに？」

どうせ結婚するまでの暇つぶしだろうな、とアンゲルは頭の片隅で思った。女性なんてのはみんなそうなんだろう。

町の女の子たちを思い出す。何もかもが遅れている管轄区でも、学校はズいぶん前から男女平等になっているのだが、アンゲルの知っている同級生の女子たちはみな、学校の勉強なんて『花嫁修業』の一環くらいにしか思っていないように見えた。何か集まりがあると、町で一番かっこいい男とか、財産のある家の息子とか、公務員の息子なんかは女の子が群がっていく。アンゲルとその他『財産も地位も容姿も何も持ってない』男の子たちは、遠巻きに彼らを眺めているしかない。

「音楽よ」

エレノアが即答した。

「音楽？」

「私、歌手なの。両親が旅芸人で、私も一緒に仕事をしてきたわ」「じゃあ、もうプロなんだね？」

「プロよ」美少女が足元に置いてあった小さな赤いバッグから、カードを取り出した。「エレノア・フィリ・ノルタ。フィリはドウロソ人の父、ノルタはアケパリ人の母。どっちもマイノリティーだけど、私はオリジナリティーだと思っているの」

「素晴らしいね！」

何が素晴らしいのかはアンゲル自身よくわからなかった。でも、今日の前にいる美女は、過去に出会った女の子たち（管轄区の、真面目に勉強しない、ほぼ全員『公務員か金持ちの花嫁希望』の）とは、全く違うタイプの人間だということは理解した。

満面の笑みを浮かべながらエレノアのカードを受け取る。そこには、ピンクの地に赤い文字で彼女の名前が印刷してあり『歌の仕事、大歓迎』と小さな文字で添えてある。

「あなたの名前を聞いていないわ。心理学者さん？」

「アンゲル・レノウス」アンゲルは握手を求めて手を差し出した。「母親がこの子は天使だって、それがそのまま名前になった、かなり

「恥ずかしい」

「アンゲル」 エレノアが彼の手をとった。「いい名前だわ。戯曲に出
てきそうね」

アンゲルはその手ごとエレノアをひっぱって、抱きしめたい衝動
に駆られたが、そんなことをしたらただの変態だと思って、必死で
耐えた。

「実際古典には出てくるが、天使なんてみんな脇役で出番が少ない
よね」

「まあ」

エレノアは自分の話を面白がっているようだ。アンゲルは嬉しく
なって、彼が目指している心理療法士の話を始めた。エレノアは、
音楽大学に行つて修士号を取るのが目標だと言った。アンゲルは、
「心理療法士も、修士号がないと資格が取れないから、俺たちつて
似たようなもんだね」

と、無理矢理エレノアと自分を関連づけて喜んでいた。

そんな話をしているうちに列車はアルターにたどり着いた。アン
ゲルは、エレノアの大きなスーツケース（『何が入ってるの?』と
聞いたら『衣装よ』と答えた）を駅の出口まで運んであげた。エレ
ノアは昔の貴族のような大げさな一礼をして、それが服装とあまり
に合っていたのでアンゲルが大笑いした。ついさっきまでイシユハ
の街に圧倒されていたことも忘れて、二人でアルターの学校の門を
くぐり、女子寮の前で別れた。

「きつとまた会えるよね?」

「同じ学校だもの。見かけるわよ」

エレノアが女子寮の中に入っていく。その後ろ姿を見ながら、ア
ンゲルは、

『これは運命だ! 運命なんだ!』

と、若い男にありがちな勘違い発言を、頭の中で繰り返していた。

1 - 6 ヘイゼル エブニーザ 男子寮の事務室

「3人だと!?!」

アンゲルがエレノアと列車の旅をしていたころ、アルターの学生寮の事務室で、ヘイゼル・シュツティファントがカウンターに向かって叫んでいた。攻撃的な青い目は見開き、今にも目玉が飛び出しそうだった。

「ここはみんな二人部屋だろう?」

「それが、都合により3人で一部屋使ってもらうことになったんですよ」無愛想な事務員が、何の責任も感じていないように、平然と言い放った。「学生が多くてね」

「どういう都合だそれは!」ヘイゼルがカウンターを両手でバン!と叩いた。「俺はエブニーザと二人なら戻ってもいいって言ったんだぞ?それが何だ?3人だつて?部屋にはベッドルームは2つしかないだろうが!」

「一人はソファアに寝るとか、ご自分でベッドを一つ買うとか。お金はあるでしょう」

「お前は俺をバカにしてんのか!?!」

ヘイゼルの叫び方がどんどんヒステリックに甲高くなっていく。

「ヘイゼル……」後ろでその様子を見ていたエブニーザが、弱々しい態度で割って入ってきた。「いいですよ、僕はソファアでも床でも眠れますから。慣れて……」

「ダメだ!お前はもう一生分床で寝ただろうが!」ヘイゼルがエブニーザを怒鳴りつけ、そしてくるりと事務に向き直ってまた怒鳴り始めた。「もう一人が到着する前に何とかしろ!さもないと、『3人目』は俺に暴行を加えられて実家に強制送還つてことになるぞ!」

「ヘイゼル!」

エブニーザが甲高い声で叫んだ。ヘイゼルが振り返ると、本当に今にも声を上げて泣き出しそうな、涙でうるんだ目でこちらを見て

いるではないか。

「わかった、わかった」

両手を振って出口に向かう。そして振り返り、高慢にカウンターを指さして、

「明日だぞ！明日！明日までに何とかしろ！」

と怒鳴りつけて、ヘイゼルは廊下に消えて行った。エブニーザはあわてて後を追った。

「どんなやつが来るのかね。見ものだね！いじめてやろうじゃないか！なあエブニーザ」

「きつと何も知らずに、二人部屋に入れると思って来るんですよ。

僕らみたいに」

「知らないんなら『もう満杯です』って追い返してもいいんじゃないか？」

「ダメですつて！」

そんな話をしながら廊下を歩く二人を、寮の学生が興味深い目で見ていた。

ヘイゼル・シュツティファントは、イシユハでは有名な大富豪の跡取り息子で、おしゃべりで、わがままである。学校ではすでに問題児として有名である。学費の総額より、破壊したものの弁償金額のほうがはるかに多い。

一方、エブニーザは常に何かにおびえてびくびくしていて、しゃべり方が奇妙に丁寧だ。出身地も不明。

そんな二人がなぜか同じ部屋に入っている。学生たちはみんな、ヘイゼルが、面倒なことを押しつけるためにわざと、あの弱々しい少年を連れてきたに違いないと思った。

1・7 エレノア 女子寮の事務室

「もうだめ！あんな女とこれ以上一緒に暮らせない！」

女子寮の事務室、ある女生徒がそんなセリフを残して学校を去ろうとしているところに、エレノアが入ってきた。カウンターでわめいている女性の、ボリュウムがありすぎてソフトクリームをさかさまにしたようになってる髪に驚きながら。

「ひどいヒステリーなの！怒鳴りつける、物を投げる……きのうも私のフェイススクリームのビンを投げたんですよ！ロンハルトからの輸入品ですごく高かったのに！フランススって、何がきっかけで怒りだすか全然わからないんです。一緒にいると疲れて気が変になりそう……」

そんなソフトクリーム頭の話聞きながら、エレノアは『困った人ってどこにでもいるのね』と思っていた。

彼女は両親と世界中を旅していたので、やっかいな人間には山ほど会っていた。演奏中にけちをつけて壇上上がったきたり、曲芸や手品の種明かしをして『こんなのは子供騙しだ！』と文句をつけてきたり……。

ソフトクリーム頭が泣きながら出て行ったあと、エレノアがカウンターに近づくと、事務の女性が不自然なほどにこやかな笑いを浮かべて、

「ようこそ。ちょうど部屋が空いた所ですわ」

と、妙にうきうきした発音で言った。

エレノアも笑ったが、なんだか嫌な予感がした。

「あなたはとてもラッキーよ。この寮で一番格式の高い家のお嬢様と一緒に」

「格式の高い？」

自由主義の国らしくない表現だなあとエレノアは思った。

「ええ。イシユ八名家のご令嬢よ。こんなことめったにあるものじ

やないのよ！この国で2番目に資産のある家ですよ。財界や政界にも関係者がたくさんいらつしやるの。このお嬢様と知り合えたら、あなたの世界もぐつと広がりますよ！」

事務の声がどんどん大げさに、早口に、甲高くなっていく。

エレノアは逆にどんどん心配になってきた。

「私、そんな偉い人とは合わないと思うけど……両親は二人とも芸人ですし」

「いいのいいの！そんなことこのイシユハでは誰も気にしないわ。自由国家ですからね」

事務員が押し付けるように書類を差し出した。

……じゃあなんで『ご令嬢』とか、『ラッキー』とか言うの？

矛盾を感じたが、エレノアはだまって微笑みながら、手続きを済ませた。

1 - 8 アンゲル 男子寮の事務室

「3人部屋!？」

こちらは男子寮の事務。

叫んでいるのはヘイゼルではなく、今到着したばかりのアンゲル・レノウスだ。

「2人部屋って聞いてたんですけど？」

「それが、学生が多くてね、一部屋三人で使ってもらわんと入らないんだよ」

「それなら、僕はもう一つの安い寮に入りたいんですが」アンゲルは学生案内に載っていた、貧しい学生が入る古い寮のことを思い出した。「僕は金持ちじゃないので、そちらのほうが合っているかなと前からそう思ってたんですが、親が承知しなくって」

「あそこはね、両親がいないとか、外国からの移民で余分な財産がないとか、そういう人が入るところだからね。実際、事件も多いんだ。麻薬とか、不法なブランド物の密売とか。生徒同士のケンカも絶えないし」

「僕は管轄区の間で、イシユ八人じゃないから、立派に外国の移民だと思えますけど」

「しかしね、君のご両親から『正しい生活をさせてください』っていう書簡が来てるんでね、ここに入ってもらわないと困るんだ。実は手続きも済んでいる」

「何だって!？」

アンゲルはそんなことは知らなかったので、驚いて大声を上げた。なぜそんな余計なことをするんだ!？

「そんなの無視したっていいじゃないですか、実際この料金を払うのはきついですよ。その……アルバイトを探す予定なんです」

アルバイトが見つかるかどうかが問題だな、とアンゲルは思った。頭の中で、自分の持ち金を必死で計算したが、何度数えたところで

2カ月も持たない。生活費を送金できるほど親は裕福ではない。学費だけで手いっぱいだろう。

「そういうわけにはいかないんだよね。いちおう学校ってのは保護者の許可があつて入るもんだから」

「学校じゃなくて、寮の話をしてるんですよ!!」アングルの声が神経質になつてきた。「生活費の話をしてるんです!」

「とにかく、君はここに入ってもらうから」無愛想な事務員がプリントを差し出した。「寮の内部。ここが君の部屋。もう二人入ってるから、せいぜい仲良くするんだね。それと、先に言つとくが……」

事務員がぎよろりとした目でアングルを睨んだ。アングルは怖くなつてきた。

「同じ部屋に、ヘイゼル・シュツティファントがいる。覚悟したまえ」

何かの刑の宣告のような調子で、事務員がそう言った。

アングルは、事務員が何を言いたいのかわからなかった。

シュツティファント?……あれ?聞いたことがあるような気がするが……。

「何か問題なんですか、その、シュツ……えーと、何でしたっけ?」

「何だ、知らないのか」事務員が呆れた顔をした。「じゃ、今すぐ部屋に行きなさい。私が何を言いたかつたかすぐにわかるから」

事務員はそう言うと、奥に引ッ込んでしまった。

アングルは渡されたプリントを見ながら、ゆっくりと廊下に向かって歩き始めた。

やれやれ。2人部屋に3人が。これはもめそうだな……。

1 - 9 エレノア フランシス 女子寮の最上階

「何よ、その変な格好は」

エレノアが部屋の重いドアを開けたとたん、不機嫌な、攻撃的な声が耳に入ってきた。

ここは女子寮の最上階。

部屋の窓辺に女性が立っているのが見える。

逆光で顔が良く見えないが、スタイルがいいことがそのシルエットからわかる。

マネキン人形のような体のラインが、くつきりと浮かび上がっている。

美しいな、とエレノアは思った。

「今日から同室のエレノアです。よろしく……」

「その変な服は何だっけ聞いてるのよ！」

女性が怒鳴った。

エレノアは瞬きをした。

何で怒ってるの？

「これ？これは馬に乗る時に着るものよ。かなり昔のね。私の家族は旅芸人だからこんな服ばかり持ってるの。100年戦争時代の衣装とかね。実際馬にも乗るわよ」

エレノアが何の気なしにそんな話をすると、

「旅芸人の娘がわたしと同じ部屋？事務のやつら、何考えてやがんのよ」

不機嫌な声、お嬢様にしては乱暴な言葉遣いと共に女性が近づいてきて、その顔が少しずつ、はつきりと、見え始めた。

意思的な、つりあがった眉と目。その視線の鋭いこと！まるで野生動物のようだ。エレノアは母が曲芸のために飼っていたレッドタイガーを思い出した。獲物を睨む目つきだ！

イシユハ・ヴァイオレット（イシユハの国旗の紫色）の縦縞の入

ったブラウスと、黒いロングスカート。地味な服装だが、材質は見るからに高価で、どこかのブランドのものだろうとエレノアは思った。

美しい金髪は頭上でまとめられていて上品に見えるが、口元が不機嫌に歪んでいて、全体の高貴さを台無しにしている。左手の中指には大きなアメシストのはまった金色の指輪が見える。

機嫌が悪そうだな……。

エレノアは長旅（と、列車で一緒だった変な男の長話）で疲れていたもので、今すぐベッドに倒れこんで寝たかったのだが、そういうわけにもいかないようだと言ったと覚悟した。

「エレノア・フィリ・ノルタよ」

エレノアは自分から手を差し出した。

金髪の女性は、その手をじつと、まるで、汚いものかどうかを判断するような見下した目で観察し、しかたないわね、というふうに自分の手を一瞬重ねて、すぐに戻した。

「フランシス・シグノー」

「綺麗な名前ね」

「古臭い、ださい名前よ」フランシスが腕を組んで、見下ろすような格好でエレノアを睨んだ。「あなた、どこの出身？イシュハではなさそうね？」

「父がドウロソ、母がアケパリよ」

「まあ！」フランシスが嘲笑うような笑みを浮かべた。「どちらもイシュハと戦争をした国じゃありませんか！シグノーの娘のところにもんな子を送るなんて、ここの事務って挑発的ね？そう思わない？」

「他に空き部屋がなかっただけよ」

「フン」フランシスは鼻先で笑った。「そんなお人よしな発言はやめなさい。ここはある意味、戦場よ？甘いこと言っていると騙されるわよ」

「誰に？」

「誰に……いろんな人よ！いちいち聞くんじゃないわよ！」

フランシスはヒステリックに叫ぶと、右側のドアを開けて中に入り、バン！と勢いよく閉めた。そして、

「あなたの部屋はあっち！」
と叫んだ。

エレノアが逆側を見ると、もうひとつドアがあるのがわかった。

ああ、ようやく寝れる！

エレノアはスーツケースを抱えると、勢いよく『自分の部屋』に飛び込んだ。スーツケースを放り出し、勢いよくベッドに飛び込む。体全体が大きく跳ねた。柔らかい。

しばらくベッドの上でまどろんでいたが、ふと起き上がり、窓の外を見ると、そこには信じられないほど広く高い空と、どこまでも続く街並み。

空は暗くなり始めていて、街の明かりが無数の星のように大地を照らしている。

空と大地が逆になったようだ。

とエレノアは思った。以前ドウロソの荒野を旅した時、空には満天の星、地面の方は荒野だから、ごっごつした岩だらけ。建物もなく、夜は真っ暗になった。

ここでは逆に大地が光で満ちていて、空には星が見えない。

本当に来ちゃったんだわ……。

エレノアは窓の外を眺めながら、自分がこの場所にいる不思議を思った。

1 - 10 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮の部屋

「おーお来たか、迷える三人目よ！」

アンゲルが指定された部屋に入ると、劇のせりふのようによく通る声が響いてきた。

見ると、そこにはソファアークが二つ、テーブルが一つ、左右にドアがそれぞれ一つずつあり、そのうち一つの前に座り込んでいる男がこちらを見てにやにやと笑っていた。季節に合わない、暑苦しい赤いジャケットを着ていて、染めたのか、髪は茶色と金髪が混じって不思議な色になっている。そして、見るからに人を軽蔑している笑いを浮かべ、偉そうにふんぞり返ってドアをふさいでいる。

もう一つのドアの前にも少年が座っていたが、こちらはちぢこまっつていて、いかにも気弱そうだ。

「御覧の通りここには二部屋しかないんでね、お帰りただいこうかな？」

劇画のようなしゃべりの男が、嘲笑うような目でアンゲルを睨んでいる。

「僕、本当はこんなことしたくないんです」

気弱そうな少年がつぶやいた。こちらは学生らしく、白いシャツに黒のスラックス姿だ。

アンゲルはその少年のあまりの肌の青白さに驚いた。見るからにか細く、体が弱そうだ。

しかも目が白い。

アンゲルはその奇妙な目の色が気になって、じっと少年の目を見つめてしまった。

目が白いな。いや、グレーか？

いや、色がないぞ？なぜだ？盲目か？

「エブニーザ！」劇画男があきれたような声を出した「あー、俺はヘイゼル。ヘイゼル・シュッティファントだ。君も聞いたことがあ

るだろう?」

「ない」

「えっ?」

アンゲルが白けた顔で即答したので、ヘイゼルの目が点になった。「シュツティファントだぞ」ヘイゼルが立ち上がって、アンゲルに近寄ってきた「聞いたことないか?」

「俺は管轄区から来たんだよ。ティツシュファントムなんか知らないね」

「シュツティファントだ!人をティツシュお化けにするんじゃない!」

ヘイゼルが叫んだ。耳に響く大声だ。

「ティツシュファントム……」

目の白い少年が、くすくすと笑いだした。

宗教画の天使みたいだな。

アンゲルは笑っているエブニーザを見てそう思った。青白すぎる顔色は除くとして、明るい金髪、奇妙な白っぽいグレーの瞳、端正で美しい顔立ち、笑った顔の優しさ。

確か、エリ・クレマーシュが描いた女神の絵に、そっくりな天使が描かれていたような気がする。美術の教科書に載っていた……。

「そっちの君は、何て名前だっけ?」

アンゲルはヘイゼルを無視して、気弱そうな少年に話しかけた。

「エブニーザ……デリス」

エブニーザの顔から笑いが消え、怯えが走った。

「俺はアンゲル・レノウス。心配しなくても君の部屋はとらないよ。こっちのティツシュ何とかを退治することにしたんでね」

「ティツシュじゃない!シュツティファントだ!!」

ヘイゼルがまた叫んだ。その声があまりにも大きかったので、アンゲルは両手で耳をふさいで後ろに数歩下がった。

「僕は床で寝るのに慣れてますから、そこのソファで寝てもいいですよ」

「エブニーザ！！！」

ヘイゼルが、部屋の空気が振動するようなすさまじい声でエブニーザを怒鳴りつけた。

エブニーザは怯えてびくりと体を震わせた。顔からますます血の気が引いていく。

まるで犬のような扱いだな！とアンゲルはエブニーザを気の毒に思い始めた。しかも、話し方が妙に丁寧だし、怯え方も普通じゃない。友達同士にしては何かがおかしい。

「床で寝るのに慣れてる？それは問題だな」

「こいつは苦労人だからな」

ヘイゼルがつぶやき、後ろのドアを開けたかと思うと、中からサッカーボールを持ち出してきた。アンゲルに向かってにボールをかざしてにやりと笑う。

「これで勝負だ！」

「サッカー？」

アンゲルはにやりと笑った。サッカーは誰よりも得意だ。管轄区では少年チームに所属してメンバーをまとめていたし、去年の大会では、管轄区の優勝チームのフォワードだった。何より、目の前のティッシュお化けに負ける気なんて微塵もしない！

「悪いけど、勝つのは俺だ！」

「おーおー言ったなこの野郎！」

ヘイゼルがボールを思い切り蹴った、アンゲルは胸で軽々と受け止めてリフティングを始めた。ヘイゼルがボールを奪うために飛びかかってきた。

「ああ！駄目ですって！室内でサッカーは禁止だって前にも……」

エブニーザはおろおろしながら二人を止めようとしたが、二人があまりにもめまぐるしく動き回るのでとても追いつけない。アンゲルはヘイゼルにボールを渡さないように部屋中を飛び回る。ヘイゼルも本気で追いかける、二人とボールはソファや家具の上を飛び、あらゆるものを倒し、エブニーザは泣きそうな顔で『やめてください』

いーちめてー！ちめてってばー！』を繰り返して叫んでいた……。

1-11 エレノア フランシス 女子寮の部屋

「エレノア！エレノア！」

眠っていたエレノアは、誰かのヒステリックな叫び声で目が覚めた。

「夕食よ！出てきなさい！まさかもう寝てるんじゃないでしょうね！」

怒鳴り声と、ドアを乱暴に蹴る音が耳と頭に響く。

エレノアはしばしぼんやりと宙を見たのち、自分が今アルターの学校の女子寮にいて、同室の誰かさんがものすごくヒステリックだということを思い出した。

「旅で疲れて寝てたのよ。そんなに怒鳴らなくても……！」

ドアを開けたエレノアは、目の前の光景に驚き、息がとまるかと思っただ。

テーブルの上には氷で冷やされているワインと、芸術品のような綺麗な彫刻の入ったワイングラスが二つ。絵画に描かれるようなフルーツが山盛りになった大皿が一つ。赤い、宝石のようにつやつやとしたロブスターを使った料理がふた皿。

他にもたくさん料理が並んでいる。

細かい装飾の入ったろうそくが、料理と、頬づえをついて笑っているフランシスの顔を照らしていた。

あまりに幻想的で、まるで、何世紀も前の絵画の世界に迷い込んだようだ。

「言っとくけど、いいものは今日だけよ」フランシスが、フォークを手元で弄びながら言った。「特別にうちの料理人に作らせたの。明日の朝から、寮の食堂よ。あそこのビュッフェは最悪。ここの料理人は味覚がないのよ」

そりゃあ、こんなものを普通に食べてたら、なんでもまずく感じるでしょうよ。

エレノアは、ためらいがちにテーブルに近づきながら、フランスの家のすごさを、そのテーブルから感じ取っていた。まるで、豪華な料理がオーラを放ち、ふさわしくない客を遠のけようとしているようだ。

フランスは、エレノアが席に着くのを待たずに、ロブスターをつつつき始めた。

「あなたの家つて、お金持ち？」

「あら？ご存じないの？」フランススが気取った、見下した目つきでエレノアを見た。「イシユ八では、シュツティファントの次にお金持ちなのよ」

「シュツティファントは聞いたことがあるわ」エレノアは、どこから料理に手をつければいいのか迷っていた。「これって食べていいのよね」

「当たり前でしょ？食べないでどうするの？まさか絵でも描く気じゃないでしょうね」

「私も今、絵画みたいって思ったの、このテーブルも、あなたもね」

「私？やめてよ、古臭い絵になんか閉じ込められたくないわ」

「絵画がみんな古臭いわげじゃないでしょ」

「古臭いわよ。今は映像とイラストの時代なの」フランススが鼻にかけたような声で笑った。「私、デザインもやっているのよ。趣味だけど」

「デザイン？」

「広告とか、ポスターよ。今はそういう時代なの」

エレノアはフランススの会話の受け答えから、今まで会ってきた『お嬢様』とは何かが違うなと思った。にこにこ笑い、愛想を取ることしかしない女性を、エレノアはこの国でもたくさん見てきた。特に、大きな家のご令嬢は、あたりさわりのないことしか話したがらない。相手が旅芸人ならなおさらだ。でも、フランススは違いそうだ。

「あなた、ここに来る前はどこにいたの？」

「最近、セカンドヴィラとレハルノーサ」

「レハルノーサ？」フランシスが馬鹿にしたような声を出した。「あんなところで芸をやったって、だれも見ないじゃないの。田舎でしょ？おじいさんしか住んでない」

「そんなことないわ。独特な伝統があつて……確かにお父さんの曲芸は反応が薄かったけど（すごく落ち込んだのよ！）みんな歌は好きよ」

「歌うの？」

「私は歌手よ」

「へええ」フランシスが試すような目つきになって、両手をあごにあてて肘をテーブルにつけ、見下すように目を細めた「歌つてよ」「えっ？」

「何でもいいから、聞かせてよ」

エレノアはしばし、頭の中で知っている曲を反芻して、どれを選ぶべきか考えた。

そして、立ち上がり、歌い始めた。

澄んだ、力強い歌声が、部屋いっぱいに響き渡る。

その声は独特の流れを持っていて、部屋の中の空気を別な世界に塗り替えていった。

戦争に行った男を待っている女。

でも男は帰ってこない。

女は一人で街に出かける。

昔を思い出して泣きたくなる……。

さびれた町の飲み屋をさまよう女の姿が、フランシスの意識にはつきりと映った。それほど、エレノアの歌の力は大きかった。

歌が終わった時、フランシスの顔から、さきほどまで浮かんでいた、試すような顔も、見下したような態度も、消えていた。

「どう？これ、ロンハルトの歌を翻訳したものよ」

フランシスは何も答えず、無言で立ちあがり、自分の部屋に入っ

ていった。

「フランシス？」

「食べてて！」

怒鳴り声が聞こえた。

気に入らなかったのだろうか？

エレノアは不安になったが、まだ手をつけていないロブスターを見て、早めに食べたほうがいいなと思った。フランシスがまたヒステリーを起こす前に。

フランシスは、自分の部屋の電話を取り、直通のダイヤルを回した。

「今年のフェスティバルに出る歌手が決まったわ」フランシスは、相手が出るなりこんなことを言った。「エレノア・フィリ・ノルタよ。ポスターに大きく名前を出すわ。あと、彼女が私のルームメイトだ。つてことを忘れないでよ！」

1 - 12 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮の部屋

男子寮。

アンゲルとヘイゼル、そしてエブニーザが、一様に疲れ切った表情でソファに身を投げ出していた。

あれから一時間近く、アンゲルとヘイゼルはボールを奪い合って部屋を駆け回り、エブニーザは止めようとしたが、ヘイゼルの蹴ったボールが顔を直撃して気を失ってしまい、騒ぎを聞いた他の学生が事務連絡し、アンゲルとヘイゼルは2時間ほど説教をされ……。

そして、今、二人揃って視線を宙に浮かせているのだった。エブニーザは眠っている。鼻血を止めるためにティッシュを鼻に詰めたままだ。

「なあ、エンジェル氏」ヘイゼルがわざとアンゲルを別な読み方で呼んだ「あそこで寝ている哀れな鼻血君はな、小さいころに人さらにさらわれたんだ」

「は？」

今度は何を演説するつもりだろう？

アンゲルはこの数時間で、ヘイゼルの話し癖がなんとなくわかりかけていた。すべては大げさに、劇画のように語られるのだ。そして延々と終わらない。

「管轄区じゃ、小さい子供がさらわれる事件が多発してたんだろ？」

「それは確かにそうだけど……」

アンゲルは小さいころのある事件を思い出した。

同じ街の端っこに、若い夫婦と小さな女の子が住んでいたのだが、ある日、人さらいに襲われ、夫婦は殺された。

女の子の姿は消えていた。

それからしばらく、町の子供たちは家から一步も出ることを許されなかった。学校も半年近く休校した。当然その間授業は行われず、

自学自習で不安を残したまま、次の学年に進級してしまった。

似たような事件が、管轄区じゅうで起きていた。

人さらいは必ず、両親や同居の祖父母を殺害していく。だから目撃者もない。

何のために子供をさらっていくのか、誰もが不思議に思ったが、誰にも理由がわからなかった。さらわれた子供は誰ひとり発見されていない。管轄区の発表では。

「エブニーザも被害者の一人さ。どこかで強制労働をさせられていたらしい。詳しくは知らないが、おそらく、毎日重いものを運んで殴られて、犬みたいに床で眠る生活さ」

「本当か？それ」アンゲルが身を乗り出した「本当に人さらいの被害者だとしたら、大ニュースになるはずじゃないか？みんな行方を探しているんだぞ？」

信じがたい話だった。目の前で眠っている少年は、見るからに（鼻血を除けば）上品な、恵まれた家の、身分の高い人間のように見えた。

ヘイゼルより、エブニーザのほうが、育ちがよさそうに見えるけどな……。

「本当なんだ。でも上手く逃げ出した。倒れているところをドウーシンが、あ、俺の知り合いなんだけど、そいつが見つけた。シュタイナー爺さんに引き取られることになった」

「シュタイナーだって!？」

アンゲルがその名前を聞いて、驚愕のあまり跳ね起きた。

「おおお、さすが管轄区の教会つ子だ。シュッティファントは知らないくせにシュタイナーは知ってるんだな？」

ヘイゼルが軽蔑を含んだ口調になった。

アンゲルにとって、いや、管轄区のすべての人間にとって、シュタイナーは英雄だ。

国一番の財閥。ファナティ教会のもつとも富める後ろ盾……。
「ほんとうにあのシュタイナーなのか？あの黒い怪盗が？」

『黒い怪盗』というのは、シュタイナーのニックネームである。いつもモノクル（片メガネ）をかけて、黒い帽子、黒いタキシードという格好で、100年戦争時代の馬車に乗って人前に姿を現すため、こう呼ばれている。

シュタイナーが諸国を馬車で回っていた時に、アンゲルが住んでいた町の近くを通った。町じゅうの人が集まってその馬車を見送った。もちろんアンゲルも両親と一緒に馬車を見た。それからしばらく、町じゅうがその話でもちきりだった。

「そうそう、怪盗シュタイナーがエブニーザを引き取って、ここの学費も出している」

「何で!？」アンゲルはあることを思いついた「そうか、犯人を探すためだな？シュタイナーならそうしようとするはずだ。人さらいを捕まえるためだろ？管轄区の実権はシュタイナーが握ってるんだからそれくらいの権限はあるだろ？」

「そんなことするか？あのシュタイナーが」ヘイゼルがうさくさい顔をした「お前ら教会っ子が思ってるような人間じゃないぞ、シュタイナーは。したたかで計算高くて策略がお得意だ。そんな面倒なことに自分から関わるとは思えない」

ヘイゼルが軽蔑のまなざしをアンゲルに向けた。

「イメージ戦略にはまるなよ。趣味で馬車に乗って旅をしてる気のいい爺さんだと思ってるだろ？教会っ子はみんな従順だからね」。

女神様シュタイナー様だろ？」

「そんなことはない」

アンゲルは真っ向から否定した。確かに教会っ子にとってシュタイナーは特別な存在だが、良くない噂も時々入ってくる。敵対している人物を暗殺するとか、教会をビジネスに利用していて、実は女神を信じていないとか……。

「そんなことあるさ。騙されてるよ。うちは取引があるからよく知ってる。商売相手として実にやっかいだ。そのうち俺が正しいってことが分かるさ。あのじいさんがエブニーザを引き取ったのは、

単に、天才だからさ、エブニーザが」

「天才？」

「いずれわかる」

ヘイゼルが自分の自慢をするように、満足げににんまりと笑った。

「それにしても……信じられない」

アンゲルが背もたれに倒れこんで天を仰いだ。

あのシュタイナーの関係者に、この外国イシュハで出会うとは！

「じゃあ、エブニーザはシュタイナー本人に会ったのか？」

「会った？そんなもんじゃない。あの豪邸と一緒に住んでいたのさ、先週までな」

「ええっ!？」

アンゲルは、すぐにでもエブニーザをたたき起こし『本当か!館の中の様子はどうなんだ!？本物のシュタイナーはどんな人間なんだ!？』と質問したい衝動に駆られた。

「可哀相な奴なんだよ。未だにさらわれていた頃の記憶にさいなまれている。びくびくしている感じがするだろ?しないか？」

「俺はさつき来たばっかだぞ？」

アンゲルはそう言い返したが、実はさつきから、エブニーザの妙に怯えた態度は気になっていた。

「てつきりお前が怒鳴りまくるから怯えているのかと」

「そんなわけないだろうが。おれはあいつを保護するためにここにいると言っても過言ではないのだぞ」

「それは大いに疑わしい発言だな!」アンゲルはヘイゼルの大げさな話し方をまねて抗議した「追いつめてるようにしか見えないぞ。

そういうのは、医者かカウンセラーの仕事だろ?少なくとも、もっと穏やかな人のほうが合ってる」

「そうそう、カウンセラーね。この学校にもいるな。エブニーザは週に一回そいつらに会わないといけないらしい。未だに原因不明の発作やパニックが起こるから、経過を見たいんだと。大いに同情するね。俺はあいつらが嫌いなんだ」

「何で？」

「何にもわかつちやいないからさ。まあ、そんなことはどうでもいい、俺が言いたいのは……」

「どうでもよくない。俺は心理学をやりここに来たんだ」

「教会つ子には無理だ。やめとけ」ヘイゼルは無理を言わさない口調だ「俺が言いたいのは……」

「何だよ」アンゲルは悟った。ヘイゼルがしゃべりたいときに口をはさむのは無駄だと「カウンセラーの悪口なら聞かないぞ」

「エブニーザにソファで寝るなんて、誰も言っちゃいけないんだよ」ヘイゼルが急に、静かで同情的な、高慢さのない口調になった「監禁されている間、ずっと床で寝かされて」

「ああ、だからさっき『慣れてる』って言ってたのか」

「だから、お前に部屋を取られると困るんだ」

「だから、俺はティッシュファントムの部屋を取るって言ったのだろ」俺に向かって二度とティッシュファントムって言うなよ！」ヘイゼルがすさまじい大声で、唾を飛ばしながら怒鳴った「今度言ったら本気で殴り殺してやる！」

「わかつたわかつた！どうしてそんなにすぐ怒鳴るんだ！？」

「お前が変なことを言うからだろうが！」

ヘイゼルの怒鳴り声があまりにも大きいので、アンゲルの耳がひりひりと痛んだ。

「わかつた、わかつたよ、もう言わない」

声と唾を防ぐように両手を前に出しながら、アンゲルは後ろに身を引いた。

「とにかく、俺が何を言いたいかというとな」

ヘイゼルはまた、昔話のような口調に戻って話し始めた。

「いいから早く言ってくれ」

アンゲルはうんざりしてきた。この調子だと永遠に話が終わらない！

「ここには、実は、部屋が三つあるだろ」

ヘイゼルが、まず自分の部屋のドアを指さし、次に、エブニーザの部屋のドアを指さし、最後に、自分が座っているソファアを親指で指した。

「ああ、ここも部屋だな。すっかり忘れてた」

「だから、三人目はここを使えばいい」

「おいおいおい。俺にずっとソファアで寝ろつての?」

「ベッドが欲しいなら買ってやるよ」ヘイゼルが意地悪な目つきをした。「男に買ってもらったベッドでぐっすり眠ればいいさ。できるもんならな」

「変な言い方をするなよ」アンゲルは露骨に嫌な顔をした。「勝手に毛布でも持ち込んで寝るよ。これ以上ばかばかしい言い争いをしたくない。ここが俺の部屋つてことでもいいんだな?あのへんは」

ソファアの後ろの、何も入っていない棚を指さして、アンゲルが渋い顔をした。

「心理学の本で埋まるぞ?」

「勝手にすりゃいいさ。ほんととは追い出すつもりだったんだがな」

ヘイゼルは残念そうな顔で、床に転がっているサッカーボールを拾い上げた。「サッカーのできるやつは追い出せない」

「チームに入ってたのか?」

「あいにくチームワークは苦手だね」

「だろうなあ……」アンゲルは横目でエブニーザを見た。まだ眠っている。「こいつは?」

「あーダメだ、全然ダメ。恐ろしくトロい。スポーツつてもものがそもそも嫌いらしい」

「だろうなあ……」

「その『だろうなあ……』は何だ?心理学的推測か?」

「単なる第一印象だよ。最悪だ」

アンゲルはヘイゼルに向かって、困惑の交じった笑いを投げかけた。

「ほんと、最悪だ」

1 - 13 エレノア フランシス 女子寮の部屋

「フェスティバル？」

「女神アニタ降臨祭。まあ、ようするにバカ騒ぎよ」

「食事は一通り片づいて、フランシスが『もういらぬ』と言い張っているエレノアのグラスにむりやりワイン（本当は未成年だから飲んではいけないのだが、フランシスはそんなこと気にもしない！）を注ぎながらにやりと笑った。

「音楽をやつてる連中が何人が歌うんだけど、最後に歌うメインの歌姫が決まってなかったの。毎年一人選出するのよ。私が決めるの。あんたがやって」

「ほんとに？」

エレノアはわくわくしていた。学校での初舞台だ！

でも、どうしてフランシスが決めるんだろう？他の生徒の意見は？

「フェスティバルっていつなの？」

エレノアは疑問に思ったことはあえて口に出さず、どうでもいい質問をした。

「9月に決まってるでしょ。降臨祭なんだから」

神話では、9月の最後の日に、女神アニタが歌うたいの声に惹かれて、地上に遊びに来た（彼女はめったに自分の世界から降りてこない）ことになっている。

「あ、あなたそういえばイシユ八人じゃないものね」

「国籍はイシユ八よ」

「へえ」フランシスがどうでもよさそうな顔でエレノアを見た「一つ忠告していい？」

「何？」

フランシスが鋭い目で、試すようにエレノアの目を覗きこんだ。さきほどの、獲物を睨む目つきだ。敵か味方が、生かすか殺すか、見定めている目だ。

エレノアは軽い恐怖を感じた。

「シュツティファントとは関わらないで」

フランシスが低い声でささやいた。

「シュツティファント？例のお金持ち？この学校にいるの？」

「ヘイゼル・シュツティファントよ！」フランシスは急に荒い息使いで叫び始めた「悪魔よ！史上最悪の男よ。人につきまとって余計なことばかりべらべらとしゃべりまくるのよ。しかも嫌がらせまでしてくるわ。人が飲むワインに虫を混ぜたりね！」

「ほんと？」

「私は気がついたから飲まなかったけど。何人か犠牲者が出たわ。

それに、舞台上で歌ってた人に向かって『何だその下手くそな歌は！俺の方がうまいぞ！』って言いながら突進して行って、マイクを奪って自分が歌い出したの。去年のフェスティバルの話よ」

「ひどいわね」

エレノアはそう言ったが、実は、『歌手のマイクを奪う客』というのは世界中どこにでもいるので、大した問題だとは思わなかった。歌い手の上手い下手は関係なく、酔っぱらった客が突進してきたり、妬み深い人々がじゃまをしに割って入ってきたり、警察を呼ばれたり……そんなことはよくあることなのだ。そんなことにいちいち怯えていては旅芸人など勤まらないと、父ミゲルがよく笑っていたものだ。

「停学になって、管轄区のシュタイナーのところを送られたって聞いてたのに、戻ってきたちゃったのよ！変な精神病の男を連れてね！さっきうちの使用人が連絡してきたわ。冗談じゃないわよ！」

フランシスががりあがった目をさらにひきつらせてわめきたてたかと思うと、ワイングラスを乱暴につかんで一気に飲み干した。そして、驚きで目を丸くしているエレノアに向かって、

「気をつけなさい。あいつはパーティーをぶち壊すのが趣味なの。

絶対今年のフェスティバルもめっちゃめっちゃにするわよ」

と言った。

「大丈夫よ、少なくとも、歌はけなされるほど下手じゃないし……」
そう言いながらも、エレノアは心配になってきた。

イシュハのお金持ち、という種族には、旅先で何人も会っているが、確かにあまり質の良い客ではない。金払いはいいが、あきらかに見下した態度をするか、人をパーティー会場のインテリアや音響機器扱いして、ただ何時間も延々と曲芸や歌を続けることだけを要求してくるか、後片付けを押しつけられるか……。

しかも、シュツティファント……イシュハの大富豪。

その息子？わがままそうだわ……。

「ま、いいわ、あんなバカのことは」

フランスは新しいボトルを開け、エレノアと自分の両方のグラスになみなみとワインを注いだ。

「もう飲めないってば……」

エレノアは明日、新入生のための試験を受けることになっていた
ので、これ以上飲みたくなかったのだが、フランスはそんなことを
気にする様子は全くない。

「いいからいいから」フランスは急に、はしゃいだ子供のような
顔で笑った。「アルターへようこそ、エレノア」

フランスがグラスを掲げた、エレノアは控えめに、そうつと、
自分のグラスをフランスのグラスに当てた。

古い、使いならされた楽器のような澄んだ音が、キャンドルに照
らされた部屋に響いた。

独房 囚人11番

独房は静かだ。

時々、どこか遠くから、気がふれたものの叫び声がすることはあるが。

普通の人間にとって、この独房は地獄らしい。

たまに見張り番や掃除のものが来る以外、だれも来ない。

来ても、話しかけることはない。

誰にも会えず、話さず、どこにも行けず、静けさの中で何年も過ごす、普通は気が狂うものらしい。

しかし、何度でも言うが、私にとっては天国だ。

好きなだけ一人でノートに向かっていられる。

邪魔をする者などいない。

他人に興味のある人間などここにはいない。

そもそも『人間』がないのかもしれない。

さて、二人の話の続きを聞かせよう。

2 - 1 アンゲル ヘイゼル 男子寮の部屋

次の日の朝。

アンゲルは授業選択の書類を読んでいるうちに『心理学と医学を希望する生徒のみ、大学に入る2年前に各教科の専門教育を受けること』と書いてあることに気がついた。

大学の二年前、つまり、上級の2年から心理学ができるってことだな！

アンゲルの胸が高鳴った。基本教育なんて早く飛ばしてしまいたかった。

「ほんとに心理学やるのか？」

ヘイゼルがソファアの後ろから書類を覗きこんできた。表情が陰しい。

アンゲルは驚いて飛びのいた。

「おい！ここは俺の部屋だろ！人が読んでいるものを覗くな！」

「ここを通らないと外に出れないんだからしょうがないだろう」ヘイゼルが呆れた顔をした「教会つ子のくせに朝祈らないのか？」

「うるさい」

管轄区の間人（敬虔なるファナティ教徒たち）は朝起きたら祈る。朝食の前にも祈る。昼食も夕食も。そして寝る前にも祈る。女神ファナティに感謝するために。

しかし、アンゲルは女神を信じていないので、ずっと祈るふりをして、家族が目を閉じてぶつぶつ言っている最中も、別なことを考えていた。

ここイシュハに来てしまったら、もちろん祈りなんてしない。

そんな習慣はすっかり忘れたつもりでいたのに、ヘイゼルのせいで思い出してしまった。

「学年は？」

むっとした顔のアンゲルを無視して、ヘイゼルが眠そうな顔で質

問してきた。

「今日の試験で決まるんだよ。お前は？」

「去年の続きだから……上級の2だ」

「いいなあ」その学年なら心理学に入れるな、とアンゲルは思った

「エブニーザも今日試験だろ？」

「そうなのだが……」ヘイゼルがテーブルの周りをうるつき始めた

「頭は最高にいいのだが……」

「だが、何だよ？」

「部屋から出てこない」

「えっ？」

「人前に出るのが怖いらしい。朝食も食ってない。あと5分待って出てこなかったら引きずり出してくれ」

「なんで俺が？」

「同じ会場に行くんだろ？」

「おいおいおい、俺はエブニーザにどう対応すればいいか全く知らないんだぞ」アンゲルが立ちあがって抗議した「特殊な事情があるんだろ？カウンセラーを呼べよ」

「心理学やるんだろ？俺はあいつらが嫌いなんだ！」

「お前の好き嫌いの問題じゃないだろうが！」

二人が言い争っている時、電話が鳴った。アンゲルは、このときまで部屋に電話があることに気がつかなかった。

「誰だ？……ああ、大丈夫ですよ。アンゲルが連れて行きますから、はいはい」

「おい！勝手に人を使うなよ！なんの話……」

「じゃーあとで〜」

文句を言うアンゲルを無視して、ヘイゼルは愛想よく電話を切った。

「カウンセラー連中が試験会場でお待ちだ。引きずり出そう」

「はあ？」

呆れているアンゲルを無視して、ヘイゼルがエブニーザの部屋の

ドアを乱暴に蹴り始めた。

2・2 アンゲル エレノア エブニーザ 新入生の試験会場

すごい人数ね！

エレノアは、目の前に並んでいる席の多さに驚いた。試験は大ホールで行われるのだが、彼女が試験を受ける席は会場のほとんど最後列だった。はるか向こうに演台のようなものと、スクリーンが見える。まるで大きなコンサートホールのようなようだ。

こんなところで授業をされても、聞き取りにくそうね……。

「エレノア！」

後ろから大声がした。振り返ると、列車で一緒だった男（たしか、アンゲル、そうだ、天使がどうとか言ってたっけ）が、半ば小躍りして手を振りながら近づいてきた。

しかし、エレノアの視線は彼ではなく、その隣の少年に釘付けになった。

なんて美しい子なの！

肌が雪のように白く、顔立ちが整っているのどこか、目のあたりに普通の人間ではないような揺らぎが見える。顔を伏せているのでよく見えないが、目の色が無色に近いくらい薄いことがエレノアにもわかった。瞳孔の黒い点がはつきりと見える。

この子の方が天使みたい……？

「君も試験を受けるんだね」

アンゲルがにこやかにそう言った。

「そうよ」エレノアは、半分夢を見ているような顔でアンゲルに答えた。「そちらは？」

「あ、えーと、こいつは、エブニーザ。同じ部屋なんだ」

アンゲルがエブニーザを見たが、エブニーザは真っ青な顔で下を向いている。

「おい、あいさつくらいしろよ！」

「いいのよ別に！試験前だから緊張してるんでしょ？」

エレノアは妙に優しい声でエブニーザにそう言ったが、全く反応がない。

「違うんだ。人前に出るのが怖いって、部屋から出てこなかったんだよ。だから俺とヘイゼルで無理矢理……」

「ヘイゼル？」エレノアが怪訝な顔をした。「ヘイゼル・シュツティファント？」

「そうそう、あの悪名高きシュツティファントだよ。まあ、俺は昨日初めて知ったんだけどさ、名前とあの性格を」

「知り合いなの？」

「残念ながら、俺とエブニーザは奴と同室だ」

「ええっ？」

エレノアが驚いていると、後ろから年配の女性が二人近づいてきた。二人とも、イシュハ・ヴァイオレットのスーツを着ている。

「そろそろ席に着きなさい。試験が始まるから」

女性がにこやかにそう言いながら、エブニーザを前方の席に押しで行った。エブニーザは不安そうに、たまにアンゲルの方を振り返りながら、最前列に近い席まで歩かされていた。

「あの人たち、何？」

エレノアは歩いていく三人を見ながら、あの子と話したかったのになあと残念に思った。

「カウンセラーさ」アンゲルが疲れた顔をした。「ちよっと事情のある奴で、精神不安定なんだ。だからカウンセラーに通ってる」

「そう……」

どんな事情があるんだろう？エレノアは気になった。ああ、試験前なのに！

「俺もそろそろ行くよ」

アンゲルは満面の笑みを浮かべると、前の席へ歩いて言った。

あの二人がヘイゼル・シュツティファントと同室……。

ああ、どうしよう、フランシスは関わるなって言ってたのに。

でも、気になるわ。どうしてあんな綺麗な子がこんなところにい

るんだろっ……？特殊な事情って何だろっ……？どうしてあんなに
目が真っ白なんだろっ？もしかして、盲目？でもふっつに歩いてい
たし、試験だって……。

エレノアは、試験と全く関係ないことで悩み始めた。

2 - 3 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮

試験終了後、アンゲルはエレノアの姿を探したが、見当たらなかつた。学生の数が多すぎて、人ごみに紛れてしまったようだ。エブニーザは試験終了と同時にカウンセラーにさらわれていった。たぶん今から面談でもするんだろう。

見学させてくれて頼んでおくべきだったかな。

アンゲルは思った。試験の最中に気がついたのだが、心理学、特にカウンセリングを学ぶと言うことは、問題のある人間、つまり、エブニーザみたいな人間に対応しなくてはいけないということだ。

人づきあいは嫌いではないが、問題を抱えている人間に対応する自信がない。

今のうちにいろいろやっておかないと、困るだろうな……。他のたくさんの学生にまぎれて外に出ると、強い日差しに目を細める。

まぶしすぎる！しかも何だこの暑さは！？

アルターはこの日、39度。連日暑い日が続いていて、熱中症で倒れる学生が多いと誰かが話しているのが聞こえた。アンゲルも、少し歩いただけで頭がくらくらしてきた。

管轄区よりはるかに北にあるはずなのに、なぜアルターはこんなに暑いんだろう……？

疑問に思いながら寮にたどり着く。クーラーが効きすぎて今度は寒気がする。

「おー帰って来たかエンジェル氏」

ヘイゼルがソファアに座って新聞を読んでいた。また赤いジャケットを着ている。

そつえば、ずっと同じのを着てるな。お気に入りなのか？

「どうだった？」

「ここは俺の部屋だろ？」

「いいじゃないか、通路みたいなもんなんだから」

「新聞は自分の部屋で読めよ」

「まあまあ、そう怒るな」ヘイゼルが新聞を振った「キュプラ・ド・エラ対イシユハの試合があした、中継されるぞ。食堂のスクリーンが人で埋まる」

「ほんと？」

アンゲルが苦笑いした。管轄区のサッカーチームはすでに敗退していた。

「あそこのチームはほとんどゲイだ。怖いぞ。見る。俺はちょっと電話かけるから」

ヘイゼルが新聞をアンゲルに向かって投げると、電話に向かった。「はいお元気かなシグノーのご令嬢よ！もうお聞きだろうが俺は生還したぞ！さんざん悪口を言いやがって！このまま追い出すつもりだったんだろが、お前の思い通りにさせるかってんだ！……あれ？きみ誰？」

勢いよくしゃべりだしたヘイゼルが、急に小声になった。アンゲルは『俺の部屋で延々と長電話されるのか……』と思ってうんざりしながらも、会話が気になったので新聞の影からじつと様子をうかがっていた。

「おお、ルームメイトその35か。え？いや、俺の計算が正しければ君が35人目なんだよ。あの麗しきお嬢様はすぐに人をたたき出すからね。君も今のうちに別な部屋を探したほうがいいんじゃないのかな？神経をやられる前にな」

34人も追い出した？どんなお嬢様だよ？イシユハの金持ちはみんな性格が悪いのか？

「ところで、ご令嬢はどこへおいでなのかな？いやいや、別に探し出そうってんじゃない。俺はしばらく管轄区に留学してたんでね、帰還の報告をしようと思ってね……え？停学？そんなわけないじゃないか。仮にもシュツティファントの人間が！そうそう、俺がヘイ

ゼル・シュツティファントだ。その様子だと俺のことをフランシスから聞いてるな？」

シュツティファントってどれだけ偉いんだろう……とアンゲルは思った。

「ところで君は何て言うのかな？え？アレン？フリノツタ？ややこしい名前だな。いったいどこから来たんだ？え？違う？何だ？ゆっくり発音してくれ……ああ、何だ、エレノアか」

アンゲルが新聞を投げてソファーから跳ね上がった。

「いい名前だけど、同じ名前の女を5人くらい知ってるぞ。ドウロソの国境近くにはたくさんのエレノアさんがいるんじゃないかな？まあそんなことはどうでもいい」

「おい！代われ！代わってくれ！」アンゲルはハイゼルに向かって走り、小声で叫んだ「知り合いなんだ！」

「えーと、いや、とりあえず本人に伝言しておいてくれ。それと、君、アンゲル・レノウスって知ってるかな？今後ろで『代われ！』ってわめいてるんだけど」

「ハイゼル！」

アンゲルの顔が真っ赤になった。

何て事を言うんだこいつは！

「ん？ああそう、列車で会ったのね、なるほどねー」ハイゼルがアンゲルを見ながらにやにやし始めた「アンゲルは俺と同室だし、君はシグノーのフランシスと同室。つまり俺たちはいやでもお友達ってやつなのよ。フランシスにもそう言っといってくれ。今後よろしくねー！じゃあまた」

ハイゼルが受話器を乱暴に置いた。

「何で切るんだよ！？」

「先に説明してもらおうじゃないか。フランシスと同室のお嬢さんとはどんな関係かな？」

ハイゼルがソファーにどかっと音を立てて座り、肘掛にもたれて、楽しそうな目つきでアンゲルを見上げた。

「ここに来るときに列車が一緒だったんだよ。さつき試験会場でも会った。それだけ」

「お顔が真っ赤ですけど、エンジェル氏」

「エイゼルが薄眼でニヤニヤしている。面白くてしょうがないという顔だ。」

「うるさい！自分の部屋に戻れ！」

「まあまあまあ、どうして俺がそんなことを聞くかと言うとだな、エレノアと一緒に部屋にいるフランス・シグノーが、とんでもない悪魔だからさ。俺は心配だね」

「悪魔？」アンゲルが呆れた。「それはお前だろ？」

「まあまあまあ。とにかくな、シグノーのご令嬢は同室の人間をいじめまくって、神経症にして叩きだすのさ。犠牲者が34人いる」
「だから？」

「言っておくが、俺の数倍すさまじい性格をしているぞ。世界一ヒステリーだ」

アンゲルはエレノアの笑顔を思い出した。今頃いじめられてるんじゃないだろうか？

それに、エイゼルよりすさまじい性格って何だ？

「別な部屋に変更できないのか？」

「この事務は融通が利かないんだよ。お前もよく知ってるだろ？」

「何の話ですか？」エブニーザが帰ってきた。「試験は簡単でした。」

でも人が多すぎて……」

「多すぎて何だ？」

「授業もあんなに人が多いんですか？」

エブニーザは今にも泣きそうだ。人混みを心の底から怖がっているらしい。

「そんなことはないだろ」アンゲルは、エブニーザの顔があまりにも真っ青なので心配になってきた。「今まで何してたんだよ？カウンセリングか？」

「わかりません……」

「わからない？」

ヘイゼルとアンゲルが同時に叫んだ。

「あの人たちが何を聞きたいのか、全然わからないんです……」

エブニーザは疲れ切った表情で、自分の部屋のドアに向かった。

「おいおいちよつと待て」アンゲルがエブニーザの肩をつかんで止めた。「カウンセラーに何を言われたんだ？」

「何を……」エブニーザが目線だけ横に向けた。「覚えてません」

「はあ？」

「疲れてるんです。眠らせてください」

エブニーザは伏し目がちにアンゲルを押しつけて、部屋に入り、ドアをそーっと、音が立たないように静かに、閉めた。

「なんだよあれは!？」

「俺に聞かれても分からんね」ヘイゼルが新聞を拾ってまた読み始めた。「お前、心理学やるんだろ。自分で分析しろ」

アンゲルはエブニーザの部屋のドアを見つめながら、自分がこれから入っていくこうとしている世界が、思ったよりもずっと難しく、理解しがたいものだということに気がついた。

……やっつけていけるのか、ここで。

ソファアに座り込んで頭を抱えたが、突然気がついたようにとなりのヘイゼル（ソファアに寝そべって新聞を読み始めた）に向かつて、

「ここは俺の部屋だぞ！」

と叫んだ。

「そんなに怒るなよ。教会っ子は短気だな」

「お前に短気なんて言われたくないな！」

アンゲルはヘイゼルを睨みつけた。でも、すぐに別なこと
なり重要なこと を思いついて、立ちあがった。 か

「ヘイゼル」

「何だ？」

ヘイゼルは新聞から目を離さない。

「エブニーザは、人さらいの顔を知ってるんだな？」

「覚えてないって言ってたが」ヘイゼルはあいかかわらずスポーツ欄に夢中だ「まあ、思い出せれば、わかるだろうな」

「思い出させるんだよ！」アンゲルがヘイゼルの持っている新聞をひたたくって叫んだ「それで、犯人を捕まえるんだ！そしたら、他の、行方不明の子供たちも見つかる！」

「新聞を返せ」今度はヘイゼルがアンゲルの手から新聞をひたたくった「悪いが、その話はエブニーザにはしないでくれ」

「なんで！？これは大事件なんだぞ、俺たち管轄区の人間にとって
は」

アンゲルは興奮気味に、荒い息をしながら尋ねた。

「昔のことを尋ねると」ヘイゼルがめずらしく穏やかな声でしゃべった「パニックを起こして泣き叫んで気を失うぞ」

「えっ？」

「思い出させるようなことはするな」

ヘイゼルは言い捨てるように言うつと、また新聞を眺め始めた。アンゲルはしばらく、反対側に座って考えていた。

思い出すとパニックになる？気を失うだって？でも、前にそんな話を聞いたことがある……たしか、飛行機事故の被害者だ。墜落の日を思い出すと全身が震えて何もできなくなつて、それで心理療法師のところに来たと書いてあったな……。

アンゲルは心理学概論の本を手に取り、読み始めた。

今はだめでも、そのうちエブニーザから真相を聞きだして、あの大事件を解決してやるぞ！この俺が！

そんな、大それたことを考えながら。

2 - 4 エレノア フランシス 女子寮の部屋

「ヘイゼルが？」

帰ってきたフランシスにエレノアが『奇妙な電話』の話をすると思っただ通りの嫌そうな反応が帰ってきた。手には『政治学概論』の教科書を持っている。

「今度かかってきたら、何も答えなくて切りなさいよ！」

「でも」エレノアが瞬きをしながら言った「私の知り合いが同室なの」

「ヘイゼルと？」

「ええ」

「男？」

「男子寮なんだから男に決まってるわ」

「そうじゃないわよ！彼氏？」

「違うわ。列車が一緒だったの」エレノアはそう答えたが、気に入っているのは『列車に乗っていた男』ではない「同じ部屋に三人いるらしいわ。不便そうね」

「ほつときなさいよ。自分で変なのを連れてくるからでしょ？」

「変なの？」

「シユタイナーのところまで来た友達らしいけど、頭がおかしいって噂よ」

エレノアはさきほど見た、天使のような顔の少年を思い出した。

「すぐきれいな子だったわ」エレノアは、フランシスが何か知らないかと探りを入れ始めた「頭がおかしいようには見えなかったわよ？」

「管轄区の支配者どのは変わり者なのよ。シグノーの者の話だと、どこかで倒れていた流れ者を引き取ったって話よ。ただの気まぐれじゃない？」

「倒れてた……」

「なによ、気になるの？そんなにきれいな少年だったわけ？」

「そりゃあもう、見せてあげたかったわ。驚くわよ」

顔を赤らめてうれしそうに話すエレノアを、フランシスは胡散臭い顔で睨んだ。

「悪いけど、どんな美少年だろうと見たくないわね。ヘイゼルがくつついてくるんでしょう？」

「ヘイゼル」エレノアが思い出したように言った「最初、私をあなたと間違えてたみたい。『俺は生還した』とか叫んでたわよ。仲がよさそうな口調だったけど」

「あいつが勝手に付きまよって来るのよ！」フランシスが教科書でテーブルをバン！と叩いた「あいつの話はやめて！それが嫌ならいまずぐ出て行ってちょうだい！」

「分かったわ、話はやめる」

やっぱりフランシスはヒステリックだ。エレノアは、ヘイゼルが話していた『追い出された34人』のことを思い出した。ああ、やっぱり私もそのうち追い出されるのかしら？でも、ここ以外に女子寮ってないし、アパートを借りると高すぎてお金が足りないし……。それにしても、シグノーの家がそんなにお金持ちなら、どうして寮に入るんだらう？アパートを借りればいいのに……。そういえば、どうしてシュツティファントみたいな大きな家の息子が、3人部屋の寮になんか入ってるんだらう？

2・5 アンゲル オリエンテーション書局

試験の結果はすぐに出た。アンゲルは上級の2年。エブニーザはなんと3年（最高学年だ！）に入っていた。

アンゲルは『心理学ができる！』と喜んだが、発表を横で見ているエブニーザは逆に、怯えたようなひきつった顔をしていた。

次の日。アンゲルは、心理学を専攻する生徒のオリエンテーションに参加したのだが、説明をしていた講師が生徒の名前と出身地を確認し始めた。席を回って一人一人に「名前は？国籍は？」と尋ねて歩いている。

他の教科ではこんなことなかったけどな……何だろう？

疑問に思っていると、アンゲルの前にも講師が現れた。

「名前は」

「アンゲル・レノウス」

「国籍は？」

「管轄区です」

講師が疑惑の目でアンゲルを睨んだ。

「管轄区？」

「はい」

講師だけでなく、周りの生徒までアンゲルのほうを見た。

「本当に、心理学を専攻するのかね？」講師は眉をひそめ、念を押すように、アンゲルの顔を覗き込んだ「本当にいいのかね？」

「え？ええ、はい」

「でも君、管轄区から来たんだろう？」

講師が手元のメモを見ながら言った。

「はい」

「本気かね？大丈夫なのかね？」

講師だけでなく、まわりの生徒も妙な目つきで自分を見ていることに気がついたアンゲルは、

「大丈夫……だと思えますけど」
と控えめに答えた。

おそらく、管轄区の教会が医学や心理学を嫌っていることを、こちらの人間も知っているのだろう。

講師は不安げな顔のまま壇上に戻っていき、残りの説明を再開した。しかし、アンゲルの耳にはその説明がほとんど入って来なかった。

気になることがたくさんあった。講師の不安に満ちた態度と言葉、『管轄区』という単語に反応して、周りの学生が自分に向けた、妙なものを見るような視線。

オリエンテーションが終わって部屋を出る時にも、アンゲルは自分のあとを追ってくる不自然な注目を背中に感じた。会場を出る直前に中をふり返ってみると、何人かの学生があわててそっぽを向いたり、別な方向に歩きだしたりした。

……変だな。

気になったのだが、一人一人に「どうしてそんな目で俺を見るんだよ？」などと聞くわけにもいかない。アンゲルは早足で廊下を歩いた。今日行かなければいけないところは他にもたくさんある。

この学校には、いわゆる部活動以外にも「コミュニティ」というものがある。外国からの留学生が多いので、出身地ごとにグループがあり、情報交換が行えるようになっている。

もちろんアンゲルは管轄区出身の学生が集まるコミュニティに参加する……はずだったのだが、入学案内に従って入り込んだ部屋（よりによって、古臭い旧校舎の中でも一番奥の、妙に日当たりの悪い暗い部屋）には、異様な空気が漂っていた。

みんな、机に向かって、手を組んで祈っていた。

テーブルの上に白い、小さな女神像（管轄区の家には必ずある安物の）が置かれていて、それを囲むように学生たち（わざと選んだんじゃないかと思うくらい地味で暗そうな顔ぶれの）が、無言で、目を閉じてうつむいていた。

アンゲルがドアを開いたことに誰も気づいていないのか、単に祈りの最中だから動かないのか、とにかく、全員が同じポーズで、人形じゃないかと思うくらい見事に固まっていた。不気味なほどの静けさが部屋を満たし、息づかいさえ聞こえてこない。

……このままドアを閉じて、何も見なかったふりをして帰ろう。

とアンゲルは思ったのだが、壁に「アルバイト情報」と書いてある紙がいくつも貼ってあるのが目に入った。

そうだ、アルバイトを探さなきゃいけないんだった。

アンゲルがため息をついたのと、ドアに一番近い学生が目を開けたのがほぼ同時だった。

「誰？」

緑色の目に茶色の髪の毛、地味な、管轄区にはいくらでもいる平凡な少年が、アンゲルを見て警戒の顔をした。

他の学生も、目を開けて顔を上げ、一斉にアンゲルを見た。

「あ、えーと」走って逃げたいと思いつきながら、アンゲルはなんとか声を出そうとした。「アルバイトを探しに、えーと、俺はアンゲル・レノウスといって、新入生で、一応管轄区から来たんですけど……」

「アンゲル・レノウス？」

一番奥に座っていた、年長そうな大柄な男が立ち上がってアンゲルに近づいてきた。

「もしかして」別な席の、痩せた生徒が叫んだ。「ヘイゼル・シュツティファントと同室になった奴か？」

「は？」

なぜここでヘイゼルの名前が出てくるのか、アンゲルは不思議に思ったが、聞き返す間がなかった。

目の前の管轄区人たちが一斉に喋り始めたからだ。

「怒鳴り合ってたって本当？」

「へ？」

「大丈夫なのか？相手はシュツティファントだぞ？わかってるのか？」

「はい？」

「管轄区でいうシユタイナーだぞ？」

「えっ？」

「お前の家はそんなに偉いのか？」

「はあ？」

「首都に愛人がたくさんいるらしいけど本当……いてっ」

好奇心で飛び出してきた小柄な生徒が、年長の男に小突かれた。

「あんなのと同じ部屋で大丈夫なのか？」

おそらくまとめ役なのだろう、一番落ちついた雰囲気の子が、坐ったままアンゲルを見上げて質問してきた。

「相当乱暴だつて噂じゃないか。校内の物をいくつも破壊してるし、ルームメイトをサンドバッグ代わりに殴りまくって、危うく殺しかけたつて話じゃないか」

「ええっ!？」

アンゲルは本気で驚いた。そんな話は聞いたことがない。そもそも、シユッティファントなる単語が何を意味しているのかも、昨日まで知らなかったのだから（今だつてなんのことだか、実はさつぱりわからないのだが）

その場の全員が、今やアンゲルに注目していた。どんな返事を期待しているのかはなんとなく想像がついた。『そうなんですよ。あいつら異教徒は非常識なんです。なんたつてアニタ教ですからね。常識も秩序もない』だ。

でも、アンゲルはそうは答えなかった。

「そこまで酷い奴じゃないですよ。確かに性格はおかしいし、喋り出すと延々と止まらないし、髪染めるの失敗してるのに気付いてないし、人の話は全然聞いてないみたいでしたけど……」

部屋はシーンと静まりかえっている。全員がアンゲルを『お前何?』という疑惑と非難の目つきで睨んでいた。

「あ、あのー」気まづくなつたアンゲルは撤退することに決めた。「アルバイトの広告だけもらつて帰りますから」

からみつく視線をふりはらうように、アンゲルは壁際に積んであるアルバイト情報を数枚ひったくり、ドアに向かって走った。

しかし、誰かに服の背中をつかまれ、部屋に引き戻されてしまった。

「まあ待て、ちょっと話をしようじゃないか」

「いや、あの、俺、急いでますんで」

そこでアンゲルは妙なことに気がついた。

「あー」

「何だ？」

「俺以外に、新入生は来てないんでしょうか？」

「最近の学生は信仰が足りないからな。すぐイシユ八に染まって、我々の集会には出てこないのだ」

……俺も最初から来るべきじゃなかった。

アンゲルは心の底から後悔したが、遅かった。

このあと、管轄区のコミュニティメンバーたち、つまり『敬虔なる女神ファナティの信徒たち』は、一斉にアンゲルに向かって『アニタ教の奴らをファナティ教に改宗させよう』だの『布教活動に協力してくれ』『女神のために奉仕するんだ』『イシユ八に染まった奴を正しい道に引き戻そう』だのお説教を始めてしまった。

アンゲルは、異常に熱のこもった彼らの演説を聞きながら、うすら寒いものを感じていた。目の前の学生は、この自由主義のイシユ八にいるこの若者たちは……管轄区本国にいる学生よりも、数段、狂信的で、信仰に熱心に見えた。何がそうさせるのかはアンゲルには見当がつかなかったが、少なくとも、管轄区で一緒だった学生たちのほうが、まだ信仰に対しては、冷めていた。毎日のルーティンになると、どんな伝統でも信仰でも、つまらなくなるものだ。うまくサボる方法も知っている。それが、この目の前の学生たちときたら……まるで、布教活動が自分の使命だとも言いたいような熱烈な目つきと態度で、延々と『女神様』だの『道徳』だの『イシユ八人の放蕩』だのを語るのである。

いや、本気なんだ。こいつらはいくまで本気なんだ。本当にそれが『正しい』ことだと思ってるんだ。

俺だって管轄区の人間だ。それはわかる。

しかし何だろう、この得体の知れない不気味さは。

説教からようやく解放されたあとで時計を見ると、3時間以上過ぎていた。

廊下を歩く足がふらついた。軽い吐き気すらしてきた。

気晴らしに敷地内の大型の本屋に入ることにした。管轄区では禁止されている本がたくさんあるはずだ。

こちらにいられる間にできるだけ読んでおこう……。

と思ったのだが、入口から入ったとたん、卑猥な（イシユ八人にとってはごく普通の、水着の宣伝なのだが）女性のポスターに驚いて、アンゲルは外に飛び出してしまった。

何だ？何だ？今のは何だ？どうして入口にあんなものが？いくら自由主義でもあんな露出はないだろう！？いくらアルターが暑いからって！

と思つたら、目の前をほとんど下着のような格好で歩く女性の集団が通り過ぎた。災いなるかな、ビキニやビスチエを普段着として投入するのが、このアルターの最近の流行なのだ。

再び飛びのいたアンゲルは、入口から出てきた男性に衝突した。

男性に謝って、頭を抱えながら帰り道を歩き出すと、今度は女神アニタに扮した女優が、腰に紫色の布を巻いている以外ほぼ全裸（もちろんトップレス）で映っている巨大な広告（ビールを手持っている）があるので、飲料関係の宣伝だと思われる）が、大きなビルの壁を覆うほど大きく印刷されて、『アニタが愛したビール』なんていうキャッチコピーが、妙にくねくねした自体で、女優の体の線に沿うように添えられていた。

おいおいおい、なんだあれは？しかもアニタって、女神だろ？

アンゲルのために説明すると、管轄区には写真を使った宣伝がほとんどない。女性のスカートの長さはくるぶしより下と決まってい

る。女神を広告に使うことは禁じられていないが、それは『そんなことを思いつく不敬な人間がいるはずがない』からだ。

アンゲルはしばらく、この『不謹慎な』広告を見上げて呆然と立ち尽くしていた。イシュハの『異教の女神』は確かに強敵だ。自ら脱いでまで、自由をうたっているのだから。

いくら自由な国でも、女神を宣伝に使うなんてどうなってるんだ？
こんな国で本当にやっていけるのか？

2・6 エレノア 音楽科「コミュニティ

エレノアは音楽科のある校舎に向かい、音楽を専攻するための手続きをしようとした。彼女にとっては夢の第一歩だ。にこにこしながら窓口に向かってきた。

しかし、受付の女性の言葉でその笑顔は消えた。

「その顔なら女優か娼婦でもやったほうがいいんじゃない」

エレノアは耳を疑った。聞き違えたのかと思った。しかしそうではなかった。

手続き済みの受領書を差し出しながら、受付の女性はさらに、

「どうせ男が見つかったらやめるんでしょ、歌なんて」

と、吐き捨てるようにつぶやいたからだ。

何なの！失礼すぎるわ！

エレノアは怒りのあまり、書類をひったくって廊下に飛び出してしまった。数人の学生にぶつかりそうになり、

「ごめんなさい」

と謝って通り過ぎようとする、後ろから声が聞こえた。

「外国人？」

「フェスティバルに出るんですって？審査員に体でも売ったんじゃない？」

……何だって？

エレノアがふり返ると、学生たちはくすくすと意地悪に笑いながら去って行った。

フェスティバルに出ることをどうして知ってるの？フランスの知り合い？

校舎を出てやみくもに早足で歩いたが、体が震えているのがわかった。見ず知らずの人間にいきなり侮辱めいた言葉を浴びせられるなんて、納得がいけないからだ。

なぜこんなひどいことを言われなきゃいけないの？

そう思いながら、今度はコミュニティの集まりに向かう。新入生を獲得しようと、部活動や、各国のコミュニティが張り紙を出したり、勧誘担当の生徒が話しかけてきたりする。

エレノアはまず、父の国であるドウロソのコミュニティに行った。しかし、

「国籍がイシュハ？だめだね」

とあっさり断られてしまった。

「どうして国籍が必要なの？」

「あのね、ここは、ドウロソからイシュハに来たばかりの、何も知らない人のためのコミュニティなんだ。今紛争が起きていて政情が不安定なのは知ってるよね？」

「もちろん」

イシュハとドウロソは常に紛争をしている。誰だつて知っている。「ドウロソ人への差別も激しい。経済的にも困難な学生が多い。そういう人たちが助け合うためのコミュニティなんだよ。君は最初からイシュハに住んでいるんだから、入る必要はないだろう？」

「でも、さっきイシュハの人には外国人って言われたわ」

「イシュハ人は細かいところを見る目がないらね」軽蔑のこもった言い方で、ドウロソの学生が言った。「とにかくここはだめ。アケパリのほうに行つてみたら？」

「……そうするわ」

ちよつととげのある言い方で別れを告げた後、今度はアケパリのコミュニティに向かった。他の国とは全く違う、独特の雰囲気があったりを包んでいる。

アケパリからの留学生は最近激増しているので、コミュニティもかなり人数が多い。エレノアの視界に入っているだけで、その場に50人以上はいただろう。そのうち半分は、着物や浴衣、異様に長い髪の女性、じゃらじゃらと数珠のようなものを首に幾重にも垂らして『伝統的なアケパリ人』をアピールしている学生、残りは普通に、イシュハ人と変わらない現代の恰好をしている。スキニージー

ンズにワンピースの女子学生が妙に多い。

「あーだめだめ。アケパリから来た人じゃないじゃん」

黒髪をポニーテールにした受付の女の子が、軽い発音でそう言った。

「そうだけど、母はアケパリ人で、年に2、3カ月はアケパリで仕事をしていたわ」

エレノアは流暢なアケパリ語を発した。

「うわ、めずらしー。超上手いじゃんアケパリ語。イシュ八人って外国語へタなのに」

受付の別な子（こちらは髪を金髪に染めていたが、明らかに似合っていない）が叫んだ。

「でもさー、あんた、どう見てもアケパリ人に見えないんだよね」

ポニーテールが言った。

「そうだね。髪黒いけど肌が白すぎるしさ、目が青いし。美人過ぎるよね」

金髪がポニーテールに向かってつぶやいた。

「わるいけどさ、あんたはアケパリのコミュに入るような人じゃないと思う」

ポニーテールはエレノアに手で『どいて』という合図をして、後ろに並んでいた別な学生の受付を始めてしまった。

エレノアはがっかりしながらその場を後にした。

大丈夫よ。別にコミュニティに入らなきゃいけないって決まりがあるわけじゃないし、私はここに、音楽のためにやってきたんだから。

音楽。そうだ。

歌おう。

気晴らしに歌いはじめた。思いつくメロディーを適当な発声で。

しかし、歌を口ずさみながら帰り道を歩いていると、通りすがりの学生に、

「うるさいー」

と怒鳴られてしまった。

あわてて走り、女子寮の自分の部屋で歌った。すると今度はフランススがエレノアのドアを開け、凄まじい目つきで睨みながら『うるさい！』と怒鳴ると、乱暴にドアを閉めた。その振動で部屋中の空気が揺れた。

窮屈すぎる。そして他に行くところもない……。

エレノアは枕の上に乗っ伏してうめいた。

それまで、歌は普通に、エレノアの生活の中に溶け込んでいたからだ。

歌う場所がないなんて苦痛すぎる！

「世の中って言うのはそういうもんだよ」母に電話をすると、そんな答えが返ってきた。「一つ成長したじゃないか」

母ヤエコ・ノルタは優しい女性なのだが、エレノアが甘えたいときに限って妙にそっけない態度を取るのだ。そんなことたいしたことないじゃない、何を悩むの？と。

ため息をつきながら受話器を置くと、フランススが後ろに立っていた。

「今の誰？」

「母」

「いいわね」

「何が？」

「なんでもないわ」

「フランススのお母さんは何をしているの？」

エレノアは何気なく訪ねたのだが、フランススの顔色が急に変わった。

「何って……ただのご婦人よ！そんなこと聞かないですよ！」

と叫んだかと思うと、自分の部屋に閉じこもってしまった。

……散歩でもしよう。ここにもいても気分が晴れないわ。

エレノアは帽子を手にとって、外に出た。

図書館の近くまで歩く。あいかわらず暑い。汗が頬や背中を流れ

てくる。

手の甲で汗をぬぐいながら、ふと前方を見ると、大きな楽器ケースを持ち歩いている生徒が目に入った。エレノアは走り寄って声をかけてみた。

「音大の学生ですか？」

「へ？」いきなり声を掛けられてびっくりしたのか、学生が背負っていたケースがぴくりと揺れた。「ああ、そうですけど、何か？」

「私、音楽科に入学したばかりなんですけど、練習する場所がないんです。部屋で歌うと『うるさい』って言われてしまうし……」

「ああ、そういうこと」学生の表情が急に優しげになった。「俺が入学した時も困ったんだよ。音楽科の中に防音ブースがあって、授業が始まる前でも使えるよ」

「本当？」

エレノアの目がきらきらと輝いた。今日初めて何かが上手くいきかけていると感じたからだ。

「誰も教えてくれないから、俺は気付くのに1カ月かかったけどね」学生が苦笑いした。「どうも、ライバル心と言うのか意地悪というのか、あの音楽科には異様な雰囲気があるよ。入ってみればわかると思うけど」

もう十分意地悪なことを言われたわ！

とエレノアは思ったが、口には出さなかった。

「ありがとう！」

エレノアは音楽科に向かって走り出した。校舎にたどり着き、壁の案内図を注意深く見る。確かに『防音ブース』と書かれている場所があった。

「ああ、空いていますよ、ピアノは必要？」

受付のおばさん（こちらは普通に愛想がいい）の声は妙にのんびりしていた

「あったほうがいいけど、なくても平気よ」

エレノアは逆に早口でそわそわしていた。一刻も早く大声で歌い

たい！

「7番が空いてるわ。これカギ。狭くて、ピアノは電子だけど」
「かまいません！」

エレノアはカギをひったくると、目指す部屋に向けてすさまじい勢いで走って行った。

7番と書いてあるドアを開け、中に飛び込んで勢いよくドアを閉めた。そして歌いだすどうでもいい歌。自分でも何が言いたいのかわからないでたらめな歌詞で、思いつくままにメロディーを歌った。エレノアにとってはこれが息だった。呼吸ができなくなったら人間は死んでしまう。エレノアは、自分が窒息しかけていたことに気がついた。あまりにも長い間（といっても数日だが）『息ができなかった』から！

一時間ほど歌っただろうか。そろそろ喉に負担がかかってきたと思ひ、エレノアがブースを出ようとドアを開けた……そして、はっとした。

ドアの前に、たくさん 학생들이 集まって、一斉に自分を見ていたからだ。驚きと、軽蔑と、嫉妬のこもった目つきで。

何？何が起きてるの？

エレノアは一瞬ひるんだ。心臓がバクバクと打ち始めた……が、すぐに廊下を歩きだした。

「あいさつもしないの、態度悪い」

「才能があるからお高ぶってんじゃないよ」

後ろからそんな声が聞こえた。それでも歩き続けた。

人混みからはすぐに離れたが、なかなか落ちついて息ができなかった。

音楽科は異様だ、とさきほど言われたことを思い出した。確かに、何かがおかしい。でも、何かがおかしいのだろう？はつきりと原因がわからないことが、エレノアをますます混乱させていた。一体なぜ、音楽科の生徒たちはあんな目で自分を見るのか？どうして知りもしない人間にあんな悪口を言えるのか？

夢中で歩いているうちに、図書館の近くのカフェにたどりついた。そつだ、コーヒーでも飲もう。少しは落ち着くだろう……。。

2・7 アンゲル エレノア 図書館のカフェ

「アンゲル？」

夕方、アンゲルが図書館の近くを通りがかった時、どこからか自分を呼ぶ声がした。回りを見渡すと、大きなつばのある紺色の帽子をかぶった女性が、カフェの前のベンチに座って、こっちに向かって手を振っていた。

「エレノア！」

アンゲルは久しぶりにさわやかに笑った。頭に付きまとっていたコミュニテイの暗い雰囲気が一瞬で消えた。

しかし、エレノアが沈んだ顔をしていることに気がついた。

「何かあったのか？」

「ダメだったわ」

エレノアが寂しそうに笑って下を向いた。手に持っているコーヒークップを無意味にくるくると回している。

「何が？」

「音楽科の人が意地悪で仲良くできそうにないし、それに……」
「それに？」

エレノアは視線を下に向けて、何かを迷っているように見えた。

「コミュニテイよ！」突然思いついたようにエレノアが叫んだ。「アンゲルは管轄区出身だから、管轄区のコミュニテイに入れるでしょう？」

「ああ、あれか」アンゲルはさっきの『狂信的な女神の信徒の集会』のことを思い出して顔をしかめた。「そんなにいいもんじゃない。出身は同じでも、気が合わない奴ばかりだ。俺は関わりたくないね」「そんなこと言わないでよ。どこにも入れない人もいるのに」

「どういう意味……あ」アンゲルは突然あることを思い出した。「エレノア、たしかご両親が違う国の出身だよね？」

「それよ」

エレノアがアンゲルの目をまっすぐに見つめた。やはりどこか心細いような表情をしているが、そんなエレノアもやはり美しく、アンゲルは見とれた。

「アケパリのコミュニティに行ったら『目が青いからダメだ』って言うの。ドウロソに行ったら『国籍がないからダメ』って」

「心の狭い奴らだな」

アンゲルはこころもち横を向いて笑った。まっすぐ見つめられると本心を見抜かれてしまいそうだ。それにしても、目の色？国籍だっけ？たかがコミュニティに？

「エレノア」アンゲルはできるだけ優しい表情を作った「君って、どこの国籍も持っていないの？」

「私はイシュハで生まれたから、国籍はイシュハなの」「イシュハ」

管轄区だったらよかったのに、とアンゲルは思ったが、黙っていた。

「でも両親は自分の国の国籍を持ったままよ。だから、バラバラなの」

エレノアが、いつかの列車の中のように、ベンチの隣を指さして『座つたら？』という仕草をした。

アンゲルは勧められるままに隣に座った。やはり花のような香りがする。

「ずっと旅してたの？」

「そうよ。世界中を回ったわ。管轄区以外ね」

「えっ？」

「父はドウロソ人なのよ？ドウロソはイシュハと同じ女神アニタを信じていて、管轄区の女神ファナティが気に入らないみたい。私も母もそんなのくだらないって言うてるんだけど、頑なに嫌がるの」「ええっ」

そんな頑固な父親がいるのか。説得するのが大変だ……待て。

俺は何を考えているんだ？

アンゲルが、空想を追い払うように頭を勢いよく振った。

「どうしたの？」

「いや、いや、俺は管轄区の出身だから、ちょっとした衝撃を受けた」

「そう……でも、私は管轄区に行きたいと思ってるのよ」

「ぜひ来てほしいね」アンゲルが乱れた髪を整えながら、エレノアに笑いかけた「イシュハの連中は、メルヘンだとか遅れてるとか田舎だとかさんざん言うけど、いいところだよ」

熱烈なファンティ信者がいること以外はな！

「アンゲルはどうしてイシュハに？」

「え？」

「管轄区にも心理学を学べるところはあるでしょう？」

「ないよ」

アンゲルはうんざりしながら答えた。あまり考えたくなかったが、事実だ。

「ない？」

エレノアは心から疑っている顔をした。

「人間の悩みは女神ファンティと関わりがあるってことになってるんだ。何か意味がある。女神が何かを伝えようとして人間に苦悩を与えているとか、困難には女神の意思が働いているとか、何かの罪で病気になるとか何とか。何でもそんな調子だ。だから心理学どころか、医学だつてたいして進んでない。医者なんてめったに見かけない。小さな国でもやってるような、当たり前前の医療保険もない。カウンセリングなんて誰も知らないよ」

「そうなの？」エレノアは本当に驚いているようだ「管轄区って、精神的にとっても真面目なイメージがあるけど」

「真面目」アンゲルがうんざりしたようないかげんな発音で、その単語を発した「まるで他にいいところがないみたいだな」

「そんなこと言ってないわよ」

「今までで、一番良かった国はどこ？」

「え？」

いきなり話題が変わった。アンゲルはこれ以上管轄区の話をしなくなかった。遅れていて、古臭くて、真面目。それは、アンゲル自身うんざりするほど味わっているあの国の欠点だった。

「今まで……アケパリ。人がみんな親切だわ。あまり感情を表に現さない国だから、曲芸にも歌にも歓声をあげたりしないの。曲芸の最中もシーンとしているし。歌っている間も、奇妙な目つきでじつと私を見つめているだけ。歌が気に入らないのかしらって不安になったわ。でも、みんな真面目に見てくれていて、ぜんぶ終わってから、地面が揺れるようなすごい拍手をしてくれるの。しかも気前よく贈り物をくれたり、舞台に向かってお金を投げたりするのよ！（曲芸師に向かって小銭を投げる習慣があるらしいわ）雇い主にもらった報酬より、観客が投げた金額の方が多かったの。本当よ」

「アケパリ」アンゲルはこの国のことをほとんど知らなかった。「イシュハと戦争してたよね？」

「そう。おかげで私、イシュハ人にいじめられるの」エレノアがそう言いながら苦笑いをした。「フランシスも……同じ部屋の子も、最初の日に『アケパリとドウロソ？どっちもイシュハと戦争をした国じゃないの！』みたいなことを言ってたわ」

「そんな奴気にする必要ないよ。管轄区なんか百年も戦争してたぞ」アンゲルは100年戦争を思い出す。

イシュハと管轄区、女神アニタと女神ファナティの戦いだ。

いるかどうかもわからない『女神』のために、100年も、殺し合いをしてたんだな。

アンゲルは考えずにいられない、その、無駄に費やされた年月と失われた人命を。

戦争ではうまく引き分けに持ち込んだのに、今じゃこんなに差がついている。

どうということだ？

アンゲルは、何もかもが進んでいるイシュハと、自分の国の古臭

さを比較して、気分が暗くなった。

「100年戦争ね。イシュハって、どの国とも戦争してるわね」エレノアが立ちあがった「話を聞いてくれてありがとう。コミュニティなんてなくても私は一人で歌うわ。それとも、『マイノリティー限定』のグループでも結成しようかしら？」

「俺も入れてよ」

俺は女神を信じてないんだよ、だから管轄区の連中と同じところにはいられないんだ。アンゲルは心の中でつぶやいた。

「あなたは必要ないでしょ」エレノアがまぶしいほど美しい笑いを浮かべて、駈け出した「フェスティバルで歌うことになったの！聞きに来て！」

アンゲルは走っていくその後ろ姿を見ながら、一人考えていた。

女神アニタ……強敵だな。国籍と親父をつかんでいるとは。

でもいい感じじゃないか？明らかにエレノアは俺に好意を持っているぞ……。そうじゃなきゃ、あんなすばらしい笑顔ができるもんか！管轄区に行きたいって言ってたし……。

やはり何かを勘違いしながらニタニタと笑い、一人うきうきしながら道を歩くアンゲルを、何人かの学生が、不審な顔で遠巻きに眺めていた。

2・8 エブニーザ ヘイゼル アンゲル 図書館く男子寮

エブニーザは、授業中も、廊下を歩いている時も、常に女の子がきやあきやあ言う声や、回りのざわつく音に怯えて、手が震え、足はすくみ、顔は真っ青になり……。

授業が終わるや否や、全力で走って部屋に戻った。

そのまま部屋にこもって本を読む予定だったが、ヘイゼルがやってきて彼をいろいろな所に連れ回した（正確に言うと『引きずり回した』）ため、今は疲れ果てて、ぐったりと横になっていた。

どうして、こんなことになってしまったんだろう？

エブニーザにはどうしても理解できなかった。わざわざ外国の学校に連れて来られ、うるさいばかりの授業（周りの学生の様子から、講師の話を目に聞いていたのは自分だけだと確信していた）に出なければいけないのか？

ヘイゼルは『彼女』のためだと言ってたけど……。

エブニーザの思考はそこで切り替わる。

彼女。

目つきがぼんやりしはじめた。彼はもはや自分の部屋にはいなかった。

どこか遠くの、薄汚れた部屋を見ていた。そこに、ぼんやりと座っている女の子……髪と目が茶色で、痩せていて、あごがとがっていて、窓の外を何も感じていないような無表情で眺めている……。

ああ、また窓の外を見ているんだな。

エブニーザがそう思って薄笑いを浮かべた。

その瞬間、映像は急に切り替わる。薄暗いが証明があり、両側に本棚があつて、そこを奥まで進んでいくと、誰も使われていない、古代の書物や、化石が並んでいる部屋がある……。

20分後。エブニーザは学校の図書館の奥深く、誰も使っていない古代の資料室の中にいた。夢で見たとおり、その部屋はあつた。

何もかもにほりがかぶっていて、置いてある本もことごとく、数百年は前のものばかり。

どうやら、何年も使われていない部屋のようだ。

勝手に戸棚を開け、何百年も前に書かれたと思われる、手書きの黒魔術の本を見つけて読みふけた。

どうしてそんなものを自分が手に取っているのはわからない。

しかし、ここが一番安全なのだ。少なくともこの学校の中では。

エブニーザは心から思った。本や、自然や、夜の闇の神秘に、溶け込んでしまつて、二度と出てこなくても済んだら、どんなに幸せだろうと。

しかし、平和な時間に終わりがあることも、エブニーザは知っていた。

夕方には、探し回っていたヘイゼルに見つかり、寮の食堂まで引きずられていった。そこでも食器を落としたり、びくびくして全然食事が進まない。まわりの物音、話声、そんなものに耐えられず、結局、ほとんど食事に手をつけずに走って部屋に逃げてしまった。

ヘイゼルは食べ終わってからゆっくりと帰ってきて、エブニーザの部屋をノックしたが、返答がない。

ドアには鍵がかかっておらず、中に入ると、エブニーザはベッドに、倒れ込んだようにうつぶせになって、ぐったりと眠っていた。

「こりゃ、思ったより厄介だな」

とヘイゼルはつぶやいた。

ヘイゼルが部屋を出ると、そこに帰ってきたアンジェルが突然、

「この国の広告はどうなってるんだ!？」
と叫んだ。

「広告？」

「ビールの、なんか、素っ裸のだよ!！」

「ああ、あれか」ヘイゼルがうんざりした顔をした。「あれが何かかな?まさか、不道徳だとか女神がどうか言っんじゃないだろうな、真面目な教会つ子め」

「うっ……」

「だから管轄区は嫌なんだよ」ヘイゼルが軽蔑の声を発した「くそ真面目にイシュ八を批判するくせに娼婦の数は世界一だろ。トップレスの広告くらいで驚くなよ」

「そういう問題じゃないだろう！……今何て言った？」

「娼婦の数が世界一」

シヨックを受けた顔のアンゲルに、ヘイゼルがいかにも愉快そうな顔で繰り返した。

「娼婦の数が世界一多いんだろ、管轄区は」

「管轄区にそんな職業はない」

「ハア？」ヘイゼルがあからさまに呆れたような大声を上げた「何をバカなことを。娼婦のいない国なんてあるわけないだろ？知らないのか？イシュ八の倍だぞ？しかも、イシュ八の場合はみんな自分から志願して保険もついて、男から大金を巻き上げられる華々しい職業だが、管轄区じゃ、貧しい家の娘がタダ同然で売られてるんだろ？」

「そんな話は聞いたことがない」

アンゲルは本当に衝撃を受けているようだが、そんなことで攻撃の手を緩めるようなヘイゼルではない。

「聞いたことがない？まあ、確かに管轄区のメディアは教会様女神様シユタイナー様だからな。報道はされないし新聞にも載らないだろうな。でも、そういう話は生きた人間の間では隠しようがないものだろ？知らないはずないだろ？親父とか学校の奴から聞いたことないか？そこらへんのおっさんとか」

「ないよ」アンゲルがかすれた声でつぶやいた「本当じゃない」

「本当はそういうのが好きなんじゃないですかあ、エンジェル氏」

ヘイゼルがにやにやし始めた。

「うるさい！俺は勉強しに来たんだ！」

「イシュ八に留学してきた奴はみんなそう言うよ。でも本当は自由に遊びたいだけなんだろ？知ってるか？このアルターでは、非行で

捕まる奴はたいてい、外国から『勉強しに』来た奴らなのだぞ？麻薬の密輸入も暴行事件も、この変じゃほとんど外国から来た留学生の作業なのだぞ？迷惑極まりない連中だ！勉強したきゃ自分の国でやれってんだよ。今時どこの国にも大学くらいあるだろうが。なんでわざわざイシユハに来るんだよ」

「心理学の学校があつちにはないんだよ！」

おもしろおかしく喋っていたヘイゼルが、突然真面目な顔になった。

「……本当に心理学やるのか？」

その表情の変化にアンゲルは一瞬ひるんだが、すぐに言い返した。

「うるさい！お前こそ勉強しろよ、ティツシュファントム！」

「ティツシュファントムって言うなあぁ！！！！！」

建物中に響くヘイゼルの怒鳴り声。アンゲルも次々と怒鳴り返し、結局大げんかに発展した。

二人の怒鳴り声でエブニーザは目を覚ました、そして、

「似てるな……あの二人」

枕に向かってうめきながら、ぼそりとつぶやいた。

音楽科のオリエンテーションが終わった。

エレノアは困り果てていた。学科の内容がわからないからではない。新入生テストの結果は上級1。音楽科に所属するには問題のない成績だ。問題は……他の学生が、エレノアを避けるのだ。話しかけようとして近づくと逃げて行き、無視され、どこからか消しゴムや、丸めた紙が飛んでくる……。

ぐったりした顔で建物から出た時、

「おい、その青目に黒髪の美人さん」

という、時代がかったアケパリ語が聞こえてきた。

声がした芝生の方向を向くと、見るからにアケパリ人らしい、細いつり目、黒いツンツンした短髪に浅黒い肌の青年が近寄ってきた。目の端にはんそうこうが貼ってあり、ギターのハードケースをしょっている。

青年はケンタ・タナカと名乗った。前日、ギターの練習中に、エレノアの歌声が隣のブースから聞こえてきたのだが、

「あまりに素晴らしい歌声だったから、本人に伝えたくて」

照れ笑いしながらそんなことを言うケンタに、エレノアは嬉しくなった。音楽科でまともに話してくれる人間に初めて出会ったからだ！

「私の母もアケパリ人なのよ」

「じゃ、これ、読める？」

ケンタはギターケースの中からぼろぼろのプリントとペンを取り出し、裏に自分の名前を漢字で書いてエレノアに見せた。

田中健大。

「これ『ケンダイ』じゃないの？」

「いや」ケンタがにんまりと笑った。「人名の場合はこれで『ケンタ』なんだ。漢字が読めるってことは本物だな」

「それ、どうしたの？」

エレノアはケンタの目の端についているばんそうこうを指さした。

「アケパリ嫌いのイシュ八人に襲われた」

「えっ？」

「財布取られた。でも、ギターと腕を守ったから俺の勝ち」

ファイティングポーズを取って笑うケンタ。エレノアもつられて笑う。

「なんだかおもしろそうな人だわ。」

ケンタはこれからギターの練習があると言って校舎に入って行った。

寮に帰ると、フランシスがキッチンのテーブルに分厚い本を何冊も広げて何か書いていた。政治学の宿題らしい。

「フランシス」

「何？」

「一つ聞いていい？」

「何？」

「お金持ちなのにどうして寮に入ってるの？」

「そういう規則だからよ」本から顔を上げずにフランシスが答えた。「学生は全員寮に入るって決まってるの。親の財産は関係なくね。」

自立を促すんだったか何だったか知らないけど、そんな理由よ。それくらいで自立できたら誰も苦労しないわね。そう思わない？」

「そうね」

フランシスの言葉には妙なとげがある。機嫌が悪いのだろうか？

あまり刺激しないほうがよさそうだと思い、エレノアは自分の部屋に向かった。

「ただ、ノレーシュの姫君だけは例外で、別荘から車で通ってくるの」

「ノレーシュの姫君？」部屋に戻ろうとしていたエレノアがふり返った。「学校にいるの？」

「紹介してあげるわ。家同士でつきあいがあるから……でも、変人

だから覚悟しといてね」

フランシスは最後まで顔を上げなかったが、エレノアは気にしていなかった。

本物の王族に会える！

エレノアは興奮してその日は眠れなかった。窓辺でぼんやりと街の明かり（なんて綺麗なんだろう！そして、この明かりの数だけ、まだ起きている人がいるということなのだ！）を眺めていると、部屋のドアが急に開いて、古風なネグリジエ姿のフランシスが入ってきた。

「眠れないのよ」

フランシスは小さな声でそつつぶやきながら、エレノアのベッドの端に座った。

エレノアも起き上がって、フランシスの隣に座った。

それからしばらく、フランシスは下を向いたまま、何も話そうとしなかった。手だけが何か、落ちつかないような、迷っているような仕草でたえず動いていた。

どうしたんだろう？

エレノアはしばらく、フランシスの隣で何かが起きるのを待っていたが、いくら待ってもフランシスが動かないので、

「私、寝るわ」

と、ベッドの中に戻ろうとすると、突然フランシスがエレノアの手をつかんだ。

「お願いだから出て行かないで」

フランシスらしくないセリフだ。

エレノアは驚いた。出て行くなんて一度も言ったことがないし、考えたこともなかったからだ（追い出されそうだなと思ったことは何度もあるが）

しかも、目の前にいるフランシスは、別人のように弱々しい。

「自分がヒステリーなのはわかってるのよ。何にでもイライラする、でも自分でもどうしてかわからないの」

エレノアが何を言っていていいかわからず黙っていると、フランシスがさらに続けた。

「命令されるのが嫌いなもの。自分で決めたいの。家に帰ったら何でも親に決められてしまう。人の言うとおりにすると不安になる。たいたしたことじゃなくても、相手の方が正しいってわかってても、『いやだ』と言わないと、そのまま相手の意思に取り込まれて、自分がなくなってしまうそうで……」

「それで、ルームメイトを何人も追い出したの？」

「追い出したんじゃないわ！勝手に出て行ったのよ！」

金切り声で叫び出したので、エレノアは慌てた。

「落ちついて」エレノアはできるだけ優しい声でそう言って、フランシスの背中をさすった。「私は出て行かないわ」

「本当？」

「本当。だからもう叫ばないで。寝ましようよ」

エレノアはブランケットを広げ、フランシスを寝かせると、自分もそーっと隣にもぐりこんだ。

そのうち、フランシスは寝息を立て始めた。嘘のようにあっさりと。

……何だろう、この人。

すごく、さみしがりやかなのかしら、それとも単に成長してないのかしら？

なんだか知らないけど、これから面倒なことになりそう……。

エレノアは、静かに眠っているフランシスの顔を眺めながら、これから来るであろう災難（具体的に何が起こるかはわからないが）を思っって身をよじらせた。

2 - 10 アンゲル アルバイト先にて

次の日、アンゲルは列車でポートタウンに行き、バイトを募集していたレストランに行ってみた。

最初にやってきたときと同じように、人と車の量に圧倒された。やたらに目に着く広告と、派手な格好（というより『下着姿同然』）の女性たち、異常に早足で、ぶつかったら何メートルかふつとばされそうなほど勢いよく歩いている人の群れ……。

アルバイト広告を見ながら歩いていたアンゲルは、だんだん気分が悪くなってきた。

……だめだ、早く見つけないと。

それからさらに数十分ほど迷った末、目的の店（レストラン）はなんと、ポートタウン駅のすぐ裏にあることが分かった。

無駄に歩き回った疲労でぐったりしながら店のドアを開けると、中は客でいっぱいだった。かなり繁盛しているようだ。

「あー」

「何名様ですか？」

「いえ、アルバイトの募集を見て来たんですが」

「ああ、アルターの学生？」

「はい」

「奥に店長がいるから、ヒゲの」ウェイトレスがカウンターの隣のドアを指さした「その人に話して、たぶんあつという間に決まるから」

「はあ……」

あつという間に決まる？ どういうことだろう？

疑問に思いながらドアの中に入っていくと、そこには驚くほど大量の食器（しかも使われた後らしく、汚れている）が積みまわって、シンクには、必死で食器を洗っているヒゲの生えた太った男と、隣で食器をふいているかわいらしい女の子がいた。

「あー」

ヒゲの生えた男がアンゲルの方を見た……かなり殺気立った目つきで。

「アルバイトの広告を見て来たんですが……うわっ」

アンゲルが話し終えるのを待たずに、ヒゲがアンゲルをつかんで、シンクの前まで引っぱって行った。

「洗ってくれ！客が多くて追いつかない！」

「えっ？」

「俺はダイナーの準備をする！」

ヒゲはそう叫ぶや否や、ドアの外に飛び出して行った。

「ちよつと待ってください！面接は……」

「面接、ないわよ」

隣で皿を拭いている女の子がそう言って笑った。

「ない？」

「そんな時間ないの。人が足りないのね。だから早く皿洗った方がいいわよ。こうしている間にも……」

ドアが開き、ウェイターがまた『洗いもの』を大量に持ってきた。「ね？」

呆然としているアンゲルに向かって、女の子がウインクした。

それから夜中まで、アンゲルは延々と皿を洗い続ける羽目になった。給料はどうなってるんだとか、契約はどうなってるんだとか、そんなことを考える余裕が全くなかった。そうとう繁盛している店らしい、洗っても洗っても、食器の山は減ることがなかった。

それでも、皿を拭いている女の子とはいろいろ話げできた。ソレア・アークという綺麗な名前で、実は彼女も管轄区出身だった。

「ここに来る前に、すごいことがあったのよ」

「すごいこと？」

「入学金を振り込みに銀行に行った時、3人組の男につかみかかられて『金をよこせ』って」

「えっ？」アンゲルは驚いて手元の皿を落としそうになった「まさ

か一人で大金持って歩いてたんじゃないよね？」

「それが……父が仕事で手が離せないって言うから、一人で歩いて
いたの」

「そりゃ、襲われるだろ」

管轄区は治安が悪い。夕方6時を過ぎると自主的に外出を控える。
『襲われる可能性が高い』からだ。昼間でも、女の子に大金を持た
せて一人で歩かせるなんてありえない。

「でもね、通りがかりの、黒髪の怖い目の男の人が、三人を追い払
ってくれたの！」

「へー」

アングелは白けた返答をしたが、ソレアはあまり気にしていない
ようで、興奮気味に話は続いた。

「しかもね、『あなたは誰？』って聞いたたら『家に帰って、最近大
きな強盗のニュースが入ってなかったか聞いてみる。財閥の金庫を
破った奴の話が聞けるだろ。それが俺だよ』なんて言うのよ？それ
でうちに帰ってから母に聞いてみたら」

「金庫破りの犯人だったの？」

「そう！」

「警察に通報したよね？」

「しないわ」

「えっ？」

洗剤の容器を強く握りすぎて、緑色の液体が天高く跳ねあがった。
「だって助けてもらったのよ？それに、金庫の持ち主は前から評判
の悪いいやな人だったし。いいじゃない」

ソレアはそこで言葉を切って、飛び散った洗剤を吹くと、両手を
組んでうつとりしたような顔をして、こう言った。

「きつと、私が毎日女神様にきちんと祈っていたから、助けを呼ん
でいただけなのよ」

……ほんとに女神様がいたら、そもそも道で襲われなし、金庫
破りなんてものがこの世に存在してないと思うけど。

アンゲルはそう言いたかったのだが、黙っていた。

相手はごく普通の（あくまで『管轄区での』普通だが）女神の信徒なのだ。本人が『女神が助けてくれた』と信じているのだから、何を言っても無駄だろう。

アンゲルは急に疲れを感じ始めた。それまで全く気にしていなかったのに、洗っても洗っても一向に減らない皿やカップが異常に憎らしく思えてきた。

どうしてイシュハに来てまで、管轄区の奴に出会わなきゃいけないんだろう……。

時々後ろの調理場から、シェフたちの会話が聞こえたが、その内容はこうだ。

「シュツティファントがまた企業買収を始めたらしい」

「またシュツティファントか！」

「何でも一人占めしやがって」

「いや、あれがイシュハだよ。シュツティファントはまるでイシュハそのものさ。欲望のままに奪い取る……」

「どうやら『シュツティファント』という単語には良い印象がないらしいな。それにしても『欲望のままに奪い取る』ってすごいな……そんなに悪い奴らなのか？」

皿を洗いながらアンゲルはそんなことを考えた。

ようやく閉店の時間になり、客が帰った後、ヒゲの店主と掃除をしながら時給と契約内容を確認した。学校が終わった後、夕方から週4日の勤務で寮の費用は賄える。しかし店主が『忙しいから週5で着てくれないと困る』と言ったので、結局、土曜日を含めて5日ということになった。

やっと帰れる……。

疲れ果てたアンゲルが店を出ようとする、ソレア・アークが、

「女神のご加護を！」

と言いながら手を振って去って行った。死ぬほどかわいらしい笑顔で。

もちろん彼女は悪意があつてそんなことを言っているのではない、ただのあいさつだ。しかし、アンゲルはますます疲れ果てて、足元がふらついた。

「いないだろ、女神なんか……」弱々しくつぶやく。「しかもここは、イシユハだぞ」

イシユハ。そうだ。ここはイシユハなんだ。自由の国のはずだ。なのにこつちに来て以来、ろくな目にあつていない気がする。ルームメイトはティッシュユファントムだし、管轄区のコミュニティは異様だし、異教の女神様は脱いでるし、バイトの女の子まで『女神のご加護』とか言ってるし。

そして時計を見ると、終電の10分前だった。

あわてて駅まで走る。なんとか間に合った。列車に乗り込んですぐ疲れて眠り込んでしまい、あやうくアルターを寝過ごすところだった。

2 - 11 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮

「おおーようやくご帰還か、エンジェル氏」

アンゲルが部屋に戻ると、ヘイゼルがソファアを占拠して新聞を広げていた。

時刻はすでに夜中の1時。

「ここは俺の部屋だろ!？」

「またそれか。いいかげん慣れるよ。ソファアがあるんだから憩いの場でもあるのさ」

「おい……」アンゲルがヘイゼルに詰め寄った。「前も言ったけどな、俺はイシュハに勉強しに来たんだ。遊びに来たわけでも、のんびり憩いに来たわけでもない!」

「まあ怒るな、怒るな」ヘイゼルがふざけた声を出した。「今日は俺だって大変だったんだぞ? エブニーザをいろんなところに案内してだな」

「案内じゃないだろ? 連れ回したんだろ? お前の事だからな!」

「人間きが悪いな」

「そういえば、コミュニティで変なうわさを聞いたぞ」アンゲルは言うべきか迷ったが、聞いてみることにした。「前のルームメイトをサンドバッグ代わりにしたそうじゃないか」

「ああ、あれか」ヘイゼルはつまらなさそうにそっぽを向いた。「あれはあいつがとんでもないバカだったからさ」

「そんな理由で人を殴るなよ!」

「まあまあ、そんなのはあくまで昔の話だろ? 確かに去年の俺はひどい奴だった。被害総額は計り知れない。でも今年は違うさ」

「何が違うんだよ」

「色々あったんだよ、シユタイナー爺さんのところでな」ヘイゼルが右手の人差し指を立てて、振った。「エブニーザに出会うまで、俺の辞書には『同情』とか『配慮』っていう言葉がなかったんだよ」

「……今もないだろ？」

「まあまあ……」

ヘイゼルが、出て行こうとしたアンゲルをにこやかに止めた。

「あいつに出会って初めて『世の中には、誰かがなんとかしてやらないとどうにもならないかわいそうな人間がいる』ということに気がついたわけだ。それまでは、周りの連中はみんなクズだと思ってたよ」

「……今でも思ってるだろ？」

アンゲルは、今までのヘイゼルの言動をひととおり思い出してみたが、そのどれからも、人を小馬鹿にしたような印象しか得られなかった。

「思ってるけど、質が変わったんだ。説明しにくいけど……まあ、安心したまえ。エブニーザとエンジェル氏は殴らない。約束しよう」

「エンジェル氏って呼ぶのやめろ、ティツシユファントム」

「ティツシユファントムじゃない！ シュツティファントだ！」

ヘイゼルがまた例のすさまじい怒鳴り声を発して、アンゲルの胸ぐらをつかんだ。興奮で目の血管が浮き上がっている。

「だったら俺のこともエンジェルって言うな！」 アンゲルはもがきながらも、同じくらいの大声で言い返した「怒鳴るのもやめろ！ 耳がおかしくなる！」

「何の騒ぎ……あ！」 部屋からエブニーザが出てきた「何やってるんですか！」

「あー心配ない、心配ない」ヘイゼルが急に力を抜いてアンゲルを床に放り出した「ちょっととした権力闘争だ。もう終わった」

「何が権力闘争だ！？」 アンゲルが床に転がりながらわめいた「ここは俺の部屋だぞ！」

「まーだそんなこと言ってるのか？」

ヘイゼルが呆れた顔で、床に転がっているアンゲルを見おろした。

「あのー」エブニーザがおずおずと言いだした「やっぱり僕の部屋を使ったら……」

「ダメ！」

「許さん！」

アンゲルとヘイゼルが同時に叫んだ。エブニーザは困惑の顔で瞬
きした。

2 - 12 エレノア フランシス 女子寮

同じ日、エレノアの機嫌を取りたいフランシスが、めずらしく自分からヘイゼルに電話をかけようとしていた。

確か、ヘイゼルと一緒にいた男が気になるって言ってたわね。

エレノア本人が『出て行かない』と言っているにもかかわらず、フランシスは怯えていた。何かエレノアの気を引くようなことをしないと、またルームメイトを失うかもしれない。そしてあの悪しきヘイゼルが『ルームメイトその36!』とか叫ぶのを聞かなければいけないのだ。それだけはどうしても避けたい。

『おやおや、ご令嬢自らお電話とは、台風でも近付いてるのかな?』ヘイゼルのふざけた声が聞こえてきた。いつもならここで怒鳴り散らして受話器を置くところだが、そういうわけにはいかない。

「あんたが管轄区から連れてきた男について知りたいんだけど」

『は? ああ、エブニーザ? そんなこと聞いてどうするのかね』

「あんたのことだから、どうせ何かに利用するために連れ回してるんでしょ? どういう使い方をしてるわけ? シュタイナーと関係があるって本当なの?」

『なぜそんなことが気になるのかな?』

「うちだってシュタイナーとは取引があるのよ!」フランシスはイラついた声で叫んだ「聞いちゃ悪い?」

『あいつはかわいいそんな奴なのだぞ』独特の語り口調でヘイゼルが話し始めた『管轄区でひとさらいが流行っていたのは知ってるだろ? あいつはその被害者の一人でな……』

「人さらいの被害者?」

『強制労働させられていたところから逃げ出して、シュタイナーに拾われたのさ』

「何それ。どこの何者かわからないじゃないの、そんな奴どうして引き取ったのよ」

『そんなことを聞いてどうするのかね。あくわかつたぞ。エブニ―
ザがいつも俺のそばにいるから邪魔なんだろう？嫉妬してるな？』

「そんなわけないでしょ！バカじゃないの！」

『いやーそのむきになって怒鳴るところがあやし……』

フランススは電話を乱暴に切った。

「受話器はもつと優しく置かないとダメよ。壊れるわ」

後ろから声がしたのでフランススが飛び上がった。帰ってきたエ
レノアが呆れた顔でフランススを見ていた。

フランススが、ヘイゼルから聞いた内容をエレノアに伝えると、

「人さらい？聞いたことがあるわ」

と言った。

「管轄区は何もかも遅れていて警察も機能してない、どうしようも
ない国なのよ」フランススは気を取り直して、お得意の悪口を言い
始めた「知ってる？あそこの身分制度つてめちゃくちゃなのよ。警
察より貴族の方が格が上なの。貴族は何をやっても逮捕されないの
よ……殺人だろうと強姦だろうと。そんな国がまともなわけないじ
やないの」

「そうなの？私が聞いた話では、のどかな、いいところだって……
一度行ってみたいわ」

「やめなさい。あそこはかなり男尊女卑よ。アケパリより酷いわよ。
あなたが旅してきた国とは違うの」

子供をしつけるような態度でフランススはそう言い、窓の外を見
て、ふと、つぶやくようにこんなことを付け足した。

「まあ、イシュハも大していい国じゃないわね。平等なんて嘘よ。
私が大人になるまでに何か変わるかしら？そう思いながら学校に通
ってたけど、どうやら何も変わりそうにない。何でも男が勝手に決
めるのよ」

そして、疲れた顔で自分の部屋に戻ってしまった。

エレノアも、言われたことを考えながら自分の部屋に戻る。生ま
れつき自由に生きていたエレノアには、フランススが嘆いているこ

とがあまり実感できない。ただ、フランシスがなぜ悩んでいるのか、何に悩んでいるのかはうつすらと感じ取れる。

イシユハは男女平等ということになっている。

でも、本当はそうじゃない。それは、フランシスもエレノアも実感として知っている。家の中で家事をしているのはたいてい母親一人。会社の重役はほとんど男性で『世界で影響力のある男性』はCEOとか大統領とか、社長だが、『世界で影響力のある女性』という特集では、どこかの幹部とか、マネージャーとか、自由業とか、女優とか、なんとなく『一ランク下』の集まりになる。旅先で出会った人をふり返って見ても、安い接客業や製造業は女性が多く、偉い人の多いイベント（あまり旅芸人が呼ばれることはないが）は男性が多い。

窓から、見事すぎる夜景を眺めながら、エレノアは考える。

世の中は変わるだろうか？ 私たちが大人になるころ……。

2 - 13 アンゲル ヘイゼル 屋根騒動

夕食の時。

アンゲルが食堂のテレビをぼんやり見ていると、台風が南から接近中と報じられ、天気図には、ちょうど、アンゲルが住んでいた町のすぐ下に白い渦巻が見えていた。

嫌な予感がする……。

アンゲルがそう思いながら部屋に戻ると、案の定、電話が鳴った。

「アンゲルかい？」

不安げな女性の声。

予想通り、母だった

「また台風が来るんだよ」

一時間ほど、不安がる母親をなだめて、ため息をつきながら電話を切ると、後ろから、

「何をそんなに『大丈夫だよ』を連呼する必要があるのかな？」

という声がした。ふり返ると、ソファで新聞を広げていたヘイ

ゼルが、不思議そうな顔でこちらを見ていた。

「台風で一度屋根が飛んだことがあるんだよ」

「屋根が飛んだ？」

「だから心配してるんだよ。また何か吹っ飛ぶんじゃないかって」

アンゲルはわざとらしくおどけたそぶりをした「まあ、修理する金がなくて親父と俺で適当に打ちつけたから、あつという間に飛んでいってもおかしくはないけどね」

前に台風が来た時、屋根と一緒にアンゲルの妹が飛ばされた。

数日後、妹は川で遺体で発見された。

顔が判別できないほど変わり果てていたが、腕につけていたブレスレット（アンゲルが誕生日にプレゼントしたものだ）で妹だとわかったのだ。

ブレスレットがこんな用途に使われるなんて、誰が予想できただ

ろう。

娘を失ったショックで、両親は魂が抜けたようになってしまい、屋根はアンゲルと、近所のおじさん（やはり子供を失っていたが、両親と違い腑抜けにはならなかった）で直した。

「こんなひでえ台風は、俺も初めてだよ。家ごと吹っ飛ばされるなんてよ」

おじさんはそうつぶやいていた。錆びた釘（新品が手に入らなかった）を打ちながら。

管轄区では、台風や暴風雨のたびに、誰かがかならず死ぬ。

アンゲルはそんなことを思っただけでまた気分が暗くなっただが、ふと、いつも管轄区を小馬鹿にするヘイゼルが、珍しく黙りこんでいることに気がついた。

変だな。

まあいいか、静かだ。

アンゲルは特に気にせずに、借りてきた心理学の本を読み始めた。

次の朝、電話が鳴ったのでアンゲルが出ると、

「今、修理業者とかいう人たちが来てて、屋根を直すって言っただよ」

母親の怯えた声が聞こえてきた。

「は？」

「シュツティファントがどうとかいってるけど」

「えっ？」

「あんたが頼んだの？」

アンゲルはしばし呆然と受話器を握っていたが、確認する

「そう言つと受話器を乱暴に置き、すさまじい勢いで廊下を走り、食堂で朝食をとっているヘイゼルに向かって、

「余計な事をするなああああああああああ……！！！！！！」

と、すさまじい金切り声で怒鳴った。

「お前は俺をバカにしてんのか!？」

さすがのヘイゼルも驚いたのか、スプーンをくわえたまま、目の前のアンゲルをポカーンと見上げてなにも言えないようだ。

「おい、謝れよ」近くにいた学生があわてて駆け寄ってきた「シュッティフアントだぞ」

そこでアンゲルははっとして、周りを見回した。

食堂にいる生徒のほぼ全員が、緊張した面持ちでこちらをじっと見つめていた。

「何で怒っているのかな？」

ヘイゼルがスプーンを置いた。

「うちの屋根だよ!今電話が来たぞ!」

すると、ヘイゼルはいたって真面目な顔で、

「だって、困るだろ、ありえないだろ、今時屋根が飛ぶなんて」と、つぶやいた。

「はあ?」

「台風くらいで飛んでちゃ、生活できないだろ?」

「はあ……」

「普通に作り直せば、簡単に飛ばないだろ?」

「いや、そうだけど……」

「イシユ八にも台風は来るけどな、ガラスが割れたりものが飛んだりしても、屋根が飛ぶなんてありえない。そんな家はとっとと直すべきなんだよ」

当然のことのようにそう言われて、アンゲルは返答に困った。

頭に上った血は完全に引いていた。

目の前のヘイゼルには、いつもの、からかっているような様子が全くない。

どうやら、単なる親切のつもりだったらしい。

「ところで、なんで怒っているのかな?」

本当にわかっていないヘイゼルに、アンゲルは呆れて怒る気力もなくなつた。

「先に俺に相談してくれよ。いきなり外国から知らない男の集団がうちに来たんだぞ。うちの親が怖がってるんだよ」

「ああ、なるほど」ヘイゼルはやっと納得したようだ「確かにそうだな」

ヘイゼルが、何事もなかったかのように食事を再開したので、アングエルも部屋に戻ることにする。呆れすぎて、朝食を食べる気力もわかなかった。

……それにしても、わざわざ外国に人を送って屋根を直すなんて、どうしてそんなに自由に大金が使えるんだ？ シュツティファントはそんなに金持ちか？ だからって、子供にそんな大金使わせるか？ 一体親は何を考えてるんだ？

そして、思い出したように振り向いて、食堂にいる他の学生を観察した。今では元通りに食事に戻っているが、さっき自分がヘイゼルに怒鳴った時の周りの態度は……慌てて、怯えていた。まるで王様に刃向った人でも見たように。

ヘイゼルってそんなに偉いのか？ シュツティファントはそんなに怖い存在なのか？ それにしても『普通に作り直せば、簡単に飛ばないだろ』って、そんな単純な話なのか？ そんなに簡単なことのために、妹は死んだのか？ やっぱり管轄区は遅れてるんだな……。

2 - 14 エレノア アンゲル フランシス 朝／カフェ

エレノアは朝に弱い。

目ざましが鳴ってもいつまでもいつまでも起きないの
で、怒ったフランシスは、大量の目覚まし時計を用意し、エレノア
の部屋を『時計だらけ』にした。

しかし、その大音響でさえ、エレノアをすぐに起こすのは不可能
だった。

「起きろ！起きろってんだよ！このアマ！！クソ女！！聞こえてや
がんなのか！！」

結局、逆上したフランシス（身分が高くせに口が悪すぎる！）
がベッドに飛び込んでエレノアをなじりながらたたきのめし、やっ
と目覚めたエレノアは怒鳴り散らす『女王様』から逃げるように部
屋を出てきたというわけだ。

帰り道、図書館のカフェにアンゲルの姿を発見。近寄っていくと、
エレノアに気がついたアンゲルがあわてて手に持っていた雑誌をテ
ーブルの下に隠そうとした。

「何を読んでるの？」

アンゲルがはずかしそうにエレノアに見せたのは、『イシュハの
セレブ達』なんていう変なゴシップ雑誌だった。

「シュツティファントの事が知りたかったんだよ」アンゲルが言い
訳のように言った「寮の連中がヘイゼルを妙に怖がってるって言う
か……偉い人を取り巻いてるというのかな、とにかく変な態度なん
だ」

「シュツティファントはこの国で一番の富豪で、イシュハの国債の
ほとんどを握ってるって話よ」

「国債？」

「昔ニュースで見たわ」

「あ、そう」

「ニューヨークに出るほど有名なのか。管轄区ではそんな話聞いたこともなかったな……。」

「シグノーは国で二番目の金持ち。シュツティファントが一番金持ち……。フランススがそう言ってたわ。それに、旅先で聞いた話だと大企業が何か不祥事をして一時的に株価が下がると、そこを狙って買収を仕掛けるとか……。あまり好かれていないみたい。どこに行っても悪口しか聞かなかったわ」

「そうなんだ。そういえばバイト先でも文句を言ってる奴がいたな。『欲しいまま奪い取る』とか何とか」

「それは言いすぎね」

エレノアが厳しい顔で、断言するような強い口調で言った。

「そう……そうだね」

「ヘイズルの悪口を言おうと思っていたアンゲルは、そこで口ごもってしまった。」

エレノアはアンゲルの向かいの席に座り、フランススが、朝起きられないエレノアのために目ざましを部屋中を埋め尽くすくらい買ったという話をした。

「そこまでするフランススもずいぶんヒマ人だな。でも、そんなに起きられないなんて変だよ。夜更かししてない？」

「10時には寝てるわ」

「早いなあ……昔何かあったとか、悩み事があるとか、あ、薬飲んでない？睡眠薬とか抗うつ剤とか……」

「飲んでないわよ！」

「俺は何もなくても、6時に目が覚めるんだ」

エレノアは驚いた顔をした。

「管轄区じゃそれが普通なんだ」アンゲルがどこか寂しそうな顔で話し始めた。「みんなそろって6時に起きて、揃って祈って食事して、学生も会社員も公務員も、全く同じ時間に家を出て、同じ時間に帰ってくる……つまらない国だよな」

「そんなことないわ」

「そういえば、ヘイゼルは俺より早く起きるんだよ」アンゲルが苦笑いした。「ソファーで目覚めたら、新聞を読んでるオヤジみたいな男が最初に視界に映るんだ。気持ち悪いからやめろって言ったら、面白がって毎日やるようになった」

「本当？」

「本当。朝の6時前に電話してみるといいよ、絶対ヘイゼルが出るから」

「ヘイゼルが早起きって、イメージに合わないわ」

「だよなあ、夜遊びして昼寝てますって言われた方があいつには似合うよな……」

そういえば、ヘイゼルって夜遊びとかしないよな？金持ちなのに？アンゲルがそんなことを考えていると、

「エレノア」

外国人風の、ギターケースを背負った男が現れた。

「忘れてた！音楽科のブースを予約していたの！」エレノアが立ち上がった。「じゃあね」

「またね……」

エレノアは、ギター男と一緒に歩き出した。とても仲がよさそうだ。歩きながら何か喋って、お互いに笑いあっている。

……やっぱりエレノアはもてるんだなあ。当たり前だよな、あんなに美人なんだから。

アンゲルは二人の後ろ姿を見つめながら、一人意気消沈していた。

部屋に『ティッシュお化け』が居座っているせいで勉強に集中できないので、アンゲルは図書館の中にある自習室に向かった。

しかし、そこには大勢で固まって黙々と勉強している『管轄区のフアナティ教徒』の群れが。コミュニティで会ったのとはほぼ同じ顔ぶれだ。

おそらく『信仰を守る』ために、一緒に行動しているのだろう。その様子を見ているうちに、アンゲルは気味が悪くなってきた。彼らは人間に見えなかった。機械仕掛けで動いている、生きていない何かに思えた。通りがかったイシユ八人も『なんでいつもぞろぞろと集まって歩いてるんだ？』『あいつら気味悪い』とつぶやいていくのでますます嫌になる。

管轄区からの留学生には常に宗教がつきまとっているように見える。

自分もあんなふうに見えるんだろうか。

アンゲルは悩み始め、図書館を出て暗い気分で歩いていると、見慣れた大きな帽子をかぶったエレノアが、女の子と一緒に歩いてくるのが見えた。

「エレノア」

アンゲルがエレノアに笑顔を向けた……が、エレノアの隣の女性が、敵意むきだしの鋭い目でこちらを睨んで、不愉快な顔をしていることに気づいて、笑うのはやめた。

「アンゲル」エレノアが右手を隣の女性に向けた「こちら、フランシス・シグノー」

「あんだ誰？」

フランシスが低い声を発した。話し方まで不機嫌そうだ。

「アンゲル・レノウス。残念ながら、ヘイゼルのルームメイト」

「それは悲惨ね」

フランススが意地悪な笑いを浮かべた。

……面倒なことになりそうだ。

「俺ちよつと急ぐから」

ヘイゼルがフランススと電話で怒鳴り合っていたのを思い出した
アンゲルは、足早にその場を去ろうとしたのだが、

「エブニーザ、人さらいにあつたんですってね」

という声が聞こえたので、ぎよつとして振り返ると、フランス
とエレノアがそろってこつちを見ていた。

「誰に聞いた？」

「ヘイゼルに決まつてるじゃないの」

フランススが忌々しそうに（アンゲルには『面白がっている』よ
うに見えた）目元をゆがめた。

なんでそんな話を、よりよつてこの二人にするんだ！？ヘイゼ
ル！

アンゲルがどうごまかそうか考えていると、

「本当なの？」

エレノアが、疑問と不安が混じつた表情で尋ねてきた。

……話題が良くないが、エレノアと話す機会ができるのは悪くな
いな。

「詳しく知らないけど、本当らしい」アンゲルが不確定な言い方を
した「学校のカウンセラーにも通つてるらしいし、普段から色々な
ことに怯えてるよ。昔何かひどいめにあつて、未だに苦しんでる。

それは間違いない……あ」

アンゲルが突然、何かに気づいたように目を見開いてやや上を向
いた。

「どうしたの？」

「不思議だつたんだよ。どうしてあの気弱なエブニーザが、あんな
わがままで身勝手な、些細なことで怒鳴りまくる史上最悪の男にな
つてゐるのか」

「ひどい言い方ね」エレノアが苦笑いした。

「事実でしょ」「フランスは高慢な口調でそう言った」「その通りよ」「もしかしたら、さらわれていた時にあいつをいたぶっていた奴らに似ているのかも、ヘイゼルが」

フランスとエレノアは、何の事だかわからないという顔でアンゲルを見つめている。

「いたぶられるのに慣れてしまってるから、せつかく助け出されたのに、同じように自分をいたぶるやつの近くに行ってしまうんじゃないかな？一度慣れた環境から自分を離せないんだ」

「それって良くないわ。わざわざ自分をいたぶる人に近づいていくなんて」

「そう？わからないでもないわよ。私にもそういうところがあるわ」「フランスの発言に、アンゲルとエレノアは驚いた。

「どこが？」

「全然違うだろ」

「何よ二人とも！」フランスがとげのある声を出した「私だってヘイゼルにはうんざりしてるんですからね。せつかく学校を辞めてシユタイナーだか何だか知らないけど、うさんくさい成金のところへ行ったと思ったら、白痴の馬鹿をつれて帰ってくるなんて」

「シユタイナーは成金じゃないし、エブニーザは白痴じゃない」

アンゲルは強い口調でフランスの発言を否定した。

「どうかしら？」フランスはあからさまに見下した目つきでアンゲルに向かって笑った「私、もう行かないと次の授業が始まりますから。エレノアもそうでしょ？」

「ええ……それじゃ、また」

歩き出したフランスのあとをエレノアも追ったが、時々、何か心残りのある様子で、アンゲルのいる方をふりかえっていた。

もう少し話したかった……できればフランスのいないところで！

そんなことを思いながら、アンゲルもその場を立ち去った。そろそろ駅に向かわないと、アルバイトに遅刻してしまう！

2 - 16 エレノア フランス ス 女子寮

エレノアがギター の弦を張り替えていると、フランスが、

「この石鹸、何？いい香りね」

と言いな がら近づいてきた。

「うちの母が作ってるの。カモミールよ」エレノアはギターをテーブルに置いて、フランスに笑いかけた「母の故郷の街では、カモミールが雑草みたいに一面に生えてるんですって」

「そうなの？イシユハではけっこう高いのに……使っていい？」

「いいわよ。気に入ったらもつと送ってもらおうから。いつも作りすぎて荷物になって困ってるの。旅芸人だから荷物は最小限にしなきゃいけないのに。父がよく『お前は石鹸売りじゃないだろ！そんなに作ってどうする！』って怒ってるの」

「親が何か作ってるところなんて、私、見たことないわ」

「食事は……あ、そっか、料理人がいるわよね」

「そうよ」

フランスは手に持った石鹸を眺めながら無表情で答えた。

「掃除も人を雇ってる？」

「当り前よ」

「当り前なのかあ……」

かなり違う世界 の人間なんだなあ とエレノアは思う。

しかしフランスは、

「あなたは自由でいいわね」

とつぶやいた。

「自由？」

「家にも国家にも、何にも縛られてない」フランスはエレノアに背を向けて歩き出した「なんでもできるし、どこにでも行ける、誰にも邪魔されることがない……」

フランスはひとり言のようにそんなことを言いながら、自分の

部屋に戻って行った。

一人残されたエレノアは考え込む。

私が自由？単に居場所がないだけじゃない？どこの国のコミュニテイにも入れないし、イシユ八国籍を持っているのにイシユ八人にも見えないし……。寮を出たくてもお金がないし……。

夕方。

ヘイゼルがソファアにふんぞりかえって、延々と話（ほとんど悪口）をしている。

アンゲルは何気なく時計を見て驚いた。

すげえ、もう2時間も一人でしゃべり続けてる！

「とにかくあいつらは最悪なんだ。何でも人のせいにするくせに自分じゃなにもしない。そのくせ、人の努力を台無しにするような事件を起こすんだからな、そいつは……」

「ヘイゼル」

アンゲルは控えめな、低い声で話に割り込んだ。

「何かな？」

「一時間前に話した内容を覚えてるか？」

「そんな昔の事は忘れたな」

平然とそんなことを言われたので、アンゲルが呆れていると、隣のエブニーザが、

「昼の一時にやってきて、夕方の六時まで延々としゃべってたことがありますよ」

と言いながら苦笑いした。

「シユタイナーの屋敷は退屈なんだよ！他にやることがないんだ！ヘイゼルが叫んだ「そんなことはいいさ、それより、そいつはヴァントールのボールを盗んで、選手の名前を消して自分の名前を入れたんだ」

「ヴァントールのボール!？」

アンゲルが叫んだ。

「ヴァントールのボールって何ですか？」

「えっ？」

「はあ？」

アンゲルとヘイゼルは同時に驚きの声を上げたが、エブニーザは不思議な顔をしている。

「なんでお前知らないんだよ！」

アンゲルが驚いて、説明を始めた。

プロサッカーの一部リーグに所属する一流の選手だけが、ヴァンツール社から『名前入りボール』をもらえるのだ。このボールは一流の選手の証、つまり、世界中のサッカー少年のあこがれなのである。

「スポーツは好きじゃないんです」エブニーザが不愉快そうにつぶやいた「ただでさえ世界中争いだらけなのに、わざわざ予算をかけて争う理由がわからない」

不愉快そうな顔で立ちあがって、自分の部屋に戻っていくエブニーザを見ながら、

「だからあいつには友達ができないんだな」

とヘイゼルがつぶやいた。

そのあと『運動場の芝生でサッカーをしよう』とヘイゼルが言いだし、二人はボールを持って部屋を飛び出した。

二人を見かけた他の学生も参加して、ちよつとした交流戦が始まる。アンゲルはほぼ一人で数人のイシュ八人学生の攻撃をかわし、楽々とシュートした。

管轄区のフォワードをなめるなよ！

アンゲルは有頂天になり、管轄区の暗い信仰のことも、屋根の事も妹の事も、バイトの事も、エレノアの事もすっかり忘れていた。小さいころから、サッカーはアンゲルにとってただの遊びではなく、自分の存在が証明できる特技であり、唯一の心の慰めだった。サッカーボールはいわば友達だ。自分を裏切ることが絶対にならない、おそらく唯一の。

見物していた学生たちが『あいつすげえ』『何者？』と口々に叫びはじめた。ヘイゼルとその一味は、やられればやられるほどむきになってアンゲルを追いかけ回したが、追いついたところでボール

を奪うことができなかった。

シユートが決まる。歓声が上がる。調子に乗ったアンゲルがとびあがって喜ぶと、ヘイゼルがタツクルを食らわせて、その隙にボールを奪った。ブーイングと『反則だぞ!』と叫ぶ声が聞こえてきた。図書館に向かう途中のエブニーザが、遠くからその様子を見てしばらく立ち止まっていたが、辛そうな顔で視線をそらして歩き出した。

僕はあの中に入っていけない……。

そこにエレノアが通りがかった。

「アンゲルがヘイゼル軍と闘ってますよ」

エブニーザが通りすがりに、寂しげに笑いかけて立ち去っていく。

エレノアはその顔が気にかかり、

「何かあったの?」

と後を追いかけたが、

「追いかける人を間違ってます!」

エブニーザがふりかえって険しい顔で叫んだので、立ち止まった。間違ってる? どういうこと?

エレノアはショックを受けた。こんなに真っ向から拒絶されたのは初めてだ。

そして、遠ざかっていく後ろ姿を見つめながら気がついた。

今まで、男に追いかけて困ったことは何度もある。

でも、自分が誰かを追いかけたくなかったのは初めてだ……と。

独房 囚人11番 掃除係

最近、奇妙な訪問者が、この独房を現れるようになった。

週に一度、掃除係が独房を回ってくる。

たいてい、この手の男は無口で、死んだ魚のような目をしている。囚人には目をくれることもなく、まるで家具のまわりを避けるかのように、座ってノートに向かっている私を避けて掃除をし、去っていくのだ。

その係が、数ヶ月前に変わった。

新しい掃除係は、年齢と過酷な人生が刻みつけた、深い谷のようなしわをいくつも持った老人だった。みすばらしい灰色の作業着と、かえって床を汚しそうな薄汚いモップ、それは今までと何も変わらない。

しかし、今まで掃除をしていた男とはまるで違うところが一つあった。目つきだ。

ぎらぎらしていて、体は今にも死にそうなほどやつれているのに、その目だけはつねに、中で何かが燃えているのではないかと思うほどの光を発していた。顔を直視しなくても、その光が視界の隅から目を刺すように感じられるほどだ。

そして、その老人は、私の独房に来るたびに、ノートを覗き見るのである。

私自身にはなにも話しかけないが、モップで部屋の床をこすりながら私の周りを回っている時、目だけは、明らかにこちらの手元を凝視しているのだ。

私はその視線を痛いほど感じた。早く出て行ってくれないだろうか
かと願った。今にもこの男、私からノートとペンを取り上げるか、
暴れて部屋をめちゃくちやにするのではないだろうか、そんな不吉
な想像が、老人が部屋を去った後も絶えず私を苦しめた。

いや、こんな話はどうでもいいことだ。

二人の話の続きを聞かせよう。

3 - 1 エレノア フランシス 女子寮の部屋

エブニーザに『追いかける人を間違ってます！』と叫ばれたあの次の日。

エレノアは、母が送ってきた荷物の中から小さなミシンを取り出した。ステージ衣装や帽子を作るために、何年も前に買ってもらったものだ。

余っていた布をてきとうにつなぎ合わせ、パターンも見ずにトートバッグを作った。昨日エブニーザに言われたことが頭に引っ掛かっていて、何か作らないと落ちつかない気分だったのだ。

間違ってるってどういうこと？そんなに私が嫌なの？それとも特に意味はないの？

そんなことは、いくら考えたところで時間の無駄だと、エレノアにも分かっていたのだが、どうしても、エブニーザのあの声と、その直前の寂しそうな表情が、エレノアの頭から離れなかった。

アンゲルとヘイゼルが、サッカーをしていた。

エブニーザはそれを遠くから見ている。

仲間はずれになったのかしら……？

考え事をし、時々縫い目が曲がったりしたが、それでもバッグは出来上がった。

フランシスはそんなエレノアを、政治学の本を片手に、じつと眺めていた。朝からガガガガと異様な機械音がするかと思ったら、妙に顔色の険しい女が、あまり見かけない古臭い機械に向かって変なものを作っている……フランシスにとっては物珍しい光景だった。「どう？ 恰好は良くないけど、楽譜は入るのよ？」

エレノアが機嫌よさそうにバッグを見せると、フランシスは見下したような顔をして、機嫌が悪そうに部屋に戻った……が、すぐに出て来て、

「あんたは何でもできるのね。私は何もできないわ」とつぶやいた。

「デザインをやっているんじゃないの？」

「趣味よ。そんなに上手くないし、最後の仕上げは人にやらせてる」
フランシスは鏡に向かい、髪をかき上げた「ま、そんなことはないわ。クーが図書館に来てるはずだから紹介するわ」

「クー？」

「クウエンティーナ・フィスカ・エルノ」

フランシスは、得意げに、一つ一つの名前を切って、ノレーシュ風に発音した。

「フィスカ・エルノ……ノレーシュの姫君ね！」

エレノアが興奮気味に叫んだ。

「そうよ」フランシスが偉そうな顔でにやけた「待たせちゃいけないから。早く行きましょ」

本物の姫君に会える！！

二人はうきうきと、軽い足取りで部屋を出た。

3 - 2 クウエンティーナ・フィスカ・エルノ その他5名 図書館

ノレーシユの姫君、クウエンティーナ・フィスカ・エルノは、図書館内を物珍しげに見回していた。

姫君はもうこの学校に来て一年にはなるのだが、図書館には来たことがなかったのだ。欲しい本はいくらでも自分で買えるし、読むのはいつも最新のベストセラーばかりだから、本屋から直接取り寄せたほうが早い。

ノレーシユ人はみな大柄で、姫君も他の女性に比べると体格が一回り大きい。王族らしい気品のある顔立ちで、褐色の肌に金色の髪、明るい茶色の目をしている。

服装は目立たないように地味に収めている。こんなところで目立ったところでいいことは何もないからだ。ファツシヨンの目的を『目立つこと』だと思っている人間を見るたびに、クウエンティーナは『頭が悪いんだな』と思った。そんなことをしても敵を作るだけ、あるいは、変な目的を持った人間の標的になるだけだと、どうしてわからないのか。

奥の方を見てみようかと通路に出たところで、姫君はあつと声をあげそうになった。

なんて美しい少年だろう！

姫の目の前を、今まで見たこともないような美少年が、すました顔で通り過ぎた。

エリ・クレマーシユの天使？神話の再来？

高名な画家の絵を思い出しながら、少年の後をついていく。

少年は、かなり奥の古びた部屋に入り、棚から古臭い革表紙の本を取り出し、古ぼけた椅子に座って読み始めた。窓から入り込む光が、少年の顔をミステリアスに照らし出す。

姫君はずっと、ドアの影からその様子をじっと見つめていた。

本当に天使のようだ。そういえば、神話の再来から500年経つ

ている……もしかして、ほんとうに神の子なのか？

ノレーシユ人らしい神話的な発想で、姫君がうっとりとして『天使』を眺めていると、後ろから誰かが姫の横を通って部屋に入ってしまった、そして、少年の背中をつかみ上げると、

「またここか！帰るぞ！」

と少年を椅子から引きずりおろし、無理矢理引っぱっていきこうとした。

「どうしてそんな乱暴なことをするのよ！」

姫君は思わず止めに入った。そして、その男が良く知っている人物だということに気がついた。

ヘイゼル・シュツティファント！

すると、相手も姫君にすぐに気がついたらしい、奇妙な、芝居がかった声でこう言った。

「あれ？ノレーシユの姫君が、こんなところで何をしているのかな？」

少年が『ノレーシユ』という言葉に反応した。そしてなんと、ノレーシユ語で、

『いつものことだから気にしないで』

と言うではないか！

『いつものこと？』姫君が叫び、そしてヘイゼルにイシュ八語で注意した「あなた、いつもこんなに乱暴なわけ！？」

「おいおいおい、いつも世話になっているって意味だよ。自分の国の言葉を間違うな」

ヘイゼルは全く気にしていない様子だ。クーはヘイゼルのあまりにも横柄な（というか、変な）態度に驚きつつ、口論をしながら外に出ると、ちょうどフランシスとエレノアがやってきた。

「ちよつと！なんであんたがここにいるのよ！」

フランシスがヘイゼルを見るなり叫んだ。

「図書館で大声出しちゃだめよ、フランシス」

横からエレノアが注意したが、全く聞いてないようだ。

そのころ、自習する席を探しに来たアンゲルが、図書館の中に入ろうとしていた。

読めるものはできるだけ読んでおかないとな……。

精神医学、心理学……とつぶやきながら本棚の間を歩き回る。

管轄区にいたころは、心理学の本は全く手に入らなかった。検閲で落とされてしまうからだ。

なぜアンゲルが『心理学』というものの存在を知ったか。

それは、旅行に来たイシュ八人が家に泊まりに来た（なぜ来たのかは未だにわからない）とき、本を置いて行ったからだ。

タフサ・クロツチマーという、風変わりな名前の精神科医が書いた本を。

そうだ、タフサの他の本も探そう……本屋になんか行かなくても、図書館で借りればいいんだよな。金かからないし、学校で推薦している書物はたいてい揃ってるし……なにせここは、世界中から学生が集まってくる名門校だからな。

専門書が並ぶ本棚を物色しながら、アンゲルは、入学前に読んだ学校案内の一文を思い出していた。

『最高の頭脳が、世界中から集まってくる……』

「いいかげん付きまとうのやめろってんだよ！バカ！クズ！死ね！」
そんな怒鳴り声と同時に、アンゲルの視界に入ってきたのは、こんな人々だ。

逆上して本をぶん投げているヒステリックな女性（フランス）と、それをかわしながら下品な笑い声を上げて飛びまわっているバカそうな男（ヘイゼル）と、泣きそうな顔で二人を見つめている気弱そうな少年（エブニーザ）と、困った顔がやっぱり可愛いエレノアと、見たことがない、人種の違いそうな褐色の肌の女性。

『……幼稚園だ！』

今、目の前を走りまわっている連中は、『最高の頭脳』とは程遠い有様だ。

呆れたアンゲルは、みなに気づかれないうちに帰ろうと向きを変えたが、後ろから飛んできた何かの後頭部に激突。

倒れた自分の上を、誰かが跳ねながら通り過ぎるのを感じ、顔を上げると、見覚えのある赤いジャケツトが前方を楽しそうに飛び跳ねているのが見えた。

「……ティツシュフアントム!!」

アンゲルはがばつと飛びあがって、全力疾走で『赤いティツシュお化け』を追いかけた。

「二度とあたしの前に姿を現すんじゃないわよ!!」

後ろから『シグノーの令嬢』の怒鳴り声が聞こえた。

足の速さに自信のあるアンゲルは、図書館を出て数メートルのところで、あっさり『ティツシュお化け』をつかまえた。

「お前は一体何をしてるんだよ!」

「俺は何もしてないぞ!文句はご令嬢に言え!」

「どうせお前が怒らせるようなことを言ったんだろ!?!」

「レポートの資料を集めに行って、ついでにエブニーザを引きずり出そうとしただけだ!」ヘイゼルがいまいましたように叫んだ「ボルデイ・ツルツパゲーノめ、提出日を前倒ししやがって」

「ボル……誰それ?」

名前だけでは、頭が禿げていることしかわからない(いや、この名前が本名だとももちろん思えないが)

「ハゲの教官さ」

「何の教科だよ?」

「知らん、いちいちそんなことを記憶してられるか」

「……何の教科かわからないのに、どうやってレポートを書くんだよ?」

「細かいことをいちいち突っ込むんじゃない……シグノーの悪魔め!あいつはそのうち女神を締め殺すぞ!」

「うるさい!」

道の真ん中でがなりたてているヘイゼルを、アンゲルが隅に引つ

ばっていく。

怒りが収まると、なにもかも馬鹿げているように思えた。

ヘイゼルも、フランシスも、そして自分も。

「そんなに嫌いならちよっかい出さなきゃいいじゃないか。フランシスだつて嫌がつてるだろ？」

「そういうわけにはいかん」

「何で？そんなに惚れてんの？そうも見えないけどな」

「あいつは絶対俺の言うことを聞かない。人のいいなりにもならない」ヘイゼルが何かの演説のように朗々とした声を出した。「だが、シグノーの家の方針には逆らえない。あの家は超古風だからな、女が何か仕事をするなんて認めないのさ。でもあいつは何かしたくてたまらない。だからいつもヒステリーに物を投げたり金切り声を上げたりしてるんだ。黙って従えない、でも文句も言えない。だからそうやって反抗するのさ」

「だから何？」

あきれながらもアンゲルは、ヘイズルの言うことは、下手な精神分析より当たっているんじゃないだろうか？と思ひ始めた。フランシスのことはよく知らないが。

「黙って言うことを聞く奴なんか、俺は嫌いだね。そんなの召使いと同じだろ？俺はまともなぶつかってくる奴が好きなんでね。そいつが悪魔だろうと、世界一性格の悪いヒステリー女だったとしてもね」

「わからない趣味だな……だからイシュ八人は戦争ばかりしてるのか？」

アンゲルは心底からの本音を呟いた。

「そうかもしれない」

ヘイゼルがめずらしく同意して黙り込んだので、アンゲルはぎよつとした。

そんな理由で戦争されちゃ回りは大迷惑だ！

外国人アンゲルは、本当に不安になってきた。

こんな奴が政治なんかやったら、イシユ八だけじゃなく、近隣諸国も、もちろん管轄区も、大変なことになるんじゃないか？

姫君クー（本人が『クーと呼んで』と言ったのだ）はあいかわらずエブニーザに見とれている。

エブニーザがぼそぼそと、でも嬉しそうにノレーシユ語で何か話して、それを聞くたびにクーも嬉しそうに応答している。

エレノアには、二人の会話が全く分からない。

「ずいぶんご熱心ですこと」フランシスが嫌味を言いながらエレノアに耳打ちした「神話の話をしてるの。エブニーザを見た瞬間に『美しすぎて、神話の再来かと思った』ですって！ノレーシユでは、500年おきに神話と同じことが起こるって信じている人がいるのよ。ノレーシユは多神教だから神が4人いて、それぞれにしもべが一人ずつ」

「わかるの？」

「第二外国語はノレーシユよ」

エレノアは、姫君とエブニーザの様子を見ているうちに不安になってきた。

やっぱりエブニーザって、だれから見ても美しいんだわ……。

姫君はさつきから、エブニーザと楽しそうに会話している。好意を持っているのが顔つきからわかる。

エレノアは何か、得体の知れない不快を胸の内に感じたが、相手が姫君ではそれを表現することはできない。もつとも、エレノアは控えめな性格なので、相手が誰だろうとそんな気持ちを表現することはないのだが。

「どうする？紹介するのやめましょうか？なんだか敵に回りそうじゃない？」フランシスが小声でエレノアに耳打ちした「いずれノレーシユに帰るのよ」

「だめよ。ちゃんと紹介して」

そう言いながら、エレノアはエブニーザから目を離さない。

フランシスはそんなエレノアとクー、そして『虚弱症の勉強オタク』を順番に見ながら、

「こんな今にもミイラになりそうな奴のどこがいいってのよ、二人とも趣味悪いわね。」

「思ってた。」

「私、歌の練習に行くわ。」

エレノアが立ち上がった。なんとなく、この場にいたくなかったのだ。

「これから？もう夕食の時間になるわよ？」

フランシスが非難するような声で言った。

「ブースは夜中にも開いてるし……歌りたいの。」エレノアが力なく笑った。「じゃあ、また。」

エレノアは、姫君とエブニーザに向かって軽く一礼すると、外に出た。

日差しは弱まっていたが、まだまだ暑い。音楽科の校舎までは少し距離がある。

歩いている間に、自分の中にある不快感が何なのか考える……エブニーザと姫君が仲良くしていたから？自分にはわからない言語で仲良く喋っていたから？

「それって、嫉妬？」

「嫉妬ほど手に負えないものはない。そんな歌があっただけ……あれはこの歌だけ？」

「考えているうちに校舎についた。中に入り、ブースが開いているか受付に聞いてみた。」

「開いてるんだけどね。」受付の丸メガネのおばさんが困った顔をしている。「隣にうるさいアケパリ人がいるけど、それでもいい？ギターの音が普通じゃないんだよね。防音がかかなくらいひどいの。」

「別にいいわ。」

エレノアは、先日会ったアケパリ人のギタリストのことを思い出した、きつと彼だと思った。たしか、ケンダイ……いや、ケンタだ

ったか。

手渡されたカードの番号の部屋に近づく。

すさまじい早弾きギターの音が聞こえてきた。一気に最高音まで駆け上がり、そして、最低音まで落ちて行く。それも、一つずつ確実に音を弾きながらだ。

エレノアはそのスピードに驚いた。エレノア自身もギターで弾き語りはするが、こんな高速で指を動かせる人間がいるとは、とても想像できない。

ブースのドアについている小窓をのぞいてみると、やはりそこにはケンタがいた。

クーラーが効いているはずなのに、全身汗だくになっていて、着ているTシャツが汗で濡れていた。表情も険しく、真剣そのもので先日会った穏やかな人間と同一人物とは思えない。音は激しく上下しているが、本人はほとんど体を動かしていない。

真剣なんだわ。じゃましないほうがよさそうね。

エレノアは、自分のブースに入って、隣に対抗するように大声で発声練習を始めた。

すると、エレノアの声に合わせて、となりから聞こえてくるギターの音が上下した。

エレノアは一瞬戸惑ったが、隣の壁に視線を流してニヤリと笑うと、音が乱高下する難しい『自己流ソルフエージュ』を歌い始めた。ついてこれるものならやってみるといつつもりで。

となりのギターは、ちゃんとついてきた。

面白いわ！

歌とギターの合唱は、そのあと、数時間続いた。

周りのブースの利用者が『あの二人、うるさいです。演奏はすくいけど』と受付にやってきてつぶやいた。

3・4 エレノア エブニーザ 資料室

エブニーザはやはり、授業中もまわりの声に怯えていた。時々昔の光景がフラッシュバックしたり、あの『彼女』がいたぶられているのが見える。

どうして『彼女』の周りには、おそろしい人間しかいないんだ？ 叫び出したくなるが、授業中に叫んではいけないことくらいはわかっているの、必死で耐えている。おかげで授業の内容は頭に入っていない。

勉強なんて、一人でやったほうが絶対に早いのに。どうして授業に出なきゃいけないんだらう……。

まわりをほとんど見ないエブニーザでも、何人かの女の子が、自分を奇妙な目で見つめているのは察していた。そのほかに、『シユッティファントのルームメイトだ』というだけで、じろじろ見たり、こそこそとうわさ話をする生徒がたくさんいた。

そういう視線が、彼には苦痛でたまらなかった。

授業が終わると同時に図書室の奥深く、古代の資料室にこもることにした。ただし、もうヘイゼルやエレノア、姫君にばれているので、夕方には誰かに見つかってしまう。

エブニーザは、いずれやってくる『余計な人たち』の事を考えると憂鬱になる。

どうしてみんなほつといてくれないんだらう……いつそ、夜中もずっとここで、一人でいられたら幸せなのに……。

この日はエレノアが様子を見に来た。

「何を読んでいるの？」

微笑みながらそんなことを言うエレノアに、エブニーザはうんざりしていた。

どうせ興味ないくせに……。

「古代の黒魔術なんですけど……あっ」

エブニーザは話の途中で言葉を切って、何かに驚いたような顔でエレノアをじつと見つめ始めた。

彼にしか見えない映像が、エレノアの後ろをかすめ飛んでいた。

二人、

そっだ。

あの二人……。

エレノアはその視線にドキドキしながら

「どうしたの？」

と聞くと、

「アンゲルとはどんな仲なんですか？」

と逆に質問された。

なぜ突然アンゲルなんだろう……？

「ここに来るときに同じ列車に乗ったの。ただの友達よ」

「ただの友達……？」 エブニーザは何かを疑っているような顔をし

た。「いつも一緒にいるのに？」

「いつ私がアンゲルと一緒にいるのを見たの？」

エブニーザは混乱しているように視線をいろいろな方向に動かし

た。まるで、別な映像を追いかけているみたいだ。

「何か誤解しているみたいね。それより、ヘイゼルが怒鳴りこんで

こないうちに帰らない？」

「僕はもう少しこれを読んでから帰ります」

エブニーザが手元の本をかざして見せた。

エレノアは向かいの椅子に座り、自分が歌手で、フェスティバル

で歌うことと、フランシスから聞いたヘイゼルの話（フェスティバル

歌手のマイクを奪って自分が歌い始めた話）をした。

「いかにもヘイゼルがやりそうなことですね」

エブニーザはそう言いながら手元の本をめくった。

「当日、邪魔しないように、黒魔術でもかけておきます？ここに

いのが書いてある」

エブニーザがエレノアにページを見せるが、どこの言葉だかわか

らない奇妙な文字が並んでいる。

エブニーザによると、1000年以上前に使われていた文字だそうだ。

「一日だけ、乱暴な人を静かにできるんですよ」

「あなた、そんなの本当に信じているの？」

エレノアが笑うとエブニーザは不満げな顔で、

「やってみればわかりますよ」

と小声でつぶやいた。

3・5 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮

男子寮の部屋。

アンゲルが心理学概論の教科書を読みながら、頭を抱えていた。数式がたくさん書かれていて、ほとんど理解できないのだ。

なんで今更微分積分なんかやらなきゃいけないんだ!?

アンゲルは数学が苦手なのだ。

しかも、困り果てているところにエブニーザが帰ってきて、いきなり、

「エレノアとはどんな関係なんですか?」

と聞いてきた。数式が頭の中ではじけ飛んだ。

「な、何でそんなことを聞くんだ?」

「ちょっと気になっただけです」

エブニーザは不愉快そうな顔でそう言うと、自分の部屋に入り、そーっと静かにドアを閉めた。

なんで気になるんだ!?!エレノアに気があるんじゃないだろうな?

と思ったときヘイゼルが入ってきて、嬉しそうな顔で叫んだ。

「試合が始まるぞ!」

「試合?」

「イシユ八対ノレーシユだ!中継だ!もう始まるぞ!」

ヘイゼルが部屋を飛び出して行ったので、アンゲルもついていった。食堂のテレビの前に、寮のほとんどの学生が集まっていた。

試合が始まると、学生はみな熱狂した。国籍は関係なく、みんな選手がシュートをするたびに大声を上げて盛り上がっている。ヘイゼルとアンゲルも、夢中になって歓声を上げていた。

エブニーザが遠くからその様子を眺めていた。いつもは食事時になっても下に降りてこないのに、なぜかこの日は降りてきていた。

しかし、歓声が上がったり、ブーイングが起こるたびに痛そうに顔をしかめた。みんなが何に熱狂しているのか、何が楽しいのか、

エブニーザには全く理解できなかった。ただ、テレビのまわりに集まっている学生たちを、暗い廊下から見つめていた。

自分だけ別な、暗い闇の世界に住んでいるみたいだ。

エブニーザは、自分が立っている位置と、他の学生たちが集まっている場所の間に、見えない壁を感じていた。彼にしか見えない壁だ。何でできているのかはわからないが、それは確実に彼を、他の人間の世界から隔離していた。

しばらくその場に立ちつくしていたが、エブニーザは、結局中に入っていくことができず、落ち込んだ様子で一人、光に背を向けた。階段を一人で上がりながら、何かの呪いのような言葉を一人つぶやく。

そつだ、僕は普通の人間じゃないから、みんなの中に入っていけないんだ……。

エレノアは、姫君クーと並んで授業を受けている。共通科目だから、学科は関係なく席につく。てきとうに選んだ席に座っていたら、隣に姫君がやってきて、

「ここ、空いてる？」

と、愛しげな笑顔で尋ねてきたのだ。もちろん断る理由はない。

授業中、クーがメモに何か書いてエレノアに回す。

『フランシスと一緒に部屋つてきつくない？』

と書いてある。

エレノアは、

『ちよつと怖いけど、今のところ大丈夫』

と書いて戻す。

『エブニーザに興味ある？』

という紙が回ってくる。

ぎよつとするが、冷静を装って、

『きれいな子よね』

と書いて戻す。すると次に回ってきたのは

『ノレーシュに連れて帰っていい？』

「だめ！」

思わず声を上げてしまった。教師が咳払いし、周りの生徒も一斉にエレノアを見た。

「すみません」

謝ってから、二人で顔を見合せて笑う。

クーの笑い方はとても愛しげで、しぐさもやわらかく、同性なのにドキドキさせる何かがある。

やはり普通の人間ではないのだなあとエレノアは思う。

授業が終わってから、二人で図書室に行くことにした。エブニーザを探しに行ったのだが、資料室にいたのはハイゼルだった。

「ここにいれば捕まえられると思ったのだが……美女二人が来るのはね」

仕方なく三人で話を始めた……というより、ハイゼルが一方的に話すのを二人で聞いていたのだが。

「エブニーザは天才だよ。未来は見える、経済指標を見て株価を予想できる、ろくに話もできないくせに、読むのだけは何ヶ国語でも自在にできるんだからな。シュタイナーの書庫でも、ありとあらゆる国の本を一人で読んでたよ。ただ、好みが変なんだよな……最初会った頃は本当に暗い奴でね、読んでるものといえば、中世の薬草辞典だの、何百年も前の類義語辞典だの、何千年前のロンハルトの呪いの書だの……そんなもん読めて何の役に立つんだ！？そのうち少しは人間的になってきたのか、最近の小説も読むようになったがね……というのも、俺が500年より前の本を禁止したからなのだが……だって、石器時代の本を読んだって現代的生活の役に立つかね？本当は50年にしたかったくらいだが、古典文学という名の、教養科目必修かつ実生活では無用のジャンルがあるからな。まあ、とにかくエブニーザは変わった奴だよ。人の目を怖がって食堂に行けないし、よくテーブルの下やクローゼットの中に隠れるし（隠れたところですぐに引きずり出してやるのだが）たまに昔を思い出して、泣き叫んだり倒れたりするし……まあ、あまりにもひどい目にあっただから、しょうがないが」

延々と話を続けるハイゼルに、クーが冷ややかな視線を送った。

「どうして、そんな手のかかる人を連れてきたの？何か企んでるんじゃないの？」

「姫君、俺を人でなしだと思ってるな？」

「思ってるわよ」

クーが冷ややかに断言した。

「まあまあまあ、そう怖い顔をせずに……その通りだよ、あいつは使える奴なんだ。それに、シュタイナーのところに行ったら危ない。それは姫君もわかってるだろ？」

「そうだけど……」

「どうしてシュタイナーのところにいると危ないの？」

黙って話を聞いていたエレノアが、急に割って入った。

「どうしてって……」

クーは何か言い淀んでいるようだ。

「いろいろ、金持ちにしかわからない国際事情ってものがあるのさ。なあ姫君」

ヘイゼルはニヤニヤと楽しそうだが、クーは逆に何かを懸念するような顔をしていた。

「ところで二人とも、将来はどうするの」

話題を変えたいエレノアが何気なく訪ねると、ヘイゼルとクーは揃って不機嫌そうな顔をした。

「もう決まってるさ、シュツティファントだからな」

「エレノアは自由でいいわね」

羨ましがっているのかバカにしているのかわからないことを言った。二人とも不機嫌そうだ。どうやら質問を間違えたらしいと気づいたエレノアが、

「私は歌手なの。歌が一番大事なの」

場を取り繕うようにそう言うと、クーがにやりと笑いながらこう言った。

「好きな人いないの？」

「エンジェル氏はエレノアに夢中なんだけど、そこんどどう？」

エレノアとクーがびっくりしてヘイゼルを見ると、いかにもおもしろがっているようなニタニタした笑いを浮かべていた。

「エンジェルって誰？」

クーがエレノアに尋ねる。エレノアは真っ赤になって、

「友達よ！友達！」

と言い張ったのだが……。

3・7 アンゲル シギ 男子寮の部屋

そのころ、アンゲルは心理学実習の授業で、『自ら精神分析とカウンセリングを受ける』ことになった。

まず自分がカウンセリングや精神分析を『受けて』自分を理解してから勉強に入ろうということらしいのだが、これで引っかかってしまった。

自分のことを話すのがこんなに苦痛だとは！

悩んでいることも考えていることもたくさんあるのだが、いざ『カウンセラー』なる人物を目の前にすると、何を話せばいいのかわからなくなるのだ。しかも、

『親子関係とか、人間関係とか、価値観の違いについて話してみれば』

と言われてまた悩みだしてしまった。女神信仰の深い地域で育ったため『価値観の違い』と言われても上手く答えられないのだ。

管轄区ではみんな、同じような価値観で生きていた……。

俺には自分がないのか？

そもそも、宗教に違和感を持っていることをここで話してしまっ
ていいのだろうか？

疲れた顔で帰ると、エブニーザが待っていて、何か話したそうに
こちらを見ていた。

「何？」

「聞きたいことがあるんですけど……」

アンゲルは機嫌が悪かったので、エブニーザを無視してソファー
に倒れ込んだ。

「自分の部屋に行ってくれ」

そうつぶやくと、エブニーザは黙って自分の部屋に戻り、ドアを
そーっと閉めた。

電話が視界に入り、エレノアにかけようかと思ったが、そんなこ

とを考えている自分にまたウンザリして、教科書をかかえて悩み始める。

心理学なんて専攻するのが間違いだっただのか？

しばらく横になってぼんやりし、ウトウトし始めたころ、突然ドアが開き、身なりの上品な、しかしどこか冷たい印象の学生が入ってきた。

見覚えがあるな……そうだ、前ヘイゼルとサッカーをした時に参加してきた奴だ。

「俺はシギ・クオンタンで、このまえサッカーをしたもう一人のデブがエボン」

シギは、平坦な口調で自己紹介した。

「おまえはどうしてあんなにサッカーが上手い？」

話し方が堅いなあと感じながらも、管轄区のチームに入っていたと答えると、

「管轄区？見えないな」

と驚かれた。相手が何を想像したか何となく見当がついたアンゲルは、

「『管轄区』気持ち悪い』だと思ってるだろ」

と聞くと、

「その通りだ」

と即答された。

アンゲルが苦々しい顔を見ると、

「ヘイゼルと同室は大変そうだな」

とシギが、同情しているような、呆れているような顔をした。

シギとエボンの部屋にも、先日急に3人目が入ってきたそうだ。

「寝室足りないだろ？どうしてるんだよ」

「俺とエボンは同じ部屋を使ってる」

「それは……嫌だなあ」

「ヘイゼルだったら俺もお断りだ。エボンはパシリだから存在感がない。いてもいなくても大して変わらない」

平然と言うシギに、アンゲルは『こいつ、ヘイゼルと同じ性格だな』と苦笑いした。

「ヘイゼルの友達？」

「友達と言えばそうだし、競合相手と見なせば敵とも言える」

「あいかわらず平坦な、抑揚の全くない口調だ。」

「敵？」

「商売相手という意味だ。家同士が」

「あ、そう」

「なんだか嫌な友情だなあ、それ。」

アンゲルはぼんやり考える。

「ヘイゼルは、利用できる人間としか仲良くしない。だから、おまえが何者なのか気になってここにきた」

「嫌な奴だなあ、本当に」

アンゲルがそうつぶやいたが、シギはそんなことは一向に気にしない様子で

「サッカーチームに入らないか？」

と言った。

チーム。

アンゲルの胸が高鳴った。

入りたい。またボールを蹴りたい。

アルターの学校で活躍できたら、本当にプロチーム入りも夢じゃない！

「入りたいけど」声が震えた「勉強しなきゃいけないし、バイトしないと生活できないんだよ」

シギは特に説得しようともせず、

「サッカー場が開いている時にまた勝負しよう」

と言って出て行った。

アンゲルは勉強しようと思って教科書を取り出したが、全く集中できなかった。

イシユハのサッカーチーム。

きっと、管轄区とはレベルが違うだろう。

でも実力を試してみたい。

勝てる自信はある。

でも、俺はここに勉強しに来たんだよな？

3 - 8 エレノア アンゲル 音楽科くカフェ

エレノアは、歌のレッスンを受けるために先生を探し始めた。

しかし、どの先生にも、歌を聞かせたとたん、

『出て行って』

『あなたに教えたくないわ』

『悪いけど……別な先生に当たってくれない？』

きっぱり、あるいは、遠まわしに、やんわりと、断られてしまった。

どういうこと？先生にまで嫌われてるの？

でも、学校の先生が生徒を拒否するなんてあり？

困り果てたエレノアが、すぎるように、ちよつと分野の違う先生（どこか小さな国の、民族音楽を教えている先生）のところ相談に行ってみると、

「ああ、わかったわ」

派手なプリントのドレスを着て、南国風の花飾りを首に巻いた、通称『ニッコリ先生』が、エレノアの歌を聞いて、その名の通り、にっこりと笑ってうなずいた。

「あなた、上手すぎるのよ」

「えっ？」

「この講師って、自分がデビューに失敗したひねくれ者が多いから、あなたに教えられることがないのよ。黙って教える方のプロを目指せばいいのに、心の中ではいつまでも『俺の方が音楽の才能があるんだ！』なんて思ってる困ったちゃんばかりなのよね。ま、安心しなさい。本物のプロの先生に紹介してあげるわ」

不安げな顔で黙りこんでいるエレノアを尻目に、ニッコリ先生は古風なダイヤル電話を回し始めた。

「あゝケツチャノツポさん、お久しぶりね。相変わらずピザばかりお食べになっっているの？え？サラダ？珍しいわね、何が起きたの

かしら？え？ああ、そうそう、実は歌を教えてほしい生徒がいるのよ。ここのクソ講師どもには歯が立たないような天才でね、え？そうそう、いじめられて困っちゃうのよ。そうそう、あなたと同じよいつの時代もここは変わらないのよ。イシユ八人ってどうしてあんなに妬みバカばっかりなのかしらね、オツホツホ。ええ、はい」

ニツコリ先生が顔を上げた。

「今日の夕方4時、音楽科の西校舎のピアノ室3、時間OK？」

「え？あ、はい！！」

「じゃ〜頼みますよケツチャノツポ先生、はいはい、夕飯くらいならお付き合ってもよくてよ、ピザじゃなければね！バ〜イ」

ニツコリ先生は、楽しそうに電話を切ると、舌をぺろりと出してエレノアに笑いかけた。

「変人でやかましいダメ人間だけど、歌だけは一流だから、間違いないわよ」

エレノアは何と答えていいかわからず、黙って愛想笑いに徹した。そして約束の4時。

エレノアが『ピアノ室3』に入ると、

「いやあ〜待ってたよエレノアちゃん」

という、ラジオのDJのような声（けっこう低温で、響く）に迎えられた。

「僕があ有名なケツチャノツポ・ウィリアムズ、よろしくね」

有名なんだ……初めて聞いたけど……。

ピアノの前に立っていたのは、想像していたのとは全く違う、かなり細身の、40代くらいの男性で、端正な顔をしていた。服装も上下黒の、ごく普通の現代人の格好で、音楽よりは、絵画や別な芸術が似合っているように見えた。

見た目だけなら、ごく普通の、いや、かつこいい男性と言えなくもない。

「ささ、おいでおいで、おバカな他の講師の事は気にしないで、レッスンを始めましょう」

ケツチャノツポ先生がエレノアを手招きした。

そして歌のレッスンは始まった……のだが、

「ちがう、ちつがう！」

エレノアがオペラアリアの盛り上がるとうたっているところをうたっているところ、ケツチャノツポが突然甲高い声で、身をよじりながら叫んだ。

「ここは情熱の花が散る一步手前、爆発寸前の愛の叫びなのよ！もつと声に色気がないとダメ！そして盛り上がったところで……」

ケツチャノツポは、細い足をピアノにかけたかとおもつと、そのまま高く飛び上がり、空中を回転しながら、スマートに、曲芸師のように床に着地した。

「華麗に決めるのよ！」

何が起きたかわからないエレノアが呆然としてしていると、

「ぼーっとしないの！ほら！もう一回歌うわよ！」

と、ケツチャノツポが伴奏を弾き始めたので、慌てて歌い始める。するとまた、

「ちがう！ちつがう！」

が始まるのである。

2時間ほど、この体育会系曲芸講師に振り回されることになった。レッスン後、エレノアが疲れ果てたうつろな目で、ふらふらと帰り道を歩いていると、オープンカフェにアングルの姿が見えた。本を読んでいるようだ。

『エンジェル氏はエレノアに夢中なんだけどそこんどこどう？』

ヘイゼルに言われたことを思い出して一瞬顔が赤くなつたが、

「エレノア！」

アングルがこちらに気づいてしまったので、すぐ平静を装った。

「また勉強しているの？」

「いや、実習が上手くいかないから、気晴らしに来ただけだよ」

自分が来るのを待っていたのでは、とエレノアは疑ったが、口には出さなかった。

「実習って何をするの？」

「カウンセリングを受けるだけ」アンゲルが力なく笑った。「おかしいんだ、自分もカウンセラーを目指してたはずなのに、自分が受ける側になると何も話したくなくなるんだよ」

「そう……」

「エレノアは？元気なさそうだけど」

「疲れてるだけ……歌の先生がすごく変な人なの。ケッチャノツポって言うんだけど……」

「ケッチャノツポって……」アンゲルの目が大きく開いた。「ケッチャノツポ・ウイリアムズ？」

「知ってるの？」

「知ってるのって、名テノールだよ！有名な！」アンゲルが突然元気になってしゃべりだした。「20歳のときには『世界一のテノール』って言われて、世界中で公演してたんだ。俺の父親がよくレコード（台風で飛んで行ったけどな！）を聞いていたし、学校でも音楽の時間に聞かされたよ」

真似して歌っていたバカな友達もいたが、それは言わないことにするアンゲルだった。エレノアに子供じみた話を聞かせたくないからだ。

「本当？」

「エレノア、プロなんだろう？どうして知らないんだよ？」

エレノアは、今まで旅してまわった場所や人、聞いた話などを、一通り思い出してみた……名ソプラノの話なら聞いたことがあるし、有名なジャズシンガーや、同じ旅芸人の歌手には会ったことがある……。

「世界中を回っていたけど」エレノアがショックを受けたようにつぶやいた。「そういえば、本当に有名な人には会ったことがないのかも……」

「あの、別に、気にすることじゃないと思うけど」アンゲルがあわててフォローした「とにかく、そんな人に教われるなんてすごいじゃないか」

「そう……そうね」

エレノアはしばらく、コーヒーカップをくるくると回しながらぼんやりしていた。アンゲルはそれを見て『ああ、落ち込んでるな』と思った。

「そういえば！」エレノアが急に目を輝かせた。「エブニーザは元気？」

「えっ？」

「クーと……ノレーシユのお姫様と仲がいいみたいなの。ノレーシユ語で話していたんだけど、何を言っているのかはわからなくて……」

エレノアはうきうきとそんな話を始めたのだが、アンゲルは機嫌が悪そうに立ちあがった。

「俺、そろそろ寮に戻らないと」

アンゲルはいきなりそう言うと、カフェを後にした。

「じゃあね！」

エレノアは一応声をかけてみたが、返答はなかった。

しばらくその場に残って、コーヒーを少しずつ飲みながらあたりを見回したが、特に面白いこともなさそうなので、帰ることにした。とにかく疲れていた。

帰ったらベッドに飛び込んでそのまま寝てしまおう！

3・9 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮の部屋

エレノアはエブニーザに気があるな！

アンゲルは、エレノアのうきうきした話し方から（勝手に）確信していた。

寮に帰ってからエブニーザの部屋のドアを叩いた。反応がない。帰って来てないのか？

何度もたたいたが、反応がないので、あきらめた。

ソファで勉強しよう……と思ってドアに背を向けたとたん、中からうめくような声が聞こえた。

「エブニーザ？」

もう一度ドアを叩く。ドアノブを回す。カギは開いていた。

「入るぞ？」

ドアを開けると、エブニーザが真っ青な顔で床に倒れていた。全身ががたがたと震えている。

「おい！どうした！？」

慌てて顔を覗き込むと、異常なほど目を見開いていた。何か話そうとしているのだが、言葉がうまく出ないのか、うなるような声を発するだけで、何を言っているのかさっぱりわからなかった。

アンゲルはあわてて事務に走った。どう対処していいか全くわからない。とにかく慌てていた。事務にかけこんだはいいが、あわてすぎて息が上手くできず、自分でも何を言っているかわからない説明になってしまった。

事務が医者を呼び、医者が部屋に到着した時、ヘイゼルが帰ってきた。

「ああ、また何か思い出したのか？」

医者が部屋にいることに、全く驚いていない様子だ。

二人で、エブニーザをベッドに乗せ、医者が薬を飲ませた。

「心配しなくてもいい。でも、今日は安静にするように。興奮する

ようなことを言わないようにね」

とだけ医者は言い残して、去って行った。

「よくあることなんだ」眠っているエブニーザを覗きこみながらヘイゼルが話し始めた。「突然昔のことを思い出して、パニックだ。いや、別な光景を見たのかもな」

「別な光景……？」

「一体何の事だ？」

「寝てりや治まる。それとな」ヘイゼルが深刻な面持ちでアンゲルを覗んだ。「こいつが『かわいそうな女の子』の話を始めたら、だまって聞いてやってくれ。絶対『そんなの妄想だ』なんて言うなよ？」

「は？」

「こいつと仲良くしてたらいずれそういう話もされる。頼むから黙って聞いてくれ」

「おいおい、お前らしくないな、頼むだつて？」

「大事なことなんだよ。頼む」

ヘイゼルのいつになく真剣な様子から、これはかなり深刻な話だとアンゲルも気がついた。しかし、どういう意味なのかはさっぱりわからない。

「その『かわいそうな女の子』って何だよ？」

「そのうちわかるさ」

しばらく二人とも黙っていた。こういう場に適切な会話なんて二人とも知らないのだ。かといって、この場を離れていつも通りの生活に戻っていいものか？

ふと、アンゲルはシギに聞いた話を思い出した。

「お前、利用できない奴としか仲良くしないって本当？」

「そんなことをストレートに聞く奴があるか」とヘイゼルが呆れた顔をした。「その通りだ」

「おいおい、俺はごめんだぞ、お前に利用されるのなんぞ……」

ヘイゼルがやりと笑った。

「悪いが、もう利用済みだ」

「えっ？」

「まあ、気にするな」

ヘイゼルが部屋を出て行く。

アンゲルはあわてて追いかけた。

「おいおいおい、どういうことだよ？俺に何したんだよ？」

しかし、ヘイゼルは何も答えずに自分の部屋に入り、アンゲルの前でドアを勢いよく閉めた。ノックをしても反応がない。

アンゲルはソファアールに戻って読書を始めたが、いろいろなことが気になって集中できなかった。そうだ、エレノアがエブニーザの話をしていたんだっけ？それにしても『かわいいそうな女の子』って何だよ？それに、ヘイゼルは一体俺を何に利用したんだ？

その頃、シュツティファントの当主は、バカンス先で日光浴をしながら、秘書とこんな話をしていた。

「管轄区から来たとても優秀な学生が、どうしても、どうしても、どーっしーてーもーヘイゼルと同室じゃないと嫌だと言いつ張っているらしいのだ」

「えー？それ本当ですかあ？」若くてかわいい水着の秘書が、心から疑問の声を発した。「あんなわがままと同じ部屋がいいなんて、言っちゃ悪いけど金目的ですかあ？」

「それが、そうでもないらしい。純粹なるシュツティファントのファンらしい。たまにそういう奇特な人間もいるものだ。しかし、わしはヘイゼルを、北の更生施設にでも放り込もうと思っていたのだが……」

「北っていうと……あれですか、この前テレビでやってた、鬼教官が3年がかりでびっちょり不良をいびりまくって、気力のないつま

らない人間に作りかえるという……?」

「人間の悪いことを言わないでくれたまえ。極めて真面目で社会的に有益な施設だよ。乱暴な人間を大人しくするのだ。世の中のために役立つているのだよ。私も出資しているから入れるのは簡単なのだ」

「じゃあ、その学生もいつしよに放り込んじゃえばいいじゃないですかあ」

「しかし、管轄区からの真面目な学生にそんなことをしたら国際問題になりかねん。最近管轄区とイシュハは微妙な関係なのだ。しかも、シュタイナーからあずかった子も一緒にいるからな。うかつなことはできんのだ」

「シュタイナーが絡んでるんならしようがないですねえ」

「まあ、あのヘイゼルと一緒に何日持ちこたえられるか、わしとしては疑問だね。管轄区の二人組がどちらもダウンしたら、息子を北に送りこむことにしよう……」

次の日。

フランシスが図書館で新刊をあさっていると、エブニーザが他の生徒（シュツティファントが嫌いな一群）にからまれているのが見えた。

あーあ、あんな弱虫じゃやられっぱなしでしょうね。いつ見てもミイラのようなわ。

しばらく無視していたが、まわりの生徒も騒ぎ始めたので、フランシスは近づいて行ってエブニーザの腕を掴むと、出口まで引っぱっていった。

「おい、待てよ、どこに行くんだよ」

いじめっ子がついてきたが、フランシスに睨まれて全員がびくつとひるんだ。

「図書館は騒ぐ所じゃないの」

フランシスが低い声を発し、まわりの人間を鋭い目で睨みつけた。あの、敵をすくませる強烈な目つきだ。

「あんたたち、冗談は顔だけにしておくのね」凍りついた空気に毒が流れ込む「部屋に鏡はないの？そんな醜い顔でよく外に出られるわね」

館内はシーンと静まり返った。

女性からこんな言葉を浴びせられては、ショックでしばらく立ち直れない人間もいるだろう。まあ、何人神経をやられようと、フランシスの知ったことではないだろうが。

フランシスはエブニーザを引っぱって外へ出た。しかし、出たたん、今度はエブニーザをすさまじい声で怒鳴りつけ始めた。

「やり返すなり逃げるなりしたらどうなのよ！三歳児じゃあるまいし！黙ってやられてんじゃないわよ！」

「でも……」

エブニーザはさっきよりさらに泣きそうだ。

「でもじゃないわよ！」

そこにエレノアと姫君クー（最近一緒に行動している）がやってきた。

「フランスス！」

エレノアが叫んだ。

「何をしてるのよ！」

クーも叫んだ。エブニーザは二人の姿を見るなり真っ赤になって、走ってどこかに逃げてしまった。

姫君クーとフランシスは、揃ってレストランに食事に行ったが、エレノアは用事があるからと言いついで部屋に戻り、電話のそばに置いてあるメモをめくった。

『バカ野郎、223』

と書いてあるのを見つけ、祈りながら223をダイヤルすると、

『……誰ですか？』

うまくエブニーザが出た。

「エレノア・フィリ・ノルタよ。さっきはごめんなさいね」

『どうしてエレノアが謝るんですか？』エブニーザは本当に何の事だかわからないという声で言った『フランシスが怒鳴るのはいつものことでしょう』

「いつものことって……前にも怒鳴られたことあるの？」

『えっ？』エブニーザが妙に甲高い声を上げた『いや、あの……いつもハイゼルと怒鳴り合ってますから、電話で』

しどろもどろの答え。

『あ、ああ、そうだ！アンゲルに会いましたか？』

どうやら、話題を変えようとしているようだ。エレノアは悲しくなってきた。

『どうして私にアンゲルの話をするの？』

『いや、まだ帰って来ていないので……』

『あなたって、誰にでもそんなに丁寧に話すの？』

『はい』

『もう少し友達らしく話せない？』

『友達らしく……』

エブニーザはよくわからないという様子。

エレノアがもっと話そうとした時、ハイゼルが部屋に戻ってきてしまい、エブニーザから受話器を奪った。

『何の話をしていたのかな？』

「ちよつと！エブニーザと話してる途中なのよ！」

『まあまあまあ、俺もちよつと聞きたいことがあるんでね』

怒っているエレノアにかまわず、ヘイゼルは楽しそうに話し始めた。

『フランスと同室でもう何日も経つが、実際どうなのかね？変なことをされてないかな？どうせ毎日物を投げたり怒鳴ったりしているんじゃないのかな？』

「それって、あなたに関係ある？」

エブニーザとの会話を邪魔されて不機嫌なエレノアは、わざと投げのある言い方をした。

『まあまあ、怒るなつて。深い意味はないのだ。ただ、あのご令嬢は30人以上も追い出しているからね、一体普段どのように暮らしているらっしゃるのか俺としても興味がわくんだな。本当に何も破壊していないのかな……』

話の途中でフランスが帰ってきて、エレノアが電話をしているのを見るなり、受話器を奪って電話を切ってしまった。

「一体あのバカ男と何の話をしたのよ？」

「エブニーザと話してたのよ！」弁解するようにエレノアが叫んだ

「ヘイゼルが受話器を横取りしたの！」

「この電話を使つな！」

フランスは凄まじい大声で怒鳴り、メモをエレノアに向かって投げつけると、自分の部屋に閉じこもってしまった。

3 - 1 2 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮

アンゲルはここ数日のイシュハでの生活で、管轄区とこちらでは、人々の意識が根本的に違うことに気がついた。

管轄区では、宗教と女神は生活そのものだ。

しかし、このイシュハでは『たまに思い出すもの』でしかないらしい。朝食の前の祈りもないし、女神の教えやら神話やら、聖書の内容なんてものが話題になることもない。行動や習慣にも全く宗教性が感じられず、ただただ本能で好きなように動いているという様子だ。

そもそもイシュハは『アニタ信仰』のはずなのに、『アニタ』という単語がイシュハ人の口から出てくるのを、アンゲルは今まで全く聞いたことがなかった。

イシュハ人はたまに『思い出したように』祈ることはあるらしいが、うつかり悪いことをしても女神に懺悔なんてしない。反省する様子もない。ただ『くそっ！』と悪態をついて終わりだ。それか、ものを蹴ったり殴ったりするか……。

めんどくさい祈りや、懺悔や、懲罰室から逃れたいと長年思っていたはずのアンゲルは、なぜかこちらの『気軽さ』にも違和感を感じていた。あまりにも精神性がないのではないかと。何でも好き勝手にやればいってもんじゃないだろう、と。

そもそも俺は何を求めてこっちに来たんだっけ？心理学以外に。

そんなふう悩んでいるアンゲルの横で、ヘイゼルとエブニーザが経済指標を広げ始めた。

「そんなの見てどうするんだ」

「どうするもなにも、ぼろ儲けさ」ヘイゼルがニヤニヤと笑っている「エブニーザには、未来が見えるんだ」

「は？」

話を聞くと、なんと、エブニーザが株価の上昇を予想してみごと

に当て、ヘイゼルが大金をもうけたことがわかった。

金額の莫大さ（学費のほぼ10倍）にアンゲルはショックを受けた。しかも、エブニーザはほんの一部しか金を受け取っていなかった。

「お前、もつと受け取れよ！お前の予想だろ！？」

「でも、お金を出したのはヘイゼルですから」

「ヘイゼル！」

「金切り声を出すなよ。フランススじゃあるまいし」ヘイゼルはずっとニヤニヤしている。「言ったる？エブニーザは天才だってな」

満足げに笑いながら自分の部屋に戻るヘイゼルを見て、アンゲルは『こいつ、自分が利用するためだけにエブニーザを引き取ったな？世話をしてるなんて嘘だ！』と怒りだし、エブニーザに向かって「お前！利用されてるぞ！」

と叫んだが、エブニーザはあまり気にしていない様子だ。

「何がいけないんですか？」

「何って……」

「人が死ぬわけじゃないのに……」

その瞬間、エブニーザが顔を引きつらせた。目がどこか、はるか遠くを見ているようになり、肩がかすかに震えた。

「どうした？」

「なんでも、ないです」

声まで、怯えるように震えていた。

エブニーザは、視線を遠くにやっただまま立ち上がり、よろけながら自分の部屋に戻って、ドアをそーっと閉めた。

大丈夫かな？何だか病気のようにも見えるけど……。

アンゲルは、テーブルに残された経済指標と株価のリスト、商品市場リストをひととおり見た。しかし、

……何が何だか、さっぱりわからないな……そういえばあいつ、学校に行ったことがなくせに、どうしてこんなに勉強ができるんだ？

どうやって勉強したか聞き出そうと、アンゲルはエブニーザの部屋のドアをノックしたが、返答がない。

あきらめて、自分の本に戻ることにした。

そうだ、俺は勉強するためにイシユ八に来たんだっけ。遊ぶためでも金を稼ぐためでもないさ。確かに生活費には困ってるけど……。

「エンジェル氏」

「わあっ」

部屋に戻ったと思っていたヘイゼルが、いきなり背後に現れたので、アンゲルは驚いて本を落としそうになった。

「何だよ!？」

「バイトなんてするくらいなら、寮費はシュツティファントで出そうか?」

「は?」

ヘイゼルはにやにやと笑っている。何か企んでいる顔だ。

「わざわざポートタウンまで皿洗いにいくくらいなら、その時間は勉強か、もっとと有意義に使った方がいいんじゃないかって言ってるんだよ」

「はあ?」

「どう?」

ヘイゼルが、困惑しているアンゲルの顔を覗きこんで、ますますあくどい笑い方をした。

アンゲルにはそれが、悪魔の誘惑に思えた。

確かに、週5日もアルバイトをせずに済めば、もっと勉強時間を確保できるし、サッカーのチームにだって入れるかもしれない……。魅力的な申し出のように思えた。しかし、シュツティファント、つまりヘイゼルに金をもらうということは……。あとで見返りに何を要求されるかわからないということだ。

第一、いきなり『寮費を出してやる』なんて、絶対何か企んでいるに決まってる!

でも……。

いや、だめだ。

時間がどうか、見返りがどうか、そういう問題じゃない。

「断る！」アングелが神経質な甲高い声を上げた。「悪いけど、気持ちだけ受け取っておくよ。そういうことをするのはよくないんだ」

「何がよくないのかな？」

「教育上よろしくない。人間、楽をするとだめになるもんなんだよ（一回胸に手を当てて考えてみる！ティッシュファントム！）それに、金が絡むと人間関係が壊れるだろ。同じ部屋に住んでるってのに」

「はいはい、わかりましたよ。勝手に苦労して疲れ果ててろよ。教
会っ子はくそまじめだからもう……」

ヘイゼルは、ぶつぶつ文句を言いながら、自分の部屋に戻って行
った。

アングелは本に視線を戻したが、文字を目で追っても、何が書いてあるのかまったく読めなかった。集中できなかったのだ。

これでよかったんだろうか？受けたほうがよかったんじゃないか……？でも、ティッシュファントムの金なんか受け取ったら、ろくなことにならないだろうし……でも……。

朝になっても不機嫌なフランシスとともに、エレノアは憂鬱な気持ちで授業に向かった。この日、クーは基本科目の授業にも現れなかった。どこにいるんだろうと聞くと、

「あの子実は気紛れだから、さぼってどこかをほっつき歩いてやがんのよ！」

フランシスが令嬢らしからぬ乱暴な言葉で言った。

いつまでも不機嫌なフランシスとは途中で別れ、エレノアは音楽科へ向かった。そして、あいかわらずの変人教師に振り回され、帰りには他の学生に『金持ちと知り合うなんて頭いいよね』と嫌味を言われ……。

エレノアは疲れ果てていた。

どうして毎日こんなに疲れるんだろう？親と一緒に旅をしていたころは、いくら歌っても、歩いてても、平気だったのに……。

ブースに入ろうとした時、ケンタに遭遇。いつものようにギターケースをしょっているが、ばんそうこうが目元から消えていた。

「元気ねえな？」

「疲れてるの」

「ブースに入る前に休憩しねえ？」

「休憩？」

「ここじゃ、『反アケパリ派』に見つかりそうだ」

ケンタは冗談を言いながら、エレノアの手を取り、そのまま校舎の裏の芝生まで連れていった。

エレノアは、ついていって大丈夫なのだろうかと思いつつも、自分を気にかけてくれることを嬉しく思った。

二人で芝生に座り、同室のフランシスの話や、エブニーザの話をする。

なんと、ケンタは二人を知っていた。

「有名だよ。シュツティファントと関わると有名人にされるんだ。エレノアの名前もそのうち知れ渡るだろうね」

「そんな知られ方嫌だわ。私は歌で人に認められたいの」

「でも、フェスティバルに出られるなんていいじゃん。俺も応募したけど、書類選考も通らなかった」

エレノアははっとしてケンタを見た。顔から血の気が引いていく。「選考があつたの!？」

「ああ。音楽科の人間はみんな出たがるよ。この学校のフェスティバルには、音楽関係のスカウトもよく来るから、だれにとつても大きなチャンスなんだ」

「私、そんなのに出れないわ」エレノアがかすれた声でつぶやいた「選考受けてないのに」

「エレノアが気にすることじゃねえよ。フラン……何だっけ?お嬢様が勝手に決めたんだろ?シグノーの人間が決めたんじゃ誰も撤回できない」

ケンタは優しいが、エレノアは、

選考も受けずにいきなり参加したんじゃ、妬まれても当然だ……。と深刻に考え始めてしまった。

少なくとも、他の生徒たちがエレノアを嫌う理由ははつきりした。

『選考も受けずに金持ちの推薦でフェスティバルに出やがって』だ。

「それよりエレノア、さつきから俺たちの様子を覗き見てる、怖い目のイシユ八人がいるんだが、知り合い?」

「えっ」

エレノアが振り向くと、後ろにいた学生があわてて後ろを向いて立ち去って行った。金髪で、青いシャツを着ているが、顔は見えなかった。

「わからないわ……知らない人だと思っけど」

「もてるねえ、エレノア」

ケンタがからかうように笑った。

そのころ、姫君クーは、図書館内の資料室でエブニーザに会っていた。

「私が来ることはわかっていたでしょう？」「予言者」さん？」

そんな意味深な発言をすると、エブニーザも優しく笑った。

前にノレーシュ語で会話した時に、「自分には未来が見える」という話をしていたからだ。

そして、クーはノレーシュの王位継承者である。

ノレーシュは、神話の発祥の地と言われている、その王または女王は『神話の擁護者』でもあるのだ。ノレーシュ人は全て、神話の中で生きていると言っても過言ではない。ある意味、管轄区の『狂信的なファナティ信者』よりも、もつと神に近い所で生きている、少なくとも、ノレーシュ人はそう思っている。

神話に出てくる神の子供たちの中に、未来を予言する者がいる。

もし、神話の再来が本当であれば……私が関わらないわけにはいかない。

クーはそんなことを考えて、エブニーザのところに戻ってきた。

他の、たとえば、エレノアやフランス、その他イシュ八人には全く理解できない思考法だろう。

二人とも、ノレーシュ語で内緒話を始めた。

『本当は王位なんてどうでもいい』とか『女の子の姿が夢で見える』とか……。

クーは、王家の人間だからこそ知っている各国の情勢をエブニーザに説明し、その中で、

「シユタイナーは危険人物よ、気をつけなさい」

と忠告した。

「そんなこと言われても……僕を助けてくれたんですよ？何の関係もないのに」

エブニーザは困った様子だ。

「あなたには何の関係がないように見えても、向こうから見たら別な思惑があるのよ」 厳しい表情でクーがそう言ったが、すぐ優しい顔に戻った。「どんな未来が見えるの」

エブニーザは遠くを見るような目をしたが、すぐに笑ってこう答えた。

「クーは女王になります」

「そんなこと誰でも知ってるわよ。お父様の子供は私一人だけよ。隠し子がいなければね」

「ヘイゼルも大統領になるんです」

「えっ……」

驚くクーにエブニーザが、心から同情しているような目で笑いかけた。

「大変ですね。国際会議で顔を会わせないといけなくなりますよ。国家元首として」

「そんなの大臣に押し付けるわ。冗談じゃない」

「無理ですよ。会議で向かい合ってる姿が見えるんですから」

「やめてよもう！絶対嫌！そんなの！」

本気で嫌そうに叫ぶクーを見て、エブニーザはおかしそうに笑った。

クーが恋愛とか結婚の話の話を聞くと、エブニーザは急に口を閉ざして下を向いてしまった。

「話したくないならいいわよ。私は結婚しないって決めているし」

エブニーザが驚いて顔を上げた。

「後を継ぐ人がいなくなりますよ」

「私の代で王家は終わりよ。決めたの」

「えっ……」

「イシユハを見なさいよ、いや、他の国でもいいわ。王家があるのはロンハルトとノレーシュだけ。未だに古代の生活を守ってるロンハルトならともかく、うちは近代国家よ。自由主義ではイシユハに

負けないわ。同性愛だって認めているし、医療体制だって上。教育にかけている予算も高額なの（人口はイシユハの方が多いのにね！）それに、ノレーシユ人はみな、自分たちが一番進んでるって自負があるわ。科学技術と神話の伝統をうまく両立して、世界一の文化を築いているの。今、実際に政治を動かしているのは大臣たちよ。そんな国に、王家なんて必要ないの」

驚きのあまりクーをじっと凝視しているエブニーザに満足げに笑いかけ、クーが立ちあがった。

「もう行かなきゃ。さすがに、イシユハ語の授業はさばれないわ」
取り残されたエブニーザはぼんやりと考える。

僕には未来が見えるけど、予想できないこともたくさんあるな、と。

3 - 15 エレノア ケンタ ライブハウス

エレノアは、学校の先輩たちが出演するライブを見に行くことになった。同じ音楽科の人たちがどんな曲を作って、どんな歌を歌うのか興味があつたし、もしかしたら、仲良くなれる人も少しはいるかもしれない……。そんな期待をしながら。

しかし、辿り着いた会場は狭く、汚い小屋のようなどころだった。煙草の煙で空気が悪い。壁にはゴシックやハードロックグループのポスター、イベントの日程が貼つてある。十人ほど入つたらいっぱいになるようなスペースに、安物の丸椅子がたくさん並んでいて、ステージにはチューニングにてこずっている先輩が数人見えた。実は、予定開始時刻をもう30分以上過ぎているのだ。

「なんか、機材が合わなかつたらしいよ」
と誰かが話しているのが聞こえた。

それくらい、前の日に調整できなかったの？

エレノアは心から疑問に思った。煙草の煙でのがおかしくなりそうだったので、飲み物を探した。古い時代の衣装と帽子を身に着けていたエレノアは、ドリンクの販売員に、

「あれ、それコスプレ？似合うね。令嬢っぽい」
と言われてしまった。

苦笑いしていると、ハウス内が暗くなり、ようやく演奏が始まった。

しかし、どの出演者も……下手だった。

音楽学校の生徒のはずなのに、歌の音程はずれ、ギターやピアノは弾き間違い、もともとどんな曲だったのか想像するのが難しいほど悲惨だ。バンドの音響もめちゃくちゃで、耳が割れそうなほどの大音響。

エレノアが耐えきれず耳をふさぐと、近くの席にいた学生が真顔で睨んできた。

曲の合間にMCが入るのだが、みんな気取っていて、偉そうで、『人類の未来を守ろう』とか『世界の平和のために歌います』とか、『俺の歌でみんなを幸せにするぜ』とか、演奏とまるでかみ合っていない壮大さだった。それに合わせて「イエーイ」とか「オー」とか叫んでいるのは、おそらく同じ学科の生徒か、顔見知りだろう。少なくとも、初めてこの会場に来た人が、あんな演奏でそこまで盛り上げられるとは、エレノアはどうしても思えなかった。

全ての演奏が終わるまで耐えて、帰ろうとすると、どこかで見たような顔の先輩たちに、

「どうだった？」

と、声をかけられた。

「あー、よかった、です」

エレノアは笑いを作って答えたが、その場の空気は凍りついてしまった。明らかに嘘をついているとばれてしまったようだ。かといって他に何と云えばいいだろう。『低レベルな演奏でがっかりです』なんて言ったら、何が飛んでくるかわかったものではない。

冷やかな視線の中、逃げるように外に出たエレノアは、入口にいるケンタを発見。

「よう、エレノア。とっとと逃げるぞ」

「えっ？」

ケンタは、ギターケースでエレノアをかばうようにして近くに寄せ、ささやいた。

「先輩がたの耳に入らない場所に逃げて、悪口を言おう」

いたずらを仕掛ける子供のような口調だった。エレノアは笑ってしまった。

二人で道を走り、もう誰も追いかけてこないだろうところまで、

「最悪のライブだな。客がかわいそうだ」

とケンタが吐き捨てるように言った。

「えっ？」

「エレノアがさつき先輩に絡まれてるの見て、俺『顔見知り少なくてよかった』って思ったよ。このライブを『どうだった？』って聞かれたって『最悪だ、客をバカにしてんのか、ほんとにプロになる気があんのか？』としか言えない。アケパリ語で言う『愚の骨頂』だな。練習不足が音からも明らかだ。そのくせ、トークだけは一人前に偉そうなんだから最悪だ」

「そこまで言わなくても」

とエレノアは言ったが、本心はケンタの言ったとおりだった。

「イシユハのライブハウスってみんなこんな感じなの？なんだか怪しげな」

「うーん、俺もよく知らないけど、ロックが主流だからね。だいたい似たようなもんだと思うよ。俺がアケパリでライブやった会場も似たようなもんだった」

「そう……」

エレノアは野外や、大きなテントの中で歌うことが多かったので、ライブハウスの暗い、閉鎖的な空間に圧迫されるような気がした。

もっと開放的な場所で活動はできないんだろうか……それにしても、どうしてあんな、未完成の未熟な状態で、人前で歌おうなんて思っただろう……いや、自分だって、未熟な子供のころから人前で歌っていた……でも、何か違う気がする……何だろう？

「エレノア、やっぱり変な男が後ろをつけてくるんだけど」

「えっ？」

後ろを見ると、また、先日と同じ背格好の学生が、慌てて走り去っていくのが見えた

「何かしら……怖いわね」

「エレノアのファンなんじゃない？俺、そのうち襲われるかもなあ」「やめてよ」

3 - 16 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮の部屋

アンゲルが『人生脚本』の本を読みながら『小さいころに無意識に書いた脚本……俺、7歳の時なにしてたっけなあ……』と考えていると、電話が鳴った。

アンゲルが電話を取ると、ドゥーシンと名乗る低い声の男が、エブニーザに代われと言ってきた。エブニーザに代わると、見たことのないような楽しそうな顔でしゃべり始めた。

ふと見ると、ヘイゼルが、ソファアから白けた視線をエブニーザに送っている。

エブニーザが受話器を置くのと同時に、ヘイゼルが質問を発した。「お前、まだドゥーシンと何かやってるのか？」

「え？」エブニーザが言いにくそうに視線をそらした「えーと……ポートタウンの管轄区側に森があるでしょう？ドゥーシンはあそこに住んでいるんです。近いから時々会いに来てって」

「やめとけ。ろくなことにならんぞ」ヘイゼルがサッカー雑誌をめくりながらつぶやいた「あいつ自身は悪くはないがな」

「ドゥーシンって誰？」

「友達です」

「犯罪組織だ」

アンゲルの質問に、二人が同時に答えた。

「犯罪組織？」

「違います。友達です。ちょっと変わっているだけです」

「シユタイナーの手下だよ」ヘイゼルが不愉快そうに舌打ちをした「かかわらんほうがいいって言うてるのに、こいつは言うことを聞かない」

「シユタイナー」アンゲルが身を乗り出した「エブニーザ、本物のシユタイナーってどんな人間だ？」

「え？」

「実物を見た事があるんだろ？」

「ありますけど……」エブニーザが言いにくそうに身を引いた。「書齋で何か読んでいるところしか見た事がないんです。僕はほとんど資料室か自分の部屋にこもっていたので……」

「シユタイナーの屋敷に自分の部屋があるのか？」

「そうですね……」

「もうなくなってるさ。戻ろうなんて思うなよ」ヘイゼルが二人の間に割って入ってきた。「お前は一人立ちしないとだめだ。シユタイナーに頼るな」

「ヘイゼル……」アンゲルは、エブニーザの顔から血の気が引いてくのはつきりと見た。「そこまで言わなくてもいいだろ。大学に入ってから考えてもいいだろ、先のことは」

「大学に行くんですか？」

「えっ？」

「何い？」

アンゲルとヘイゼルがそろってエブニーザを見た。

「行くだろ？この学校は大学に行きたい奴のためにあるんだぞ？」

ヘイゼルが驚きを隠さずにそう言つと、

「どうしても、行かないといけないんですか？」

と、エブニーザが弱々しい声で尋ねた。不安そうに。

「はあ？」

アンゲルはあからさまに呆れた顔をしたが、エブニーザは真面目に質問しているようだ。すぐるような目でアンゲルとヘイゼルを交互に見つめている。

「だって、エブニーザ」アンゲルはなんとかまともな説明をしようと試みた。「お前、いつとも本ばかり読んでるだろ？人に会うのも嫌いなんだろ？大学に行かないで、どうやって生きて行くつもりだよ？頭使う以外に生活する道がないだろうが」

「そうですねですか？」

「そうですねですか……」

エブニーザは『何の事だか全然わからない』という顔をしている。「アンゲル」ヘイゼルがサッカー雑誌をアンゲルに押し付けた「これでも読んで寝てる。エブニーザは世の中なんか何も知らないからな」

そして今度はエブニーザの方を向いて。

「大学に行け。じゃないと俺は縁を切るぞ」

「えっ……」

ヘイゼルは立ち上がり、二人を置いて自分の部屋に戻ってしまった。

「俺だったら、喜んで行くのやめるね。あいつと縁が切れるんならアンゲルは雑誌を読みながらそんなことを言い、エブニーザは不安げな顔でヘイゼルの部屋のドアを見た。」

「アンゲル」

エブニーザが、かすれた声でアンゲルを呼んだ。

「何？もう遅いから寝るよ」

雑誌から目をそらさずにアンゲルが聞き返した。

「アンゲルは。生活するために心理学をやっているんですか？」

「違う。心理学をやるのが夢だったんだよ」

「管轄区じゃ、心理学で生活なんかできないしな。」

アンゲルは心でつぶやいた。

「夢……」エブニーザが近寄ってきた「誰かが、見えたりしますか？」

「は？」

アンゲルが顔を上げた。

「だれか、自分以外の人か、夢で見えたり、しますか？」

「は？」

アンゲルはエブニーザが何を聞きたいのかわからなかった。

「夢で、別な人の人生が見えたり、しないですか？」

「知らない人が出てくることはあるけど……それが何？」

「その人に現実に会ったことは？」

「あるわけないだろ。夢なんだから。まあ、知ってる人が夢に出てくることはあるけど」

「そうですか」

エブニーザは肩を落として、いかにも落ち込んでいるようなふらふらした歩き方で、自分の部屋に戻っていった。そしてドアをそっくと閉めた。

……何だ？何が言いたかったんだ？変な夢でも見たのか？

アンゲルはエブニーザの落ち込んだ様子が気になり、ふと、

あいつの人生脚本は悲惨そうだな。書き変える必要がありそうだ。

と思ったが、手元の雑誌に『アルターの競技場でサッカー世界大会の決勝戦が行われる予定……』という記事があるのが目に入って、夢中で読み進んでいるうちに、エブニーザのことは忘れてしまった。

3 - 17 エレノア クー フランシス ランチ

エレノアとクーはまた並んで授業を受けた。

エレノアは、ときどきクーが自分の方を見て、愛しげに笑っていることに気づいたが、意味がわからなかったので、知らないふりをした。

昼にはフランシスと合流。フランシスがクーにこんなことを言い始めた。

「エレノアがああ気持ち悪いエブニーザに夢中なのよ」

「ほんと？」

クーが怪訝な顔をした。

「フランシス……」

エレノアはどう話しているのかわからなくなってしまった。しかし、二人に『どうなの！？どうなの！？』としつこく追及されて、正直に、

「気になる」

と答えた。するとクーは同調してこう言った。

「あんなに美しい少年が現れたら、だれだって心を奪われるわ」

しかし、フランシスは全く逆の意見だ。

「気持ち悪い。暗い。目の色が不気味。人間とは思えない。しかも病気」

心の底から不快そうな顔で、そんな言葉を連発した。

「何言ってるの！？」

「フランシス！」

クーとエレノアが揃って抗議したが、フランシスは意見を変える気は全くないらしい。

「ヘイゼルもシュタイナーも、何考えてやがるんだかわかりやしないわ。あんな弱虫じゃ、いくら頭が良くても、世の中を渡っていけるとは思えないけど。学費を出すだけ無駄じゃないの。どっかの施

設にでも入れて、一生ぼーっとさせときゃいいじゃない。あんな青白い顔でびくびくしながらそこら辺をうろつろされたんじゃ、まわりがいい迷惑じゃないの」

「ひどい……」

フランスの毒舌には慣れたつもりだったエレノアだが、これには参った。

「フランススって、弱い男が大嫌いなよね」クーがいたずらっぽい顔で笑った「で？これからどうするの？」

クーがいたずらっぽく尋ねたが、エレノアは、

「どうするって言われても……」

と困るだけだった。

そのうち、フランスとクーは別な友人（エレノアには縁のなさそうなお金持ち）のうわさ話を始めてしまい、エレノアはぼんやりとそれを聞きながら、エブニーザのことを考えた。でも、すぐに母親に言われた、

『大いに勉強しておいで、そして大成功しなさい。でも、男にはまっちゃんだめよ』

という言葉を思い出す。

そうだ、私は音楽の勉強のためにアルターに来たんだけ。

「歌の練習に行かなきゃ」

そう言っつて、エレノアは逃げるように寮を出た。

音楽科に向かって歩く。久しぶりに雨が降って、ところどころに水たまりができていた。

ときどき覗きこんでみると、薄暗い水面に自分の顔が映った。

元気ないわね。

エレノアは、水面に移った自分に話しかけた。声には出さずに。傘の先で水面を突く。波紋が広がり、自分の姿が割れて、揺れ動いた。

水面が元通りに静まると、また傘の先で突き、波紋や、水滴の落ちたあとを見る……。

エレノアはそんなことを繰り返していた。自分の働きかけで動くものが、目に見える形で現れると、面白い。

理論的に、あるいは実用的には何の役に立たない行動でも、気を紛らわすくらいの効果はあるらしい。少なくともエレノアには。

3 - 18 アンゲル エレノア 道

そのころ、アンゲルは、バイトに向かうために歩いていた。傘を持っていない（今持っていないと言っ意味ではなくて、本当にアンゲルは『自分の傘』を所有していないのだ）ので、雨がまた降らないうちに駅にたどり着こうと、かなり早足で歩いていた。

すると、視界に見慣れた帽子をかぶった女の子の姿が。

エレノアが、水たまりの表面に傘の先で円を描いていた。

……何をやってるんだろう？

離れた場所から観察していると、エレノアは、水溜りの真ん中で傘の先をふつと上げ、水をまっすぐに跳ね上がらせた。それを、楽しそうな顔で何度も繰り返ししている。

アンゲルがそーっと近づいて行くと、エレノアはアンゲルに気づいて、傘をひっこめて顔を真っ赤に染めた。

かわいいなあ……。

アンゲルはニヤニヤしながら、

「何してたの？」

と聞くと、エレノアは慌てた様子で、

「なんでもない！」

と叫んで、走って逃げて行ってしまった。

アンゲルはしばらく『よくわからないけど、いいものを見た』と、ニヤニヤしながら水溜りを眺めていた。

しかし、そのうち雨が降り始めたので、あわてて駅まで走って行った。

3 - 19 アンゲル ロハン レストラン〜古い寮

アルターの学生たちは金銭的に余裕があるのか、やたらに買い物をしたりライブに出かけたりと金遣いが荒い。アンゲルはアルバイトでギリギリの生活をしているので、そんなイシユ八人たちと同じ行動はできず、かといって、管轄区の生徒とは全く気が合わず、学校とバイト以外に行き場がなくなっていた。

ある日、バイト先のレストランに配達にやってくる食料品店の店員が、

「あれ、お前、この前学校にいなかった？」
と話しかけてきた。

この店員、ロハンは、同じ学校の『安いほうの寮』の住人だそう
だ。アンゲルはその寮に遊びに行くことになった。

開いている部屋があったら、移してもらえないか頼んでみよう…
…。

そんなことを期待して行った古臭い建物には、残念ながら、空いている部屋はなかった。

ロハンの部屋に入ると、ドアの前いきなりベッドが二つ置いて
あって、両サイドの壁際に本棚と机があった。同じ部屋を二人で共
有する造りになっているらしい。

冷房がなく、蒸し暑い。汗がたらたらと流れる。窓を開けても風
が入って来ない。

どちらの本棚も、教科書や難しい専門書で埋め尽くされていて、
雑誌やコミックなどは一切見当たらなかった。

「イシユ八人でも真面目な奴いるんだなあ」

「ああ、同室のノレーシユ人が怖いくらい勉強家だから、負けてら
れないんだよね」

「へえ……」

そういうルームメイトならいいなあ。お互いに成長できて。

こっちはティツシユフロントムと……半病人だもんなあ。やつかいなだけだなあ……。

うらやみつつも話を聞いてみると、ロハンはイシユ八人だが『あまりにも貧乏で、父親が刑務所において、母はアル中なので』特例でこの『移民の寮』に入ったという。

「いいのは成績だけだ。おかげで助かったけどね」

「俺だつてこっちに入りたかったのに、高い寮に三人押し込められて、しかもティツシユお化けと一緒にんだぞ」

「ティツシユお化け？」

「本名は、えーと、なんだつたつけ、シユツティファント？」

ロハンは『シユツティファント』という単語に露骨に嫌悪感を示した。

「あいつらが好きな奴なんているもんか。国の金をどんどん吸い取りやがつて」

「そうなの？」

「そうさ！」ロハンが、抗議文でも読み上げるように叫んだ「あいつらがいなくなったら、俺たちの暮らしはもっと楽になっているはずなんだ！」

「ふうん……」

どういう仕組みでそういうことになるのか、アンゲルはよくわからなかったが、今まで会ってきたイシユ八人の態度から、おそらくロハンの今の言葉が、イシユ八人の一般的な『シユツティファント』の解釈なのだろうと考え、あえて反論はしなかった。

同じ学校の生徒がみんな、趣味やパーティーや車に金を使っているのを見て、苦々しい思いをしていた二人は、

「あいつらおかしいんだよ」

「金を使うために学校があるわけじゃねえんだよ」

「俺たちは真面目に勉強してんだよ」

「しかも働いて税金取られてるんだぞ！」

「そうなの？」

「勝手に引かれてるよ。明細見てみるよ」

「知らなかったああああ!!」

「何にでも金がかかりすぎるんだよなこの国は」

「遊んでる奴はろくな人生送れねえぞ!」

と変なことで意気投合し、夜遅くまで語り合ってしまった。

しかし、帰り際、アンゲルは、ロハンの部屋の隅に、飲んではいけないアルコールの空き瓶がたくさんあることに気がついた。

難しそうな本がたくさん並び、不思議なほどきちんと片付いている部屋と、その空き瓶の群れは、妙なコントラストを作り出していた。

気になったが、ロハンに『お前が飲んだのか!?!』と尋ねることはできなかった。

寮に帰ると、こんどはエブニーザが『人に会うのが怖い』と言ってやはり部屋にこもっていたので、話しかけてみることにした。

いつもヘイゼルばかり延々としゃべってて、こいつと話したことがなかったからな。

それにいつか、人さらいの正体をつきとめないといけないし……。

「どうしてヘイゼルはあんなジジイみたいな口調なんだろうなあ」

「『カントナ博士の日常』って知ってますか？」

「知ってるよ。ベストセラーだろ。何冊か読んだことがある……あつ」

「そうですよ。あの博士の口調ですよ」エブニーザがおかしそうに笑った「カントナ博士に、シュツティファントの高慢さを足すと……」

「ヘイゼルになるんだな！……でも、あれって子供向けの、どっちかというと常識的な本だよな？ヘイゼルがおもしろがって読むとは思えないけど……」

「かなり小さいころに読んだらしいんですよ」

「それにしても合わないなあ、あの博士ってかなり道徳的だろ？」

管轄区の厳しい検閲は有名だ。通過する本は珍しい。特にイシユ八の本は、ほとんど通過できないと言われている。そこを通ったと言っことは、その本は『かなり道徳的な本』『料理などの実用書』

あるいは『当たり障りのないつまらない本』のいずれかに該当する。

「ヘイゼルはけっこう道徳的な所がありますよ」

「……どこが？」

しばらくは、本の話で時間が潰せた。エブニーザは、アンゲルが知っている本はほぼ全部読んだことがあると言った。

いいなあ。シュタイナーのところにはそんなに本があったのか……。

一瞬うらやましくなったが、エブニーザがそういう立場になったのは『人さらにさらわれる』という不幸のせいだったと思いだした。

エブニーザはいきなり上級の3年に入ったので、うまくいけば来年には大学に進めることになる。

「将来何になるつもりだよ？成績がいいから何にでもなれるだろ？」
アンゲルがやや嫉妬を含んだ口調で言うと、エブニーザは気まずそうに下を向いてしまった。

「……わかりません」

「わからない？」

「自分が何をしたいか、わからないんです」

「まあ……あせって決めなくてもいいんじゃないか？実際この学生で将来が決まってる奴なんてそんなにいないだろ」

「でも、どうしてもやらなきゃいけないことはあるんです！」

急にエブニーザが熱のこもった声を出したので、アンゲルは興味をそそられた。

何だろう？『作家になりたい』とでも言うのかな？本好きらしいしな……。

「何？」

「彼女を助けなきゃ」

「は？」何の話に飛んだのか、アンゲルは一瞬戸惑った。「何？」

「もともと彼女はご両親と妹さんと、幸せに暮らしていたんですが、ある日、両親が殺されて、変な所に引き取られてしまったんです」
エブニーザが真面目な顔で、訴えるような熱心さで話した。「汚い部屋に住んでいて、毎日怒鳴られたり殴られたり、とんでもないことをさせられたりして……疲れ果ててぼんやり窓辺で外を眺めてる。早く見つけて助け出さなきゃ」

「ち、ちよつと待って、それ誰の話？知り合い？」

「見えるんです」

アンゲルがその一言で思い出したのは、

「私は霊が見える、死んだものが無念でさまよっているのが見えるのだ」

と言っていた、昔話のしわがれたお婆さんの声だった。管轄区の国営ラジオ放送でやっていた、昔話に出てくる霊媒師の老女の話だ。アンゲルはそんなものを思い出してポカーンとしていた。しかし、エブニーザは構わずに、熱のこもった口調で話し続けた。

「夢の中とか、歩いている時に、ふと、彼女の姿が見えるんです。未来が見えるのと同じように、予知と同じです。いつもいじめられたり、殴られたりしているんです。どこにいるかはわからないけど、早く見つけ出さなきゃ……」

「ちよつと待って」アンゲルは本気で頭を抱えた「つまりそれ、誰？」

「だから、たまに見えるんです！確かにいるんです！」

エブニーザが「どうしてわからないんだ！」と非難しているような口調で叫んだ。

それから「それにしたって誰だよ」だから見えるんですけどは！」「だから何だよ！？」の問答を繰り返した後、アンゲルが出した結論はこうだ。

「お前、精神病んでるだろ？」真面目に、深刻な顔でアンゲルが宣言した「それは抑圧から来る妄想ってやつだぞ」

「違います！」

エブニーザが青い顔になりながらも、珍しく強い口調で反論した。「いや、落ちついて聞けよ。お前はきつと、監禁の後遺症で、別人を頭の中に作り上げて、自分の体験を投影してるんだ。殴られたりこき使われたりしてたのは、彼女じゃなくて、お前なんだ。その体験があまりにもつらいから、別人を作り出して、自分は遠くから見る立場に退避したんだよ」

勢いで喋ってから、アンゲルはしまったと思った。

エブニーザが、凍りついたように動きを止めてしまったからだ。

「エブニーザ？」

呼びかけても返答がない。

「おい、大丈夫か？」

「違う」エブニーザは真つ青な顔で、半ば震えながら立ちあがった
「違う」

そのまま、よろけながら部屋に戻り、そーっとドアを閉めた。

そのあと数日、エブニーザは、アンゲルを無視して話そうとしな
かった。

部屋から出てくると、アンゲルにもヘイゼルにもあいさつせずに、
そのまま出て行ってしまふ。

授業で見かけ近づくと、走って逃げてしまふ。

夕方、ヘイゼルが図書館に探しにいつても、いない。

早めに自分の部屋に帰って、そのまま閉じこもっているらしい。

「何があつたのかな？」

3日ほど経って、エブニーザの変な態度にようやく気がついたヘ
イゼルが、ソファーにふんぞり返ったまま質問を發した。

アンゲルがようやく事情を打ち明ると、ヘイゼルは逆上して、も
のすごい勢いで怒鳴り始めた。

「だから女の子の話は否定せずに聞けって言っただろ！？」

「だってどう考えても妄想だろうが！」

「そんなことは関係ない！実際にいるかどうかなんてどうでもいい
んだ。問題は、あいつの心の支えがその女の子しかないってことな
んだよ。いつかその子に会える、それだけを支えにここまで来てる
んだ。じゃなきゃ一生シュタイナーの屋敷にこもってただらうさ！
シュタイナー爺さんのところにいたときのあいつがどれだけおかし
かったか、見せてやりたいよ。まるで廃人だったのだぞ！？話しか
けても何の反応もしない！それをようやくここまで持ってきたのだ
ぞ！本当の事がどうかなんてお前の知ったこつちやないだろ！それ
に未来が予知できるんだから、本当にそんな女がいてもおかしくな
いだろ？」

「未来が見えるって、経済指標を見て株価を予想するのはまだわかるけど、いくらなんでも女の子が……」

「实在しようがしまいがそんなことは関係ない！要はあいつがまともになるまでもちこたえればいいんだよ！夢を壊すなよ！奴の人生がかかっているんだぞ？」

めずらしくヘイゼルがまともなことを言ったので、アンゲルは一応反省したが、それでも、話の内容はほとんど理解できなかった。……ちよつと待てよ。

「ヘイゼル」

「何だよ」

「そんな重い症状の奴を、お前の勝手な判断で引き取ったのか？」

「シユタイナー爺さんのところにいるより、こっちのほうがよっぽどマシだね」

「病院に連れて行くべきじゃないのか？学校にも精神科医がいるから……」

「そんな必要ないさ。病気じゃないんだから」

「おい……」

アンゲルから見れば、エブニーザは明らかに病気だ、しかもかなり重い。

「心配するなって」

ヘイゼルが軽い口調で、口元だけにやつと笑った。

もちろんアンゲルは納得できなかった。

『そんな妄想を抱いたまま生きていて大丈夫なんだろうか……？』

『カウンセリングでこういう患者と延々とつきあわないといけなくなるのか……』

と、一人で頭を抱えてしまった。

「それより明日試合があるだろ？」

ヘイゼルが、先ほどとは打って変わって、心底楽しそうにニヤニヤと笑いだし、赤いジャケットのポケットから、サッカーの観戦チケットを二枚取り出した。

「行くぞ。代金は気にしなくていい」

落ち込んでいたアンゲルも急に飛びあがって、チケットに顔を近づけた。

「おおおお！マジ？本物？」アンゲルは自分の目が信じられないようだ。「ダフ屋じゃなくて？ほんとにプロの試合？」

「シュツティファント様が偽物を持つてくると思うか？」

競技場で本物のプロの試合が見れる！！アンゲルは大喜びだ。

サッカーには、何もかもを吹き飛ばす威力がある、少なくともアンゲルにとっては。

……次の日、

三人分のノートを抱えたエブニーザが、物理の教官に、

「あの二人はどうした？」

と聞かれて、

「文句はサッカー協会に言ってくださいよ！」

と泣きそうな顔で叫んでいるのを、上級のほとんどの生徒が目撃することになった。

独房 囚人11番 掃除係の老人

それから半年ほど、週一回、老人は掃除をしながら、私のノートを覗いて去って行った。何もしゃべらないが、明らかに何かを期待しているように見えた。

そしてある日、いつも通り掃除にやってきた老人が、モップを床にこすりつけながら、こんなことをつぶやいた。

「その、アルターとかいうのは、ほんとうにあるのかな」

いきなり低い声が部屋に響いたので、私はぎよっとして、座ったまま跳ね上がった。書きかけの文字が歪んだ。消しゴムがないので二重線で消すしかない。

「あるよ」

声があまく出なかった。

「そこに書いてるのは、本当の事かね？」

老人はそう言いながら、独房の隅に積んである、書き終えたノートを指さした。

「私がよく知っている人たちの話だ」

「読んでもいいかね」

驚いて顔を上げると、老人はにやにやと笑っていた。楽しみで仕方がないと言う顔だ。

私は迷った。できれば見せたくなかった。

しかし、相手がどう出るかわからない。もしこの男が凶悪で、ちよつとした拒絶ですぐに腹を立てて暴れるような人間だったらどうすればいいのだ？

「すぐに答えなくてもいいさ」

老人は、意外なほど穏やかな声で言った。

「こんな所で他人を信用するのは難しい。俺だってそれくらいはわ

かってるさ」

老人はモップを持って独房を出ようとしたが、ふと立ち止まって。「どうせ来週も掃除に来るし、さ来週も来るさ。その次の週も、ずっと次もな。いつでもいい。読ませてもいいと思ったら言ってくれ」そう言い残して、出て行った。

見張り番がカギをかけるあの金属音が、妙に大きく響いた。

いや、私の事はどうでもいい。
続きを聞かせよう。

4 - 1 エレノア フランシス クー アンゲル 女子寮

フェスティバルが近づいてきた。

エレノアは、自分の持っているステージ衣装をすべて取り出して、窓辺に並べた。

古いものばかりで、中には、100年戦争時代のドレスまで混じっている。旅芸人をしながら集めたものだ。

そんな古いドレスの中から、ステージ衣装を選ぼうとしているエレノアを、フランシスはしばらく、珍しいものを見るような目で観察していたのだが、エレノアがその中でも一番古そうな衣装に手を出したとたん、

「そんな古臭いの着ないですよ！」

と、お得意の甲高い声で叫んだ。

「でもこれ、すごく由緒正しい衣装なのよ。有名な舞台女優がエルツコ・シデクラの舞台のためにわざわざ作ったもので、今では使われていないレースが……」

「だめ！」

フランシスは、エレノアの手から『由緒正しい衣装』をひったくった。

「そんな古臭い舞台とフェスティバルを一緒にしないでちょうだい！私があんたを推薦したんですからね！変なものを着てもらっちゃ困るのよ！」

フランシスは、壁にかけてあった帽子を、エレノアに向かって投げつけた。

「出かけるわよ！支度しなさい！」

有無を言わさない命令口調だ。

「どこに？」

「セカンドヴィラ……」

フランシスが軍隊のような口調で『イシュハのファッション・キ

ヤピタル』の名前を叫んだ。

「ちゃんとしたデザイナーに作ってもらわよ！」

「えっ？」

「早く着替えるー！」

いきりたつフランス。エレノアがあわてて着替えている間に、フランスはクーに電話したらしい。女子寮を出ると、黒塗りの車が止まっていて、後部座席からクーが笑顔で手を振っているのが見えた。

「セカンドヴィラなんて久しぶりだわあ」

クーはうきうきした様子だ。

どうやら、エレノアのためというよりは、自分が行きたいだけらしい。

こうしてエレノアは、半ば誘拐されるように、北の街セカンドヴィラに連行された。

セカンドヴィラは『ファッション・キャピタル』の名前の通り、大きな通りのほとんどが有名デザイナーのショッパや工房で埋め尽くされている。歩く人々もモデルのように華やかに着飾っていて、日常がファッションショーのようだ。

エレノアは、前にもこの町に来たことがあったが、旅芸人の両親と一緒に、小さい頃だったため、ほとんど記憶に残っていなかった。「あの教会のあたりだけ覚えてるけど……」

「ああ、あれはずっと前からあるわね」フランスが興味なさそうな声で言った。「他の店は常に入れ替わってるし、建物もすぐ変わるから」

「町の景色も文化財産なんだけど、イシュハ人ってそういうこと考えないのよね」

「そんなつまらない話はやめてちょうだい、クー」

フランスのお気に入りだという、どこかで聞いた名前のデザイナーの店の前で、車は止まった。

それから、自身もモデルなのではないかと思うほど美しいデザイナー

ーに迎えられ、エレノアのためのドレスは新調された。
ドレスはあまりにも美しく、エレノアははじめて自分の姿にうっとりした。

「あんたって、クーより姫君に見えるわよ。その格好だと」
フランシスが苦笑いする。ただ、また大きな帽子をかぶろうとしてクーに、

「そんなのかぶったら、せつかくの美しい顔が見えないでしょ」
と、飾りのついた、王族がかぶるような小さいものを勧められた。

そんなふうにして衣装が決まり、今までにましてやる気になった
エレノアは、必死で曲作りと練習に励んだ。

しかし、音楽科の生徒たちは、あいかかわらずエレノアをよく思っていないようだ。

楽典の授業の最中に、消しゴムを小さくちぎったものがたくさん
飛んできた。

廊下では、誰かに足をかけられて転んだ。

建物を出ると、誰かがくすくす笑っている声が妙に気に障り……

エレノアは落ち込んでいた。

そして、肝心の歌のレッスンも大変だ。

ケツチャノツポ先生が、相変わらず変人ぶりを発揮して、

「もつと情熱を！ 歓喜を！」

と叫びながら、曲芸師ばりのジャンプや回転を披露して、エレノアを混乱させるのだ。

疲れる……。

ブースで練習をした帰りに図書館の前を通ると、カフェにアンゲルがいた。

沈んでいる様子なので、どうしたのか聞いてみると、

「エブニーザとけんかしてね」

と、力ない答えが返ってきた。

「どうして？」

エレノアは驚いた。ヘイゼルならともかく、アンゲルは、そんなに簡単に人とけんかをするようには見えないからだ。

「いやー、説明しにくいんだけど、あいつの意見というか、見かたというか、それが変だって言ったら、部屋にこもって口をきいてくれなくなっただけ」

「そう」

エレノアはフェスティバルの話をした。みんなに良く思われていないのに、いきなりメインの歌姫になったのがプレッシャーだと話すと、

「そんなの、実力で認めさせればいいだろ？ 妬む奴なんか気にするな」強い口調でそう言うと、アンゲルは笑った。「いやがらせするほど暇だなんて、どうせ大した奴らじゃない」

アンゲルの不思議な所はここだ。強そうなことを言ってもきつく感じない。押しつけるような感じが一切しない。

なぜだろう？

女子寮に帰ると、クーが遊びに来ていた。

エレノアが『みんなに嫉妬されてる』と話すと、

「大丈夫よ、あなたなら」

クーがエレノアの背中を撫でながら、どこか、うつとりするような微笑みを浮かべて、エレノアの目を覗きこんだ。

エレノアはその瞳の深さと、微笑みに現れたあまりの愛しげな色に、どぎまぎして頬を赤く染めた。

本当にこの子は姫君なんだ！ やっぱり普通の人は何かが違う！

「本当にかわいいのね、エレノア」

クーが耳元でささやいたので、ぞわぞわとした感触と共に、エレノアの顔がますます真っ赤になった。

「からかうのやめなさいよ。姫君の悪い癖ね」

フランシスが面白がっているように、カラカラと独特の笑い声をあげた。

4・2 アンゲル エブニーザ ヘイゼル 男子寮の部屋

授業のあと。

図書館で本をあさっていたアンゲルに、エブニーザが、

「お母さんから電話がありますから、帰った方がいいですよ」

と言った。無表情だったが。

あの『女の子が見える』でもめた日以来、久しぶりに自分から話しかけてきたので、アンゲルは嬉しかったのだが、顔には極力出さないようにした。

「お前が電話取ったのか？」

「いいえ、見えただけです」

それだけ言うと、エブニーザは無表情のまま去って行った。きつといつもの資料室に行ったのだろう。

見えただけって何だ……？

疑問に思いながらもアンゲルは一応、読みかけの本を借りて部屋に戻った。

30分後、電話が鳴り、取ると本当に母親だった。

「食料を送る、あれも送る、これも送る、心配だ。父さんがまた変なものを森から拾ってきて云々」

同じ話を何度も繰り返し返して、なかなか話が終わらないので、アンゲルは頭痛がしてきたが、かといって切ることもできず、ひたすら話を合わせてきとうに返事を続けた。

一通り話が終わって電話を切った頃には、2時間ほど過ぎていた。アルバイトに行く時間を大幅に過ぎている……慌てて部屋を飛び出した。

数日後。

アルバイトを終えて、アンゲルが部屋に戻ると、母親から送られてきた荷物を、ヘイゼルが勝手に開けていた。

「人の荷物を勝手に開けるな！」

「まあまああ」ヘイゼルがにやけながら、封筒をアンゲルの目にかざした。「それより面白いものが届いてますぞ。『拝啓、アンゲル、ちゃんと勉強してるんだろうね、こちらは相変わらずお父さんが変なものを集めて……』」

アンゲルは逆上してヘイゼルにとびかかったが、あっさりかわされて、ソファアの上に倒れた。

「……置き場所がないのにどうしてそんなものを持ってくるんでしょうね？何度言っても聞かないんだから。あんたが注意した方が聞くんじやないかしら？それと、この前郵便局でカペットのおばさんに会いました。あんたが夢中になっていたミレアちゃんが……」
「おお、何かね、スキヤンダルの香りがしますなあエンジエル氏！」
「人の手紙を勝手に読むなあああああ……！！！」

ヘイゼルは爆笑し、手紙を朗読しながら部屋中を飛び回った。アンゲルは真っ赤な顔でそれを追いかけ回し……。部屋をひととおり駆け回り、アンゲルがやっと手紙を取り返した頃、エブニーザが帰ってきた。

アンゲルはビスケットを渡そうとしたが、
「遠慮します」

エブニーザはそれだけ、小さな声で言うと、自分の部屋にこもってしまった。

「あいつは偏食だぞ」

そう言いながら、ヘイゼルがビスケットを奪い取った。アンゲルがすさまじい目つきで睨んだが、全く気にならないようだ。

ヘイゼルはほっという勉強しよう……。
アンゲルは本を開く……。ふと、エブニーザが母の電話を予知したことを思い出した。

どうしてわかったんだ？かかってくる前に？

ヘイゼルにその話をすると、

「予知能力さ」

口にビスケットを詰めたまま、ヘイゼルが答えた。

「予知能力？」

「前にも言ったたる？未来が見える。何でも当ててる。天才だ、だから連れてきたんだ」

「だからって、うちの母親の電話なんか予知してどうするんだよ！？」

「俺に聞かれてもわからんね……ブツ！」ヘイゼルが食べかけのビスケットを吐き出した「なんだこれは！？足の裏みたいな味だぞ！教会っ子は味覚がないのか！？」

「勝手に食って文句を言うなー！！」

アンゲルは、ヘイゼルからビスケットの袋をひったくった。

そして、妙なことを始めた。

まず、テーブルの上にビスケットを全て出した。

そして、一つ一つ選別し、二つのグループに分け始めた。

ヘイゼルはしばらく、アンゲルのこの奇妙な行動を見守っていたが、作業が半分ほど進んだところで、

「エンジェル氏」めずらしく控えめに質問した「何をしているのかな？」

「分けてるんだよ。これは生焼け。これは黒焦げ。これは材料が混ざってないから、うっかり口に入るとまずい。さつき引つかかったたる」

アンゲルは当然のことのように言った。手を止めずに。

ヘイゼルは、何か、見てはいけない物を見てしまったような、困惑の顔をした。

「それは……」うさんくさそうに目を細めながら、つぶやいた「なんとというか……問題じゃないのかな？工業製品として、質が均一じゃないというのは」

「別に普通だろ。人間が作ったものなんだから、変なものも混ざるよ」ヘイゼルはテーブルの上をじっと見ている。

アンゲルが分けたビスケットの山は、規格品より不良品のほうが

多いように見える。

「……いちいち分けてから食わにやいかんのかな？」

「何だよさつきから」アンゲルがヘイゼルに抗議の目を向けた。「別にビスケットじゃなくなつて、何だって、まず袋の中身がちゃんとしたものか、確かめてから食うだろ？」

「確かめなくても食えるものが入ってるべきじゃないのかね？」

「確かめないで変なもの食ったらどうするんだよ？」

「メーカーに電話して、苦情を言って金でも取るさ……」ヘイゼルは、ビスケットの空き袋を手に取った。「何も書いてないな」

ヘイゼルは袋を持ったまま立ち上がり、

「ツルツパゲーノのレポートのネタにするとしよう」

と言いながら、部屋を出て行った。

アンゲルはしばらく『またツルツパゲーノ？』と考えながらビスケットを選別し、それが終わると、母親から送られてきた箱の中身を点検し始めた。

ビスケットがさらに2袋と、質の悪いノート。

空き箱を片付けようとした時、荷物の中に、見覚えのある黒い表紙の本を見つけた。

それが何か分かったとたん、アンゲルは身をひきつらせた。

聖書だ。

フアナティ教の。

見間違いだつたらいいのに、と思った。

しかし、どう見ても、それは、そこに存在していた。

アンゲルはそーっと、両手で『フアナティ教の聖書』を箱から取り出した。

どうしてこんなものを送ってくるんだよ!?

アンゲルは頭の中で叫んだ。

いや、理由はわかっている。アンゲルの両親は普通の管轄区の人間だ。

つまり、『敬虔なる女神フアナティの信徒』なのだ。

手の中にあるその小さな本が、アンゲルには、まるで、大きな鉛の塊のように、重く感じられた。そのまま押し潰されてしまうのではないかと思うくらいに。

頭がくらくらした。せつかく逃れた何かに、再び捕まえられたような感覚に襲われた。

アンゲルは、両手でその『黒い本』を本棚まで運ぶと、本棚の背につくように入れ、その上から大きめの本を何冊かかぶせた。視界に入らないようにするために。

自分は敬虔なフアナティ教徒ではない。

そもそも、女神なんて信じていない。

親を騙しているようで辛かった。

アンゲルの両親は心理学のことを知っているのだが、それでも時々、勉強をしている最中に、アンゲルはふと、両親を裏切っているような気分になることがあった。

気にしないで勉強しよう。

そう思って本を開いても、いつのまにか、本棚の方を、虚ろな目でふっと見つめている自分に気がついた。

上から何をかぶせても、隠しても、確かにそれは、そこに存在していて、アンゲルに何かを語ろうとしていた。

知りたくもない、重苦しい何かを。

4 - 3 エレノア フランシス ケンタ リハーサル

エレノアは今まで、旅芸人の親と共に、数か月おきに違う街を回る生活をしてきた。そのせいも、何カ月も同じアルターの同じ学校で、同じ人間と毎日顔を合わせる……という生活に、なかなかなじめなかった。

人を避けて、一人で行動したいと思うのだが、フランシスはかまっつてあげないと機嫌が悪くなるし、姫君クーと一緒に来て来ると『近寄るな!』とは言いにくい。

音楽科の帰り道に、できるだけ、通ったことのない道を選んだり、道のない林や藪の中を通ってみたり、変化をつけようとしているのだが、それくらいでは倦怠感をぬぐえそうになかった。

ブースの中で一人で歌っている時が、一番気楽で、楽しい。でも、練習を終えてブースを出たとたん、音楽科の生徒たちの、敵意に満ちた視線を感じる……。

エブニーザはあいかかわらず気になる。

でも、向こうがエレノアを気にしている様子は全くない。

そもそも何にも興味がなさそうだ。

そして、アンゲルはいつも同じカフェの同じ場所にいる……。

お金がないと言いながら、ほぼ毎日カフェにいる。

なぜだろう？

やはり自分を待っているのだろうか？

エレノアは、図書館のカフェの前を通るたびに、アンゲルに声をかけようか迷う。かけるときもあるし、かけないこともある。

せっかくアルターの学校に来たのに、知り合った友人がみな、とてもうつとおしく思えることがあった。

もともと優しい性格のエレノアは、そんな自分が理解できずに戸惑っていた。

そういえば、父と母はどうして、ずっと一緒にいられるんだろう？

何十年も、同じ誰かと一緒にいる、ということが、急に不思議なことに思えた。

両親、曲芸師で、猛獣使い。

全くけんかなんかしない二人。

どちらも芸人だからだろうか、なんでも笑い飛ばして芸のネタにしてしまう。

そんなことより、フェスティバルは明日なんだから……。

エレノアが今向かっているのは、フェスティバルのリハーサル会場だ。この日のためだけに組み立てられた特設ステージで、音響や舞台装置の担当者が動き回っているのが、遠くからでも見える。

上の席に、フランススらしき白いドレスの女性が見えた。

たしか、双眼鏡で上から見ると言っていた……。

「あー来た来た！こっちこっち」

演出担当者がエレノアを見つけて、両手を大きく振った。

他の出演者であろう、楽器や譜面台を持った学生が何人も集まっていたが、やはり、エレノアを見る目つきは冷ややかだ。

順番に歌って、マイクや楽器の音量、バランスを調整する。

エレノアは最後に歌うので、他の出演者の歌や演奏をひととおり聞いたのだが、やはり選考を通過しただけあって、みんなプロの水準に近い演奏だった。

できる人は、いくらでもいるのよね、世の中には……。

ぼんやり考えているうちに順番が回ってきて、エレノアが歌いはじめた。

あれ？

音が小さい？

エレノアはマイクを口元に近づけたが、何も変わらない。異変に気付いたのはエレノアだけでなかった。

「おい、マイクの電源入ってないぞ！」

運営が機械担当に向かって叫んだ。

「ちやんとつながってますよ」

機械担当と、歌い終わった何人かの学生が、意地悪くにやにやしていた。

遠くの席で、フランシスがその様子をじっと見守っていた。

……何？機械の故障？運営ってそんなにお粗末なわけ？

そのころ、裏口からこっそり入ってきたケンタ・タナカは、ステージにつながっているケーブルのまわりに、見覚えのある先輩が何人が集まっているのを発見した。

「ざまあみるって」

全員、ニヤニヤとあくどい笑いを浮かべている。

足元のケーブルは、引き裂かれていて、中の線がぐにゃぐにゃと曲がり広がっていた。

いじめも、ここまでくると犯罪だなあ。

ケンタは、呆れながらその場をあとにして、遠くからエレノアを観察する。明らかに困っている様子だ。

……マイク、直らないの？

しばらく歌っていたら直るのではないかと、エレノアは期待していたのだが、いっこうに電源が入る気配がない。

……仕方ないわ！！

エレノアは、発声の仕方を変えた。

歌には合わないが、オペラのような奥からの発声で、ありったけ大声を張り上げた。

訓練を積んでいないと、絶対に出せない響き。

エレノアの声は、会場全体に届いた。

ケーブルを切っただけで安心していただいていた先輩たちは、ぞっとした顔で、ステージの上のエレノアを凝視していた。

フランシスにはやけながら手用の用紙に『エレノアの声はマイクなしでも、大きな会場の最後列まで届きます』と書きこむ。

そこには『新人オーディション、エントリーシート』と書いてある。

「マイク、いらなんじゃない？」

運営が話しているのが、歌っているエレノアにも聞こえた。

「すっげえ〜」

会場の隅で、ケンタが、驚愕と歓喜の顔でステージのエレノアを見ていた。

その後ろに、いつもエレノアのとをつけ回している男もいるのだが、ケンタは気付いていないようだ。

4 - 4 アンゲル コミュニティにからまれる

そのころ、アンゲルは道の真ん中で、管轄区のコミュニティメンバーにからまれていた。

「どうして顔を出さないんだ」

「いや、あの、アルバイトが忙しくて、働かないと生活できないし敷地内に教会があるのは知ってるんだらう？」

「そうなんですか？どうもイシュハの教会ってうそくさくて行く気がしないんですね」

「明日のフェスティバルで布教活動しよう」

他の質問は適当にかわしたが、これにはアンゲルも困ってしまっ

た。「友達の手伝いがあるので！それじゃ！」

てきとうに言い放って、最後には走って逃げた。

「冗談じゃない！！」

楽しいはずのフェスティバルで、そんな陰気なことをさせられてたまるか！

アンゲルは心の中で叫んだが、かといって、フェスティバルで何かやることがあるのかと言われると『何もなし』ことに気がついた。部活動も何もしていないので、アンゲルには所属先がない。そんなことをしている余裕がないからだ。実際、明日もアルバイトがあるので、エレノアのコンサート以外はほとんど見ることができない。

サッカーチームに入ったら、行くところはあつたんだな……でも、そんなことのためにここに来たわけじゃない。

しかし、イシュハの学生は楽しそうだ。

フェスティバルは、自分の作品を発表したり、出店で稼いだり、友達を作ったり遊んだりする格好の機会で、余裕のある学生にとつては年に一度の楽しい日だ。

こっちは勉強とアルバイトで手一杯なのに……。

考えれば考えるほど空しくなってきた。

やめよう。帰ろう。勉強しないと……。

アンゲルは、必死に自分にそう言い聞かせたが、一度頭にまとわりついた憂鬱は、なかなか去ろうとしなかった。

4 - 5 フェスティバル

フェスティバル。

風船とか、意味のわからない言葉が描いてある紙吹雪とか、そんなものが視界をかすめて飛んでいく。

出店には、祭りのとき以外絶対だれも買わないような、色のおかしい食べ物がたくさん並んでいて、仮装という名の自己主張を楽しんでいる変な格好の学生が、思い思いの方向に歩いている。

残念ながら、そんな光景のほとんどは、アンゲルには縁のないものだった。

行くところがないな……。

「何が楽しいのかさっぱり分からない」

エブニーザが、いつのまにか隣に立っていた。アンゲルは驚いて飛びのいた。

「何だよ！？おどかさなよ！」

「エレノアの歌を聞きに行くんですよね？」

「だから何」

「僕も行くんです」

「だから？」

「だからって……一緒に行きましょう」

「一人で行けば？」

アンゲルはエブニーザを置いて逃げようとしたのだが、エブニーザはしつこくアンゲルについてきた。そして、まわりの学生が笑い声を上げたり、何か大きな音がするたびに怯え、泣き出しそうな顔をしたので、アンゲルは仕方なく一緒に歩くことにした。

途中で、楽しそうに歩くカップルとすれ違った。

ますます気分が悪くなってきた。

どうして俺は、よりによってエブニーザと、こんなところを歩かなきゃいけないんだ？

「ヘイゼルはどこに行つたんだ？」

「たぶん、VIP席に入つてると思いますが」

「そんな席あんの？」

不機嫌が頂点に達した時、前方に、黒い服を着た学生の集団が見えた。

管轄区のコミュニティの集団だ。

布教活動のためのピラとプラカードを持っている。

「やばい！逃げるぞ！」

アンゲルは彼らに背を向けて、全力疾走でその場から逃げ出した。

「えっ！？」

エブニーザも慌てて走りだしたが、何が起きたのかよくわかっていないようだ。

さんざん走りまわって、二人が会場についた時、歌のステージはすでに始まっていた。

ステージ裏では、エレノアが出番を待っていた。

何組かの先輩が歌い終わって、出番が近づいて来るのを感じるたびに、足が震えた。

今までこんなことなかったのに……アケパリでも、ノレーシユでも、ほかに、色々な街で、もっと多い人数の前で、平気で歌ってきたのに……どうしてこんなに怖いんだろう？やっぱり、音楽科の人たちの冷たい視線のせい？

エレノアは、演奏中のヤジや中傷には慣れていた。旅芸人ならみんな慣れっこだ。

しかし、長い時間をかけていじめられるのは、ここに来てからが初めてだ。

敵意がある人間が確実にいる、そんな場所で歌う。これもエレノアには経験のないことだった。

大丈夫よ。大丈夫。

エレノアは目を閉じて深呼吸した。

練習はちゃんとした、準備もできてる。マイクがなくてもちゃんと歌えたじゃない。

「エレノア！スタンバイして！」

運営の学生がエレノアを呼んでいる。

エレノアは深く息を吸うと、ゆっくりと、舞台に向かって歩いて行った。

エレノアは、自作の曲を素晴らしい声で歌いあげた。その声は、皆の想像をはるかに超えていた。誰も聞いたことのない音色が会場を満たした。

エレノアは、歌っている間も怖くて震えていたのだが、誰もそんなことには気がつかなかったに違いない。観客はみな、それぞれにまるで違う世界に引き込まれてしまって、エレノアの姿など見てはいなかったのだから。

歌が終わわり、エレノアが一礼した時、会場は驚きと歓喜の拍手に包まれた。

観客席にいたアンゲルは、衝撃を受けていた。

まさか、こんなにうまいとは思わなかった……まるで、昔学校で聞いた、ソプラノ歌手のレコードみたいじゃないか。こんな天才だったのか……きっと、あつというまに有名になってしまう……。

アンゲルは、急にエレノアが遠くに行ったように感じた。

ふと隣を見ると、エブニーザがエレノアを見上げて、心底から嬉しそうな顔をしていた。まるで遊園地に初めて来た子供のようだ。

それを見て、アンゲルはますます不安になってきた。

そういえば、こいつ、文学とか芸術好きそうだからな、きっと音楽も好きなんだろうな、きっとそうだ、別にエレノアが好きかわけじゃないだろう……。

自分に言い聞かせていると、

「複雑そうですね、エンジェル氏」

例の変な口調が聞こえてきた。後ろにヘイゼルが立っていた……が、見るからに眠そう。目が半分閉じているし、いつものおもしろがっている雰囲気がない。

「何だよ、その変な顔は」

「なんでだろうなあ、眠いんだ。昨日は10時間以上寝たんだがなあ……」

「……寝過ぎだろ？」

フランススが、そんなヘイゼルを、高い位置にあるVIP席から双眼鏡で観察していた。

今年はじゃないのね、珍しいわね……不気味なほど大人しいわね。

そして、本日の主人公であるエレノアは、楽屋に入ったとたん、疲労と脱力で床に座り込んでしまった。しかし、休む間もなくすぐに『わかファン』の対応に追われることになった。『あんなにうまいとは思わなかったわ』『今日初めてあなたの歌を聞いて感動しました』という客が、次々と楽屋に押しかけてきたからだ。

「素晴らしい才能ですね……ファアア」

あくびをしながらやってきたのは、ヘイゼルだった。眠そうな顔でエレノアにチョコナッツ（なぜコンサートにこんなものを？とエレノアは思ったが、顔には出さなかった）を差し出したが、

「悪いけど、強烈に眠いんでね、帰るよ。あとでワインでも送ってくからご令嬢と飲むがいいさ……ファアア……」

あくびをしながら楽屋を出て行ってしまった。

エレノアは、前にエブニーザが図書館で言っていた『黒魔術』の話思い出した。

まさか……本当に？

疑問に思ったのだが、花束を持った人がつきつきと楽屋に入ってきて、口々に歌をほめたたえたので、そんなことは忘れてしまった。「ごめん、何も持ってこなかった」アンゲルが済まなさそうな顔で

入ってきた。「でも、すごかったよ。こんな天才だとは思わなかった」
「天才じゃないわ。練習したの」

エレノアが笑った。
「ああ、かわいいなあ……でも、いつか、遠い存在になってしまうのかな。」

花くらい持つてくるんだ……何も考えてなかったな。

「エブニーザが、すごく嬉しそうな顔で聞いてたよ」
「本当に？」

エレノアが真っ赤になって喜ぶ。アンゲルは余計に不安になったが顔には出さなかった。

ノレーシュの姫君クーが、大きな花束を抱えた従者とともにやってきた。

「あら、エブニーザは来てないの？」

「お前もエブニーザか！」

アンゲルはますます嫌になってきた。しかも、エレノアとクーは、エブニーザがかわいいとか、天使みたいだと話し始めたので、気まぐずになったアンゲルは、

「夕方からバイトだから」

と言つて、その場を後にした。

「かわいそう」アンゲルが出て行ったとたん、クーがわざとらしい声をあげた。「アンゲルってぜったいあなたに気があるわぁ」

「クー……」

客がようやく来なくなったところ、ケンタが入ってきた。

「花はもうあふれてるみたいだから」と楽屋を見回しながら、特殊な材質でできたギターのピックを二枚差し出した。「音の抜け方が違うよ」

「ありがとう」

エレノアは微笑みながらピックを受け取った。

そういえば、音楽科でここに来たのはケンタだけだ……。

「やっぱすげえな、エレノア」

ケンタはそう言って笑うと、すぐに去ろうとしたが、入口でふり返り、

「この前つけてきた男が、ハイゼルと話してるのを見たよ」と言った。

「本当？」

「つけてきたって何？」

クーがエレノアの方を見た。エレノアは不安げな顔をした。

「今度、あれは誰だつて聞いてみたら？」

ケンタが去った後、クーが怪訝そうな顔でこう言い始めた。

「今の男もあなたに気があるわね」

「誰にでもそう言うのね、クー……」

「これから歌姫を奪い合うのよ……やっぱ事実つて、小説より面白いわぁ」

楽しそうなクーに、エレノアはただただ呆れた。

改めて楽屋を見回す、花でいっぱいになっている。

フェスティバルは終わった。

エレノアにとっては大成功だ。リハーサルの時のような妨害もな

かった。自分の歌を聞いて、感激した人々が楽屋におしよせてきた

……これ以上の成功なんてあるだろうか。

そうだ。やっぱり私は歌うために生まれてきたんだ……。

エレノアは物ごころついた時から、人前で歌ってきた。旅芸人の前で、サーカスのテントに集まった観客の前で、地方の小さな、あるいは、劇団のための大きなステージで。そして、その度に喝采を受けてきた……。

でも、今回ほど不安だったことは一度もなかった。

親と一緒にだったし、子供だったから、どこかで甘えていたんだわ

……もう、一人でやっていくしかないのね。

「どうしたのエレノア、しぶい顔しちゃって」

「えっ？」

クーが心配そうに自分を覗きこんでいる……エレノアは急に我に

返った。

「なんでもないわ」

そういえば、エブニーザも聞きに来てた……ヘイゼルが元気なさそうだったけど、まさか、本当に黒魔術をかけたわけじゃないわよね？

「お祝いしようよ」クーがドアを開けてエレノアを手招きした
「今頃、フランススがワインと料理を運ばせてると思うわよ」

「ワイン？」

「パーティよ、3人で」

もう、休みたいんだけどなあ……。

エレノアは困ったが、フランススが準備しているのを断るわけにはいかない。それに、こういうお祝いができる機会なんてめったにない。

ま、いいか。

エレノアは、つとめて上機嫌な顔で、クーと共に楽屋を出た。

4 - 6 アンゲル ヘイゼル エブニーザ クー フェスティバル後

アンゲルが部屋に戻ると、ヘイゼルがソファでぐったりと寝込んでいた。

「自分の部屋で寝るよ！」

アンゲルが怒鳴ると、ヘイゼルがとつぜん目がさえたように飛び上がった。

「耳元で怒鳴るな！」

「ここは俺の部屋だぞ！」

「まだ言ってるのか!？」

二人が言い合っているところに、エブニーザが部屋から出てきた。「図書館に行きます」

とだけ言つて、二人を止めずに部屋を出ていった。

「こんな時間に図書館？」

「勉強したいんだろ？誰もがお前みたいに遊びたいわけじゃないんだよ、ティツシュファントム！」

「ティツシュファントムじゃない！シュツティファントだ！」

「大して変わらないだろ！」

「全然違うだろうが！」

ヘイゼルは完全に目が覚めてしまったらしい。そして、アンゲルも機嫌が悪い。

言い合いは深夜まで続いた。

エブニーザは、いつもの資料室で薬草辞典（シュタイナー邸に同じものがあつたが、ヘイゼルに没収されて最後まで読めなかった）を眺めていた。

そこにクーが現れた。衣装は美しいが、疲れた顔をしている。

「フランスとパーティじゃないんですか？」

「どうしてそんなことを知ってるの……ああ、そうだ、予知ね？」

エブニーザは黙ってうなずいた。クーは向かいの席に座り、つぶやいた。

「フランシスは飲み過ぎて眠っちゃったし、エレノアは疲れてるみたい」

エブニーザがお気に入りのレモングラスの話を始めると、クーは「ハーブティーは嫌い。歯磨き粉の味がするから」

とそっけない返答をした。そして、エブニーザにこう聞いた。

「エレノアの歌を聞いていたでしょう？才能があると思わない？」

「思います」

「美しいと思わない？」

「思います」

クーはどこかさみしそうな笑みを浮かべていた。

「どうしたんですか？」

「何でもないわ。エレノアがうらやましいだけ。美しくて、自由に、

強くて……」

4 - 7 エレノア フランシス ヘイゼル フェスティバル後

フェスティバルは成功したが、エレノアはあいかわらず、同じ音楽専攻の学生に妬まれたり、いやがらせをされ……フェスティバルの前よりも、さらに孤立してしまった。

「才能がある人は試練も多いのよ」

クーがそんなエレノアを、愛しげな表情で慰めた。エレノアは、クーの、優しいながらもあやしい笑顔とその手つき（やたらにエレノアに触る）が気になった。

どうしていちいち触るんだろう……ノレーシュの文化にそういうのあったっけ？

寮に戻ってから、フェスティバルの写真を見ると、歌っている自分の姿が、知らない他人のように見えた。フランシスに作ってもらったドレスのせいかもしれない。

私って、着飾ると美人に見えるんだわ。アンゲルが私に好意を持っているのは、単にきれいな娘だからっていうだけかも。中身まではきつと見ていないんだわ。

エブニーザはいつも怪しげな本に夢中で、あまり人と話したくない様子だ。エレノアにも興味がなさそうだ。

そこで黒魔術のことを思い出す。眠そうなヘイゼルの事も。

あれは本当に？それとも偶然？

横ではフランシスが、ヘイゼルに電話をしていた。かなりきつい口調で。

「エレノアをこっそりつけまわしてる変な男が、フェスティバル会場であんたと話してたって言うんだけど、誰か知ってる？」

「フェスティバルの会場？あの麗しく空気の悪いVIP席じゃなくて？」

「普通の席の方よ」

『普通の席……話したのはアンゲルと、シギだけだな』

「シギ？」

フランスはそこで電話を乱暴に切り、エレノアに向かった。

「エレノア、もしかしたらシギ・クオンタンかもしれない。シグノ
ーほどじゃないけど、金持ちの良家よ。ただ、ヘイゼルの手下だけ
あつてろくな性格してないけどね」

エレノアは驚いた。

ヘイゼルの友達？

「でも、狙い目よ。最近多いうさんくさい成金じゃなくて、ちゃん
とした実業家だから。紹介してあげましょうか？」

ニヤニヤするフランスにエレノアは、

「やめてよ……」

と困り果てて、嫌な顔をした。

どうして自分の周りには、変な人ばかり集まるのだろうか？

数日後。

エレノアが図書館の資料室を覗くと、エブニーザが、こんどは古代の鉱物事典を熱心に読んでいた。

「古代には、宝石に魔力があると知られていたんですよ。薬みたいなのに、使い方が書いてあるんです」

あいかわらず本から目を離さず、無表情だ。

「宝石……あまり縁がないわ」

「そんなことないでしょう。こないだもピンク色のトルマリン……」

エブニーザはそこまで言って言葉を切った。

「トルマリン？何の事？」

「何でもありません」

エブニーザは本から視線をそらし、窓の外を見つめる。エレノアも窓を見るが、特に変わったものは見えない。

「どうしてこんなものに興味を持ったの？こんな、天使みたいな顔してるのに」

エレノアがそう言うと、エブニーザはとたんに不機嫌な顔になった。

「どうしてみんなそういうことばかり言うんですか？顔だけ見てあとを追いかけてきたり、騒いだり妬んだりする。それは僕自身とは何の関係もないことなのに……」

最後の方は小声でぶつぶつとつぶやいていた。

かなり根暗な性格だな、とエレノアは思ったが、自分も思い当たる節があったので、

「私も、歌を聞いてもらいたいのに、顔ばかり見られて困ってるの」と言った。そして、旅先で追いかけてきた男たちの話（私が好きだっていうくせに、私の歌なんかまじめに聞いてないのよ！）をした。

「私は歌手なの。歌いたいの。歌を聞いてほしいの。顔を売りたいわけじゃないのよ」

「そうですか」

エブニーザはあいかわらず無表情だが、何か考えているようにも見えた。

外は曇っている。

「雷が来ますよ、帰りましょう」

エブニーザが立ちあがった。二人で一緒に図書館を出た。

エレノアが寮の部屋に着いた時、突然、夕立のざあっという音と共に雷鳴がとどろいた。

「ほんとに、雷が……」

エレノアが窓から外を見た。街全体が薄黒い雲に覆われていた。黒魔術のことを聞き忘れた！と思いだしたが、遅かった。

4 - 9 アンゲル クー エレノア エブニーザ カフェ

アンゲルは、授業で受けた心理療法の最中に具合が悪くなってしまった。管轄区の学校に通っていたころの悪い思い出が、頭の中を駆け巡ったのだ。

「どんな思い出かと言うと、なんのことはない、初恋の女の子に『カエルみたいな顔』と言われてシヨックを受けた、それだけの話だ。こんなことでシヨックを受けるなんて、ばかばかしい……。いつの話だよ？」

何年も前だし、今はあんな奴の事は何とも思っていないんだぞ？
何でそんなことでふらふらしてるんだよ？バカじゃないのか？

廊下をふらふらと歩きながら、アンゲルは自分自身を盛大にけなしていた。

俺でさえこうなんだから、エブニーザが昔を思い出したら、シヨックで倒れてもおかしくないな。監禁されてたんだから……。落ち込んだまま道を歩いていると、

「あら！あなた！エレノアの友達でしょ！」
どこからか声がした。

見ると、黒塗りの車の前に、いつかエレノアと一緒にいた、褐色の肌の女性が立って、手を振っていた。

フェスティバルで見たな……。ノレーシユの姫君か！

アンゲルは、どんな態度を取ればいいのかと迷った。しかし、姫君は運転手に『行って』と言い、にこやかにアンゲルに近づいて来た。

「ちょっと話をしましょうよ」

姫君クーが、いつもとは違う、第三校舎の裏にあるカフェを指さした。黙ってついて行くことにした。

「不思議に思っ」

席に着くなり、姫君は楽しそうに喋り始めた。

「ほら、シュツティファントはイシュハでは大物、エブニーザはあのシュタイナーと関係がある、でも、あなただけ、そういう後ろ盾がないでしょう？どうしてあの二人と対等にやっけていけるのかと」「対等？」

自分には合わない単語が出てきたので、アンゲルは大声を上げた。「冗談でしょう？ヘイゼルは常に俺を見下してますよ？あのティツシュフアントムは、世界のあらゆる人間をバカにしていますよ！この前だって俺あての小包を勝手に開けて、中身を食ってたんですよ？常識がないんですよあのティツシュフアントムには！！」

「ああー、それね」

クーが勝手に何かを納得したような、深い声を上げた。

「それ？」

「ヘイゼルにもそんなふうにはつきりとした口を聞いている？」

「え？ええ、たぶん……」

「だからだわ」

「どういう意味ですか」

「私もそうだけど、いかにも『偉いお方に会えて光栄です！』なんてふうには、にこにこしながら近づいて来る奴が嫌いな。こびへつらうっていうのかしら？たぶんヘイゼルもそうなんじゃないかと思っ」

「へえ……」

「エレノアは好き？」

「えっ？」

アンゲルが真っ赤になった。

「ふふふ、かわいい反応ね」クーは面白がって笑い、大人ぶった顔で立ちあがる。「もうすぐエレノアが来るから、話でもしたら？あ、そうそう、私に敬語は使わないで。不愉快だから」

最後の一言は、かなりとげのある言い方だった。きっとアンゲルが控えめに丁寧な言葉を使ったのが気に入らなかったのだろう。

呆然とするアンゲルを置いてクーがカフェを出ると、ほぼ同時に

エレノアが入ってきた。

「クーと待ち合わせをしていたんだけど……」

アンゲルがエレノアに事情を話すと、

「最初からこういうつもりだったのね……クーは人をからかうのが好きなのよ」

と困った顔をした。その顔がとても可愛いとアンゲルは思った。

「一国の姫君をクーなんて呼んでいいのかなって迷ったんだけど、『姫様』扱いされるのも嫌なんだろうな」

「そうね」

せっかく姫君が用意してくれた席だったのだが、あまり話は弾まず、アンゲルはバイト、エレノアはブースで練習、と言い訳して、その場を離れた。

本当はどちらも、まっすぐ寮に帰ったのだが。

アンゲルがソファーで勉強していると、エブニーザがやってきて、「エレノアは歌を評価してもらいたいですよ」

と突然話しだした。

「は？」

「歌手として認められたいんです。きれいだとかかわいとか言われたいわけじゃないんです」

「ちよっと待て、何の話？」

「あの……アンゲルには言っておいた方がいいと思って……」

何か言いにくそうな様子だ。

きっと俺がエレノアに気があるのを知ってて、そういうことを言うんだらうな。

そう考えると、たまらなく腹が立ってきた。

「何で？」

アンゲルの口から、必要以上にきつい声が出た。

「何でって……」

「勉強の邪魔すんな」

アンゲルは本に目を戻した。

エブニーザは落ち込んだ様子で部屋に戻り、そーっとドアを閉めた。

4 - 10 エレノア クー ケンタ 音楽科のブース

エレノアは、音楽を専攻する人が全員受けるプレテストのために、歌の伴奏を弾いてくれる人を探したが、どの学生にも断られてしまった。

本格的にみんなに嫌われてる……。

そう落ち込んでいるエレノアに、なんと、クーが、

「ピアノなら、ここの学生より上手く弾けるけど？」

と言いだした。

「余計に大きな話題になって妬まれるわよ。姫君とステージなんて」「フランシスは、口ではそう言ったが、顔つきは明らかに面白がっているようににやにやしていた。

結局クーに伴奏を頼むことにして、二人でピアノがある防音室を借りて練習を始めた。

エレノアはクーのピアノを聞いて驚いた。

なんだかすごく、感情のこもった演奏をするのね……？

クーの弾き方は、情熱的で、音色が豊かだった。確かに、下手なピアノ科の学生に頼むよりはよっぽど上手いだろう。

クーはあいかわらず、曲の合間に、

「アンゲルとはどうなの？」

「いままで一番いい男が多かった国ってどこ？」

「男と寝たことある？」

などと、とんでもない質問をして、妖しい笑顔をうかべながらエレノアの肩や髪をなでまわし、真っ赤になって慌てるエレノアをかかって楽しんでるようだった。

クーは、前から人の肩や髪によく触ってきたが、どんどん、触る場所が、胸の近くや腰など、きわどい場所になってきたため、エレノアはどう止めたものか悩んでいた。

つまり、練習に全く集中できなかった。

しばらくして、ブースのドアをノックする音がした。
ケンタだ。

「ちょっと話があるんだけど」
と、エレノアを廊下に連れ出したケンタは、心配そうな顔でこんなことを言った。

「アケパリのメディアによると、あの姫君はレズビアンだって話だけど、二人きりで大丈夫なの？」

「えっ？」

エレノアは驚きで思考が止まってしまったが、すぐに気を取り直して、

「と、友達だから大丈夫よ」

と返答して中に戻った。

しかし、クーにあの愛しげな笑顔を向けられ、練習中はまた肩や髪を触られ……疑惑はふくらんでいく。しかし『プライベートなことだし……』と、直接本人にたずねることができなかった。

となりのブースからケンタのすさまじい早弾きギターが聞こえてくると、クーが手を止めて、感心したようにこう言った。

「わあ、ロツクね。もしかして天才なんじゃない……だからあなたに惹かれたのかも、天才どうし」

「クー……」

「でも、アンゲルよりはお似合いだと思うけど」

「クー！違っちゃってば！そういうのじゃないの！二人とも友達！」

エレノアは怒りだし、クーは、

「怒った顔も可愛いのね……」

エレノアのほおを指で突っついて、さらにからい始める。

エレノアは、ますます歌に集中できなくなってしまった……。

4 - 11 アンゲル 王様 クラウス ソレア ある一日

アンゲルはカウンセリングを受けることにうんざりし『やっぱり心理学なんて取るべきじゃなかったかも……』と思い始めた。

そのことを講師に相談すると、

『実際にクライアントと話すところを見ないか？』

と誘われ、プロのカウンセラーの面談をミラー越しに観察することになった。

アンゲルが見たカウンセラーは、以前エブニーザが試験を受けるときについてきた二人の女性のうちの一人だった。クライアントはかなりやつかしい相手で『あなたに相談することなんか何もないわよ！』とひたすら文句を言うばかり。一体どうするつもりなんだろうとアンゲルはじつと話を聞いていたのだが、結局、この日は相手に言いたいだけ文句を言わせるだけに終わった。

「あのクライアントは今日来たばかりだからね、慌てて事態を変えようと無理矢理こちらから話をしてもダメなんだよ」

講師にそう説明されたが、アンゲルは何か納得できないものを感じた。

それから『わずかだが給料が出る』という文句に惹かれて、精神病の患者が通う作業所の『見張り』のような仕事を頼まれた。

「逃げようとする患者がいたら、つかまえるんだ。でも、乱暴なこととはしちやいけないし、怒鳴りつけてもいけない。話を聞いて、なだめて、連れて戻るんだよ。けっこう難しいよ？」

アンゲルは好奇心から引き受けたが、何時間経っても、特に逃げ出そうとする患者もいない。

みな、暗い顔ではあるが、黙々と作業をこなしていた。彫刻だったり、家具を作っていたり、何か書いていたり、あまり生産的な内容ではないが、熱心だ。

木を削っていた中年の患者が、アンゲルに話しかけてきた。

「あんたは留学生かね？」

「そうですよ」

アンゲルが普通にそう答えると、男は急に顔をアンゲルの耳に近づけ、

「わしは本当は、東の国の王なのだが、事情があつてここにかくれているのだ」

とささやいた。

「？」

何の事だろう？

その『王様』は、長々と、不幸な身の上を話し続けたが、説明にまるで脈略がなく、どうやら『勝手に思い込んでいるだけらしい』ことが、アンゲルにもわかった。

てきとうに話を合わせて聞いていたが、ふと、エブニーザの妄想の女を思い出し、

「俺の友達に、こういう奴がいるんですけど」

夢で見たという女の話してみると、なんと『王様』は、真面目な顔で、

「ああ、そりゃあ妄想だよ」

と、断言した。

「そう思いますか？」

アンゲルは『おい、自分はどうなんだよ！？』と叫びたくなつたが、黙っていた。

「きつと寂しいんだな。誰も相手にしてくれないからさ。きつと友達も彼女もいないだろう、そいつには」

「はあ……」

『王様』はそう言うと、自分の作業場に戻って、また木を削り始めた。

自分の妄想は棚に上げて、他人にはあっさりそんなことを言うとは……。

でも、そつだよな、やっぱりエブニーザも妄想を抱いてるな。や

つぱり精神病なんだろうか？ここで作業させるか？でも、これって治療になってるんだらうか？何のための作業なんだろう？

予定の時間が過ぎた後で、アンゲルが担当の医師に尋ねると、「生活リズムをくずさないようにするために、来てもらっているだけ。作業の内容はあまり関係ないよ」

という答えが返ってきた。

その帰り道でのことだ。

アンゲルは図書館の近くで、同じく管轄区から来たという生徒に声をかけられた。

またフアナティ教の話をするのか……。

とうんざりしたが、その生徒はこんな質問をしてきた。

「君はアニタ教に改宗したのかい？」

「えっ？いや……してないよ」アンゲルはその質問に驚いた「何で？」

「だって、君はすごく自由に見える」痩せた、青白い顔の学生がそんなことを言った「管轄区から来た連中とはぜんぜん違うよ。重苦しさが全くない。本当に改宗してないの？」

「してない」

そんなこと、考えたこともなかったな……そういう選択肢もあったか。

「シュツティファントとつきあうと必ず改宗させられるんだろ？」

「ハア？」またしても思いがけない質問だ「そんな話聞いたことないし、ヘイゼルは宗教の話なんてしないよ」

学生が驚いた顔をした。

「破門されてない？」

破門とは、教会が言い渡す最高刑のようなもので『お前は人間ではない』と言われるのと同じ意味である。主に、殺人罪や、教会侮辱罪の被告人に言い渡される。教会に入れなくなり、社会復帰の機会もまず与えられない、社会的な死刑である。

……ただし、管轄区内でだけ有効だ。最近では、気にしない人は全く気にしないという話もある。

「されるわけないだろ！」

アンゲルが怒ってその場を立ち去ろうとすると、その生徒はあわててアンゲルを引きとめて、

「実は……改宗しようと思ってるんだ、アニタ教に」と言い始めた。

アンゲルが驚いて振り返ると、学生の顔は深刻そのものだ。

何か嫌な予感がしたので、アンゲルは彼を図書館の隣のカフェに連れて行き、話を聞くことにした。

学生はクラウスという名前前で、アンゲルが住んでいたところより、さらに田舎の出身だった。

「女神がどこかに存在しているなんて、どうしても信じられないんだ」

話を聞いているうちに、自分と同じように、管轄区の価値観や、女神フアナティ信仰に違和感を抱いていることがわかった。

クラウスは延々と、祖国の暗い生活や、両親や友人と意見が合わずに孤立していること、普段考えている哲学的なこと（アンゲルにはなんのことだか理解できない内容だったが、とりあえず悩んでいるということとは伝わった）を、延々と話し続けた。

いつまでも話が終わりそうにないので、アンゲルは、

「週に一回、ここで話をしようじゃないか、ほかのフアナティ教徒には内緒で」

ということにして、その日は別れた。

しかし、自分の祖国に対する違和感を、改めて思い知らされてしまった。

こんな悩みをかかえたまま、心理学なんてやっていいの……？
時計を見ると、アルバイトが始まるまであまり時間がない。

あわてて駅に向かう。イシュハの街並みや、派手な広告を見回しながら歩く。

『信仰』なんて言葉自体、この町には存在していないように、アンゲルには思えた。

女神なんているわけないんだよな。いたとしても、信じなきゃいけない理由なんてあるか？酷いことばかり起きているっていうのに。そこで、アンゲルの思考に、つんざくような叫び声が入ってきた。屋根を直している時にも聞こえた。

夜眠るときにも聞こえた。地獄のような叫び声。

一生眠れないのではないかと思った。

そして映像。妹が飛ばされていく。屋根と一緒に。

アンゲルは頭を振った。

昔の話だ。過ぎたことじゃないか。

どうしてそんなことを、今頃、思い出さなきゃいけないんだ？

暗い顔でレストランにたどり着くと、今度はソレアが、

「彼女がいらないなら私と付き合ってよ」と言い始めた。

「なんで？」

「同じ商人の出だし……管轄区の男ってみんな退屈だけど、アンゲルはなぜか自由そうに見えるもの」

「まただ。」

『自由そうに見える』だつて？何の話だよ？

バイトしないと生活費が出せないし、学費だつてギリギリなのに、何が自由なんだよ？

「そんな理由で相手を選ぶな！」

いらいらしていたアンゲルが神経質な声で叫ぶと、

「ほかにどんな理由があるの？私たちは管轄区の間人よ？イシユ八人みたいになれとでもつきあえるってわけじゃないでしょ？」

ソレアが言っているのは、身分が同じでないと結婚ができないというあの『古臭い階級制度』のことだ。

……そんな話をこれ以上聞きたくない！！

「俺はこつちに勉強しに来たんだよ！」

「でも、どうせ帰ったらだれかと結婚させられるでしょ？」

「うるさいな！仕事しろよ！」

二人とも黙りこんだ。

厨房の料理人たちはあいかわらず、『またシュツティファントが……』という話をしている。企業買収の成功がニュースになっているらしい。

イシュハのニュースはいつだつて大げさで華々しい。株価の暴落で、国家予算と同じ額が消し飛んだとか、映画界の巨匠が亡くなって、借金が何億クレリン残ってたとか、新人女優の契約金が何千万クレリンだとか……。

エブニーザは、夢で、女の子が乱暴に扱われているのが見えたり、何かを思い出したりして、だんだん 発作がひどくなってきた。震えながら倒れたかと思うと、叫んだり、泣き出したり……。

アンゲルも、ヘイゼルも、適切な対処なんてできない。しかたなく、前のように事務に走って医者呼び、あとは寝かせておく……そんなことが何回も起きていた。

「やっぱり精神病んでるだろ、ちゃんとした病院に連れて行ったほうがいいんじゃないか?」

アンゲルがそう言っても、ヘイゼルは、
「寝てりやおさまるんだから、余計なことをするなよ!」

何を勧めてもはねつけて、聞く耳を持たなかった。

「カウンセラーに連絡した方がいいんじゃないか?」

「どうせ毎週会ってるんだからいいだろ」

「どうしてそんなにカウンセラーが嫌いなんだよ?」

「何も分かってないからさ!」

「どういう意味だよ?説明しろ!」

「俺は特殊過ぎてあいつらにはわかんないんだ!」

「はあ?」

話はいつも、こんな風に平行線をたどっていた。

ある日、ひとしきり泣き叫んだエブニーザが眠った後、二人がまた口論していると、廊下から歓声が聞こえてきた。

何かと思ってドアを開けると、なんとそこには姫君クーがいた。

透けたスカーフを幾重にも巻いてドレスアップし、妖精が迷い込んできたのかと思うほど清楚で美しく見えた。

そういえば、姫君なんだっけ。こういう格好しているとそれらしく見えるな。普段着だとわからないよな……。

アンゲルは何を言っているかわからず、無言でそんなことを考え

ていた。

「姫君、男子寮に一人で入ってきちゃ危ない、ちょっとした犯罪行為ですよ」

ヘイゼルがにやけながら、おどけた声で言うと、

「事務に許可はもらったわよ」クーは許可証をヘイゼルに突き付けた「エブニーザに会わせて」

呆然としている二人を無視して、クーはエブニーザの部屋に入つて、ドアを閉めた。

アンゲルとヘイゼルは、ドアにくっついて中の声を聞きとろうとした。

『また彼女なのね？』

クーが当然のことのようにそう言うと、エブニーザが弱々しい声で何か話し始めたが、声が小さすぎてよく聞こえない。

「なんでクーが妄想の女のことを知ってるんだ？」

「妄想じゃないって言うてるだろ。あいつら仲がいいから、しゃべっちゃったんじゃないか？女の方がこういう話は好きだろ？いかにも運命って感じで」

「そう？」

アンゲルは逆に、女性の方が現実的だから、そんな妄想は信じないのではないかと思つたのだが……。

「そういうエンジェル氏も、エレノアに運命を感じているようすぎな！」

「うるさい！ティッシュファントム！」

「ティッシュファントムって言うなあああ！」

また二人は言い合いを始めてしまった。

4 - 13 クー エブニーザ エブニーザの部屋

部屋の中では、クーがベッドの枕元に座って、エブニーザの額を撫でながら話を聞いていた。

エブニーザの話だと、夢の中の彼女が『とても言葉にできないような酷い行為』を毎日強要されている、泣き叫んでいるのが毎日見える、ということだった。

「それって売春？ 性行為じゃない？ あなたが見ているのは」

クーがはつきりとした声で言った。

エブニーザが目を見開いて、震えながらクーを見た。

クーは驚くほど静かな、怒りをたたえた目で、エブニーザを、いや、そんなふうにも人を貶める世界全体を、見おろしていた。奇妙な沈黙が二人の間に生まれた。絶対的な不幸と、そんな不幸を起こし続ける人間に対する怒り……。

「世界中で同じようなことが起きているわ。たぶんノレーシユでもね……許せないわ、絶対に許しがたい行為だけど……止めるのは難しいのよ」

「でも！ でも……ひどい！ あんまりだ……」

またエブニーザが泣き出したので、クーはエブニーザを抱きしめた。

「かわいそう……優しい子なのにそんな場面を見せられるなんてね」
外から、アンゲルとヘイゼルが言い争う声が聞こえてきた。

クーは鋭い目つきでドアを睨んだ。

「うるさいわね……いつもこうなの？」

「いつもこうです」

エブニーザがうつすらと笑ったのでクーは、

「案外、ああいうのがいたほうが気がまぎれるんじゃない？」
と笑った。

「でも、二人とも、僕を友達だとは思ってないですよ」

「どうして、そう思うの？」

「僕がおかしいから」

「おかしくない人間なんていないわよ。それに、あなた、あのヘイゼルがまともな人間だと思う？」

クーが、いかつい銀の指輪をはめた指でドアを指し示すと、外から二人の叫び声が聞こえてきた。

『やめろ！髪を引っぱるな！反則だぞ！』

『ケンカに反則もくそもあるか！』

そして、走りまわるバタバタという音と、何かが倒れる音。

『こら！やめろ！お前の辞書に常識って文字はないのか？』

『シュッティファントの辞書にそんなクソつまらん言葉はない！』

クーがエブニーザに、呆れたような笑いを向けた。

エブニーザもつられてうっすらと笑った。

4 - 14 アンゲル ヘイゼル 男子寮の部屋

ドアの外では、アンゲルが乱れた髪（数本ヘイゼルに抜かれた）に手をやりながら、怒鳴り散らしていた。

「お前の家の辞書をよこせ！全部書き直してやる！常識的に！」

「無理だ。さんざん探したが出てこなかった」

ヘイゼルがまじめに困った顔をして両手をひらひらさせた。

「は？」アンゲルは目が点になった。「探した？」

「探したさ。家政婦も使用人も総動員でな。でも、どこにもないんだ。シュツティファントの広大かつ利用者のほとんどいない書庫（高尚な無駄遣いだ！）もひとつとおり探したが、それらしきものは発見できなかった。台所も倉庫もひとつとおり、しまつてあるものを全部出して搜索したのだが……」

「おいおいおい、待て」アンゲルがあわててヘイゼルの話を止めた。「ほんとに辞書を探したのか？本気で見つかると思つたのか？それともただの冗談か？」

「冗談なもんか。小さいころから親父が、俺が何かするたびに『シュツティファントの辞書にはそんなこと書いてない』とか言いながら怒つたのだぞ？普通、どこかにあるに決まつてると思つたろ？実物を読んで確かめなければ気が済まないだろ？」

「……ヘイゼル」

アンゲルは、自分でも驚くほど低い声を出していた。

「何かな？」

「それは……ただの例えだああ！！！！」アンゲルが両手を震わせながら甲高い声で叫んだ。「本気で辞書を探すバカがどこにいるんだよ！あるわけないだろうが！」

ヘイゼルもこの叫び声には驚いたらしい、目を丸くして、体を少々後ろに引いた。

興奮しすぎて、しばらく肩を上下させながら荒い息をしていたア

ンゲルだが、

「……なあ、それ、ただ親父に嫌がらせしたかっただけじゃないのか？」

ふと、思いついたことを質問すると、

「違う違う。あんなくそ真面目な男に嫌がらせなんてしたって、無反応で面白くもなんともないだろ？嫌がらせというものは、エンジエル氏のように、リアクションの大きい人間に行ってこそ意味のあるものなのだぞ？」

ヘイゼルが白い歯を見せて、目を半月型にしてニヤリと笑った。心の底から、人をからかうのを楽しんでいる顔だ。

アンゲルは、手元のを、テーブルごと投げつけてやりたい衝動に駆られたが、必死で抑えた。相手と同じレベルに下がるのは嫌だったからだ。

「わかった、これからは何でも無反応で対応してやる」

「まあまあ、そう怒るなよ」ヘイゼルが調子のいい笑いを浮かべて、アンゲルの顔の前で手を振った。「どこかに辞書があるに違いないと思っただな、一週間みんなで館中を駆け巡って探したぞ。家中の家具という家具を全部移動して探したのだが、結局何も見つからなかった。もとに戻すのに苦労したよ。ちよつとした天災だったな」

「天災じゃなくて人災だろ！100%確実に人災だろお！！」

「まあまあ、落ちついたまえ……ああ、でも、もしかしたら親父の書斎にあるのかもしれない。書斎は探せなかった。あそこは親父と、巨乳の秘書しか入れないからな」

アンゲルは呆れて何も言えなくなった。そして、そんな間抜けな搜索に付き合わされたシュツティファントの使用人たちを、心から哀れに思った。

辞書をほんとに探すなんて、単純なのかアホなのか、わからないな……。

次の日、クーがエレノアに、エブニーザの発作のことを話した。ただし、女の子のことは黙っていた。話の内容が過酷すぎるからだ。

エレノアは『クーとエブニーザって仲がいいんだなあ……』とぼんやり落ち込んでいると、フランシスが大声を上げた。

「あなた、一国の姫君ともあろう人が、男子寮に一人で突入したわけ！？」

「何お堅いことを言ってるのよ。許可は取ったって言ってるでしょ」「私も連れてってよ！」

その発言にエレノアは驚き、クーは笑いだした。

「だって、そんなことできる機会めつたにないじゃない！」

「また発作起こしたらお見舞いに行く？」

「そんな言い方良くないわ」

エレノアが神妙な顔で言うつと、クーがショックを受けたように、

「そ、そうね、ごめんなさい」

と謝った。フランシスがそれを見て呆れた顔をした。

「なんで謝るのよ？いいじゃないの、今度何か起こしたら、三人で乗りこんでやるうじゃないの」

「あなたはヘイゼルの部屋が見たいだけじゃないの？」

「おだまり！クー！！」

そんなやりとりのあと、エレノアは歌の練習に行こうと寮を出た。しかし、ふと、思いつきで図書館に立ち寄ってみた。

奥に進むと、やはりエブニーザが、あやしげな辞典をいくつかテーブルに広げて、じつと何か考えこんでいた。

「それ何？」

話しかけると、エブニーザがエレノアの方を向いたが、無表情。

三つの辞典をそれぞれ指さしながら、平坦な声で説明を始めた。

「三つとも同じ呪術について書かれているんですが、手順がみんな違うんです」

エレノアが辞典を見ても、やはり読めない古代文字で書かれているため、内容がわからない。

「フェスティバルのとき、ヘイゼルが眠そうだったけど、あれもあなたか？」

「ほかに誰がいるんです？」

エブニーザがやりと、何かを企んでいるような顔で笑った。そんな顔もするんだ、とエレノアは意外に思った。

「これは何のおまじない？」

エレノアの質問に、エブニーザはむっとした顔をした。

「おまじないじゃありません。黒魔術です」

どう違うんだろう……？

エレノアにはよくわからなかった。

「雷を落とすんです、好きな場所に。たとえば戦争をしている相手の国とか」

「雷を落とす？」エレノアが懸念の顔をした。「そんなことしちゃダメよ」

「別に実行しようとは思ってませんよ」

「ほんとにできると思ってる？」

「ヘイゼルを静かにさせたでしょう？まだ疑うんならどこかに落としますか？雷を」

「ダメよ！」

「冗談ですよ」

エブニーザはそう言ったが、表情が険しすぎて冗談には聞こえなかった。

「それに、3つも違う手順がある、どれが正しいかわからないですからね」

「アンゲルが、あなたが未来を予想するって言ってたけど」

「予想じゃありません。見えるんです」

「見える？」

「まるで、目の前で起きているみたいに」

「映画のワンシーンみたいに？」

「映画……？」エブニーザは目線を上にあげて考えている。「見たことないです」

「えっ？」エレノアは顔を輝かせた。「じゃあ、一緒に見に行きましようよ……！」

エブニーザが急に怯えた顔になったが、エレノアは気がつかなかった。いつもなら表情の変化に敏感なエレノアだが、エブニーザと一緒に出かけられる可能性が出てきたため、急につきつきして、自分の考え以外に注意が向かなかったのだ。

「でも、人がたくさんいるところには……」

「学校より少ないわよ！」

「でも……」

「考えておいてね！」

そう言い残して、エレノアは嬉しそうな様子で走り去った。

エブニーザはため息をついた。

「そう言われるのは、もうわかってたけど……どうしよう」

エブニーザは未来を見ることができ……のだが、見えた事を回避することができないようだ。

4 - 16 アンゲル エブニーザ ヘイゼル 男子寮の部屋

エブニーザは寮に戻り、アンゲルに控えめな声で尋ねた。

「エレノアが僕に映画に行こうって言うてるんですけど……いいんでしょうか？」

アンゲルは目を見開いたまま、動きが止まってしまった。

同時に、ヘイゼルが口笛を吹きながら部屋から出てきた。ニヤニヤと笑いながら。

「聞き捨てならん話ですな！エンジェル氏」

「いや、別に俺に聞かなくても……」

「行けばいいじゃないか、お前が外に出たがるなんて珍しい。さすがエレノア、美人は違うな！」

「そうじゃないですよ！僕は行きたくない……」

「いいから行け！決定だ！」

泣きそうな顔のエブニーザに、ヘイゼルが強制的に命令を下した。アンゲルは『どうしてヘイゼルが決定するんだ？』と思ったが、

エブニーザとエレノアが仲良くなると考えるだけで、気が気ではなかった。

エブニーザは、

「どうせまた面倒なことが起こるに決まってるのに……」

とつぶやきながら部屋に戻って、そーっとドアを閉めた。

それと同時に、ヘイゼルがアンゲルに飛びついてきて、読んでいた本を奪った。

「5クレリン持つてるか？」

「なんだよ！本を返せ！」

アンゲルは本を取り返そうとしたが、ヘイゼルがソファアの下に隠してしまった。

「映画の代金だよ」

「何で俺が出さなきゃいけないんだよ！？」

「そうじゃなくて、俺たちもこっそり行こっつて言ってるんだよ」
「はあ？」

「いいかねエンジェル氏。あいつは、まともに一人で外出したことがないのだぞ。シユタイナーじいさんのところでは、図書資料室の一番奥の本棚の前からほとんど動かなかった。1年も！ここでも授業以外、ほとんど外に出てないだろ？」

「カウンセリングと図書館は？」

「それは別の話だ。とにかく、だれかと一緒に出かけるなんて、初めての経験なのだぞ。何を起こすかわからんだろ。保護者として見守る義務があると思わないかな？」

「お前一人で行けよ！俺は勉強が」

「エレノアがエブニーザと仲良くくっついてもいいのかな？」

「うるさいな！」

「素直じゃないなあ、エンジェル氏」

「うるさい！ティツシュファントム！」

「ティツシュファントムって言うな！！！！」

また二人で言い合いを始めた。その様子をエブニーザはドアにくっついて聞いていて、一人困り果てていた。

どうしてみんな、ほっといてくれないんだろっ……？

映画館。

エレノアはうきうきと微笑んでいて、頬がバラ色に染まっていてとても美しい。でも、エブニーザはまわりを気にしてきよるきよると落ちつかない。

と、視界の隅にクーの姿を発見。

エブニーザは、救いの神が来たかと思って周りを見回した。しかし、クーの姿はどこにもない。見失ってしまったようだ。

そのころクーは、ヘイゼルとアンゲルが、売店の近くにいるのを発見した。

「あなたたち、いったい何をしているの」

クーはジーンズにTシャツ、スウェットのパーカーと超軽装だ。

「これはこれは、ノレーシュの姫君がここで何をしているのかな？」

「それはこっちのセリフ」

クーはヘイゼルを見て、あからさまに嫌な顔をした。

「クーも二人の様子を見に来たの？」

「二人？何の事？」

「エンジェル氏……余計なことを」

二人は仕方なく、エレノアとエブニーザの話をする。ふと入口を見ると、二人が中に入るところだったので、慌てて三人とも後を追った。

「フランスにばれたら『なんで私も呼んでくれないの！』って怒られそうね」

クーが半ば呆れながらつぶやくと、ヘイゼルがにやにやと笑いながら、

「好きだけ悔しがらせておけばいいさ！パンフレットでも買ってやるか？」

と言った。とても楽しそうだ。

アンゲルは、2つ前方の席の、エレノアとエブニーザをじっと見つめていた。

俺も映画は初めてなのに、なんでエレノアじゃなくて、ティツシユフアントムと一緒に来なきゃいけないんだ？

アンゲルは内心不満でいっぱいだ。

隣にノレーシユの姫君（一国の王位継承者）がいるのだから、普通の人間なら、一生忘れがたい思い出の日になるところだろう。

『ノレーシユの姫君と映画を見に行ったんだぞ！』

一般的な学生なら、あとあと自慢しそうなものだ。

しかし、アンゲルはエレノアの事で頭がいっぱいで、隣の『姫君』のことなど、全く考えていなかった。そもそもアンゲルには、相手の地位や立場をまるで気に留めないという、天性の鈍感さが備わっていた。だからこそ、反対側の席でニヤついている『ティツシユフアントム』とも、毎日普通に怒鳴りあえるのだが……。

「そんなにエレノアが心配？」

クーがいたずらっぽく言うと、アンゲルはクーを睨みつけたが、特に言い返さなかった。

「健気だわあ」

「姫君、あまりエンジェル氏をいじめないでくださいよ」

「ティツシユフアントムは黙ってる」

「ティツシユフアントムって言うな！」

「静かにしなさい！ばれるわよ！」

エレノアが後ろを振り向いたので、三人とも座席の下に隠れた。

なんか、今、ヘイゼルの声が聞こえたような……。

「ヘイゼルたちは、知ってるの？ここに來ること」

隣のエブニーザを見ると、顔をしかめて嫌そうな顔をしていた。

「たぶんこの会場のどこかで、こっちを見えますよ。わかってましたよ。こうなるのは」

「えっ？」エレノアは驚いてあたりを見回した「どうしてそんなこ

とを？」

「僕が何か起こしたら困るから」

「何か起こすのはあなたじゃなくて、ヘイゼルじゃないの？」

「そうですね。映画が終わったら、早くここを離れたほうがよさそうですね」

「何か起こす前に？」

「隣の客のポップコーンを奪い取って、まき散らす前にね」

「それは、予知？」

「そのうち、わかりますよ」

エブニーザはいつまでも表情が険しい。

エレノアは、ヘイゼルを探そうと周りを見回したが、もうすぐ映画が始まるので、原作の本の話をすることにした。マリアン・デフォアの自伝的小説で、100年戦争時代の愛の物語だ。エブニーザは、

「読んだことがありますよ。でも題名が違いますけど……」

「だそうだ。彼女の本はほとんど読んだという。マリ안의小説のほとんどが、何回も繰り返し映画や舞台になっていると教えてくれる」

「それは……見てみたいですね」

エブニーザが興味を示した。

映画が始まってすぐ、ヘイゼルが、

「隣の席でものを食べる音がうるさい」

と言いだした。

そして、映画の間中、いらいらと手足を揺らして落ちつかない様子だった。

アンゲルとクーは、

いつ爆発するかわからないぞ……。

と気になって、映画の内容が全く頭に入らなかった。

映画の名台詞『どちらの女神も、愛を迫害するようなことはなさらない』が出てくると、エブニーザは、

「女神なんて、いないのに」
と小声でつぶやいた。エレノアはそれを聞き逃さなかった。
エブニーザ、管轄区の間人よね？そんなこと言っているの？
エレノアの心配をよそに、映画はどんどん進んでいき……そして
事件は起こった。

映画終了直前、ヘイゼルは隣の客とケンカを始めてしまい、エブ
ニーザが予言したとおり、隣の客のポップコーン（3つ目）を奪っ
て回りに投げつけ始めた！

周りの客が悲鳴と共に逃げて行く。

「ああ、終わるまでもたなかったみたいだ……帰りましょう」

エブニーザが立ち上がった。エレノアは抗議の顔で彼を見上げた。
「まだ映画が終わってないのに……」

「早く！」

エブニーザはエレノアの腕をとって、強引に映画館の外に連れ出
した。

こんな強気になることもあるんだ……。

エレノアはドキドキしていた。

そのあと、二人で手をつないだまま（手を離すタイミングをつか
めなかっただけで、エブニーザには好意は全くなかったのだが）寮
まで帰った。

エレノアにとっては、思い出に残る一日になったようだ。

そのころ、ヘイゼルとアンゲルとクーは、三人そろって映画館の
事務室に連れていかれて、いかめしい顔の館長に、

「今度やったら警察に突き出してやる！」

と怒られていた。ヘイゼルは、

「俺じゃなくて隣の奴を連れてこい！」

いつものようにわめいたが、アンゲルとクーに両側から睨まれて
黙りこんだ。

4 - 18 エレノア フランシス 女子寮の部屋

エレノアが寮に帰ると、フランシスが怖い顔で、目もとをひきつらせて立っていた。

「エブニーザと映画に行ったんですってね。クーに聞いたわよ」

エレノアは驚いた。

「どうしてクーがそのことを知ってるの？」

「どうして私に教えてくれないの!？」

フランシスが椅子を投げつけたかと思うと、その場に座り込んで泣き出してしまった。

エレノアがあわてて駆け寄ると、

「どうして私だけいつも仲間はずれなのよ!」

とわめきだす。エレノアは謝ったが、どうしてフランシスがこんなに泣くのがわからなかった。

必死でなだめながら、今日起きたことをフランシスに説明すると、「そうでしょうね。ヘイゼルが2時間も黙って座っていられるわけがないのよ。前にも映画館で暴れたことがあったわ」

「えっ?」エレノアは驚く。今日は驚いてばかりだ。「ヘイゼルと一緒に行ったことがあるの?」

「一回だけね。映画の内容が気に食わなくて、ずっと大声で悪口を言ってる、周りの客とけんかになったの」

「ほんと?」エレノアは呆れた。「そういえば、どうしてクーが映画館に?」

「偶然ヘイゼル達に会ったって言ってたけど、怪しいわ。きっと最初から三人で様子を見てたのよ」

フランシスがくやしそうな顔をした。

4 - 19 エレノア フランシス カフェ

次の日。

練習の帰りにエレノアがカフェに向かうと、アンゲルが他の学生（顔色の悪い、エブニーザより暗そうな）と熱心に話しているのが見えた。最近よく見かける。二人ともいつも深刻そうな顔で話をしていた、近寄りがたい。

何を話しているんだろう……。

と思いながら、奥のカウンターでコーヒーを受け取る。ウェイターが、エレノアに熱心に話しかけてきた。彼は前からエレノアが気に入っていたが、いつもアンゲルとしゃべっているので話しかけられなかったという。

「あれは彼氏？」

「違うわ。今日は別な人としゃべっているし」

「ああ、毎週長話してるよ、あの二人。馬鹿な男だね、君みたいな綺麗な子をほつといて、あんな暗そうなのと」

エレノアは一応笑っておいた。それから、ウェイターと当たり障りのない話をし、てきとうに話を切ってカフェを後にした。あまり気の合う相手ではなさそうだ。

外に出て振り向くと、アンゲルと学生が見えた。話がまだ終わらないようだ。

「エレノア」

フランシスが遠くから歩いて来て、エレノア前に来るなり、こう言った。

「ちょうどよかったわ。あんたはオーディションに行くのよ」
不気味なほどさわやかな笑い方で。

「えっ？」

何の話か、エレノアにはわからなかった。

「フェスティバルの映像と書類を送ったら、一次選考に通っちゃっ

たの。二次選考があるから、行って！冬の休暇が終わった後だから、まだだいぶ先だけどね。それじゃ」

「ちよつと待つて！」エレノアは、立ち去ろうとしたフランススを引きとめた「どういうこと？勝手に出したの？」

「だって、締め切りが迫つてたし、チャンスは利用しないとったいないじゃないの」

「フランスス！」

「怒らないでよ。言つとくけど、今はなんだって競争が激しいんだから。こういう機会があれば、ばんばん挑戦しないとダメなのよ！おわかり？それじゃ」

まだまだ文句を言いそうなエレノアを置いて、フランススは早足に去って行った。

何考えてるのよ！オーディション！？

怒りと混乱でしばし立ちつくした後、エレノアはまた音楽科に戻ることにした。

ブースで歌の練習をするためだ。

4 - 20 アンゲル クラウス 古い寮

アンゲルはクラウスの部屋に案内された。

ロハンが住んでいるのと同じ、あの古い寮だ。

壁際の本棚には、宗教関係の難しい本が、聖書と一緒にずらっと並んでいた。

……そうとう悩んでるな。

そして部屋を見回す。ロハンの部屋と全く同じ造りだ。

やっぱりこちらの寮でよかったのになあ。なんでティッシュファン

トムの巣窟に住んでソファァーで寝てるんだらう、俺は。

「ルームメイトは？」

「同じ管轄区の、コミュニティに入ってる」

「げっ」

アンゲルはあの、不気味な集団を思い出した。

あれと一緒に部屋って……ティッシュファントムの方がよっぽど
ました。

「ということとは毎日祈ってるわけ？二人で？」

「当たり前じゃないか」

アンゲルは、クラウスが心の底から気の毒になってきた。

「集会に参加してるから、夜遅くまで帰って来ないよ」

「集会って……」

「聖書を回し読みする会」

「……はてしなく暗いね」

「ほんとに管轄区の人なの？そんなことを言うなんて」クラウスが、
非難に満ちた声をあげた「本当はイシユハにずっと住んでいたんじ
やないの？」

「違うよ。クレハータウンって知らない？」

「知ってる。ポータタウンの近くだろ」

「そこからさらに10キロほど歩くと、俺の住んでいた町がある」

しばらく二人で管轄区の町の話をしていたのだが、そのうちクラウスが『懲罰室に一週間も閉じ込められた』という話を始めた。

「何やったんだよ？」

「わからない」

「わからない？」

「みんなは僕が、祭壇の飾りを壊したって言う。でも僕にはそんな覚えはないし、第一、祭壇に近づいた記憶もないんだ。でも、みんな、僕がやったのを見たって言うんだよ。友達も両親も、神父様まで」

「変だな」

「でも、神父様がそう言ったら、僕が何を言おうと信じてもらえないだろう？」

「だろうなあ……」

アンゲルは自分の町にいた神父を思い出した。クラウスの話に出てくる神父とは違って、人間的に善良な老人だった。町の人間の手本のような存在だった。

でも台風で行方不明なんだよなあ……。

「それで、女神が信じられないわけ？」

「それだけじゃないけど……それがきっかけと言えなくもない」

それから二人は、『いかにあの国の影響から逃れるのが難しいか』を話した。せつかくイシユ八に来たのに、コミュニティの連中にはつけ回されるし、イシユ八人はあまりにも即物的で、精神性がない……。

「どうしてイシユ八人はあんなに気楽そうなんだろう？」

「さあね。生活に宗教が入ってないみたいだけど」

「でも、信仰なしで人間、生きていけるものなのかな？」

クラウスが深刻な顔でつぶやいた。

「どういう意味？」

「信じるものがなくて、それで精神を平静に保てるものだろうか？」

「……信じないほうが平和な気がするんだけど」アンゲルには、ク

ラウスが何を言っているかよくわからなかった。「少なくとも、フアナティ信仰は」

クラウスが、何か異質なものを見るような目でアンゲルを見た。アンゲルはその目つきに見覚えがあった。

あの、狂信的な『管轄区コミュニティ』の連中と同じ目だ。

「アンゲル、やっぱり君は管轄区の人間じゃないだろう?」

「残念ながら、生まれも育ちも管轄区なんだよ。ただ女神が信じられないだけ」

「そんな管轄区人いないよ」

「じゃあお前は何なんだよ!?!」

意見が合わなくなってきた。

どうも、アンゲルが抱いている違和感と、クラウスが抱いている違和感では、内容がだいぶ違うらしい。

帰り道、アンゲルは混乱した頭で、クラウスに言われたことを考えた。ええ。

『信仰なしで人間、生きていけるものなのかな?』

アンゲルは、そんなことを考えたことがなかった。そもそも、この問いかけの意味が理解できなかった。

どうということだ?

もともと俺は信じてないぞ?それが何だ?

いきなり死んだりしないだろ?

いや、そういうことじゃない。わからなくはない……でも、何だ?

考え事しながら歩いてきたアンゲルは、自分が反対方向に歩いていることに気がつかず、アルターの駅が視界に入ったところであわてて引き返した。

自分の寮に帰った時には、日付が変わっていた。

4 - 21 エブニーザ アンゲル シギ 校舎内

エブニーザは、授業が終わった後に、全く知らない女の子にデートに誘われたが、

「僕、あの、忙しいんです！」

走って逃げてしまった。

その様子を遠くから見ていたアンゲルは、

「もったいないなあ……」とつぶやいた。

そして、エレノアのことを考える。どうしたらエレノアを、エブニーザではなく、自分の方に向けることができるんだろうか……。

いや、待て、俺はイシユハに勉強しに来たんだった。

頭を振って、立ちあがって次の授業へ移ろうとすると、女の子数人が、こんどはアンゲルに向かって、

「エブニーザの友達でしょ？」

「紹介してよ！」

と口々に言いだした。

「あいつは本にしか興味がないんだよ！急いであるからどいて！」

足早に廊下に出ると、今度はシギが近づいてきて、『ちよつと来い』と引っぱられた。なんだろうと思っついて行くと、階段の踊り場まで来たところで、シギが、

「エブニーザは何者だ？」

と、不愉快そうな顔で言い出した。

お前までエブニーザか！？

うんざりしたアンゲルは、

「本人に聞いてくれよ。ヘイゼルとかさあ。俺もつうんざり……」

「エレノアとつきあってるのか、あいつは」

「ファ！？」アンゲルは驚きのあまり、変な声を上げてふり返った

「そ、そんなわけないだろ！？」

シギは妙な目つきでアンゲルをじっと見ている。

やばい、こいつもエレノアを狙ってるのか？

「授業に遅れるから！」

アンゲルは走ってその場から逃げた。

ああ、どいつもこいつも何なんだよ！授業に集中できないじゃないか！！

エレノアがレッスンを終えて道を歩いていたとき、誰かに足をかけられて転んでしまった。

うずくまっていたまま後ろを見ると、音楽科の生徒らしき数人が、笑いながら去っていくのがわかった。

「こっちの校舎は質の悪い生徒が多いですな！」

いつのまにか、ヘイゼルが目の前にいて、エレノアに手を差し出していた。

「大丈夫かな？」

「ありがとう……どうしてここに？」

「あそこに用事があったね」ヘイゼルは音楽科の校舎の隣の、集会場を指さした「女神アニタ様を信じている哀れな古代イシユ八人の集会があつたんだが、またご令嬢がヒステリーを起こしてね」

「フランシスが？」

「隣の席の女とケンカして、水を浴びせて平手打ちして飛び出して行った」

「えっ？」

顔をしかめたエレノアに、ヘイゼルは両手を振ってなだめるような顔をした。

「いやいや、今回ばかりは相手が悪いのさ。『暇つぶしに学校に来てるんでしょ？どうせお金持ちとお見合いして終わりですもんね。』

シグノーのご令嬢は気楽でいいわね！』なんて言われてみる、誰だつて怒るさ。水どころか、灯油をかけて火をつけてやってもいいくらいだ。そう思わんかな？」

「火なんかつけちゃだめよ！」

「わかっているわかってる、たとえ話さ。そんなことを言われたら、シグノーのご令嬢じゃなくなつて怒るだろ」

「でしようね……フランシスを探すわ」

「頼みますよ。俺はボルディ・ツルツパゲーノの授業に出なくては
いかなのでね」

ヘイゼルは、偉そうにそう言いながら去っていった。

もしかして、わざわざ私に知らせるためにここで待ってたんじゃない
……？

と疑うが、すぐに女子寮に向かって走り出す。

寮に戻ると、やはり中でガチャーン！と何かを破壊する音が聞こ
えた。

おそるおそるドアを開けると、皿と花瓶と、何本かの化粧品のビ
ンが割れて床にちらばっていて、フランシスが荒い息で肩を上下さ
せながら立っていた。後ろ姿なので顔は見えない。

「フランシス？」

エレノアが声をかけるとフランシスが振り返った。涙でマスカラ
が流れていて、顔がめちゃくちゃだ。

「どうしたの！？」

エレノアが叫ぶと、フランシスが声を上げて泣きながら抱きつい
てきた。まるで、いじめられて泣いている小さな子供のようだ。

フランシスの背中をさすってなだめながら、エレノアは不思議に
思った。

この間の映画のときもそうだったけど、いいところのお嬢様が、
どうしてこんなに子供っぽいだろう……？

数時間経ってフランシスが落ちついたあと、エレノアは恐る恐る、
気になっていた子をと口に出してみた。

「ヘイゼルって本当は優しい人なんじゃない？今日のこと、エプ
ニーザを連れ回していることも……面倒なことは避けるでしょう？
普通は。どうしてあんな高慢なふるまいをするのかしらね」

意外にもフランシスは怒らず、冷静に、

「シュツティファントだからよ」

と答えた。

「黙っていたら、シュツティファントっていう家に押し潰されるか

らよ。私がシグノーに潰されているみたいに」

エレノアをじっと、深刻な目で見つめた。

やっぱり子供のような目だ、とエレノアは思った。成長していない目。成長したいのにできない人間の目だ。

「私だって同じ……そうね……家の名前が呪いみたいに、どこにいっても付きまとってくる。みんな、シグノーとかシュッティファントっていう名前しか見ない。ヘイゼルとかフランスっていう人間がいるって知ってもらうには……そうね、だからよ、だからあんなとんでもない言動をするのよ。みんなが私やヘイゼルを家の名前でしか判断しないから……だからムカツクの」

そして、

「あなたがうらやましいわ、エレノア」

と、ささやいた。

「暴れたり物を投げたりするより、もっとましな方法がいくらでもあると思うけど……」

とエレノアはつぶやいたのだが、フランスはそれを無視して、他人の悪口を延々としゃべりはじめた。

おおよそ脈絡も根拠もない内容だったが、『イシユ八の上流階級が大嫌い』だということと『自分も地位が高いはずなのに、好きなこともできずに親のいいなりになっている』ことが気に食わないのだということが、エレノアにはわかった。

4 - 23 アンゲル ヘイゼル クラウス カフェ

アンゲルは、エレノアがいまいかな〜と思って、本を読みながら図書館のカフェに座っていたのだが、残念ながら、そこに通りがかったのはヘイゼルだった。

「ここで誰を待っているのかな？」

とニヤニヤしているヘイゼルに、アンゲルはむっとした顔で、「別に、勉強してるだけだよ！」

と言り返した。

ヘイゼルは、フランスが起こしたことで、エレノアに会ったことを話した。

「だから、ここで待っても来ないですよ？ククク」

「……お前やつぱり悪魔だな」

アンゲルが立ち上がると、ヘイゼルはにやにやしながらアンゲルを引き止めた。

「まあまあまあ、たまにはここで話でもしようじゃないか」

「どうせ同じ部屋だろ、ここでまでお前となんか話したくないね！」

アンゲルはヘイゼルを置いてその場を立ち去ろうとしたが、クラウスが近づいて来るのが見えたので、声をかけて別な席に一緒に座った。

二人で管轄区の話やイシユハの話をする。クラウスの話はいかかわらず内容が暗く、哲学的で謎めいていた。

本人も、自分が何を話しているか、わかってないんじゃないだろうか……。

アンゲルは話題を変えようと思い、何を専攻しているのか聞いてみると、クラウスはそれには答えず、

「なんのためにここで勉強しているのかわからない」

と言って黙りこんだ。

アンゲルも返答に困った。

自分は何のためにここにいるのだろじ……？

4 - 24 アンゲル エレノア カフェ

次の日、アンゲルがカフェでぼーっとしていると、エレノアがやってきた。

エレノアは、フランシスが集会場で暴れた話をした。

「ヘイゼルって、本当は優しいんじゃないかしら」

「ヘイゼルが？」アンゲルが抗議の声を上げた。「おいおいおい、熱でもあるんじゃないか？練習のしすぎで疲れたんじゃないか？」

「違うわよ！」

「まあ……そうだなあ、少なくとも、俺とエブニーザはあいつの家のことなんかどうでもいいな。俺はそもそもシュツティファントなんて名前知らなかったし、エブニーザは自分の事で悩みすぎて、そんなこと気にしてる余裕もないんだ。俺たちはただ、ヘイゼル自身の性格の悪さに困ってるだけだね！」

「だから仲がいいのね」

「は？」

『仲がいい』という言葉の定義が知りたいと、アンゲルは思った。

「家の名前しか見てくれない、誰も『ヘイゼル』『フランシス』っていう人間を見ない……」エレノアがぼんやりと遠くを見た。「でも、あの二人だけじゃないわね。みんな、その人自身を見ているようで、表面的なことしか見えてないのかも。見た目とか、顔とか、髪や目の色とか……本人の気持ちとはまるで関係のないことばかりを」

エレノアが立ち上がり、冷やかな目でアンゲルを見おろしながら、真剣な声でこう言った。

「ねえ、心理学で、人の本当の姿が見える？それとも、やっぱり表面的なことしか分析しない学問なの？私はそれがすごく気になるの」

エレノアが去っていく。アンゲルは考え込む。

その人の本当の姿……って何だ？

どうしてエレノアが心理学のことを気にするんだ？

アンゲルは困惑しながら、そのままカフェでクラウドが来るのを待っていたのだが、閉店する時間になっても、彼は姿を見せなかった。

何かあったのか？

寮の様子を見に行こうかとも思ったが『おせっかいすぎるのはよくないよな』と思い、自分の部屋に帰ることにした。

4 - 25 エブニーザ クー 図書館裏

エブニーザとクーが、図書館裏の芝生のベンチで話している。

女の子に追いかけられるのが嫌でたまらないというエブニーザに、クーは呆れていた。

「警沢な悩みねえ。好かれたくても嫌われる可哀相な人もいるっていうのに」

「でも、実際僕は誰にも興味がないんです」

「例の女の子以外ね」

「……彼女を探さなきゃ」

エブニーザが辛そうな顔で下を向いた。

「どうやって」

「場所がわかればいいのに……汚い部屋しか見えない」

エブニーザは下を向いたまま黙り込んでしまった。

クーは空を見上げ、優しく声をかけた。

「下じゃなくて上を見なさいよ。こんな綺麗な空は珍しいわ。夕陽

がピンクと紫よ。独特の色ね」

エブニーザがゆっくりと上を向く。

「本当だ……どうしてこんな色なんだろう」

しばらく無言で空を見つめたあと、

「彼女にも見えるといいのに」

とエブニーザがつぶやいた。

「きっと見えるわよ」

クーが笑った。

姫君らしくない、弱々しいやり方で。

「どこだって、空は見えるわ」

独房 囚人11番 25番

掃除係の老人は、25番と名乗った。ただし、独房の番号ではない。

彼は、10人ほどと一緒に放り込まれる雑居房の囚人で、そこでは、数千人の囚人たちに通し番号をつけている

数千人の中の25番目だ。相当昔から、牢獄の中で暮らしているに違いない。

25番は、あいかわらず、週に一回掃除にやってきて、私の手元のノートに興味深そうに、鋭く光る目で観察すると、自分の事を、独り言のようにとりとめもなく話し、（だから私は彼が何者か知っているであって、直接会話することはほとんどなかった）『見せたくなったらいつでも言ってくれ』と毎回言いながら、独房を出て行く。

私はまだ、彼にノートを見せる気にはなれない。

さて、話の続きを聞かせよう。

5 - 1 アンゲル ロハン エブニーザ 冬の休暇前

冬の休暇前

道路には雪が積もっている。アンゲルは、よろよると、慣れない雪道を歩いていた。

……雪なんて嫌いだ!!

アンゲルは、心の中で悪態をついていた。先日、いつもなら負けないイシユ八人（特にヘイゼル）の雪玉攻撃にあって、こてんぱんにやられてしまった。雪に足元をとられて、上手く逃げるのができなかつたのだ。

運動不足になっていると感じたアンゲルは、ロハンを誘ってジョギングを始めた。

しかし、ほんの4、5分走っただけで、ロハンは疲れ果ててうすぐまっけてしまった。

「まだ全然走つてないだろ!？」

「だって……昨日バイトで遅かつたし……もう1キロは走ってるじゃないか」

「それくらいで疲れるなよ!」

「金持ちには勝てないよ。いいもの食って高いフィットネスに通ってんだから」

ロハンが、よくわからない言い訳を始めた。

「なんだよそれ」

「今日だって夕方からバイトなんだからさあ、体力取つとかないと」

「1キロ走る体力もないくせに、なにを取つとくんだよ!？」

仕方なく、アンゲルは一人で外を走っていたのだが、ちゃんとした防寒具を着ていなかったため、体が冷え切つてしまい、気分まで異常に落ち込んでしまった。

エブニーザが図書館から帰ってくると、死人のような顔で、ヒーターの前に座り込んで震えているアンゲルの姿があった。

「……何してるんですか？」

「寒いんだよ」「アンゲルが震えながらつぶやいた。「さっきからヒーターの前にいるのに、ちっとも暖かくならないんだよ」

「寒い日に、長時間外にいますと、冷え切ってしまうんですよ。それで、しばらく戻れないんです。ちゃんと保温しないで外を歩くからいけないですよ。いきなり温めようとしても無駄で……」

アンゲルがきつい目でエブニーザを睨んだので、エブニーザは言葉も切って、自分の部屋に逃げた。

あいつ、自分も管轄区出身のくせに！！

そしてふと疑問に思う。エブニーザの口から、女神フアナティとか、信仰とか、そういう言葉を聞いたことが一度もないな、と。

そういえば、祈ってるのも見たことがない……。

祈らない管轄区人なんて、俺以外に見たことがないぞ。

もしかして、あいつも女神なんて信じてないんじゃないか？

尋ねてみようかと思ったが、ヒーターから離れたくなかったので、やめた。

5 - 2 アンゲル エレノア カフェ

次の日、カフェで会ったエレノアに『寒過ぎて死にそうだ』と言うと、エレノアは笑ってこんなことを言った。

「体は常にあたためておかないとだめなの。声楽家は絶対に体を冷やすようなことはしないの。そうしないと声が出ないってわかってるから」

「ふーん」

「スポーツのウォーミングアップと同じよ」

「ああ、そういえばそうだな……」

アンゲルはサッカーを思い出した。練習しなくなっただけからもう半年は経っている。きっと、今チームに参加しても、前ほど上手くはプレーできないだろう。

「そういえば、この前ヘイゼルとサッカーをしてたわよね」

エレノアは何気なく言った（ついでにエブニーザについて聞くと思った）のだが、アンゲルはびくつと体を震わせた。

「ああ、あれは、ヘイゼルが……」

「チームに入ってるの？」

もちろん、エレノアはわざと聞いたわけではない。

しかし、アンゲルにとっては、一番されたくない質問だった。

「そんな余裕ない」

冷たい声でつぶやくと、アンゲルは勢いよく立ち上がり、その場を離れてしまった。

「……どうしたんだろう？」

一人残されたエレノアは、アンゲルの後ろ姿を見ながら困惑していた。

5 - 3 アンゲル クラウス カフェ

休暇が始まる前の日に、アンゲルはクラウスと話をした。クラウスは管轄区の実家に里帰りしなくてはいけないのだが。

「行きたくないんだよ」

と力なくつぶやいた。

「行ったらまた、祈りだ聖書だ新年の行事だ……意味がわからないことを無理矢理させられるんだ」

「だったら行かなきゃいいじゃないか」

「寮が、新年の間、閉まるんだ。行くところがない」

「寮が閉まる？」

アンゲルはそんな話を聞いたことがなかった。安い寮だけだろうか？

「アンゲルは帰らないの？」

「帰らないよ。なあ。一度家を出たら、めったに帰らないもんじゃないのかな？なんていうか……出世するまで帰ってくるなみたいな」

「ずいぶん古臭い話だね」

クラウスが笑った。

アンゲルは衝撃を受けた。ごく当たり前の事を言っただけだったからだ。

こいつに古臭いなんて言われるようじゃ……。

クラウスは、いつもより明るく、元気そうに見えた。きっと休暇のせいだろうとアンゲルは思った。

いくら女神を信じてなくなっても、慣れた家に帰れるんだから、多少は気が休まるだろう。

そういえば、うちの親はどうしているだろう……？

あの、標準的な、善良なフアナティ信徒たちは……。

特に宗教の話にもならず、『また会おう』と約束して別れた。

アンゲルは、クラウスの事はすぐに忘れてしまった。休暇の時間

をどう使おうか考えていたからだ。

もちろんアルバイトには行くし、勉強しなきゃいけないからな。でも、せっかくイシユ八に来たんだから、もっというんな所を見て回ったほうがいいかもしれないな……。

そんなことで頭がいっぱいだったのだ。

この日の事を、アンゲルは、一生後悔することになるのだが……。

5 - 4 エレノア フランシス レストラン

エレノアは、ケツチャノッポにのどあめとチョコレート没收されてしまった。

「のどあめは実はのどによくないの！糖分がだめなの！」

「えっ」エレノアがあわてて反論した「でも、今まで毎日チョコレートを食べていたけど、ちゃんと巡業でも歌えていたし……」

「だめよ、喉に良くないの！痰が絡むから！控えなさい！」

エレノアは仕方なく、甘いものをがまんすることにしたのだが……。

夕食のあと、フランシスは、スイーツを食べている自分を、エレノアがうつろな目でじーっと見つめていることに気がついた。

「食べる？」

フランシスが皿を差し出しても、エレノアは、

「いらない」

と言うのだが、やはり、じーっとスイーツを見つめ続けるのだ。

「ちよっと！いいかげんにしてよ！」

最初は『歌のためなら』と我慢していたフランシスだが、三日目の朝に突然キレた。

「気持ち悪いっつの！！飢えた犬みたいな目をしないでよ！ちよっと来なさい！」

フランシスは怒鳴りながら、嫌がるエレノアを引きずって、食堂を出て行った。

それを見ていた他の生徒たちは、

「ああ、とうとうあの子も追い出されるんだわ」

「フランシスってどうしてあんなにヒステリーなのかしら」

「次はどんなのが来るんだらう？」

と、口々に噂していた。

フランシスは、エレノアを連れて『アルターで一番スイーツがお

おいしい』レストランに入った。そして

「甘いものを全部持ってきて！全種類！！」
と叫んだ。

「フランスス！！」

エレノアが泣きそうな声で叫ぶと、

「全部食べなさいよ。あたしも手伝ってあげるから」と、こともなげに言った。

「だめよ、糖分がだめなんだってば、喉に……」

「まったく食べられないってわけじゃないでしょ？コンサートの前だけ控えれば？極端すぎるじゃないの。いきなりチョコレート禁止なんて」

「でも……」

エレノアは泣き出してしまったが、それくらいで引き下がるフランススではない。

「いいから食べえ！」

エレノアは仕方なく、目の前に置かれたチョコレートケーキを口に運んだ。

ああ、おいしい……。

フランススがそれを見てにやりと笑いながら、

「ヘイゼルの別荘に遊びに行くから、あんたも来なさい」

と言った。エレノアは、抗議の目をフランススに向けた。

「いいじゃないの、ほんの一週間よ？親のところにはそのあと帰ればいいじゃない？2月にはパーティもあるし」

「パーティ？」

「偉い人がたくさん来るから、顔売るチャンスなのよ」

……つまり、もう出なきゃいけないって決まってるわけ？

最近、フランススは、エレノアの行くところを、次々と、勝手に決めていた。オーデイションに、パーティに、社交のなんとやら（エレノアには理解不能な場所）……。チャンスあげたいという気持ちはわかるのだが、何もかも決められてはエレノアも困る。

でも、フランススを止めるなんて、誰にもできそうにないわ……。
エレノアは、目の前に並んでいる『きれいなスイーツ』を見渡し
ながら、困り果てていた。

5 - 5 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 車内

休暇がやってきた。

ヘイゼルは、みんなを連れて別荘（やや北西よりの地方都市）に行くことに決めた。人の都合を聞かないで勝手に決める、これがヘイゼルのやり方である。

アンゲルは行こうかどうか迷った。ヘイゼルと行動を共にすると、どんな厄介なことが起こるか想像がつかない。

……結局振り回されて、疲れ果てて終わるんじゃないか？

アルバイトをそんなに長く休んでいいのだろうかとも思ったが、レストランの店主は、

「休暇になれば学生はいなくなるもんだからな」

嫌な顔をしていたが、一応了承してくれた。

まあいいか、どうせどっかに旅行しようと思ってたし……。

アンゲルは行くことにした。

そして出発の日。

アンゲルがバイトを終えて帰ろうとすると、目の前に、いかにも高級そうな車が止まり、座席の窓からヘイゼルが顔を出した。

「乗れ！」

ドアが開いた。

通行人がみな、怪訝な顔でこちらを見ている。

ああ、俺まで、金持ちのダメ息子だと思われてるな……。

憂鬱な気持ちで車に乗った。乗り心地は悪くなかった。

しかし、後ろから、誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。

「ヘイゼル」

アンゲルが疑惑の顔をヘイゼルに向けると、ヘイゼルはいつも通りニヤニヤしていた。

「ああ、実は、ノレーシユの姫君が、祖国の行事で不参加だね」

「そんなことより、後ろの席の……」

「エブニーザが『僕も行きたくない』ってわめきだしたのだが、行きたくないで済むことなんて世の中にはないからな、無理矢理車に乗せたのだが、暴れてね」

アンゲルは後ろをちらつと見たが、人の姿は見えない。嗚咽だけが聞こえてくる。

「置いてきた方が良かったんじゃないか？」

「そんなわけにはいかんよ。あいつは部屋にこもりすぎる。ほっといたら休暇の間ずっと部屋から出てこない可能性もあるわけだ。ただでさえシグノーのご令嬢にミイラ呼ばわりされているのに、図書館なんかは何カ月も籠られてみる、本当に化石になっちまう」

「別にいいだろそれでも」
「すすり泣きがバツクシートから響いて来た。

……嫌な予感がする。

「良くない。エンジェル氏もこの前言っていただろうが『教育上よろしくない』って」

「それは金の問題だ。エブニーザの問題じゃない」

「だからな、シートベルトでぐるぐる巻きに縛り上げてやったのさ」
「何い!？」

慌ててアンゲルが、身を乗り出して後部座席を覗くと、そこには、手足をシートベルトで縛られて、人質のように横たわっているエブニーザの姿があった。

「お前はアホか!？」 アンゲルがヘイゼルに向かって怒鳴った「これじゃ、人さらいと同じだろうが!何を考えてるんだ!？エブニーザに昔の事を聞くなって言ったのはお前だろ!？犯人と同じことをしてどうするんだよ!？犯罪だぞ!もつと症状が重くなったらどうするんだよ!？責任問題だぞ!？」

「シヨック療法になるかと思っただが」
「なるか!」

アンゲルがエブニーザを助け出そうと、シートの上から後部座席

5 - 6 シュッティファントの別荘

「あなたたち、何でそんなにボロボロなのよ」

別荘の前。車から降りてきた『乱闘二人組』を見て、フランシスが露骨に不愉快な顔をした。

アンゲルもヘイゼルも、服は破け、髪はめちやくちゃになっていた。その後ろにエブニーザが立っているが、暗い顔で下を向いている。誰とも目を合わせたくないようだ。

「何かあったの？」

エレノアが心配そうに二人を見た。アンゲルは車内に逃げ込みたくなった。

「何でもない。ちょっとした権力闘争だ」

「またそれか……」

ヘイゼルは全く反省していないようだ。ニヤニヤとフランシスに近づいていく。

制服を着た使用人が何人かやってきて、フランシスとエレノアのスーツケース（どうしてあんなに荷物が必要なんだろうと、アンゲルは疑問に思った）を運び、全員を入口に案内した。

アンゲルは深く考えずについてきたのだが、『シュッティファントの別荘』を見たたん、驚きで息が止まりそうになった。

別荘……というより、城だろ、これは。

アンゲルは、目の前の『豪邸』を見上げて、呆然としていた。もつとこじんまりとした、普通の家を想像していたのに、図書館より立派で大きな建物が建っていたからだ。

これが別邸って、別じゃない家はどれだけ大きいんだよ？

エレノアも『すごく立派ね！』と叫んでいたが、言葉ほど驚いているようには見えなかった。お世辞、社交辞令のような響きだ。

エブニーザはずっと、青白い顔で下を向いている、心の底からここに来るのが嫌だということが、沈んだ態度ではっきりとわかった。

きつと、休みの間ずっと、図書館にいたかったのだろう。

エブニーザは部屋に荷物を置くなり、

「本屋に行つてきます!!」

と飛びだしていつてしまった。エレノアがあわてて追いかけて行った。アンゲルも追いかけてよとしたのだが、ヘイゼルに捕まってしまった。

そして数時間が経過。

ヘイゼルとフランシスは、あいかわらずくだらないことでわめいている。

「こんなとこに別荘なんてダサイわよ」

窓の外を眺めながらフランシスが文句を言った。今日で7回目の「ダサイ」だ。

「お前こそ成金趣味だろうが。ポートタウンの一等地に興味の城なんぞ建てやがって!」

「そんなことないわ」フランシスがお嬢様らしい気取った振り返り方をした「立派な文化事業なのよ。古い町並みを復興するの」

「そのうち使用人に金目の物を盗まれるぞ!あそこはそういう土地だ!」

「ポートタウンは立派な文化都市よ。それとも、未だに外国人を差別してるの?」

「外国人じゃなくて、下衆な連中を差別してるのさ!人から小銭をかすめ取ることしか考えてないような奴らをね!」

「下衆はあんたでしょ!」

二人が際限なく言い争っている、傍でぼんやり様子を見ていたアンゲルが、

「金持ちはケンカのネタが多くてうらやましいね。俺なんて家は一つしかないし、住んでんのは両親だけだ。使用人がものを盗む心配なんてないからね」

とつぶやいた。けんかをしていた二人は黙り込んだ。

やれやれ。アンゲルは緑色の目を窓の外に向けてソファーにもたれかかった。細かい細工のついた、信じられないほど座り心地のいいものだ。

しばらく立ち上がりたくないなあ……ああ、だから金持ちは太るんだ。

アンゲルはこのイシュハという国の『贅沢さ』が嫌になってきた。何もない管轄区にいたころは、ものがあつて豊かなことはいいことだと思つていたのだが、実際にイシュハに来てみると、そうとも思えなくなつてきた。

「エレノアはまだ帰つて来ないの？」

フランスがソファーに向かつて歩いて来る。古風な服装、くびれた腰のラインがまるでマネキン人形のようにだと、アンゲルは思った。

生きた人間なのかな？本当に？

いや、こんなこと思う俺もどつか神経を病んでるな。

「エブニーザと一緒に本屋を回つてるんだろ。絶対帰りは遅いさ」

ヘイゼルが手を空中で振り回しながら目をくりくりさせた。「古臭い

文学書だの哲学書だの……本の虫どもめ、俺は理解できん」

『哲学』という言葉で、アンゲルはクラウドを思い出した。

あいつは今頃どうしているだろう？

「哲学は大事だよ。仮にも政治家を目指している人間がそんなこと言うもんじゃない」

「目指してるんじゃない、無理矢理やらされようとしているんだ！」

「情けない男ね。自分の意思がないの？」

「なにい！？」

「こら、二人とも、やめろ」

アンゲルが今にも互いにとびかかりそうな二人の間に入るべく、立ち上がった。

「頼むから、ソファーから立ちあがらなきゃいけないようなことはしないでくれよ！それより、これどこで買った？気に入った」

「セカンドヴィラだ」

「授業料一年分より高いわよ」

フランススが意地悪な笑いを浮かべた。

アンゲルは身を固くして目を丸く見開いた。居心地の良さが一気に消えた。

学費と同じ!? ソファーが? 俺はバイトで苦労してるつてのに、こいつらは……。

とはいえ、妬む気にもなれないアンゲルだった。あいかわらずこの『ティッシュお化けとご令嬢』は、くだらない理由で言い争いを再開してしまうし、本を探しに行った『流れ者二人組』は帰ってくる気配がない。

どいつもこいつもお子様だな! イシュハの将来はこんなんで大丈夫なのか? まあ、管轄区よりましだけど……。

アンゲルは、自分の生まれ育った国の惨状を思い出した。何もかも遅れていて……だから、自分はここに心理学を学びに来たはずなのだが……気が付いたら、あの富豪シュツティファントの別荘なんかで、高いソファーにつかまってしまっている。

「部屋に戻る」アンゲルは暗い気分で立ち上がった。「案内してくれ。まさかお前と一緒に部屋じゃないだろうな?」

急に勉強したくなったのだ。

こんなおしゃべりときあつてる暇なんてないからな!

「おいおい、まだ寝るには早いだろ」ヘイゼルが出て行くこうとするアンゲルを止めた。「本の虫たちもいいかげん帰ってくるだろう。もう店だって閉まるころだ」

「ちょっと一人になりたいだけだよ」

俺には贅沢をして遊んでる時間はないんだ。そう心の中でつぶやく。

「ノノカ! アンゲルを寝室に案内して!」

フランススは、使用人がいるであろう方向に向かって叫んだ。

まるで彼女がここの持ち主のようだ!

「おいおい、エブニーザみたいなこと言うなよ」

ヘイゼルが、軽蔑の眼をアンゲルに向けた。アンゲルも同じ目つきで言い返した。

「実際俺とエブニーザは似てるよ、お前らと違っておしゃべりじゃないからな！」

廊下に出る。派手な装飾でいっぱいだ。柱にはなんだかわからないうねうねしたレリーフ（人間の脳みそみたいだ、とアンゲルは思った）や、誰が描いたのかわからない絵画（そのうち何枚かはエリ・クレマーシュだと彼にもわかった）であふれている。通路と言うより美術館のようだ。

何をどうしたら、こんなあぶく銭が集まってくるんだろう……。アンゲルはそう思い、しかし次の瞬間、金銭で判断するのは悪い癖だと思い直して、やってきた使用人には親切そうな笑みを浮かべた。

あいつらのために働くなんて、たまったもんじゃないだろうからな！

5・7 エレノア エブニーザ 本屋

「それで、彼女は見つかったの」

エレノアが、エブニーザに本を一冊押し付けた。

「女性が分からない人のための本」

「見つからないんです」エブニーザは顔をしかめてその本を押し返した。「やめてください、そういうの」

「エブニーザ……」エレノアは押し返された本を、選び抜かれた『良書の山』の上に積んだ。「ねえ、彼女が見つかったらどうするのよ？顔を赤くしておどおどしてるだけじゃ、どんな優しい子でも嫌になるわよ？今から人に慣れたほうがいいわよ」

エレノアが早口で、しかし、嫌味さは全くない、同情的なトーンでそう言った。

横目でエブニーザの顔を見る。明るい色の金髪、グレーの目。よくいるブルーグレーではない。ほとんど真っ白だ。色素がないような、不思議な色だ。

綺麗。男なのに。

どうしてこんなに美しいんだろう？

天使の絵みたい……。

本探しを忘れて、うっとりとしてエブニーザに見とれているエレノアも、まわりから見れば美しい女性だった。完全に、芸術のために生まれてきたのだと、彼女を見る誰もがそう思う。そして、性格も旅芸人らしく、明るく、声も通る。

一方、もう話し慣れているはずの友達相手でもぎこちないエブニーザ。

さらわれて監禁されていたころの記憶に未だにさいなまれているのか、単に生まれつき気が弱いのか、未だに、人の目を見てまともじゃべることができないようだ。

人さらいはきつと、この美少年を、どっかの金持ち女に売るつも

りだったに違いないわ。

エレノアは勝手に、どこかの古風な婦人とエブニーザを想像してうっとりした。

「でも、どこにいるかわからない……」

エブニーザが消え入るような声でつぶやいた。夢に出てくる女が心配でたまらないのか、単にエレノアとしゃべると緊張するのか、もともと青白い顔色がますます悪くなってきていた。

「世界中の娼婦のところを回ってみたら……あ、うちの父がそういうの得意よ。旅芸人だもの。女は旅の楽しみって言ってる……」

「そういう話はやめてください」

エブニーザは露骨に嫌悪感を現した。

「ねえ。まだ何も危ない話してないわよ！いくつなのよ本当に……」
エレノアは呆れた。そしてがっかりした。

一緒に買い物に行こうって言うからついてきたら、こんな話？

エブニーザから話しかけて来て、しかもどこかに行こうなんて珍しいと思ったら……女の子を探してるなんてね！

エブニーザを追って来たエレノアは、一緒に本屋に入ったのだが、そこでエブニーザから聞かされたのは『売春をさせられている女の子を探している』なんていう、とんでもない話だった。

エレノアは不愉快さを隠さずに、本をばらばらとめくった。

エブニーザは黙り込んだ。顔つきがひどく寂しそうだった。迷子になった子供みたいだとエレノアは思った。

「ねえ」エレノアは別な棚をあさりはじめた。「真面目な話。彼女がいそうな娼館をかたっぱしから尋ねてみたら？今のままじゃ、話を聞くとはだか……犯罪に巻き込まれているみたいじゃない？」

エブニーザは何も答えない。てきとうに手に取った本を乱暴にめくっているが、速度が速すぎる。明らかにちゃんと読んでいない。

5 - 8 アンゲル エレノア フランシス 別荘内

夕方。

何をしても動きが遅いエブニーザに、いらいらしているフランシスが怒鳴りまくっていた。見かねたアンゲルが

「ヘイゼルじゃあるまいし、怒鳴るなよ！」

と注意すると、フランシスはもったときつい声で叫んだ。

「トロすぎるのよ！見ててイライラするの！！」

アンゲルは呆れた顔で立ち去り、別な部屋で休んでいたエレノアに話しかけた。

「あんなのとルームメイトなんて、よくやっていられるね」

「その言葉、そのままお返しするわ。ヘイゼルと一緒になんて大変じゃない？」

「たしかにそうだ……でも、みんながうわさしてるほど悪い奴じゃないよ」

そこにフランシスが入ってきた。

「何をいい子ぶってんのよ。本当はウンザリしてるんじゃないの？」

「まあね〜」アンゲルはコミカルに困った顔をした「人の荷物を勝手に開けて中身は食うし、人の手紙を勝手に読むし」

「手紙？」

「母親の手紙を大声で朗読されたよ」

「それがヘイゼルよ」

フランシスが嫌味な笑いを浮かべた。なんだかんだ言って楽しそうだ。

「本屋で何を探してたの？」

話すことが浮かばなかったので、アンゲルはできとくに聞いてみた。

「何も……『フラネシア』っていうミュージカルの楽譜を探していたんだけど、絶版になっていて、なかったの。そのあとはずっとエ

ブニーザと女の子の話」

「女の子って……妄想の？」

アンゲルが顔をしかめた。

そんな話をなぜエレノアにするんだ？あいつは……。

「妄想って……たしかに信じがたいけど、本人はすごく深刻な顔を
していたし……」

「だから施設に送れって言ってるのよ、絶対頭がおかしいのよ」
フランシスがいまいましそうに言った。

5・9 エブニーザ ヘイゼル 絵画の前

同じころ、ヘイゼルはエブニーザをフランシスから引き離し、絵のある部屋に連れて行った。

「本物のエリ・クレマーシュだ」

かかっているのは女神アニタの絵である。紫色のドレスを着た女神アニタが、胸元で両手を重ねて、祈るように目を閉じている。

目を輝かせているエブニーザとは裏腹に、ヘイゼルは横目で白けた視線を送っていた。

「そんなに感激するもんかな？ シュタイナーのところにもたくさんあったら？」

「そういう問題じゃありません」

「フランシスをここに入れるなよ、絵を引き裂かれるぞ」

「自分が暴れて破壊する、の間違いじゃないですか？」

「お前最近嫌味になってきたな」

「どうしていつもフランシスを怒らせるようなことを言っんですか？ 本当は好きでしょうがないくせに……」

ヘイゼルがすさまじい目でエブニーザを睨みつけた。

「……わかりましたよ。もう何も言いません」

「あいつが俺に変なことを言わせるんだ！」

「はいはいはい」

ヘイゼルは、そのあとずっと文句を言い続けたが、エブニーザは絵に夢中で真面目に聞いていなかった。

エブニーザが疲れて『やっと一人になれた……』と部屋でぐったりしている、ドアをノックする音がした。エレノアだ。

「何ですか？」

エブニーザは露骨に嫌な顔をした。

エレノアはさっき聞いた『夢に出てくる女の子』の話が気になっていたのだが、どう言い出しているかわからず、

「夕食まで時間があるから、話をしない？」

ときこちないお願いをした。

「アンゲルは？」

「どうしてそこにアンゲルが出てくるの？」

「だって……」

エブニーザは口ごもったがすぐに、

「そっだ、フランシスは？」

とまた聞き返してきた。

「そんなに私と話すのが嫌なの？」

「そういうわけじゃないですけど……」

エレノアは傷ついた顔で立ち去った。そこに運悪くアンゲルが通りがかったが、エレノアはアンゲルを無視して行ってしまった。

「お前、エレノアに何を話したんだ？あんな顔初めて見たぞ」

「何も話してません」

エブニーザは弱った顔でドアを閉めようとするが、アンゲルが無理矢理中に入った。

「ヘイゼルとフランシスがまたケンカしてるから、部屋から出ないほうがいい。俺もヘイゼルと話したくないから、かくまってくれ」

「エブニーザ！アンゲル！どこだ！！」

廊下の向こうから、ヘイゼルの怒鳴る声が聞こえてきた。

アンゲルはあわててエブニーザをつかむと、クローゼットに飛び

込み、扉を閉めた。

部屋のドアが乱暴に開く音がして、足音がうるついたが、すぐに出て行った。

アンゲルは安堵のため息をついて、外に出ようとした。

しかし、クローゼットの扉が開かない。

「おい、何で開かないんだよ!？」

「騒ぐと見つかりますよ」

慌てているアンゲルとは対照的に、エブニーザは、暗い顔ですみっこに座りこんでいた。アンゲルが睨みつけると、

「いいじゃないですか。ここの方が静かだし。普通の部屋くらいの広さがありますよ」

「お前なあ……」クローゼットの中を見回す「確かに、寮の部屋と同じくらいの広さはあるな」

そこには服や荷物はなく、小さな木箱が一つ、奥に置かれていた。アンゲルが箱を開けると、そこには薬が大量に入っていた。

「何だこれ？」

「……これ、躁うつ病の薬ですよ」

エブニーザが錠剤を手にとってつぶやいた。

「え？」

「僕も処方されたことがあるんです。体質に合わなくて、ひどいめまいがしたので、すぐやめたんですが……」

「管轄区に医者なんかいるか？」

「シユタイナーには主治医がいるんです」

「シユタイナー？」

「おかしい。」

アンゲルは思った。

教会は、医学も心理学も認めていないし、医者なんてあの国にはいないはずなのに。

「それより……なんでこんなところに躁うつ病の薬なんかあるんだよ、しかも箱いっぱい」

「僕に聞かれても分かりませんよ。ここはヘイゼルの……」
二人ははっとして顔を見合わせた。
「ヘイゼルが？」

エレノア ヘイゼル フランシス 広間くエレノアの部屋

そのころ、エレノアがフランシスにエブニーザのことを話すと、「本にしか興味ないんでしょ、きつと。オタクなのよ。病的な。あんな気味悪いのにかまわないですよ」

ときつい口調で言われてしまった。

「ねえ、フランシスは、ほんとに、エブニーザを見ても何とも思わないの?」

「気持ち悪い、トロい、とは思いますが?」

「どうして?」

「どうしてって、実際動きが鈍くて気持ち悪いからよ!しかも何なのよあの目の色は?真っ白じゃない。気持ち悪い。ほんとに人間なの?」

「でも、クーも、学校の女の子たちも、みんな、かわいい、きれい、美しい……って言うわよ?」

「そんなの私の知ったこつちやないわよ!」

「やっぱりヘイゼルみたいなのが好み?」

「何ですって!?!」

フランシスが逆上してヘイゼルの悪口を言い始めた。

そこに、アンゲルとエブニーザを探していたヘイゼルが来てしまい、また言い合いが始まった。

エレノアが逃げるように廊下に出ると、騒ぎを聞きつけた女中が、「ああ、またお二方ですか。しばらくお部屋に非難されていたほうがいいですよ」

と苦笑いしながら言った。

どうやら、慣れっこのようだ。

エレノアは一人で部屋に戻ったが、やることがない。

しかたがないので、買ってきた本を読もうと手に取ると、それは『女性がわからない人のための本』だった。

『男性がわからない人のための本』を買うべきだったかも……。
エレノアは本を床に放り投げ。ベッドに倒れ込んだ。エブニーザ
が言っていた『夢に出てくる、売春をさせられている女の子』のこ
とを思い出す。

妄想？

でも、エブニーザの予想は当たるし、黒魔術の事だって……。

本当に、その子が存在しているとしたら……？

エレノアは、世界各国を親と回って、裕福な人にも、そうでない
人にもたくさん出会ってきた。その中にはもちろん娼婦も、過酷な
労働をさせられている密入国者もいた。でも、みんな人間には変わ
りない。

……どうして世の中はこんなに不公平なんだろう？

こんな立派な別荘を持つている人間がいると思えば、人さらいに
あつたり、売春させられたりしている人もいる。

……エレノアは、しばらく、エブニーザになったつもりで、どこ
か遠くにいるかわいそうな少女を憐れんでいた。

なぜか、涙があふれてきた。

ああ、いけない、こんなことしてる場合じゃない。

エレノアは起き上がり、手の甲で目をこすり、部屋の鏡で化粧を
直すと、部屋を出た。

やっぱりエブニーザとちゃんと話さなきゃ。

相手が自分と話すのを嫌がっているということを、エレノアはす
っかり忘れていた。

5 - 12 アンゲル エブニーザ クローゼットの中

アンゲルとエブニーザは、躁うつ病の薬のそばに座りながら相談していた。

「そうか、あの偉そうな態度、いつまでも終わらない長話、そしてあのへんてこりんな性格は、躁うつ病だったのか」

アンゲルが、謎を解いた探偵のような口調でそう言ったが、エブニーザは納得していないようだ。

「でも、ヘイゼルのものとは限らないでしょう？ここは別荘で、毎日暮らしている場所じゃないし……他の人のかも」

「そうだな……でもなあ、あの性格はやっぱり何かおかしいだろ？」

「そうですか？」

「そうですね……」

「僕と違って、ヘイゼルは落ち込んだりしませんよ。躁はともかく『うつ』とは無縁だと思っんですが」

「じゃ、躁病なんじゃないか？」

「たしかに、この薬は飲むと落ち込みますけど……」

「そうなの？お前が飲んじゃダメだろ」

「僕もそう思っただんですけど、たまに、妙にニヤニヤしていることがあるから、おかしいって……」

「ニヤニヤしてる？」

エブニーザのそんな姿を、アンゲルは全く見たことがなかったの
で、不信の顔をした。

「その……彼女が見えて」

「彼女？ああ、妄想のね」

「妄想じゃありません！」

エブニーザがむきになって大声で叫んだ。

「わかった、わかったから。それよりこの薬は誰のなんだ？誰のにしても、こんなところに大量にあるのはおかしいぞ？処方間違い」

てるか、もらったのに飲んでないか……」

そこで二人ははっとした。

「処方されたのに、飲まずにここに隠してるってことか？」

つまり、この薬の持ち主は、医者 of 診断を無視しているということだ。

……とにかく、ここを出て、ヘイゼルに聞いてみよう。

アンゲルはまた、クローゼットの扉と格闘を始めたが、エブニーザは部屋の隅に座り込んでしまった。

「ここから出たくない」

「はあ？」アンゲルは心底から呆れた「何言ってるの？」

「この方が静かですよ。外に出たら……またフランスとヘイゼルが怒鳴り始める……」

「そんなのいつもの事だろうが！」

「エレノアもいるし……」

アンゲルの動きが止まった。それを見たエブニーザは『しまった！』という顔をして身を引きつらせた。

「おい」

アンゲルがエブニーザに近づいて、しゃがんで、エブニーザを正面から睨んだ。

「エレノアが何だって？」

「なんでもありません」

「何だよ？」

「何でもないですつてば！」

「何でもないならなんで『エレノアもいるし……』って嫌そうな顔でつぶやくんだよ!？」

「ほんとに何でもないですつてば！」

クローゼットの扉が突然開いた。

そこにいたのは、なんと、エレノアだ。

「騒いでる声が聞こえたから」ぼんやりした顔でエレノアがつぶやいた「そんなに嫌がられているとは思わなかった」

エレノアは部屋を出て行った。アンゲルがあわててその後を追った。

エブニーザは、部屋のドアを閉め、それから、またクローゼットに入って、扉を閉めた。

本当に一人になりたかったのだ。

5 - 13 エレノア アンゲル 廊下

不機嫌に廊下を歩くエレノアの後を、アンゲルは必死で追いかけた。

「ヘイゼルから隠れるために入ったら、扉が開かなくなって困ってたんだよ！ありがとう！ねえ、エレノア！何でそんなに怒ってるんだよ！」

エレノアは答えずに自分の部屋に入ろうとした。

「待って！」

アンゲルがドアを手で止めると、エレノアは鋭い眼でアンゲルを睨みつけた。

怒った顔もすごく美しいな……いや、そんなことを考えてる場合じゃない！

「そんな怖い顔するなって！エブニーザは一人になりたいからって、あそこから出ようとしなかったんだよ。疲れてるんだ。常に一人でいたがるんだよ。いつものことだって。別にエレノアが嫌いなわけじゃない。それに、あそこで変なものを見つけたんだよ」

「変なもの？」

「躁うつ病の薬。しかも大量に」

「どういうこと？」

「誰かが、処方された薬を飲まずに、あそこに隠してたんだと思う」
アンゲルとエレノアがエブニーザの部屋に戻ると、誰もいない。
クローゼットの扉を開けようとしたが、開かない。

「エブニーザ？まさかまだ中にいるんじゃないだろうな!？」

アンゲルが叫ぶが、返答がない。

「つたく。どこに行ったんだ？」

「ヘイゼルを探して、聞いたほうがいいんじゃない？」

「そうだなあ……俺はぜったいあいつが病気だと思う。2時間も一人でしゃべり続けるんだぞ、しかも人の荷物を勝手に……」

二人が去つたのを確認してから、エブニーザがそーっとクローゼットから出てきた。実は内側から開ける方法を知っていたのだ。手には、薬の入った箱を持っている。

ヘイゼルとフランシスが物を投げあう大げんかをしていた。そこに入って行ったアンゲルの頭に、ヘイゼルが投げた花瓶が命中。アンゲルはあっさり倒れた。

「何をしてるのよ!」

エレノアが叫んだ。

使用人が何人が飛んできて、気を失ったアンゲルを運び出し、部屋中に散らばったものを片づけ始めた。

同時に、白いあごひげの、怖そうな男性が入ってきた。

ヘイゼルとフランシスがぎょつとした顔をした。

彼はシグノー家の執事で、フランシスの様子を見にやってきたのだ。

「一体何事ですか、お嬢様」

それから、2人は白ひげに延々とお説教されることになった。

そのころエレノアは、気を失ったアンゲルの様子を見ながら、女中に尋ねた。

「エブニーザを探してきてくれますか……それと、この館に、躁うつ病の人って、います? 部屋に薬が置きっぱなしになっていたのよ」

「あの……言いくいのですが」女中がエレノアの耳元に、小声でささやく「フランシス様です」

エレノアはぎょつとした。

「フランシス?」

「あの、私から聞いたことは内緒にしてくださいね」女中が、怯えた様子でささやいた「じゃないと、私が殺されてしまいます」

「わかったわ」

女中が部屋を出て行った。エレノアが、今言われたことを考えながらぼんやりしていると、アンゲルが目を覚ました。

「大丈夫？」

「……あれ？エレノア？なんで男子寮にいるの？……あれ？」
「こ？今何時？」

アンゲルは寝ぼけているようだ。

「躁うつ病はフランシスよ」

「躁うつ病？何の事……ええっ！？」

アンゲルが跳ね起きた。完全に目が覚めたようだ。

5 - 15 エブニーザ 裏庭

裏庭。

エブニーザが、焚き火に薬を次々と放り込んでいた。

冬のイシユハはそうとうに寒いのだが、エブニーザはコートを着ていなかった。

「こんなもの見たくもないな」

嫌そうにつぶやきながら、箱ごと、炎の中に投げ込んだ。

そして、しばらく一人ではーつと炎を見つめていた。

どうして僕がこんなところで、こんなことしなきゃいけないんだろう？

彼女はどこにいるんだろう？

どうして僕に見えるんだろう？

見えても助けることができなきゃ、何の意味もない。苦しいだけだ。

何も見えなければいいのに……。

5 - 16 アンゲル エレノア エブニーザ 裏庭

アンゲルとエレノアがフランシスの部屋に行くと、まだ白ひげが二人にお説教（常識がどうかいう、いかにもヘイゼルが嫌いそうな話）をしていた。

「あれ誰？」

「さあ……」

「小さいころからお説教をされている方で、二人とも、あの方が苦手であらうしやるの」女中がそーっと二人の間に割って入ってきた
「とても話が長いですから、しばらく静かですよ」

仕方がないので、二人はアンゲルの部屋に戻った。

アンゲルはそこで初めて「エレノアと部屋に二人つきり……」と気づいて顔が真っ赤になった。

いや、別に、変なことを考えているわけじゃないけどな！！

「エブニーザはどこに行ったのかしら？」

エレノアがつぶやいた。

アンゲルは「またエブニーザか！」とがっかりしたが、一緒に探しに行くことにした。

しかし、館内をひととおり探しても見つからない。

「どこ行っただんだ？」

アンゲルがふと窓の外を見ると、誰かが倒れているのが見えた。

慌てて外に出ると、やはりそれはエブニーザだった。

そばには、何かを燃やした跡がある。

「エブニーザ！」

エレノアが慌てて、エブニーザをゆすって起こそうとしたが、反応がない。

「他に燃やすもの、ない？あと、食べ物」

「えっ？」

エレノアが非難するような目でアンゲルを見た。アンゲルは構わ

ずに笑った。

「ヒマだから、三人でここでなんか焼いて食おう。あの二人がいないうちに平和な休暇を楽しもうじゃないか」

アンゲルはわざとらしい、おどけた声でそう言つと、

「寒いな。コートも取つてきた方がいいかも」

ひとり言のようなことをつぶやきながら、館に戻つていった。

「エブニーザ！起きて！風邪ひいちゃうつてば！」

エブニーザは薄眼を開けたが、目の前にいるエレノアに気がつく
と、

「……ほつといて」

と言つてまた目を閉じてしまった。

「ほつといてつて……」

そんな私と話すのが嫌なの？

エレノアはがっかりした。

それにしても……あいかかわらず、なんて綺麗な顔をしているんだ
ろう。

5 - 17 アンゲル エレノア エブニーザ 裏庭

アンゲルは館の中に入って、まず自分の部屋にコートを取りに行った。それから、フランススの部屋を覗いて、まだ白ひげが説教を続けているのを確認。

「いいぞお、一生しゃべってる!!」

「にやけながら台所を探し出し、

「燃やすものと、食べ物ありますか?」

と聞いてみた。中にいた女中が怪訝な顔をしたが、説明すると、

新聞紙の束、マツチ、じゃがいも、小魚の干物を渡された。

「なんだろうこれ、食べたことないなあ……」

小魚をかかげて見ながら外に出ると、まだエブニーザは寝ていて、そばにエレノアがすわりこんで、心配そうな、さみしそうな顔でエブニーザを見おろしていた。

アンゲルはため息をついた。

あの顔は、完全に恋をしてる顔だなあ……。

「こんなのもらつたよ」

アンゲルは、無理矢理笑顔を作りながらエレノアに近づいていき、自分のコートをエレノアの肩にかけた。

「あなたは寒くないの?」

「平気」

「この前凍えてたじゃないの。寒いのは苦手なんじゃ……」

「……そんなこともあったね」アンゲルは自分が嫌になってきた「エブニーザは?」

「一回起きたのに、『ほつといて』ってつぶやいてまた寝ちゃったのよ!」

エレノアは不満そうに叫んだ。

「よほど人に会いたくないんだなあ……さっきもクローゼットに閉じ込められた時『ここのほうが静かがいい』って言ってたんだよ。」

出てきたくなかったみたいだ。そもそもこの別荘にも来なくなかったらしいんだよ。クーがいないし」

「クー……」

エレノアが暗い顔をした。アンゲルはそんなエレノアを見なくなかったので、手元に集中した。新聞紙をばらばらにし、ジャガイモを埋めて火をつけた。幸い風はほとんどない。

「これ、どうするかなあ……放り込めばいいかな？」

小魚を見て悩んでいると、エレノアが、

「網か棒、ない？」

と言いだした。そして林に走って行って、細い枝を何本か拾い、

小魚を突き刺して、炎の周りに立てていく。

「慣れてるね」

「旅芸人の生活って、キャンプみたいなものだから」

エレノアが笑って、旅先でのいろいろな出来事をしゃべりだした。アケパリの母方の祖母は薬剤師で、庭がハーブで埋め尽くされていること。アケパリの公演はいつも大盛況だったこと。母が猛獣使いなので、小さいころからレッドタイガーや蛇と遊んでいたこと。旅先で資金がなくなったとき、父が『釣り禁止』の川でこっそり魚を釣って、それで何とか栄養を取っていたこと。キュプラ・ド・エラのサーカスと共演した時、ピエロの女の子と仲良くなったのに、その子が公演中の事故で亡くなってしまったこと。ドウロソでエレノアが男に追いかけられたとき、曲芸師の父親がトラの檻を開けたとたん、男が悲鳴を上げて逃げて行ったこと……。

「そりゃ逃げるだろ。食われたくないし」

アンゲルはそう言いながら『自分がやられたらどうしよう？』と内心怯えていた。

「でも、トラは檻から出てこなかったのよ」エレノアが、焼けた小魚をかじりながら笑った「母の言うことしか聞かないの。入口を開けても逃げないのよ」

「へえ……」

エブニーザも、眠ったふりをしてしながら聞いている……。

5 - 18 フランシス ヘイゼル 白ひげ 説教終了後

白ひげの説教がようやく終わりそうになった。

「お嬢様、薬をちゃんと飲んでいますか？」

フランシスが、憎悪のこもった鋭い目で白ひげをにらみつけた。

「毎回同じことを聞かないで」

怒って出て行こうとしたフランシスを、白ひげが押さえた。

「いいかげん、ご自分の状態をご理解ください」

フランシスは、白ひげを振り切って出て行った。ヘイゼルが白ひげを突き飛ばしてフランシスのあとを追う……廊下を歩いている間も、二人で口論していたのだが。

ふと、窓の外に煙の筋が見えた。

二人が窓の外を見ると、アンゲルとエレノアが何か燃やしているのが見える。

フランシスが窓を開けて叫んだ。

「何やってんのよ!!」

「げっ、見つかった」

アンゲルが嫌そうな顔をした。フランシスの声で、エブニーザが起き上がった。

「フランシスも食べる？」

エレノアが焦げた小魚を振りかざして笑った。フランシスは走って下に降りて行く……それを見たエブニーザが慌てて逃げ出した。

「おい!どこに行くんだよ!」

アンゲルが叫ぶが、無視だ。

エブニーザは、裏口でヘイゼルとすれ違う時に、

「薬は燃やしました」

と言って中に入ってしまった。

ヘイゼルはにやにやしなから『夕食もここで食おう』と提案。使用人にテーブルやいすを運ばせ始めた。

……別に、焚き火の周りに座ってふつうに休みたかつただけだなあ。どうしても大げさにするんだらう。楽しくないじゃないか。

アンゲルは疲れた顔で、使用人と、えらそうなヘイゼルを見ながら、そんなことを考えていた。

フランシスが、エブニーザを呼びに人を出したが、『食べたくない』という返事が返ってきた。

夜。

エレノアがフランシスの部屋に行き、クローゼットで見つけた薬について聞いただと、

「あんたに関係ないわよ！」

と怒鳴られた。エレノアはひるまずに厳しい声で言い返した。

「私は同じ部屋に住んでいるのよ！それに、友達でしょ？関係あるのよ！」

「私は病気じゃないわよ！」

フランシスが叫んで、また物を投げ始めた。

エレノアが、なんとかなだめて話を聞いたところによると、医者
は躁うつ病だと言ったが、薬を飲むと自分じゃなくなったような気がして怖くなったので、飲むのをやめたという。家のゴミ箱に捨てるとばれるので、薬はヘイゼルに送っていたという。

「ヘイゼル？」エレノアが呆れる。「嫌いなんじゃないの？付きまといわれるって言ってたじゃない」

「だって……他に頼める人いないし」

「そうだけど……」

一体、ヘイゼルとフランシスは何なんだろうと、エレノアは改めて考える。

確かに、フランシスにはクーとエレノア意外友人はいなさそうだが……。

「エブニーザ、頭がいいわね。燃やすなんて」フランシスがつぶやいた。「いや、そんな簡単なことも思いつかない私がおかしかったんだわ。最初からそうすればよかった。そうすれば、ヘイゼルに付きまといわねずに済んだのに」

フランシスを寝かせてから、エレノアが疲れた顔で廊下に出ると、そこにヘイゼルが立っていた。

「何してるの？」

「そんな怖い顔をしなさんな。様子を見に来ただけさ。薬の事もばれてるんだろう？」

「悪いけど疲れてるの」

エレノアは、ヘイゼルを無視して歩き出したが、ヘイゼルは楽しそうについてきた。

「しかし、エレノアには驚くね。あのご令嬢はもう何人もルームメイトを追いだしているのだが……俺の知る限りでは、こんなに長く一緒にいた奴はいない。新記録だよ」

「そう」

そんなことを言われても、エレノアは全く嬉しくなかった。

「いやあ、不思議だ。どうしてあんなヒステリー女と一緒にいられるのかな？コツがあったら聞きたいね」

「ついてこないでくれる？」

エレノアは怖くなってきた。部屋までまとわりついて来る気では？

「わかりましたよ、綺麗な顔でそんな怖い顔をするもんじゃない…

…俺は純粹に不思議に思っただけさ」

エレノアはふり返って、ヘイゼルを厳しい目で睨むと、軽蔑のこもった声でこう言った。

「短気な人なんて、世の中にくらでもいるでしょう？（あなただつてそうじゃないの？）ただ、落ちつくまで待つてあげればいいだけのことだわ。そんなことすらできないんだから、私たちみんな気が短すぎるのよ」

そして、わざと足音をたてて、怒りをあらわにした歩き方で去って行った。

「大した女ですな」

ヘイゼルは、エレノアの後ろ姿を眺めながら、偉そうにつぶやいた。

5 - 20 アンゲル エブニーザ 本屋

次の日。アンゲルは『心理学だけじゃだめだ。精神医学も勉強したほうがよさそうだ、薬の事も知っておいた方がいいかもしれない……でも、両方の資格を取るの……きついな……』と考え始め、街の本屋（先日エレノアとエブニーザがいたところ）で薬学辞典や精神医学の本を探した。しかし、

「高い……高すぎる」

載っている値段を見て顔をしかめた。

生活費が何ヶ月分も飛んでいきそうな金額だ。

「それ、アルターの図書館にありますよ」

という声でしたのでふり返ると、エブニーザだった。

「何やってんだお前」

「何って……本を探しに来たに決まってるじゃないですか。本屋なんだから」

「昨日も来ただろ？」

「もう全部読みました」

「えっ……？」アンゲルは昨日、エブニーザが抱えてきた本の山を思い出して愕然とした。「どうやってあんな量を一晩で読むんだよ！」

「普通に読めば終わりますよ」

平然とそう言うと、エブニーザは、上に向かうエスカレーターに乗っていなくなった。

アンゲルが壁の案内を見ると、

『3F 文学・歴史学・宗教学・郷土史・伝記・エッセイ・占い……』

と書いてあった。

何を探す気だ……？

唇過ぎ。

ようやく目覚めた（目覚まし時計がないので早起きができなかった）エレノアは、自分の部屋のソファで新聞を読んでいる男を発見。

怯えて引きつった声を上げてしまった。男が新聞から顔を出した。ヘイゼル！

「どうして私の部屋にいるの!？」

エレノアが恐怖の顔で叫んだが、ヘイゼルは何とも思っていない顔でこう答えた。

「私の部屋？ここはシュツティファントの所有だぞ。どの部屋もうちの親のものだし、休暇中は俺が使ってるんだから、どこに入ろうが俺の勝手だね」

「だからって女の部屋に入らないでよ!！」

「何を騒いでいらっしやるのかな？別に何もしてないだろ？」

「そういう問題じゃないのよ!！」

「問題なんてそもそも何もないね。勝手に悩み事を作るもんじゃない。最近は何も起きていないのに、自分で不安の種を作ってキヤーキヤー言ってる変な奴が多くてね」

……だめだ、ヘイゼルに何を言っても通じない。

エレノアは文句を言うのをやめた。

「フランシスは!？」

「ご令嬢は出かけましたよ。白ひげが一緒だったからたぶんシグナーの邸宅だろ？ここからそんなに遠くないしな」

……どうりで、朝、起こしに来なかったわけだ。

エレノアが部屋に置かれた時計を見ると、もう1時を回っていた。「どうして急に?」

「母親が会いたいって言うてきたらしい。同情するね。シグナーは

シュツティファント以上にクレイジーだからな」

「エイゼルよりクレイジー？そんなの、人間じゃないわよね？」

「エブニーザは？」

「さあ？アンゲルは本屋に行くって出て行ったよ。まったく、どいつもこいつも、別荘をなんだと思ってるんだ？会社の研修旅行じゃないんだぞ」

一人とり残されたエレノアは、これからどうしようか考えていると、

「劇場にでも行くか？昼すぎに公演があるぞ、すぐ近くだ」

「エイゼルがそう言っつて、ニヤけ笑いを浮かべた。

「悪いけど、あなたと行動を共にしたくないわ。あとでフランスに何を言われるかわからないもの」

「フランスには了解を取ったよ」

「エイゼルがそう言っつと、エレノアが驚きで目を見開いた。

「ミュージカルだ。音楽の勉強になるだろ？」

「でも……」

「早く支度しろよ」

「エイゼルはそう言っつと、ニヤニヤしながら部屋を出て行った。

エレノアは不愉快だった。二人とも、他人のやることを勝手に決めて、相手の意向や都合は全く考えていないのだ！

人を何だと思っつてるのよ！？私は使用人じゃないんですからね！しかしエレノアにはわかってる、二人とも、悪気は全くないと言っつことを。悪気どころか、いいことをしているつもりでいると言っつことも。

エレノアは、重い頭でベッドから這い出た。

5 - 2 2 アンゲル ヘイゼル エレノア 通り

別荘に帰ろうとしたアンゲルは、ヘイゼルとエレノアが、二人で反対側の道を歩いているのを発見した。

ヘイゼルとエレノア？どこへ行く気だ？フランスはどうした？こっそりあとを追うことにした。

「どうしていつもでかい帽子をかぶっているのかな？」

ヘイゼルがエレノアに尋ねた。エレノアは花飾りがついた、つばの広い帽子をかぶっている。

それは俺がしたかった質問だぞおおお！

アンゲルは、物陰に隠れながら心で叫んだ。いつも、大きな帽子を目印にして、エレノアを見つけていたからだ。

「帽子が好きなのよ。昔の貴族は、帽子がないと外出できなかったのよ。服と同じ。着ないで外になんか出れないでしょ？」

「ほほう」

ヘイゼルが年寄りのような声を出して笑った。

「今、こういう帽子ってあまり売ってないでしょう？貴重品よ？」

エレノアが片手を帽子のつばにあてて笑った。死ぬほどかわいいとアンゲルは思った。

通行人もちらちらとエレノアを気にしている様子だ。ヘイゼルもさつきからニヤニヤと嫌らしい笑いを浮かべている。アンゲルは考える。

足元にサッカーボールがあったら、ヘイゼルの頭に命中させてやるのに！

「私のスニーカーの中身は半分以上、アンティークの帽子なの。100年戦争時代のもあるし、もうすこし後の時代のも……」

アンゲルは、列車で運んだ大きなスニーカーを思い出した。

5 - 23 エブニーザ 自分の部屋

エブニーザは、また大量に本を抱えて部屋に戻ってきた。

幸いみんな出かけていて静かだ。

ずっと帰って来なければいいのに……。

つぶやきながら本を読み始める。

と、また女の子が見える。誰も助けに来ないので抵抗するのをあきらめてしまったのか、ぼんやりした顔でされるがままになっていた。

エブニーザは怖くなった。

とうとう抵抗もできなくなってしまったのか？

いや、それより……。

そこで、気づいてしまった。

今までは被害者の視点で彼女を見ていたが、自分は男なのだ。しかも彼女に惹かれている……。

自分も、いつか、同じような、恐ろしいことをしてしまうのではないか……。

震えながら、うろつろと部屋を歩きまわる。

再び映像がよみがえる。彼女の青白い足、だらりと力なく横たわっている手、はだけた下着から見えるまだ幼い、でも十分に丸みのある胸、ほとんど手入れされていない乱れたブルネットの髪、琥珀色の、どこを見ているかわからない虚ろな瞳……。

エブニーザは震えながら身をよじり、数歩よろけたかと思うと、音もなく床に倒れた。

5 - 24 フランシス エブニーザ 別荘

夕方、ようやく親と白ひげから解放されたフランシスが、別荘に帰ってきた。

「みんなは？」

「エブニーザ様だけ帰っていますが、みんなお出かけです」

八つ当たりをしに……いや、様子を見にフランシスがエブニーザの部屋に向かった。

「エブニーザ！」

ドアをノックするが返答がない。

「エブニーザ！？入るわよ！」

ドアを開けると、エブニーザが真っ青な顔で床に倒れているではないか。

「ノノカ！ノノカ！」

フランシスは女中の名を叫びながら廊下に飛び出していった。使用人がやってきて、エブニーザをベッドに横たえて、医者呼んだ。ヘイゼルもエレノアも……どこで何をしているのよ！

フランシスは、いらいらしながら自分の部屋に戻った。自分の気分だけで手いっぱい、倒れていたエブニーザの事を心配する余裕がなかった。

まあ、余裕があっても、他人の心配なんてフランシスはしないのだが……。

ヘイゼルとエレノアが劇場に入ろうとするが、ヘイゼルはとつぜんふり返り、

「そのエンジェル氏も入りますかな？」

とにやにやしなから叫んだ。

アンゲルにつけられていることには、とつくの昔に気づいていたのだ。

「お前ほんとに悪魔だな」

物陰から出てきたアンゲルがヘイゼルを睨んだが、となりのエレノアが、不審者を見る目で自分を見ていることに気がついた。

「俺は帰るよ。金ないし。ティツシュファントムに出してもらうのは嫌だしね！」

背を向けて歩き出した。

「ティツシュファントムって言うな！」

という叫び声がうしろから聞こえたが、無視して立ち去ることにした。

金持ちと観劇か。女の子なんてみんなそんなもんだ。どうせ俺は貧乏なカエルだよ……エレノア、本当に嫌な顔をしてたな……気味の悪い奴だと思ってるんだろうな。

アンゲルは一人いじけながら別荘に戻った。

ソファのある部屋に入ったとたん、フランシスが、すさまじい金切り声で怒鳴りつけてきた。

「どこに行ったたのよ！エブニーザが倒れたわよ！」

「えっ？」

慌ててエブニーザの部屋に行くと、エブニーザはまだ眠っていて、医者が診察しているところだった。たぶん貧血だろうと。

「妙に痩せているね。食事をちゃんと取るべきだな。鉄分があきらかに不足しているよ」

医者は、そう言って帰って行った。

「エブニーザ、きのう、夕食を食べなかったわね。ここに来てから食事してないんじゃない？」

「そういえば」アンゲルも気がついた。「こいつが何か食ってるところ、見たことないな」

「えっ？」

フランススが怪訝な顔でアンゲルを見た。

「寮の食堂は？」

「こいつ、人が苦手だから、食堂には行かないんだよ」

「じゃあどこで食事を」

「それが……見たことないんだよ」

「一度も？」

アンゲルはしばらく記憶をさぐってみるが……ヘイゼルが部屋で何か食っている（人から奪うのも含む）ところばかり浮かび、エブニーザが何か食べているのを見た記憶が、全くないことに気づいた。「ああ。一度も見たことがない」

しばらく二人とも無言で立ち尽くしていたが、突然フランススが、

「……明日の予定は決まったわね」

と言いだした。

「は？」

「エブニーザに食事をさせるの。全員手伝ってもらおうよ」

何かを企んでいるかのようにニヤニヤし始めたフランススを見て、アンゲルはいやいな予感がした。

今のうちに逃げ帰ったほうがいいかも……。

「今、逃げようと思ったわね？無理よ。ヘイゼルが連れ戻しに来るわよ」

フランススが断定的な口調で言いながら、横目でアンゲルを睨みつけた。

……どうして心を読むんだよ！？

アンゲルは本気で恐怖を感じた。

エブニーザは何も知らずに眠っている……。

夕方、ハイゼルとエレノアが帰ってくると、さっそくフランシスが『明日の予定』を発表した。

エレノアは『倒れた』と聞いてエブニーザの部屋に走っていった。エブニーザはまだ眠っていた。

ハイゼルとフランシスは、何を食わそうか、どこのレストランに連れて行くか、いつそのこと料理人を呼んでここでごちそうを作ってもらおうかと相談を始めた。

いつもはケンカばかりしているのに、陰謀がからむと仲が良くなるらしい。

「目覚めないほうが幸せかもなあ、エブニーザ」
アンゲルがつぶやいた。

「何か思い出したのかしら」
廊下を歩きながらエレノアが言った。

「そうかもね。また女の子が見えたのかも」
アンゲルはどうでもよさそうにつぶやく。

「彼女、ほんとにいると思う?」
「思わない。妄想だよ」

アンゲルはそう答えて、自分の部屋に戻ることにした。
昼間の観劇の話がされたら嫌だからだ。

エブニーザが目を覚ました。

しかし、エレノアの顔を見たたんブランケットの中にもぐって、
「近寄らないで！」

と叫んだので、エレノアはショックを受けて出て行った。

エブニーザは怯えていた。

夢で『彼女』を犯している男たち……いずれ自分も同じことをし
てしまうのではないか……？

そう考えているので、女性（エレノア）が近づくと、夢の女の姿
とだぶって見え、全身で恐怖を感じるのだ。

アンゲルが様子を見に来たが、やはり何も話そうとしなかった。

「お前、なんでエレノアに冷たいの？」

「冷たい？」

エブニーザは本気で驚いているようだ。

「そんなことはありません」

「じゃあなんだよ、最近の態度は」

「それは……」

口ごもる。『襲ってしまいそうだから』なんて言えないからだ。

エブニーザは質問に答える代わりに、

「僕は人間じゃない……」

かすかな声でつぶやいた。

「は？何それ？」

アンゲルが聞き返したが、返答はなかった。

5 - 28 5人 宴会？

次の日。フランスとヘイゼルが、シグノーの料理人に大量にごちそうを作らせ、エブニーザに『食わないと寮に返さない』と宣言した。

もちろんエブニーザは真っ青だ。エレノアとアンゲルはそろって『無理に食べさせなくても……』と呆れた。フランスが無理矢理料理を押しつけようとしたとたん、エブニーザは即座に脱走して部屋にこもってしまい、ヘイゼルがドアをがんがん蹴っても出てこない。

結局、残り4人で宴会となった。

「クーをつれてくればよかったのよ。エブニーザと仲良しでしょ？ どうせノレーシユの行事なんて大したことないんだから」

エレノアはずっと、落ち込んだ様子で黙っている。

「今からでも呼びましょうか？」

エレノアを気遣ってフランスが言ったが、ヘイゼルは興味がないさそうだ。

「やめとけ。それより、確かにあいつは痩せすぎだな、寮に帰ったら……」

何か企みそうなヘイゼルに、アンゲルは、

「おい、帰ってからもこの陰謀は続くのか？ ほっといてやれって。

おしつけるとますます何も食わなくなるぞ。『やれやれ』って人に言われるとますますやりたくなくなるんだよ。心理学的に」

と警告した。

「あっそ」

ヘイゼルがうんざりした顔をした。フランスが真面目な顔でアンゲルを見た。

「教会っ子が心理学なんかやってていいわけ？ 教会に捕まらないの？」

アンゲルは言葉に詰まった。

エレノアはそれを察して、あわててフランスに料理を勧めるが、差し出した皿はヘイゼルに取られ、それがきっかけでいつもの口げんかが始まってしまった。

「物を投げ始めないうちに逃げようか」

アンゲルとエレノアは、急いで廊下に逃げ出した。

エブニーザを心配したアンゲルとエレノアは、二人でエブニーザの部屋のドアをノックしたが、返答がない。

カギは開いていた。そーっとドアを開けると、エブニーザは眠っていた。

眠っている時は、とても安らいでいるように見える。

「やっぱこいつ、起きないほうが幸せなんだろうなあ」アンゲルがつぶやいた。「明日、エブニーザを連れて寮に帰ろうと思うんだ。これ以上ここにいてもやることないし。こいつはもとからここにいるのが苦痛そうだし、俺は帰って勉強したい」

エレノアが驚いた目でアンゲルを見た。

「エレノアは残ってフランシスと遊びなよ。せっかく来たんだから。でもヘイゼルとは付き合わないほうがいいと思うけど」

エレノアは不愉快な顔をして立ち上がり、

「そうするわ」

冷やかに言って出て行った。

「明日帰るんですよね」

と声がしたのでベッドの方を見ると、エブニーザが目を覚ましていた。

「聞いてたのか？」

エブニーザは答えずに、またブランケットにもぐりこんでしまった。

「寝るのはいいけど、荷物まとめとけよ……って、ほとんど持ってきてないか」

アンゲルが立ち上がって出て行こうとしたが、疑問が頭をかすめたので足を止めた。

「おい。昨日『僕は人間じゃない』とか言ってたよな、あれはどういう意味だ？」

「説明できません」
きつい声が返ってきた。アンゲルは黙って出て行くことにした。

5 - 30 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 車内

次の日、アンゲルとエブニーザが、自力で帰ろうと駅に向かって
いると、

「待て待て待て、俺を置いて行く気か？」

ヘイゼルが追いかけてきたので二人とも驚いた。

「お前の別荘だろ？」

アンゲルが嫌そうな顔で抗議したが、ヘイゼルはかまわずについ
てくる。

「また白ひげが来たらどうすんだ？ここはシグノーのご令嬢にでも
譲るさ」

結局三人で、ヘイゼルが呼んだ高級車に乗って帰ることになった。
車の中ではヘイゼルが、

「俺たちがケンカしてるとかならず現れるんだ。きつとどこかに盗
聴器を仕掛けてるぞ。屋敷中を検査してやる！あいつの家もな！だ
いいち今時なんだあのヒゲは！独立戦争の肖像画じゃあるまいし…
…夜中にシグノーの家に忍び込んで剃ってやる！！」

などと、延々と『白ひげ』の悪口を言いきくり、エブニーザはず
っと無言で窓の外を見ていて、アンゲルはその二人の間で、じっと
耐える羽目になってしまった。

やっぱり、ティッシュファントムについてきたのは間違いだった
！！

5 - 31 エレノア フランシス 別荘内

フランシスはヘイゼルの別荘を、自分の家のように堂々と使っていた。使用人たちも慣れたように、フランシスを主人として扱っていた。

エレノアは、そんなフランシスと使用人たちに驚きながらも、館内が急にがらんと広く感じられ、寂しくなってしまった。

エブニーザ、どうしてあんなに私を嫌ってるんだろう？

それにアンゲルも、急に帰るなんてどういうこと？

フランシスはワイン貯蔵庫を勝手に開け、高そうなものを選んで勝手に飲み始めた。

エレノアは驚いて、

「勝手に飲んじゃだめよ！」

と叫んでワインをフランシスから奪い取ったが、ノノカやワインの管理人（そんなものまでいるとは！とエレノアは驚いた）は、

「フランシス様には好きなだけ飲ませるとヘイゼル様が」

と言つので、呆れてしまった。

「つきまとわれたくないって言つてたじゃないの！どうしてこんな甘えるようなことをするのよ？」

「甘える？冗談じゃないわ。気持ち悪いこと言わないで頂戴。お互いに利用し合っているだけ」

フランシスがあつというまに3本もワインを開けたので、エレノアは、

もしかしてアルコール中毒なんじゃ……。

と不安になり、飲むのをやめるよう言ったのだが、当然フランシスは言うことを聞かない。

フランシスが酔いつぶれて眠った頃、なんと、あの白ひげがふたたび戻ってきた。

エレノアが、

「私は飲むなって言ったんですよ！」

とあわてて弁解すると、白ひげは無表情でこう言った。

「わかつております。本当に困ったお方だ。よくお嬢様と同じ部屋に住めますね。その忍耐力に敬意を称しますよ」

それはとても嫌味な声だった。

「この方は生まれつき精神を病んでいましてね、みな手を焼いているのです。何かあったらここにご連絡を」

白ひげは、名刺（ゴノ・フレウルと書いてある）をエレノアに渡し、使用人に『ワインを隠せ』と命じて去っていった。

エレノアは、名刺を服の中に隠した。使う日が来ないことを祈りながら。

「フランス！起きて！もう寮に帰りましょう！」

フランススをゆすって起こそうとしたが、深く眠りこんでいるのか、起きなかった。

使用人がやってきて、フランススを担ぎあげた。

運ばれていくフランススを見ながら、エレノアは悲しげな眼で考えた。

もしかしたら、フランススも、エブニーザと同じで、目覚めないほうが幸せなのかもしれない、と。

独房 囚人11番 25番

25番は、モップを抱え込んだまま床に座り、熱心にノートをめくっている。

彼の任務は掃除だけで、一部屋十数分で終わることになっている。あまり長居をすると、監獄の責任者に不信がられるので、一回につき数ページしか読むことができない。

一応断っておくが。私は彼に『読んでもよい』とは言っていない。

ある日突然、勝手に部屋の隅のノートを手にとって、めくり始めたのだ！！

大変不愉快だったが、止める気力も勇気も私にはなかった。

いや、そんなことはいい。

話の続きを聞かせよう。

二人の試練はこれからだ。

6 - 1 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮の部屋

別荘での騒動が済んで、寮に帰ってきたアンゲルは、休暇中にもかかわらず、担当の講師から呼び出された。

エブニーザの事かな……。でも、シートベルトでぐるぐる巻きにしたのは俺じゃなくてヘイゼルなんだよな！カウンセラーに聞かれたら、はつきりそう言う……。。

そう考えながら、呼ばれた部屋に入った。

「アンゲル。落ちついて聞いてくれ」

不思議なほど無表情の講師に聞かされたのは、こんな言葉だった。

「クラウスという生徒が、寮で首をつって死んでいた」

「アンゲル？アンゲル？聞こえてるか？」

講師が必死に自分に向かって何かしゃべっている。

しかし、アンゲルの意識はどこかに飛んでしまっていた。

「仲が良かったんだろう？何か聞いていないか？」講師が深刻な顔で尋ねた。「同室の生徒は、何も変わったことはなかったと言っていて、遺書もないそうだ」

アンゲルは、何も答えることができなかった。

ただ、最後に見たクラウスの顔……今思えば、不審なほど機嫌の良さそうな顔だった……と、彼と話したことを、必死で記憶からたぐりよせようとしていた。しかし、記憶はつかもうとする手をかすめてしまい、肝心なことは何も思い出せない。

「そういうこともある、気にするな、おまえのせいじゃない」

講師や、偶然居合わせた他の学生は、口々にアンゲルを慰めた。

しかし、クラウスの、祖国や宗教に対する悩みを、自分のことのように考えていたアンゲルには、ショックが大きすぎた。

……俺のせいだ。

ふらふらと寮に帰って来たかと思うと、部屋のソファーに倒れ込み、寝込んだまま、何日も動こうとしなかった。

「たまには外に出たほうがいいですよ」

3日ほど経ってから、エブニーザが声をかけると、

「お前に言われちゃおしまいだ」

とだけ返ってきて、やはり動く気配がない。

一週間ほど経って、寮費を滞納しているという電話があった。取ったのはハイゼルだ。

「あつそ、はいはい、伝えておくよ」

ハイゼルは一度電話を切り、またどこかにかけてはじめた。

「今月は倍振り込んでくれ。いや、別に、何も破壊してないよ。ちよつと別な部屋も使わせてもらったんでね、今月だけさ……」

そして電話を切り、今度は銀行に電話だ。

「今月の寮費を振り込んでくれ。え？もう払った？だれが俺のつて言った？人の話は最後まで聞けよ。アンゲル・レノウスだよ……ああ、つづりはエンジェルだよ」

電話を切ってから、ハイゼルは、そーっと、アンゲルが横になっ

ているソファアに近づき、毛布をめくって、アンゲルが眠っていることを確認した。

珍しくからかうようなことを言わず、何日も黙って様子を観察していたヘイゼルだが、8日目の夜、まだアンゲルが寝込んでいるのを見て、とうとうキレた。

アンゲルが寝ているソファアごと、力任せにひっくり返したのだ！！

「いいかげんにしろ！？」建物中に響くすさまじい怒鳴り声だ「いつまでいじけてる気だ！？アルバイトはどうしたんだ？」

さかさまになったソファアの下から、弱々しい声が聞こえてきた。「お前にはわからないよ。管轄区は複雑なんだ。お前みたいな金持ちの坊ちゃんにわかってたまるか……」

ヘイゼルがますます怒り狂い、ソファアをがんがん蹴り始めた。しかも、寮全体にとどろくようなすさまじい大声で怒鳴り続けた。

「とつとと出てこい！！！ひ弱な教会つ子め！そんなに複雑なら自分で解決してみろってんだ！！何のためにイシュハに来たんだ！？寝込みに来たのか？ああ？」

「簡単に言うな！それと怒鳴るな！耳が聞こえなくなる！！」

アンゲルがさかさまになったソファアの下から、耳を押さえながら這い出てきた。そして二人でぎゃあぎゃああとかみ合い＆言い合いを始めてしまった。エブニーザは、怖くて自分の部屋から出ることができず、ドアにくっついて震えながら、じつと二人のやりとりを聞いていた。

そのうち、騒ぎを聞いた事務の職員がかけつけてきて、いつかのようになまた二人で怒られた。

6・2 エレノア フランシス 帰りの車内

エレノアとフランシス（二日酔い）が帰りの車の中で話している。フランシスは具合の悪そうな顔で文句ばかり言っていた。

「ヘイゼルは悪魔、エブニーザは白い目の化け物、アンゲルは退屈な教会っ子」

「ヘイゼルのワインでしょ？きのう飲んだの。そんなこと言わないの」

「ヘイゼルのじゃないわよ、シュッティファントのワインよ。腐るほどあるんだからいいでしょ、私が何本飲んだって」

「フランシス……」

「それよりあなた、アンゲルとはどうなの？」

「友達よ！」エレノアが嫌そうな顔で叫んだ「どうしてみんな、アンゲルと私をくっつけようとするの、エブニーザだって……」

そこで、エブニーザのここ数日の冷たい態度を思い出した。

どうしてあんなに嫌われているんだろう……？

「あんな気味の悪いのはほっときなさいよ。あんたに合うのはもっとしっかりした男」

そこで、フランシスが思い出したようにこう言いました。

「クーに電話しなきゃ、寮に帰るって」

「……どうして？」

「どうせ行事はもう終わってるし……ウフフ」

フランシスが意味ありげに笑いだした。

エレノアは理由を訪ねたが、教えてもらえなかった。

6 - 3 アンゲル タフサ・クロツチマー クラウスの部屋

アンゲルは、クラウスの部屋で立ちつくしていた。

女神フアナティの聖書と、アニタの神話が書かれたイシュハの本が一緒に並んでいるのを見つめる。

前に二人で話したことを思い出しながら。

ルームメイトの姿もない。きつとコミュニティにでも行ったのだろう。あの、狂信的で陰惨な……しかし、心の底から女神を信じていて、間違っても自殺なんてしなさそうな連中のところに。

イシュハの奴らは、こんなことで悩まないよな。

どうして、管轄区の間人だけ、こんな面倒なことになるんだろう……。

生気のない目でぼんやりと立ち尽くしていると、ドアが開き、初老の男性が入って来た。

振り向いたアンゲルは、相手の顔を見て、驚いた。

そこにいたのは、タフサ・クロツチマーだった。

教科書に顔写真が載るほど高名な心理療法士であり、精神科医でもある、アンゲルが心理学を志すきっかけになる本を書いた人物だ。「幽霊でも見たような顔をしているね」

タフサが、深みのある声を発した。

「タフサ・クロツチマー？」アンゲルがかすれた声でつぶやいた。「本物？」

「本物だよ」

アンゲルは知らなかったのだが、死んだ学生は、ずっと前から回到りに『どうしても女神を信じられない』とむやみやたらに話して、家族や友人たちとトラブルを起こしていたため、一度タフサのもとに、学校から相談が寄せられていたのだそうだ。

「僕が管轄区出身だって学校は知ってるからね、適任だと思ったんだろう。同じように信仰の問題で悩んだ。だから助けられると思っ

た。でも失敗だったな」タフサがうつろな目で部屋の天井を見上げた。「16歳か……」

タフサはそうつぶやくと、部屋から出ようとしたが、アンゲルはタフサを引きとめて、自分が同じように悩んでいることを打ち明けた。クラウスから生前聞いた話も。

話を聞いて、これは死んだ学生と同じくらい深刻だと判断したタフサは、アンゲルにこんな提案をした。

「私のところに来てみないか？首都までは、アルターから列車に乗ればそんなに時間はかからない。教えられることはたくさんあるよ。管轄区から来たならなおさら、相談相手は必要だろう？アルターには管轄区出身の指導者はあまりいないからね」

タフサがアンゲルに名刺を渡した。受け取る手が震えた。

「何かあつたらすぐに電話するんだよ」

そう言い残して、タフサは部屋を出て行った。

……これは運命なんだ！

アンゲルはまた、お得意の思い込み発言を頭の中で繰り返した。

しかし、すぐに、自分が今いる場所を思い出した。

クラウスの部屋。

死んでしまったものの部屋だ。

そこに、自分だけが生きて、チャンスをつかんで立っている……。

いいんだろうか、本当にいいんだろうか……。

俺はどうすればいいんだ？

アンゲルは、渡された名刺を見た。『タフサ・クロツチマー』と、よく見かけるフォントで印字されている。その下に、大学の研究室の電話番号と、タフサが運営している精神病院の住所が載っていた。首都まで通うのか……やばいな、交通費が出せないぞ。

そう思いながら、こんなときにまで金の心配をしている自分が空しくなってくる。

アンゲルは名刺を財布にしまうと、寮を出た。

途中でロハンとすれ違ったが、話す気になれなかったので素通り

してしまった。ロハンも、同じ寮で自殺者が出て、それがアンゲルの知り合いだということを知っていて、アンゲルには話しかけなかった。何を言えればいいかわからなかったのだ。

エレノアは、ポートタウンで歌のオーディションを受けていた。しかし、他の人が歌っているのを聞いているうちに、自分は場違いだということに、すぐ気がついた。

……ロックとか、ヒップホップの人が来るところよね、ここ。今、エレノアの目の前で、過激な服装のロックバンドが、耳をつんざくような大音響で、ほとんど罵声のような歌を怒鳴り散らすように歌っていた。

そのうち自分の番が回ってきた、エレノアは懸命に歌ったが、「あなたの歌い方って、昔のオペラなのよね。そんな時代終わったわ」

と審査員に言われてしまった。確かに、流行っているような音楽じゃないわ、私が作っている曲は……。

エレノアは、自分の音楽に疑問を抱き始めていた。かといって、イシュハで流行っているロックやヒップホップが、エレノアはどうしても好きになれない。うるさいだけ、あるいは、八つ当たりをしているだけ、罵声を浴びせているだけにしか聞こえない。

どうしようか、悩みながら道を歩いていると、ヘイゼルとフランシスが言い合いをしながら歩いて来るのが見えた。

エブニーザが、泣きそうな顔でそのあとについて歩いているのも、「フランシス？」
声をかけると、

「これ買つといて！」
フランシスは、エレノアにメモを投げつけ、その場を去ってしまった。

ヘイゼルとエレノア、エブニーザで、カフェに入って席に着いた

が、楽しそうなのはヘイゼルだけだ。

旅先ではいつもみんな、私の歌に拍手してくれたけど、あくまでそれは旅芸人の歌だから、っていうことなんだわ。正式に歌手としてCDを出したり、大きなホールで演奏するには、私の歌は古すぎるのかも知れない……。どうしよう。

そんなふうに悩んでいるエレノアを横目で見ながら、エブニーザが考えていたのはこんなことだ。

エレノア、どうしてアンゲルの気持ちに気がつかないんだろう？もしかして、もう気が付いているのかな？知っててわざと知らないふりしてるのかな？怖いな。女の人ってみんなそうなのかな？アンゲルは最近カフェに来ないのに、心配にならないのかな？

ヘイゼルがフランススの悪口を盛大に述べている間、エレノアとエブニーザは聞いているふりをして頷きながら、こんなふうに、全く別のことを考えていた。

「とにかく、あいつは悪魔だ！間違いない！」

ヘイゼルが叫んだ。通行人が彼を胡散臭そうな目で見ているが、一向に気にしている様子はない。

「言い過ぎよ」エレノアが注意した。「あなたたち、しゃべり方が良く似てるわ」

「やめてくれえ、気味が悪い」

ヘイゼルが本当にうんざりしたように首を左右に勢いよく振ったと思うと、フランススの気取ったしぐさをまねて、両手で頬づえをついて目をぎよるぎよると上に動かした。その様子があまりにもコミカルで、しかもよく似ていたので、エレノアは声を上げて笑った。エブニーザはそんな二人を黙って見つめている。

「よかつたら、夕食でも一緒にしませんかね？」

ヘイゼルがふざけた口調でエレノアを誘った。エブニーザがはっとしてエレノアの方を見た。

「一つだけ条件をつけてもいいのなら」

エレノアは挑発的な笑みを浮かべた。

エブニーザはその顔を見るのが苦痛だった。エレノアの笑い方が、エブニーザには、夢に出てくる痛めつけられた女の顔と同じように見えたのだ。

「何だね？」

ヘイゼルはそんな親友の様子にも気付かず、偉そうに頬づえをついたままだ。

「私の親友を、二度と『悪魔』なんて呼ばないって約束してくれたら」エレノアが立ちあがった。「夕食をご一緒してもいいわ」

「わかった。大変難しい課題だが、挑戦してみよう。ただし三日だけね！」

「三日？私の価値はそれっぽっちなの？」

「一週間。頼むよ、エレノア。君の価値の問題じゃなくて、俺の忍耐力の限界について話しているのだぞ？」

「大した忍耐ですこと！」

エレノアがわざと気取った口調で、皮肉っぽい笑いを浮かべながらその場を去っていく。

「大した女ですな！ん？」

ヘイゼルがエレノアの口調をまねて、エブニーザにやりと笑いかけた。

エブニーザは笑おうとしたが、うまく顔の筋肉が動かない。引きつっているのが自分でもわかった。

……絶対何か企んでる！

ヘイゼルの楽しそうな様子から、エブニーザはこう確信していた。そうだ、きつと、エレノアを誘えば、フランシスやアンジェルが動き出すと思ってるんだ、きつとそうだ！……それにしても、どうしてエレノアも、ヘイゼルも、こんなふうに軽い会話ができるんだろう。

いや、普通の人間はできるんだろうな。

そうだ、僕は普通の人間じゃないんだ。だからまともになど会話もできないんだ……。

6 - 5 アンゲル クー 図書館内

図書館で熱心に本を読んでいる（ように見えるが、実は上の空の）アンゲルに、

「いろいろ大変だったそうね」

と、声をかけてきたのは、クーだった。

「行事は？」

「とつくの昔に終わったわ」

隣の席に座る。アンゲルがタフサに出会ったことを話すと、

「タフサ・クロツチマー？聞いたことがある。そういうことってあるのね」

と驚いた様子だ。

「今、交通費をどうしようか考えてるところなんだ。それに、別に学費がかかるかもしれないし……」

アンゲルが力なく話すと、

「エブニーザに出してもらえば」

クーが平然と言い放った。

「そんなことできないよ」

「どうして」

「どうしてって……」

「あの子、どうせ稼いでも使わないのよ」

「ダメだよ、友達同士でそういう金の貸し借りはよくない。対等に話せなくなるだろ」

アンゲルがそう言うと、クーはにっこり笑って立ち上がり、「友達ね？」と言いながら、アンゲルを抱きしめた。「その言葉が聞きたかったの」

真っ赤になってポカーンとしているアンゲルを置いて、姫君クーは、優雅な足取りでその場を去っていった。

「おい、今の、ノレーシユの姫君だろ？知り合いなのか？」

近くの席に座っていた学生が、興奮した声で尋ねてきた。

「……友達の友達」

アンゲルは呆然と、クーが去った方向を見つめながらつぶやいた。

6 - 6 エレノア クー フランシス 女子寮の部屋

エレノアが寮で本を読んでいると、クーがやってきて、とつぜん抱きついて来た。

「何？何なの！？」

驚いたエレノアがクーを押しのけると、

「友達に抱きついちゃいけない？」

クーが拗ねた顔をした。

フランシスが部屋から出て来た。

「クー、エレノアをからかうのやめてちょうだい」と渋い顔をする

「ただでさえ最近悩み顔なんだから、見ててうっとおしいったらありゃしない」

「悩みて何？」

エレノアがしかたなく、イシユハで流行っている音楽と、自分の音楽が違う、と話すと、

「そんなの、あなたの個性なんだからいいじゃない」

クーは、何が問題なのかよくわからない様子だ。

エレノアはフランシスに、恐る恐る

「ヘイゼルが夕食に行こうって言ってたわ、冗談だと思うけど」と話すと、

「いいじゃない、おごってもらいなさいよ。一番高いのを注文しておごらせなさい。あんたは出しちゃだめよ。相手はシュツティファントなんですからね」

予想とは違い、協力的な返事が返ってきた。

エレノアはほっとした。また怒りだしてもめるかと思っていたからだ。

次の日。アンゲルは、めずらしくカフェにいるエブニーザを発見した。

「珍しいな。どうした？」

「人に慣れようと思って……」

エブニーザが、弱々しい声でつぶやいた。

「人に慣れる？」

店内では、昨日行われたサッカーの試合をめぐって、学生が大声でさわいでいた。笑い声や怒鳴り声が響いて来るたびに、エブニーザがびくつと体を震わせて怯えたような顔をする。アンゲルは昨日の試合を思い出した。

「試合の審判ミスで盛り上がってるんだよ。お前を笑ってるわけじゃない」

「どうしてわかるんですか？」

「だって、ユニフォーム着てる奴がいるし、スポーツ雑誌持ってる奴がいるだろ？それに昨日の試合は本当に審判がいかれてるんだよ。誰が見たってあれにレッドカードはないだろ……」

「違います」エブニーザが厳しい表情をした。「僕が、自分が笑われてるような気がするっていうことを、どうして知ってるんですか？」

「それは……カウンセリングの事例にそういうのがあったから、たぶんお前もそうなんだろうと、人が苦手そうだし」

自分も時々そんな気がするんだ、とは、アンゲルは言えなかった。

「つまり推測ですか？」

「まあ、そうだけど……」

「自分はそうやって人の事を勝手に推測するのに、どうして僕の言うことはみんな妄想だって言うんですか？」

「……なんか話がずれてない？」

また大きな笑い声が響いてきたので、エブニーザは下を向いて黙

り込んだ。

こいつ、人に慣れるだけで人生終わりそうだな。

アンゲルは心から哀れに思った。

「アンゲルはここで勉強してるんですか？うるさいのに」

「いつもはこんな騒いでないよ。お前、悪い日に来たな」アンゲルが笑う。「エレノアがそろそろ来るころだ」

アンゲルが腕時計を見ながらそう言うと、エブニーザは急に立ち上がり、

「帰ります」

とだけ言つて、騒いでいる学生を避けるように、遠くの座席を迂回して出て行った。

……エレノアと何かあったのか？

その後やってきたエレノアは、アンゲルを見て目をしばたかせた。

「久しぶりね……もう、大丈夫なの？寝込んでたんでしょ？」

「平気とは言い難いけど」アンゲルはうすく笑った。「友達が亡くなつたんだ」

「ヘイゼルに聞いたわ」

「ヘイゼル……」

……なんでもべらべらしゃべる奴だな。

「別荘でも一緒に観劇してたよな……仲がいいんだな」

言つてから、嫌味だなど思ったが、遅かった。

「そういうことじゃないの」エレノアが困った顔をした。「そういえば、ヘイゼルに夕食に誘われたんだけど……」

「行けば？」

アンゲルはかなり投げやりな言葉を発した。

人が悩んでるのにそれかよ！！

……いや、エレノアやヘイゼルには関係ない話だな。どうして管轄区だけこんなややこしいんだろう。

「行くけど……フランシスもいって言ってたし……」

エレノアが気まずそうに、小さな声で言った。

「フランシス？」

何となく嫌な予感がするアンデルだった。その予感は当たるのだが。

6 - 8 レストラン騒動

ヘイゼルとエレノアがレストランで食事をしている……のだが、すぐ裏の席で、フランシスとアンゲル（強制連行された）が、じつと二人の会話を聞いていた。

「何で俺がこんなところに」

「何よ、私に一人で食事しろって言うの？」

「クーと来いよ！俺は金がないんだ！」

「クーは別に用事があるって言うってたんだからしょうがないでしょ！」

アンゲルは仕方なくメニューを眺めていたのだが、そこには、外国語としか思えない意味不明な単語が並び、価格のところにはずらつと『時価』とだけ書いてある。

「おいおいおい、時価って何だよ？いくらかかるんだよ？」

「本日のプレゼペドロヒメネス、ウズラとエビのローストソースジュドクリュスタッセ」

向かいのフランシスは慣れた様子で注文しているが、この注文内容からして、アンゲルには何の事かさっぱり理解できなかった。別な世界の呪文のようだ。

「アンゲルも同じものね」

「えっ？」

「かしこまりました」

固まっているアンゲルには構わず、ウェイターは去って行った。

「おい！勝手に決めるなよ！金がないって言うてるだろ！」

「いいでしょ、払うのは私なんだから」

フランシスは明らかに見下した態度だ。

「ところで、時価って何？」

「ハア？」フランシスが軽蔑の声を上げた。「時期によって値段が違っつてことよ。食べ物には旬があるでしょ？当たり前じゃないの」

「しょうがないだろ、レストランに客として来たのは初めてなんだから」

フランシスが驚愕の目でアンゲルを見た。

「信じられない。そんな人間この世にいるのね。新しい発見だわ」

「……そんな発見されてもちっとも嬉しくないね！」

相性の悪い二人が、不毛な言い合いをしているところ、同じレストラン内の離れた席に、クーとエブニーザがいた。

「よくないですよ、こういうの」

「静かにして！」困った顔のエブニーザに、クーが注意した。「私が心配してるのはね、どうせフランシスの事だから、今は隠れてても、そのうち騒ぎだしてヘイゼルと大げんかを始めるに決まってるってことよ。あなたにも見えてるでしょう？」

「見えますけど……でも……」

エブニーザは気が進まない様子だ。

「そしたら、私とあなたでアンゲルとエレノアを連れ出すの。別な所で二人をくつつけるわ。おわかり？」

クーはとても楽しそうだ。

そして予想通り、ヘイゼルが自分の悪口を言っているのを聞きつけて逆上したフランシスが、エレノアとヘイゼルの席に向かって走り出し、ヘイゼルは、

「こんな事だろうと思ったよ！ほんと俺の言うことが気になってしょうがないんだろ！」

と、相手の神経を逆なでするようなことを言ったため、やはり物を投げ合うケンカに発展した。

クーがエレノアを連れ出そうとしたが、エレノアは、フランシスを止めようと必死で、その場を離れようとしなかった。

エブニーザはアンゲルと一緒に外に出ようとしたが、フランシスが投げた皿が頭に当たって倒れてしまう。

「エブニーザ！」

エレノアが悲鳴を上げた。

「おまえらいいかげんにしろよ！」

アンゲルが怒鳴った。

レストラン内で暴れたため、警察がやってきて、6人とも追い出されてしまった。

クーは、飛び散った料理で汚れた服を見おろしながら、

「明日あたり、タブロイドにスクープされそうね」

と、つぶやいた。

フランスとヘイゼルは、迎えに来たシグノーの運転手にむりやり車に乗せられて帰ってしまった。

「うちに来て、飲みなおさない？」

クーが残りの3人を誘ったが、エブニーザは

「頭が痛いから帰ります」

と、その場を離れてしまった。

アンゲルとエレノアは、クーの家（警備がいる）に向かった。

しかし、部屋に二人を案内するなり、クーはどこかに電話をかけ、「あら？そう？今行くわ」クーが電話を置いて二人に笑いかけた。「用事ができたわ、遅くなるからごゆっくり！」

クーはそう言うなり、二人を置いてどこかへ出かけてしまった。

二人きりでとり残されて、気まずく黙り込むアンゲルとエレノア。

「どうしてレストランにいたの？」

「どうしても何も、フランスに無理矢理連行されたんだよ。まさかエレノアがいるとは思わなかった」

「そうなの……文句ばかり言ってるけど、フランスって、ヘイゼルが気になってしょうがないのよ」

「それはヘイゼルも同じだな。エレノアを誘ったのって、最初からフランスに嫉妬させるためじゃないか？」

「そうかも……ああ、なんだか嫌な感じ。利用された気分よ」

「嫌な感じどころじゃないよ。俺はヘイゼルを殴ってやりたいね」

「だめよ」

また二人とも黙り込む。

エレノアは立ちあがって、クーの本棚を探った。

「読めない本ばかりだわ、全部ノレーシュ語」

「外国語は何を取ってるの？」

「ロンハルトよ。ロンハルトの歌をよく歌うから」

「そうか……」

「アングエルは？」

「アケパリ語」

「アケパリ？」エレノアが、笑い声の交じった声で叫んだ。「難しいのを選んだのね。漢字を覚えるの大変よ。父も苦戦してるわ」

「いや……アルファベットじゃない文字を一度学んでみたかったんだ」

本当は、エレノアの母親がアケパリ人だから選んだのだが、それは言わないことにした。

その時、アングエルは、エレノアが本を開いたまま、硬直していることに気がついた。

「どうしたの」

「だめ！だめよ！これは見ちゃだめ！」

エレノアが見ていた本を慌てて本棚に戻した。

「なんだよ」

アングエルが手を伸ばそうとすると、エレノアがつかみかかって止めようとした。本が床に落ちた。

……なんとそれは、女性のヌード写真集だった！

しかも、修正なし、何もかもが写っている……。

エレノアがあわてて拾い上げて、投げ込むように本棚に戻した。

アングエルの顔は真っ赤だ。

「どうしてクーがそんなものを」

「わからない……」

お互いを見て、目が会ったとたん同時に視線をそらして横を向く二人。

「……帰った方がよさそうだ」

「そ、そうね！」

アンゲルはわざとらしく腕時計を見て、

「うわあ、もう日付が変わる！」

と叫んだ。

二人はあわててクールの部屋を出て行った。

アンゲルは、エレノアを女子寮の前まで送ったが、道を歩いている間も顔を合わすことができず、二人とも終始無言のままだった。

6-9 クー エブニーザ カフェバー

そのころ、クーは別なカフェバーで、エブニーザと合流していた。「ほんとに二人を置いてきたんですか？家に？」

エブニーザは呆れた。

「頭は大丈夫？」

「まだ痛いけど、たぶん、そんなに重症じゃないと思います」

クーは、時間をつぶそうとして神話の話始めた。

カーリー・フェイウが人間に子供を産ませる。双子だが、そのうち一人が悪いことばかりするので『殺してこい！』と女神フアナテイがカーリーを雷と共に地上に突き落とす。前にカーリーと争って負けたフレイグが、仕返しをしようと後を追って地上にやってくる。カーリーは息子を殺し、その恋人も手にかけてしようとするが、女神アニタが邪魔をする。帰って来たフレイグから詳しい事情を聞いたアニタは、二人を憐れんで、殺された息子の魂を探し出し、恋人のもとに返してあげる……。

「500年ごとにこの神話が繰り返されると、ノレーシユでは信じられていて、実際、500年前に似たような事件が、独立する前のイシュ八で起きていたのよ。双子のうちの一人が殺されてね……」

「何が言いたいんですか？」

黙って話を聞いていたエブニーザが、急に嫌な顔をした。

「あなたを見た時、美しすぎて、『神話の再来だ！』って思ったの。しかもあなたは未来が見える。神の子は年を取らず、未来を予知するって言われてるけど、どう思う？」

「関係ありませんよ。関係あるとしたら……」エブニーザが遠い目をした。「たぶん僕は、殺される方ですよ」

「なぜそう思うの？」

「なぜって……」

「見えるの？」

沈黙。

クーはエブニーザの目をまっすぐに見つめた。何かを探りだそう
とされているみたいに。

エブニーザはその目が怖くなって、顔をそらして立ち上がった。

「もう帰ります」

「待って」

クーがエブニーザの服の袖をつかんだ。

「アンゲルが帰ってたら、戻ってきて。あの二人が家を出るまで、
私は帰らないから」

アンゲルはソファアに横になっっているが、眠れない。

エブニーザが帰って来たが、アンゲルを見たたん、部屋を飛び出して行ってしまった。

「何だよ？」

ヘイゼルも帰ってきていないようだ。アンゲルは眠ろうとするが、さきほどクーの部屋で見たヌード写真が頭から離れない。

「うわああ、だめだ、だめだ」

と一人うめく。

管轄区では、婚前交渉どころか、女性の裸を『想像するだけ』でも罪だということになっている。当然だがポルノがない。（ただし、ヘイゼルが言った通り、売春婦の数は世界一である）

明日から忙しくなるんだから、眠れ！眠るんだ！

アンゲルは自分に言い聞かせるが、ますます目がさえるだけだ。

起き上がって本をめくり始めるが、数ページ読んだだけで『ああ

だめだ！うわああ』と本を閉じて頭を抱えてしまった。

そこにヘイゼルが帰ってきた。

「なんだ、こんな時間までお勉強か？」

「今までどこで何をしてたんだよ！」

「シグノーの別邸でお説教だ。また白ひげだぞ？思い出したくもない」

ヘイゼルは部屋に直行。

アンゲルはまた本を読み始めるが、やはり『だめだ！だめだ！』とわめいたため、ヘイゼルが出て来て来て怒鳴った。

「うるさいぞ！何時だと思ってる！？」

「お前の怒鳴り声の方がうるさい！ティッシュファントム！」

「ティッシュファントムって言うな！」

真夜中に怒鳴り合いが始まってしまった。

隣の部屋の学生が事務に苦情を言ったため、事務の職員がかけつけてきて、

「またお前たちか」

と、1時間近くお説教をされた。

戻ってきたエブニーザは、その間、廊下で待つはめになった。

結局、三人とも、この日は眠れなかった。

エレノアが、真夜中に帰ってきたフランシスに『クーの家にアンゲルと二人で取り残された。しかもヌード写真があった』と話すと、フランシスは心からおかしそうに『アハハハハ！』と大声を上げて笑い始めた。

「最初からそういう作戦だったのね！」

「どうしてレストランにいたの？」

エレノアが聞くと、フランシスは急に不機嫌な顔になって黙り込んだ。そして、

「それはきつと、わざと置いておいたのよ」

と、話をそらした。

「えっ？」

「写真集よ。あなたたちを二人きりにして、エッチなものを置いておく。上手くその気になったら……」

「フランシス！」エレノアが真っ赤になって怒り始めた。「変なこと言わないで！」

「変なことじゃないわよ。実際どうなの？ どういう関係なの？ 毎日常カフェで会ってるそうじゃない？」

「じゃあ、あなたとヘイゼルはどういう関係なのよ？ こんな時間まで何をしてたわけ！？」

「白ひげに説教されてただけよ！ 変な想像しないでよ！」

「こんな真夜中に説教なんかする？」

「するわよ！ あんたは下賤な貧乏人だからわかんないでしょうけどね！」

「何ですって！」

二人が言い合いをしていると、部屋のドアをノックする音がした。クーだった。

汚れた服のまま、神妙な顔で入ってきたクーを見て、フランシス

は驚いた。

「あんた、どうやってここに入ったのよ」

「裏口が開いてるの」

「最低のセキユリテイね」フランシスがため息をついて、クーを睨んだ。「あんた、わざとエレノアとアンゲルを部屋に連れてったでしょ。それに、何？ヌード写真まで置いて」

「えっ？」

クーが驚いて、動きが止まった。みるみる顔が真っ赤になる。

「……わざと置いたんじゃないの？アンゲルをひっかけるために」

「違うわよ！」クーが真っ赤になって叫び、二人に背を向けた。「ああ、だめ、だめ、エレノア、どうしてそんなもの見つけるの」

「見つけるって……普通に本棚に入ってたんだもん！」

エレノアも真っ赤になって叫んだ。

フランシスは妙に冷静な声で、

「ほんとに、わざと置いたんじゃないの？」

とクーに尋ねた。

「違うってば！」

「……もう反省した？」

「ごめんなさい。謝るわ。でも。フランシスが心配だったのよ。絶対暴れると思って。エブニーザもそう予言してたし」

「エブニーザ？」エレノアが驚いた。「ほんと？」

「ええ」

「何なの、気味が悪いわね」フランシスは苦笑いしながらつぶやいた。「みんな、何かを企んで、ことごとく失敗したってとこね……ワインでも飲む？どうせ今日は眠れないわよ」

三人で時計を見ると、朝の4時になっていた。

いつもはカフェでエレノアを待っているアンゲルだが、今日は寮に直帰。クーの部屋で見たヌード写真の衝撃がまだ抜けないのだった。

女神なんか信じてないのに、こんなこと気にしてどうするんだ？ イシュハの連中はもっと自由に……待て、俺は何を考えてるんだ？ 自問しながら、勉強に集中しようとするが、やはり思い出すたびに『だめだ！だめだあ』と頭を抱えてしまった。

そのころ、エレノアは図書館に向かっていた。

資料室に行くと、エブニーザとクーがいて、ノレーシユ語で何か話していた。エレノアには話の内容がわからない。

帰ろうとすると、クーがエレノアに気づき、『いらっしやいよ』と誘った。

エブニーザが広げているのはやはり黒魔術の本。

「こわいのよ。カップルを引き離す方法が載ってるの」

「バラのとげを燃やすんです」

「そんな怖い話やめてよ」

「私、ためしてみようかしら……」

「えっ？」

クーが暗い顔でつぶやいたのでエレノアは驚いた。

「あの二人は運命の相手だからだめですよ。僕にはわかるんです。無駄ですよ」

エブニーザが真面目な顔で言った。

「誰の事？」

「いえ、あの……」

「ノレーシユのバカップルの話」クーが白けた顔で言った「もう行くわ。授業があるから」

クーは、極上の笑顔をエレノアに向けて去って行った。エレノアはドキッとして、

「クーってときどき、びっくりするほど優しく笑うのよね」

「そうですか」

エブニーザは、悲しげな顔をしていた。

エレノアが去った後、やっと一人で本が読めると安心したエブニーザのところに、シギがやってきた。

「何ですか」

と聞くと、予想通りエレノアについていろいろと聞かれ「お前なら話しても大丈夫だろう」と、恋の相談を延々とされてしまった。「美しすぎて、近づけないんだよ」

「……じゃあ、近づかなければいいんじゃないですか？」

「でも、キツネ目のアケパリ人や、アンゲルとは仲がよさそうじゃないか。それを見るたびに俺は身を割かれる思いがする」

「そうですか」

エブニーザは「僕より言葉が硬い人もいるんだなあ」と思っていた。

その後、エブニーザは「あきらめたほうがいいですよ」としか言わなかったのだが、シギはそれが聞こえていないかのように、延々と話し続けた。

夕方。ようやくシギが帰ったので、眠そうな目になりながらも「やっと本が読める」と『黒魔術』の本を開いたエブニーザのところに、よりによって険しい表情のフランシスが声をかけてくる。

「あんだ、私が暴れるのを予知してたって本当？」

「……誰に聞いたんですか？」

「クーに決まってるでしょ。二人で変なことを企んでたみたいですが、うまくいかなくて残念だったわね」

よりによって一番苦手なフランシスにまた読書を邪魔されて、露骨に嫌がる（正確に言つと『怖がる』）エブニーザに、フランシスは、

「あんだ、そんなもの読んで何をする気？誰かを呪い殺す気？だっ

たらヘイゼルにしてよ」

と言いだした。そして、

「あいつは悪魔よ！うるさいったらありやしないわ！どこまでもつきまとうてくる……あんだ、どうしてあんな悪魔と知り合いなの？それともあんたも悪魔の一味？だからそんな本読んでのの？」

とまくしたてられ、エブニーザは困惑しながら考える。

この二人、お互いを悪魔呼ばわりしてるんだな。エレノア言うとおりだ。似てるな。

そのうちヘイゼルがエブニーザを探しに来てフランスと口論を始めてしまい、エブニーザは、

今日は最悪だ……。

と思いながら、二人を置いて図書館を後にした。

6 - 14 アンゲル タフサのところへ通う

首都のタフサ・クロツチマーの研究室で、アンゲルは、自分の事やクラウスの事をぽつぽつと、慎重に、話していた。正確に話さないといけないような気がしたのだが、自分でも何が正しいのか、何が間違っているのか、わからなかった。

「一つだけ確かなのは、自分は女神なんて『信じていない』し、『いるとも思えない』ということだった。

ひととおり話し終わったところで、タフサは『あくまで僕が思ったただけだけど』と前置きして、話し始めた。

「君はきつと、管轄区にいなながら、信仰の輪の外にいたんだ」「信仰の輪？」

「文化の輪と言ってもいい。同じ文化、同じ価値観で暮らしているグループがあるとする」

タフサが、紙に鉛筆で、大きな円を書いた。

「君は、生活していたのは管轄区だけど、心理的には、輪の外にいるわけだ」

タフサが、最初に書いた大きな輪から離れた場所に、小さな輪をぽつんと描いた。

「そして、クラウスはたぶん、ここにいたんだよ」

最初に描かれた大きな円の内側に、小さな円を描く。

「女神は信じられないかもしれない、そう疑ってはいたが、まだ確信を持っていたわけじゃない。文化の内側から、外の、異教徒の文化を見ていたわけだ。でもアンゲルはどうだい？最初から信仰の外にいたんじゃないか？そして、さしてそのこと自体に疑問を持っているようにも聞こえないんだが」

「それは……そうですね」

アンゲルは、クラウスが自分を見た時のあの異様な目つきを思い出した。教会信者が異端者を見る目つきだった。

「良いとか悪いと言う問題じゃない。ただ、同じ文化圏にいても、感じ方も信仰の度合いも、立ち位置も違うものなんだ。これは覚えておいた方がいいかもしれないね」

「はい」

『立ち位置の確認』ということで、最初の日は終わった。アンゲルは、定期的にタフサのところへ行く約束をってしまった。

交通費は？

アンゲルは『バイトを増やす』というきつい選択をした。

おかげで、ほとんど寮には戻って来られず、タフサのところへ通う時間も入れると、ほとんど、エレノアや他の友人と話す機会もなくなってしまうた。

それでも、死んだクラウドスや、台風のときの悲鳴などを思い出すと、生きているんだから、文句を言うべきじゃない、今は勉強するべきだと思えた。

首都では、タフサと管轄区について話したり、精神病院の患者の話し相手になったりした。

とにかく忙しくしていないと、また余計なことを思い出してしまいがちだ……管轄区の狂信的なファナティ信者の事、台風のこと、まとわりついてくる悲鳴、クラウドスの話し声、それに……。

実際、精神病院での体験は実践的で、学校の授業よりも得るものが大きかった。

しかし、アンゲルはまた疑問に思い始めた。

カウンセリングって……話し相手がいれば必要ないんじゃないだろうか？

どうせ勉強するなら、やはり精神科医の資格を取った方がいいんじゃないだろうか？そうすれば、管轄区に帰らなくてもイシユ八で生きていけるし、人を助けることもできるはず……。

バイト先では終始無言で、ソレアとは全く話そうと思わなかった。余計な気力を使いたくなかったのだ。

「シフトが増えて、一緒にいられる時間が長くてうれしいけど、何

かあったの？」

「そういう言い方やめて」

アンゲルはできるだけ黙り込んでいたが、ソレアは自分の事とか、故郷の事を延々としゃべりつづけるので、それを聞いているとますます疲れた。

ヘイゼルは最初、ぐったりと疲れ切っていたアンゲルをからかっていたのだが、日が経つにつれて疲れすぎて、からかっても反応しなくなってきたので、

「お前そのうち死ぬぞ。アケパリ人みたいに、過労で」と言い始めた。

見かねたエブニーザが貯金をおろしてきて、

「お願いだから受け取ってください」

と懇願すると、アンゲルは怒りだした。

「俺をバカにしてんのか！」

「だって！毎日疲れた顔して、ヘイゼルともほとんど話さないじゃないですか！おかげでヘイゼルもいらいらしてるし……二人とも最近怖いですよ」

「そんな理由で人に金を出すな！」

「それに、最近アンゲルを見かけないってエレノアにも言われたし

……」

アンゲルはその言葉で怒鳴るのをやめた。

「……今大事な時なんだよ。会ってる暇がない。エレノアはどうせ俺に興味ないしな」

いじけてソファで寝始めてしまった。

「そんなことないですよ。だってエレノアは……」

「出てけ」

アンゲルは毛布にもぐりこんでしまった。エブニーザは、落ち込んだ様子で部屋に戻り、ドアをそーっと閉めた。

カフェでコーヒーを飲みながら『最近アンゲルを見かけないなあ』
と想っていたエレノアは、知らない男性に声をかけられた。話を聞
くと、フェスティバルでエレノアが歌っているのを見てから、ずつ
と好意を寄せていたらしい。

しかし『やっぱり外見だけ見てて、歌をちゃんと聞いてないのね』
と、話の内容から判断したエレノアは、

「もう帰る」

と彼を置いて寮に戻ってしまった。

それから、アンゲルがいないかと電話をかけるが、出たのはハイ
ゼルだった。

『バイトと勉強で疲れちゃって、話しかけても反応しないんでね。
そのうち過労で死ぬんじゃないかな』

もっと話を聞こうとしたのだが、帰ってきたフランシス（紙袋を
たくさん抱えている！）に受話器を奪われてしまった。

「何の話をしてたの？」

『ああ、アンゲルが死にかけてるって話をしてたんだよ、何だ、俺
の話がそんなに気になるか……』

フランシスは乱暴に電話を切った。エレノアはぼんやりと、何か
考えているようだ。

「何があつたの？アンゲルとケンカ？」

「違うの、アルバイトで忙しすぎるみたい」

「あっそ」フランシスの興味を引かない話だったようだ「さっき、
ポートタウン駅の近くでエブニーザを見かけたけど、どこに行くの
かしらね」

「ポートタウン？」

「ものすごく気持ち悪い……いえ、青黒い、暗い顔で、かなり慌て
ていたみたいけど」

エレノアは何かあったのではないかと思い、もういちど電話をかけようとしたのだが、

「かけたってヘイゼルしか出ないわよ」

とフランスに止められた。フランスは「セールがあるから買い物に行く」と出て行った。

どうしよう、駅に行ってみようか……。

迷ったが、エレノアはまたヘイゼルに電話した。

「エブニーザはどこ？ポートタウンで見かけたって言うてる人がいるんだけど」

『ポートタウン？』

『様子がおかしかったらしいの』

『……わかった、探してみる。全く手のかかる連中ばかりだ！』
電話は乱暴に切られた。

「一番手がかかっているのはあなただと思っけど……」

エレノアは受話器に向かってそうつぶやきながら、苦笑いした。

6 - 16 アンゲル 過労で倒れる

アンゲルは、疲労が極限に達して、タフサのところで倒れてしまった。

目を覚ますと、タフサがすまなさそうな顔で、ベッドの横に立っていた。

「アルバイトまでしているとは知らなかったよ……無理しないで、まず大学に入れるように、学校の勉強に専念するべきだな」

がつくりと落ち込むアンゲルに、タフサは優しい声でこう言った。「夏と冬に長期休暇があるだろう？ どうせその間も私は仕事をするんだから、休暇に来ればいいじゃないか。若いうちに言うっておくが、体をこわしたら、他人の悩みなんて聞いてもらえないぞ」

帰り道。がつくりと肩を落しながら歩くアンゲル。しかも、寮にたどり着く前に、あのフランスに遭遇してしまった。

「あら、どうしたの、死人みたいな顔をして」

フランスはいつでも、どこでも、容赦がない。

「ほっといてくれ」

「エレノアが来週ステージに出るの。伴奏はまたクーよ。来なさいよー」

後ろから叫び声がした。

もうどうでもいいよそんなの。

そう思いながら寮に帰るが、部屋には誰もいない。エブニーザの部屋もヘイゼルの部屋も、からっぽだ。

日付が変わる時刻になっても、二人とも帰って来ない。

心配になったアンゲルは、外に探しに行ったが、どこにも二人の姿はなかった。

あきらめて部屋に戻り、ソファーに横になるが、眠れない。

ヘイゼルめ、またエブニーザを変な所に連れ回してるな……。まさか娼館に行ったんじゃないだろうな？ 妄想の女を探しに……。

アンゲルは、クーの部屋で見たヌード写真を思い出し、『うわああ
！だめだ』と叫んで毛布にもぐりこむ。目がさえてしまって、全く
眠れない。

6 - 17 ヘイゼル エブニーザ ポートタウン

そのころ、ヘイゼルは、ポートタウンの駅でエブニーザ（真っ青な顔でふらふら歩いていた）を発見した。

「どこへ行くつもりだ!？」

つかみかかって怒鳴りつけると、エブニーザは真っ青な顔でつぶやいた。

「彼女を探さなきゃ」

「ハア？」

「見えたんですよ、灰色の建物で……部屋の外にも似たような色の建物が並んでいて……同じ場所を探せば……早く見つけないと……本当に手遅れに……」

エブニーザがつぶやきながら震え始めたかと思うと、倒れてしまった。発作だ。

「お前一人で探すなんて無理だぞ!」

ヘイゼルはエブニーザを駅の外に引きずっていき、タクシーに放り込んだ。運転手は、

「アルター?今から?俺が家に帰れねえよ!」

と文句を言ったが、ヘイゼルは100クレリン札を持っているだけすべて投げつけ、

「いいから早く出發しろ!」

すさまじい剣幕で怒鳴りつけた。

朝5時、ヘイゼルが疲れた顔で帰ってきた。

ソファアールでうとうととしていたアンゲルが

「どこに行つてたんだよ!？」

と聞くと、ヘイゼルは、アンゲルが寝ているソファアールに近づき、しゃがみこんで、じつとアンゲルの目を見つめた。表情がない。

「何だよ? 気持ち悪いな。エブニーザは？」

「お前が正しかったのかもしれない」

「は？」

「あいつは病院だ。もう出て来れないかもしれないな」

「何だつて!？」

飛び起きた拍子に、アンゲルの頭がヘイゼルの額にぶつかった、二人してしばらく激痛にうめく羽目になった。

ヘイゼルの話だと、駅で発作を起こして倒れたので、病院に連れて行つたとのこと。

「やっぱりあいつをここに連れてきたのは間違いだったのかもしれない」

ヘイゼルは疲れ切つて、いつもの傲慢……いや、元気が出ないようだ。

「そんなに深刻な状態なのか？」

アンゲルが起き上がったヘイゼルを見た。

「いや、いつもの発作なのだが……だが」

「だが、何だよ？」

「例の彼女を探すつて言つてたんだよ」

「また？」

「どうも、いつもと違って、居場所がはっきり見えたらしいんだ。

どっかの汚い娼館だけだな。だから探せると思つたんだろうな。でも、そんな建物、世界中にいくらでもある……なあ」

ヘイゼルが、今まで見たこともないような、弱り切った顔をしていた。

「このままその女が見つからなかったら、あいつはどっちみち気が狂うんじゃないかな？それとももう狂ってるんだろうか？俺にはどうしてもそれがわからないんだ」

「狂ってる……？」

アンゲルは返答に迷った、明らかに病気だと今まで思っていたのだが、

「いや、狂ってはいないと思う」

と答えた。

「思う？」

「確かに変わってる、思い込みも激しい、でも、違うと思う」

アンゲルはだんだん心配になってきた。すっかり忘れていたが、エブニーザだって管轄区の間人なのだ。そして、かなりやつかいな過去を抱えている。

クラウドみたいになったら大変だ……。

「病院からは？すぐ出られないのか？」

「わからん。診断は明日だ」

次の日。

「そんなに深刻な症状ではない。学校には通わせた方がいい。カウンセラーに会う回数を増やして、月一度こちらにも来るように」

という医者診断が出て、夕方にはエブニーザが寮に戻ってきた。しかし、誰とも目を合わせようとせず、アンゲルにも何も話さずに、部屋にこもってしまった。

次の日。

ヘイゼルとアンゲルが学校に行ったあと、エブニーザは電話を取った。

クーが出ると、

「僕は、狂っているんですか？」

と、突然質問を始めた。

『……根拠は？』

「僕にははっきり見えることが、みんなには見えてないんです。ヘ

イゼルもアンゲルも、医者も、みんな妄想だと思ってる」

『医者？どういうこと？ねえ、今、私の部屋に来れない？一回くらいイシユ八語をさばっても大丈夫よね？私ちゃんと話せてるでしょ？』

「僕よりお上手ですよ」

『あら、それは問題だわ……すぐ、いらっしやい。警備には話しておくから』

アンゲルは、タフサに言われたとおり『今は学校の勉強に専念しよう』と熱心に授業を受けるが、やはり自分が精神分析を受けたり、カウンセリングの話になると、信仰や、その他いろいろ問題が浮かび上がってきて、気分が悪くなってしまった。

帰りに、ひさしぶりにエレノアの姿（やっぱり大きな帽子をかぶっていたが）を見て、あまりにも美しく、輝いて見えたのでぼんやりしていると、エレノアは、

「ねえ？どうしたの？」

いつかのように隣の席を指さして『座れば？』という顔をした。

やっぱりエレノアがいないと自分の人生は真っ暗だ、俺にはエレノア必要なんだ！

アンゲルは勝手にそう思いながら、先日起きたエブニーザの一件について話した。

「そんなことが起きてたの？全然知らなかったわ……」

「あのヘイゼルが真面目に落ち込んでたから、世界の終わりかと思っただよ」

アンゲルは軽口を言ったが、実際は心配でたまらなかった。

「何かできることがあったら教えてね！」

エレノアは、弾んだ声でそう言いながら、歌の練習に向かった。

やっぱりエブニーザが好きなのかなあ、エレノアって。

アンゲルはため息をついた。それでも、エレノアと話せたことを嬉しく思う自分がいた。

空は晴れていて、街の空気が、木々が、急に輝いて見える。アンゲルはぼんやりと周りの景色を眺めた。驚くほど、世界が光に満ちていた。

ああ、やっぱり俺はエレノアを愛してるんだ！

心が感激で満たされた。ここまで深く何かを感じたのは、久しぶ

りだった。

しかし、すぐに自分の立場を思い出した。そして怖くなった。いつかソレアが言っていたではないか『どうせ管轄区に戻ったら、誰かと結婚させられる』と。

でも、自分は女神を信じていない。管轄区にはどうせ居場所がない。

イシュハに残ることは可能だろうか……？

……いや、今は勉強しないと。

そう思い直し、とぼとぼと寮に戻った。

6 - 21 クー フランシス クーの家

授業の帰りにクーの家を訪ねたフランシスは、そこにエブニーザがいるのを見て驚き、持ってきたお菓子を落としてしまった。

「いやねえ、変な想像して、一緒に話してただけよ」

クーは余裕で笑うが、フランシスが怖いエブニーザはずっと下を向いている。

「クーに用があるから、あんだ、帰って」

フランシスがエブニーザをにらみつけると、エブニーザは逃げるように部屋を出て行った。

「ちよつと、いろいろ大変なことがあったばかりなのよ、私のベイビーをいじめないでくれる？」

大人ぶったクーが笑うと、

「私のベイビー!?!」

フランシスが目を丸くして叫んだ。

「また発作を起こして、ヘイゼルに病院に放り込まれたのよ。すぐ退院できたからいいけど、シヨックを受けたみたいよ。自分は狂ってるんじゃないかって何度も聞かれたわ」

「実際精神病なんでしょ?どっかの施設にでも入れてやったらいいじゃない!それとも、シユタイナーのところに送り返すとか」

すると、クーが急に深刻な顔になった。

「シユタイナーのところには……関わらないほうがいいと思う」

「なんで？」

「さんざん利用されたあげく暗殺されそうだから」

「そんなにシユタイナーって危険人物？」

「ノレーシユの富豪はみんな」クーが深刻な表情でフランシスを見つめた「あそこと関わると、死人が出るって知ってるわ」

フランシスは困惑していた。そんな危ない話になるとは思わなかったからだ。

「私、あそこの娘と文通してるけど、そんな話聞いたことないわよ」
「管轄区の間は何も知らないのよ。外国から見たほうが、その国の裏事情はよくわかるものなの。イシユ八だってそうでしょ？」
「そうだけど……」

6 - 2 2 アンゲル ヘイゼル 男子寮の部屋

アンゲルが寮に戻るが、またしても誰もいない。

ヘイゼルの部屋をノックすると、中から、

「何だ？」

という、不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「何でもない」

一度引きさがってソファで勉強を始めたアンゲルだが、集中できず、立ちあがってヘイゼルの部屋のドアを開けると、ヘイゼルは熱心に『心に傷を負った人への対処法』という本を読んでいた。

「何してんのお前？」

本の題名と、読んでいる人間があまりにも合わないので、アンゲルが噴き出しながら尋ねると、

「御覧の通りだ」ヘイゼルは本をかざして、題名が見えるようにアンゲルの方に向けた。「あいにく、シュツティファントの辞書には、人を操る手段とか、気に入らない奴を痛めつける方法とか、精神的に追いつめる手順とか、無理矢理服従させる戦略は書いてあるが、こういうのは……どこにも載ってないんでね」

「恐ろしい一家だな」

「エブニーザをここに連れてきたのは俺なんだよ。はっきり言って失敗だった。でも、最後まで面倒をみる義務があるだろ？」

お前がいつ面倒なんか見たんだよ！？お前が面倒かけてるんだろ
うが！

とアンゲルは言いたくなかったが、相手が落ち込んでいる様子なので口には出さなかった。

「確かに失敗だったな」

アンゲルがそう言うのとヘイゼルが、攻撃的な目を見開いて睨みつけてきた。

「利用するために連れてきたんなら、大失敗だ。でもな、俺やエレ

ノアやクーに知り合えて、勉強もできてる。友達を作って、成長させるってことを期待してたんなら、悪くないさ。大成功とは言わないけどな」

「エンジェル氏にしては優しいことを言うね！」

「うるさい、ティッシュファントム！」

ヘイゼルが怒鳴り返す前に、アンゲルはドアを閉め、廊下に逃げた。勉強する気になれなかった。

少し歩いて、いろいろ考えてみよう。特に何かいいことが思いつくとは思わないが……。

次の日。

本屋でエレノアが、ヘイゼルが読んでいたのとまったく同じ本を立ち読みしている。後ろにエブニーザがいることも知らずに。

エブニーザは、エレノアを見つめながら、
いろんな人に迷惑をかけているんだな、僕は……。
と、一人自分を責めていた。

エレノアがその視線に気づき、後ろを振り向くやいなや、驚いて本を床に落とした。

エブニーザが、それを拾って棚に戻した。

「こんなの、読む必要ないですよ」

「え？」

エレノアがエブニーザを見たが、エブニーザはそれ以上何も云わず、その場を去ってしまった。

エレノアは公衆電話に向かう。出たのはアンゲルだった。

『そんなの気にするなよ。最近機嫌が悪いんだ』
と言われただけだった。

どうするべきなんだろうかと、考えながら音楽科へ向かうと、ケンタがちょうど練習を終えて出てきたところだった。

「顔色が悪いね」

二人で芝生に座ってエブニーザの話をする。

「それは難しいね」

ケンタもいい解決法を思いつかないようだ。

「でも、エレノアは優しいな。それが伝われば十分だと思う。人生をどうするかは本人が決めることだよ」

「でも、あのままで大丈夫なのかしら……」

エレノアがまだ何か言おうとしたので、ケンタは急に大げさなふりをつけて説明を始めた。

「エレノア、エブニーザだって男だろ？いくら病気で、周りがみんな『大丈夫大丈夫？』ばかり言ってたら、情けなくもなるよ。どんなに仲のいい友達でもね。アケパリ人男子から見た視点で言わせてもらえば『ほつといってくれ！俺の問題だ！』ってとこだ。それか、自分のせいで周りが迷惑してるって、内向きに悩みだすか……どっちにしても、周りが心配したって本人のためにならないんだよ……エレノアは自分の音楽に集中しなよ。それが誰にとっても一番いいんだ。エブニーザにとっても、エレノア自身にとっても、俺にとっても」

エレノアは顔を上げてケンタの顔を見た。ケンタはどこか遠くを見つめていた。顔が赤くなっているように見えたが、夕陽のせいだろうなとエレノアは思い直した。

不思議な安堵感に包まれながら、エレノアは立ちあがり、

「ありがとう」

と言うと、その場を去って行った。

残されたケンタは一人のため息をつく。

「うらやましいな、エブニーザ」

エブニーザが暗い顔で部屋に戻って来たかと思うと、

「学校をやめて、シユタイナーのところに帰る」と言い出した。

「アホか！」

「だって、ここにいてもできることなんてないし、みんなに迷惑をかけてるし……」

「そう思ってるんなら黙って学校に行ってる！」

「でも……やっぱり僕には合わないんですよ」

「『合わないから行きたくありません』なんて話が通ると思ってるのか！？」

「でも……」

ヘイゼルが怒鳴りつけ、延々と文句を言い続けたが、エブニーザの決心は固いのか、なかなか考えを変えようとしなかった。

勉強するふりをしながらそのやりとりを聞いていたアンゲルは、
「逃げようとしてるな」とつぶやいた。

「まわりが自分に気を使うから嫌になったんだろ？さっきエレノアから電話が来てたぞ。機嫌が悪そうだったから、自分が何か気に障るようなことをしたんじゃないかって。心配されるのが嫌だったら自分がしつかりしろ。それが無理なら、人の好意をはねつけるなよ。簡単に逃げ帰るような奴に女の子なんて救えないな。問題なのはお前の病気で弱さでもない。そういう逃げ腰の態度だろ？」

エブニーザは傷ついた表情をして、部屋に戻ってしまった。

そして、めずらしくドアを乱暴に、音を立てて閉めた。

「わお。そろそろ反抗期かもね」

アンゲルが笑うと、

「性格変わったな、エンジェル氏」

とヘイゼルが驚いたような、呆れたような顔をした。

囚人11番 25番 牢獄の中庭

珍しいことだが、囚人が外に出されることがある。

中庭と呼ばれている、フェンスで囲まれたグラウンドがあり、年に数回だが、そこでサッカーの試合が開かれるのだ。

そこでプレーしているのは、雑居房の囚人で作られたチームだ。フェンスの向こうの『選手』に向かって、みなが歓声（というより、ほとんどブーイングか暴言だが）をあげている。

「つまらなさそうだな」

25番が、隅っこで壁にもたれている私のところへやってきた。

「サッカーは嫌いかな？」

私は答えなかった。答えたくなかったからだ。

他の囚人は、外に出られることが嬉しいらしい。

私は全く嬉しくなかった。

むしろ迷惑だ。早く独房に戻りたかった。

しかし、そんな人間は、ここでは私一人らしい。

25番は、私の隣であぐらをかき、こころもち上に視線を向けると、

「それで、あの二人はどうなった？」

と、古い友人の消息でも尋ねるように、つぶやいた。

さて、続きを聞かせようか。

7-1 アンゲル ヘイゼル 男子寮の部屋

2月。女神アニタが人々を宮殿に招いたとされる週。

道の真ん中で花火をふりまわす若者がいたり、フアニージャンプ（地面に描いた点の上を飛びながら、奇抜なポーズや変な顔をしておもしろさを競う、くだらない遊び）に興じている人々が広場を跳ねまわっていたり、道を歩く女性の服装がいつも以上に過激に、派手に、露出過多になったり……。

とにかく、この期間のイシュ八人のテンションは、異常だ。

国民総ドラッグ中毒なのではないかと外国人が思うほど、彼らの興奮ぶりはすさまじい。道を歩く時も、うっかりよそ見をすると、花火攻撃にあつたり、フアニージャンパーに追突されたりする羽目になる。夜中に集まって騒ぐ人も多く、騒音の苦情がもつとも多い季節でもある。

控えめで大人しい人たちは、この時期わざと、イシュ八から海外へ逃げてしまうほどである。実際イシュ八の旅行代理店では、そういう人向けの『静寂を求めて逃避行ツアー』がたくさん売りだされている。

イシュ八中がお祭りモードになり、日昼夜さわがしいこの季節。

首都で開かれるパーティに、アンゲルがなぜか出席することになった。シュツティファントが主催するもので、ヘイゼルが勝手に招待客のリストに名前を書いてしまったのだ。

「俺はバイトがあるんだっつもの！」

「いいじゃないか、どうせ一日だけだし、タフサの大学に会場が近いだろ？それに、けっこう有名な心理学者も来るんだぞ？エレノアとシグノーのご令嬢もな」

「学者が来るんなら、まあ……」

「ほんとはエレノア目当てだろ、エンジェル氏」

「うるさい！ティツシュファントム！」

「ティツシュファントムじゃない！シュツティファントだ！パーティの主催者を化け物呼ばわりするんじゃない！」

「お前じゃなくて親だろ！……エブニーザは置いてくんだよね？」

「何をたわけたことを、無理矢理連れて行くに決まってるじゃないか」

「……またシートベルトで縛ったら、俺もお前とは絶交するぞ！」

「まあまああ、落ちついたまえエンジン氏」

二人がいつものようにこんなやりとりをしているのを、エブニーザはドアの向こうで聞き、真っ青になって震えていた。

そしてパーティ当日。

「エブニーザ！！！」

大地を揺るがすような大声で、アンゲルは目覚めた。

「なんだよ、朝から怒鳴るなよ」

「エブニーザが逃げた」

「は？」

寝ぼけているアンゲルに向かってヘイゼルは『出かけます。夕方まで帰りません』と書いてある紙をつきつけた。

「頭いいね」

アンゲルがにやけた。

別荘で痛い目に会ってるからな、学習してるな……。

「良くない！」

ヘイゼルがさらに大きな声で叫んだので、アンゲルは軽く飛び上がった。

結局、不機嫌なヘイゼルと二人で、会場に向かうことになってしまった。

会場に着いたとたん、アンゲルは、とんでもないことに気がついた。

「ヘイゼル」

「何かな？」

「お前、服装は普段着でいいって言ってたよな？」

「それが何かな？」

ヘイゼルは意地悪くニヤニヤしている。

「どう見ても、みんな、正装だろ!？」

そう、パーティー会場にいる人々はみな、男性はスーツ、女性はイブニングドレス姿なのである。

「いいだろ別に、どうせスーツ持ってないだろ？」

「そういう問題じゃない！」

「ヘイゼル」

アンゲルが怒っていると、ストレートの金髪の女性が、ヘイゼルにとびついてきた。

ヘイゼルはそのまま、女性と一緒に会場の奥に消えてしまった。

一人残されたアンゲルは、二人が去って行くのをポカーンと見送りながら、コミュニケーションで言われた『首都に愛人が何人もいる』という話を思い出した。

おいおい、本当かよ？

フランシスは何なんだ？ここに来てるんだろ？

はち合わせたらどうするんだよ!？また大げんかか？

「あれが現地妻その4ね」

ふり返ると、姫君クーが、豪華なドレス姿で笑っていた。頭に、ヴェールを巻きつけたような帽子をかぶり、背後には、黒服のボディーガードの姿が見える。

「何だよその、現地妻4つて!？」

「あら、知らない？主要都市にそれぞれ違う女がいるのよ」

「えええええ！？」

「驚くことじゃないわ。残念ながらイシユ八には、そういうダメ人間がたくさんいるの」

クーは、両サイドについている、いかつい警備を両手で指し示しながら、

「今日はあまり自由に動けないの」と困ったように笑った。

そのあと、知らない人たち（みんな金持ちそう）がアンゲルに『ノレーシユの姫君と知り合いですか？』とにこやかに声をかけてきたのだが、みな、アンゲルがただの学生だと知ったとたん、そつなく離れて行ってしまった。

どうせ俺は貧乏なただの学生ですよ！！

いじけながら会場をうろつくアンゲルだった。

どう考えても場違いだ。ヘイゼルにだまされて、いつもよりちょっとだけ上質なジーンズ（わざわざ買った、ただし、古着屋で）で来てしまったアンゲルだが、他に、こんなカジジュアル、というより、貧乏くさい恰好の人間はいない。

……完全に騙された！！

しかたなくあたりを見回す。彼らはみな自信ありげな、いかにも『私は成功している！』と言わんばかりに輝いている人間ばかりで、思い思いのグループに分かれて話をしている。アンゲルは、いくつかのグループにそーっと近づいて、話題をうかがってみた。一体何を話しているのだろうか？女神の祝祭の日に。その結果わかった主な話題は、政治やファッション、最近の経済のことらしい。

そしてふと思う。

これって、女神アニタにからんだ行事なんだよな？

だれも女神の話をしてないな？

神話の話も……結局イシユ八ってのはこうなのか？

これが、管轄区の女神ファナテイの行事だったら、厳肅な雰囲気
で、全員が整然と並び、聖書の朗読が始まって……。

ああ、やめだ、そんなこと思い出したくもない。

向きを変えたたとたん、変な集団が目に入った。

若い女の子の集団だ。

ただし、他の年配の女性客とは明らかに趣向の違う、ファッションショーのような奇抜な格好をしている。先頭を歩いているのはあのフランシス。ちょっと後ろにエレノア（一人だけ大きな帽子をかぶっているのですが、気まずそうについて歩いて、その後を、性格の悪そうな……いや、おしゃべりの好きそうな女たち、きゃあきゃあ言いながら追いかけて行く。

なんだあ？

エレノアは、アンゲルに気がついたらしく、口と身振りだけで何か言おうとしていた。

『好きでやってるんじゃないのよ!!』

と言っているように、アンゲルには見えた。

「なあ、あの帽子をかぶった女の子は誰？」

後ろで誰かが話す声が聞こえた。アンゲルがふり返ると、イシユハ・ヴァイオレットのスーツを着た男が二人、エレノアの方を見て話していた。

「シグノーのヒステリー女の友達らしいよ」

フランシス……どこでも有名なんだな、ヒステリーで。

アンゲルはそう思いながら、そーっと男二人に近づいた。

「それは可哀相だな。……あんな綺麗な人見たことがないよ。あとで誘ってみるか？」

「やめとけ、シグノーに噛まれるぞ」

「かまわないよ。どうせシュツティファントの息子とケンカするんだろ、その隙に」

男二人がクツクツと笑った。アンゲルは不快になったのでその場を離れた。

やっぱりエレノアって、どこに行っても目立つんだな……。
まあいいや、飯食おう。ほかにやることないし。

そう思いながらドリンクを取るうとした時、誰かに肩をつかまれた。

「これはこれはエンジェル氏、こんなところで会うなんて奇遇ですな」

ヘイゼルが、不気味なほどにこやかな顔で立っていた。

「なんだよ、気持ち悪いな」

「ちよつと外に出て話そうじゃないか」

「はあ？」アンゲルは心の底からの抗議の声を上げた「飯食わせるよー！」

するとヘイゼルは、後ろのヴァイオレットスーツの集団を親指で指しながら、アンゲルの耳元で、

「あいつらから逃げたいんだよ！ー！」

と嫌そうにささやいた。

「ああ、そういうこと」

二人で一緒に、会場の外に逃げた。

「さっきの女はどうしたんだよ？」

「ああ、何か、勝手に一人でしゃべって、怒りだして、どっかに行つたな」

「はあ？」

「どこにでもいるんだよ、勝手に何か期待して近づいてきて、相手が思い通りにならなかつたら逆上して金切り声を上げながら物を投げてくる、シグノーのご令嬢じゃあるまいし……ああ、やだよだ！もうやだよ！」ヘイゼルが、ロビーのソファに倒れ込みながら叫んだ「いつまでこんな生活しなきゃいけないんだ。俺が何か悪い事でもしたか？」

「……毎日してるだろ」

「第一あいつらは、俺を金のなる木か何かと勘違いしてるんじゃないか？」アンゲルの言葉を無視して、ヘイゼルは延々と話し続けた

「観葉植物であるだろ、葉っぱを切つて土の上に置いておくと勝手に根が生えて増えてくのが。お手軽な培養方法だ。残念だが、シュッティファントの木はそんな簡単に増えないのだぞ」

「何の話？」

アンゲルには本当に、ヘイゼルが何を言っているのかわからなかった。

「エンジェル氏、勉強ばっかしてないでちょっとは想像力つてものを使えよ。要するに、俺をお手軽な金づるか、成功ツールだと思つてる奴がたくさん寄つてくるのさ」

「要するに、だれもかれも気に入らないんだろ？」

言いながらアンゲルは気がついた。

会場の男性はみな、黒かグレーか、イシユハの国旗と同じ濃いヴァイオレットのスーツを着ているのに、目の前で偉そうにふんぞり返っているヘイゼルは、異様に目立つ真つ赤なジャケット（もちろん、いつも着ているものとは違って、高そうなフォーマルなものが）を着ている。

何だろう？

自己主張か？反抗期？単に赤いのが好きなだけか？

「そんなことはない、同じ金切り声でも、シグノーのご令嬢には正当な理由があるし、毎日へろへろに疲れてる癖に、資金援助を受けないくそ真面目なエンジェル氏をからかうのはたいそう楽しいがね」

「……俺もう帰つていい？」

アンゲルはヘイゼルに背を向けて歩き出した。

「まあまあ、待て待て待て」

ヘイゼルがアンゲルの肩をつかんで引き戻し、またソファアームにどかっとな音を立てて座った。

「お前さあ」アンゲルがお説教のような口調でしゃべった「その、家の名前にこだわりのやめるよ。ティッシュだかシュッティファントだか知らないけどさ。そういうのを自分から外して、自分自身が何かって一回考えてみたら？」

アンゲルがこう言ったのは、ヘイゼルがみんなに思われているよりは『まとも』だと知っていて、変に思われるふるまいを止めてくれることを期待したからだ。

「エンジェル氏」ヘイゼルの顔から笑いが消えた。「その質問は駄目だな」

「何で？」

「自分の立場や背景を取って『自分探し』なんてするのは、無駄だ。俺からシュツティファントの影響を取ったら？そんな質問は無効だ。人間、自分だけで成り立ってるわけじゃない。育った国や家や環境と、分がちがたく結びついているもんだ。エンジェル氏だってそうだろう。くそ真面目な国で、信仰という名の思考停止な奴らに囲まれて育ったからこそ、そこから出たいと思ったんじゃないかね？」

「信仰は思考停止じゃない」

アンゲルは強く反論した。女神を信じているわけではないが、ヘイゼルの独断的な意見には、賛成する気になれなかった。それに、管轄区の信仰は、思考停止で説明できるほど根が浅くないのだ。

「まあ、それはいいさ、信じる神が違うからな。でもな、周りを無視して、自分の人格だけ取って考えろって？そんなことばかりやってるから、ただ『欲しい欲しい』だけのガキみたいな大人になるんだよ。そんな発想にはうんざりだ……しかし不思議だな。どうしてあのお堅い管轄区で、エンジェル氏みたいな、羽根の生えている自由人が誕生したのかね？」

「俺に聞かれても困るし、羽根なんか生えてない」

好きであの国に生まれたんじゃないからな！

アンゲルは心の中で叫んだ。ヘイゼルはそれを見破ったかのように、またニヤニヤと笑いだした。

「『自由そうに見える』って言われないかね、エンジェル氏」

アンゲルはびくりと肩を震わせた。

「だったら、何？」

声が震えた。

アンゲルは嫌なことを思い出していた。

クラウスやソレアに『自由そう』と言われたことを。

その不快さ、不可解さを。

「浮ついてるってことさ、立ち位置がないからそうなるんだ。俺に『シュツティフアントが云々』言えるような立場かな？少なくとも俺は、落ちついてるよ、自分の場所がどこか知ってるからな。エンジェル氏はどうなのかな？でたために羽根をばたばたさせてるだけじゃないのかな？」

「……勝手に言ってる」

アンゲルは再びヘイゼルに背を向けた。

ヘイゼルはもうほっといて、学者を探そう。

そのために来たんだった。忘れてた。

後ろから、ヘイゼルが何かわめく声が聞こえたが、あえてふり返らなかった。

しかし、言われたことだけは、しっかりと脳裏に刻まれた。

立ち位置がない……。

7-3 エレノア フランシス 女性たち パーティ会場

そのころ、フランシスと一緒に会場に来たエレノアは、フランシスの取り巻きの女性たちと一緒に、フルーツが並んだテーブルを囲んでいた。

「それでね、運営の嫌がらせでマイクの電源が入らなかったのに、エレノアってば、マイクなしで、会場全体まで響くような大声を出したのよ」

フランシスは、席に着いてからずっと、エレノアの話ばかりしている。

エレノアは小声で『やめてよ』と言い続けているのだが、気付いているのか無視しているのか、フランシスが話を止める気配はない。「すごいわね」

「でもいやがらせなんて怖いわあ」

取り巻きの女性たちは、みんな妙に甲高い声で、作り笑いだと誰でもわかるわざとらしい表情で、大げさに感嘆しながらフランシスの話を聞いていた。

「ご令嬢はご機嫌がよさそうですね！」

ヘイゼルが席に近づいてきた。

「何の用？」

フランシスがきつい目つきでヘイゼルを睨んだ。

「ちょっと来てもらっていいかな？」

「嫌だつて言ったら？」

「そう怒るなって」

そして、フランシスがヘイゼルに連れられてどこかへ行ったとたん、テーブルの女性たちが、一斉に安堵のため息をつき、

「あんなのと同じ部屋なんて大変でしょう？」

「いつもこんな風に連れ回されているの？」

「今でも物を投げるんでしょう？」

と、一斉にエレノアに同情し始めた。

驚いたエレノアは慌てて否定した。

「そんなことないわ。確かにたまに怒りだして物を投げることはあるけど……面白い人よ」

エレノアは本気でそう言ったのだが、女性たちは、

「いやだ、私たちにまでそんな嘘つかなくていいのよ」

まるでエレノアを信用していないようだ。

「嘘じゃないわ。本当になんでもないのよ」

「心配しなくてもいいの。私たちは何を聞いても黙ってるから」
「ちよつと太めの女性がこう言った「私もルームメイトだったの」

「私は12番目」

青いドレスの娘がそう言った。

「私は22人目」

「私は16番目」

「私は8番目」

「私は……」

みなで口々に叫び始めた。エレノアが、よく目の前の女性たちを見ると、アルターに來た時に見た、ソフトクリーム頭に似た顔が混じっていた（髪型は普通のストレートに変わっていたが）

どうやら、ここにいるのはほとんどが、フランスの元ルームメイトのようだ。

一度口を開くと止まらないのか、『元ルームメイト』たちは、一斉に、フランスの悪口を言い始めた。かなり辛辣に。

「とにかくヒステリーなのよ。すぐ物を投げるし、怒鳴るし」

「あの目つき！」

「絶対病気だわ。たまにいるじゃない、生まれつき性格がイカれてる女って」

「そうそう、そういう奴はたいてい目がつりあがっているのよね！」

「どうしてあんなのがシグノーに生まれたのかしら？」

「場末の娼婦でいいじゃないの」

「あんな性格じゃ、娼婦でも稼げないよ」

「けんかしてすぐに刺されて終わらつてとこね」

「なまじお金持ちに生まれると、ああいう人が長生きして困るのよね」

エレノアは『そこまで悪い人じゃないのに……』と思いつつながらも口には出さず、黙って悪口を聞いていたが、そのうち、目の前の女性陣がだんだん怖くなってきた。

この子たち、きつと、私がここを去つたら、ものすごい勢いで、私の悪口を言い始めるに違いないわ……。

エレノアは不思議でたまらない。

どうしてフランスは、こんな人たちと付き合い続けているんだらう……？

7-4 アンゲル エレノア フランシス クー パーティ会場

アンゲルは、会場の隅で、高名な心理学者が、一人でワインを飲んで見つけた。

声をかけようか……でも、俺ってただの学生だしな……。

アンゲルが声をかけようかどうしようか迷っていると、クーが現れて、アンゲルを学者のところへ引っっぱって行き、

「私の友達ですの」

と紹介してくれた。アンゲルは喜んだが、クーが去り際に、

「借りはきっちり返してもらおうわよ」

と言い残して去って行った。

そのころ、ようやく『フランシスの元ルームメイトたち』から解放されたエレノアが、会場をうろろしていると、学者とうれしそうにしゃべっているアンゲルを見つけた。

アンゲルにとっては、パーティーも勉強する所なのかしら……。

「誰かを探してるの？」

エレノアがふり返ると、そこには、イシュハ・ヴァイオレットのスーツを着た男性が立っていた。上品な顔立ちで、エレノアの好みにはわりと近い。

「友達よ」エレノアが、にっこりと笑いながらアンゲルの方を指さした。「取り込み中みだから、いいの」

「シグノーの友達なんだって？」

「どうして知ってるの？」

「うわさになってるよ。君みたいな綺麗な人が、あんなヒステリーと友達なんて信じられないってね」

エレノアの顔から笑顔が消えた。

「悪いけど、失礼するわ」

エレノアはその場を去ろうとしたのだが、

「待って」

腕をつかまれた。

そこへクーが、にやにやしなから近づいて来た。

「あら、私のエレノアに何をしているの？」

男性が『ノレーシユの姫君』に驚いて、引き下がった。

クーは、まだ学者としゃべっているアンゲルを、白けた目で見や
った。

「残念ね。お目当ての男性が取り込み中で」

「そういう言い方やめてよ」

「ちよつと来て」

エレノアはクーに引っぱられて、会場の外に出た。

そこにはクーの、黒塗りの高級車が停まっていた。

「二人で脱走しましょう。おもしろくもないでしょ？」

「でも……」

「エブニーザも来てないし」

「来てないの？」

「早朝に起きて脱走よ。指導したのは私だもの」

「えっ」

エレノアが露骨に嫌な顔をした。

「そんな顔しないでよ。早く乗って、ほら」

エレノアが車に乗ろうとした時、突然フランススが飛び込んで
き
て、

「早く出して!!」

とヒステリックに怒鳴った。

車は走り出した。

エレノアが後ろを振り返ると、ハイゼルらしき赤い服の男の姿が
見えた。

「何があつたの？」

と聞くと、フランススは訳を話さず、いつものようにすさまじい
勢いでハイゼルの悪口を言い始めた。

「冗談じゃないわよ！品性のかけらもないわね！礼儀つてものを知

らないのよ!」

「いつものことじゃないの……パーティの恒例行事よね、あんたたちのケンカって」

クーは楽しそうに軽口でからかっていたが、エレノアは、ハイゼルが可哀相だなあと思った。そして、フランシスにしようと思っていた『どうしてあんな人たちと付き合うの?』という質問を忘れてしまった。

7-5 アンゲル ヘイゼル パーティ会場

パーティも終盤に入った頃、アンゲルは、酔いつぶれた学者を、同じ建物の上の階にある客室に運び、逃げるように会場を出た。

この学者、タフサと同じか、それくらい有名な、精神医学の権威のはずなのだが、自分の話を延々としたあげく、飲み過ぎで寝込んでしまったのだ。

……やっぱり来るんじゃないか！

廊下を歩きながら、アンゲルは一人、自分に腹を立てていた。

そうだよな、ティッシュファントムの行事なんて、かかわったつてろくなことになるはずもないよな。どうしてそれくらい判断できないんだ俺は！？

ロビーの椅子に座って、通る人を観察する。

みんな立派そうだ。

金持ちかどうかは知らないが、少なくとも『自分の立ち位置を持っている』人たちのだろう。

……と思ったら、白髪の学者めいた男性数人が、ロビーでフアンジャンプをしているのが目に入った。跳ねるたびに両手を振り上げたり、白目をむいてのけぞったりしている。

見ている方は全く面白くないが、あれでもジョークのつもりなのだろう。妻なのか同僚なのか、白髪の上品そうな女性が、彼らにカメラを向けてにこにこしている。

……イシユ八人って、大人になってもガキくさいな。

アンゲルは、管轄区の親せきや、近所の『白髪の男性』を思い出してみたが、気でもふれない限り、飛び跳ねて変なポーズなんてしそうにない。あちらでは大人というのは『落ちついて、知的で、バカなことば絶対しない人たち』の事を言うのだ。

もついちど、飛び跳ねている『お爺さん』たちを見る。

ばかばかしいが、本人たちは楽しそうだ。

……俺は将来、どうなるんだろう？

アンゲルには、自分の未来が、まるで想像できなかった。管轄区に戻って親と同じ仕事なんて、絶対にしたくなかったが、かといって、このままイシュハで勉強したところで、将来何か職に就けるとも思えない。

深刻に考えこんでいると、ヘイゼルがやってきた。

「ご令嬢とエレノアは、姫君の高級車で逃げたよ。つたく、用意のいい女どもめ」

「えっ!？」

エレノアを探すつもりだったアンゲルがショックを受けた。いや、今までエレノアの存在なんてすっかり忘れていたのだが。

「残念でしたな。せつかくの女神の祭りだったのに。手をつなぐ相手がいなくなつて」

「どつという意味？」

「知らない？我らが忘れられつつある女神アニタ様が、右手に男性、左手に女性の手を取つて、二人は結びついたという、あの日なんだよ、今日は」

「……そういえば、そんな神話あつたっけ」

アンゲルはすっかり忘れていた。学校で習つたのだが、この神話は女神フアナティとは関係がないので、管轄区の学校では軽く触れただけで終わつていた。

エレノアが……。

がつくりと落ち込んでいるアンゲルに、ヘイゼルが追い打ちをかけるように、

「もっとちゃんと調べておくんだつたな。せつかくエレノアを捕まえるチャンスだったのに、酒飲みのジジイの話なんか熱心に聞いているんだから、エンジェル氏は困るね」

せせら笑うような笑みを浮かべた。

「うるさい！ティツシュファントム!!」

「ティツシュファントムじゃないって言ってるだろうが!」

「君たち」会場の職員が近づいてきた。「掃除の邪魔だから、出て行つてくれないかな。それとも手伝うかい？」

パーティはとっくの昔に終わって、清掃業者が入り始めていた。

二人は慌てて会場を出て車に乗ったが、ヘイゼルは延々と文句を言い続けていた。

「なんだあれは、俺が何者か知らんのか？何が手伝うかいだ！！嚴重に苦情を申し立ててやるぞ！！いや！あんなやつは解雇してやる！！」

「だから、そういう態度を改めろって言ってるんだよ！」

二人の言い合いは、アルターに着くまで続いた。

7-6 パーティの後

エレノアたちの乗った車がアルター内に入った。

「あら、エブニーザ！ちよつと止めて！」

クーが窓の外を見ながら叫んだ。エレノアも同じ方向を見る。

エブニーザが本を何冊か持って、嫌そうな顔でこちらを見ていた。
「乗りなさいよ」

クーが声をかけてドアを開けたが、エブニーザは気が進まない様子で、

「いいです」

と言って、歩き出した。しかし、フランシスが

「早く乗れ！」

と怒鳴り始めたので、仕方なく、怯えた表情で、前の席に乗った。

男子寮の前でエブニーザは降ろされたのだが、ちよつと、アンゲルとヘイゼルも帰ってきたところだった。

エレノアとエブニーザ！

アンゲルは、二人（他の2名は目に入らなかったらしい）が一緒にいるのを見ていじけてしまい、ヘイゼルもなぜか機嫌が悪く、部屋に戻ってからみんな黙り込んだまま、気まずい空気が流れていた。

そこに電話がかかってきた。

アンゲルが出ると、エレノアだった。

「あの一……」

何を話しているのかわからないような、何かを躊躇している様子だ。

「何か用？」

アンゲルは不機嫌な声で尋ねた。またエブニーザじゃないだろうな？

『フランススよー!!』突然思い出したようにエレノアが叫んだ『そう!そう!フランススが変なの。ヘイゼルに何か聞いてない?二人で行動してみたいだし』

「変?」

『黙りこんでぼんやりしてるの』

「疲れてるだけじゃないか?」

『ヘイゼルは?』

「……今いないから聞いて、かけ直す」

アンゲルは電話を切った。

「おい、3人ともいるだろ、何だよ?」

ヘイゼルがソファーにもたれたまま文句を言った。

「フランススの様子がおかしいんだって、何かやったの?」

「押し倒してキスしたらぶんなぐられた」

「ハア!?!」

アンゲルが驚いてふり返ると、エブニーザも、怪訝そうな顔でヘイゼルを見ていた。

「いいだろ別に、パーティなんだから。年に一度の。しかも女神の神話で……」

「良くないだろ!」

「だめですよ!」

アンゲルとエブニーザが同時に叫んだ。

「つたく、教会っ子が揃って何を驚いてるんだよ?」

また長々と話し始めるかと思っただが、ヘイゼルは立ち上がって、自分の部屋に戻ってしまった。

「……何か変じゃないか?」

「変ですね」エブニーザが真面目な顔で言った「ふられたんでしょ
うか?」

「俺に聞かれてもなあ……」

アンゲルは、女性の集団の先頭を歩いていたフランススと、後ろに着いていたエレノアを思い出した。

そつだ、エレノアにあとでかけ直すって……正直に話しているのか？

7・7 エレノア フランシス 女子寮の部屋

フランシスが落ち込んでいる。

窓のそばに座って、ぼんやり外を見ている。そして何もしゃべらない。

大変珍しく、不気味な事態である。

エレノアはアンゲルからの電話を待っていたのだが、いつまでたってもかかってくる気配がない。

どうしてだろう？何も聞き出せなかったのかしら？それとも、話せないようなことをしたのかしら……？ヘイゼルなら、何をやってもおかしくないけど……でも、フランシスが文句も言わずに黙りこんでいるなんて。

夜になっても、次の朝になっても、フランシスは静かだった。

朝になっても起こしにこない。部屋にこもって寝込んでいるようだ。

夕方になって、エレノアが練習から帰っても、窓辺でぼんやりしていたので、

「帽子を買いに行こう！」

エレノアが叫んだ。フランシスが不思議な顔で振り向いた。

「帽子？」

「次のステージでかぶる帽子がないの！！」

「たくさん持つてるじゃないの」

「ドレスに合うのがないんだってば！！」

エレノアは強引に言い続けた。すると、フランシスは戸惑いながらも、好みの店をいくつか挙げたので、エレノアは全部回ることにした。

着替えたエレノアが部屋から出て来た時、自分宛の手紙がテープルに置かれているのを見つけた。

うちの母だわ。何だろう？

読んでみると、

『あたしたちと、フェンキの曲芸師たちで、アルターで芸を披露するんだよ。許可が取れたから、駅前の路上でやるよ。見に来なさい。ポトラも連れてるし、久しぶりに会えるね』

と、アケパリ語で書いてあった。

しかもその公演の日付は、今日だ！

しかも、開幕まであと数時間しかない。

「うちの両親がアルターに来るのよ！！」

エレノアが叫んだ。部屋で着替えていたフランシスが、中途半端に上着をかぶったまま、飛びだしてきた。

「ほんと？」

「しかも今日で、もう時間がないの！！」エレノアがフランシスに手紙を突き付けた。「急がなきゃ！！」

二人であわてて寮を飛び出した。

エレノアの両親が、アルターにやってきた。

駅前に到着した時には、芸人の姿が見えないくらい、たくさんの人が集まっていた。エレノアとフランシスが人をかきわけて前に出ると、見覚えのあるフェンスに当たった。

「このフェンスがあるということは、ポトラが出るのよ！」

エレノアが興奮して叫んだ。

「ポトラって？」

「レッドタイガーよ！一緒に育ったの！！」

「虎と一緒に育った！？」

フランシスが叫ぶと同時に、巨大な一輪車に乗ったピエロが現れた。

「お父さあーん！！」

ピエロに向かってエレノアが叫んだ。フランシスは目を丸くして、巨大な車輪のはるか上（落ちたら確実に即死だ）に乗っている、やせぎすの変なピエロを見上げた。

あれがエレノアの父親？

フランシスが想像していた父親像（絶世の美男子、だってエレノアが美人だから！）とは、あまりにもかけ離れていたので、フランシスはその事実をすぐには信じられなかった。

エレノアの父は、一輪車に乗ったまま、新体操のような芸を披露し、帽子から手品のようにキャンディを取り出すと、車輪の上から観客に向かって投げはじめた。そのうちのいくつかは、エレノアとフランシスの頭に当たった。

一輪車ピエロが退場した後、フランシスをもっと驚かせる人物が現れた。

コミックに出てくるスーパーヒーローのような、筋肉のついた、それでいて女性的なラインを保った、肉感的な黒髪の女性が現れた。

体にぴったりとくっついたセクシーな衣装で、フラフープと、火のついたたいまつを掲げながら、観客を挑発的な目で見回している。彼女の向いに現れたのは、レッドタイガーという、オレンジ色の毛をした虎だ。

「まさか、あれが母親とか言わないわよね？」

フランススが弱り切った声で言うと、エレノアは、

「そうよ。あれがヤエコ・ノルタよ」

いたずらっぽくウインクしながら言った。フランススは息をのんだ。

ヤエコ・ノルタは、レッドタイガーのポトラ相手に、闘牛のような芸を披露した。

火のついたフラフープを掲げ、レッドタイガーが炎の輪の中を通り抜ける。

どつと歓声が起こる。

「本当に、あれ、あんたのお母さんなの？」

フランススが困いから身を乗り出すようにして叫んだ。

「ええ、そうよ」

「全然似てないわね。魔女みたいに見えるわ」

どうしてあの二人から、エレノアみたいな子が生まれるんだろう

……？

フランススには、それが、どうしても理解できなかった。

レッドタイガーが退場した時、ヤエコがエレノアのところに来てきて、

「あんたも仕事して」

と言うと、そのたくましい腕で、エレノアを囲いの中に引きずり込んだ。客からどつと、笑い声と歓声が聞こえた。残されたフランススは、何が起こるのかと、じっと、怯えた顔でエレノアを見つめていた。

フェンキの曲芸師たちが、アコーデオンと変な形の笛を吹き始めた。

エレノアはそれに合わせて、昔からよく知っている歌を歌った。豊かな音色が会場を満たした。

曲の終わりと共にエレノアと曲芸師がお辞儀すると、観客がすさまじい喝采を浴びせた。父ミゲルと母ヤエコが並んで出て来て、二人で、自慢するようにエレノアを高く担ぎあげた。また歓声と拍手が沸き起こった。

……あの親子にして、エレノアありなのね。幸せそうだわ……。フランスはこの『へんてこりんな親子』に驚きあきれつつ、陽気で自由そうな一家を羨ましく思っていた。

実は、この会場に姫君クーがお忍びで来ていたのだが、通行人にばれてしまった。

「ノレーシユの姫君だ！」

人混みの後ろで歓声が上がった。エレノアとフランスは驚いた。「クー!？」

フランスが声をした方向に向かって、人混みをかきわけて進んでいくと、黒塗りの車が、人に囲まれて立ち往生していた。

「どいて!どきなさいっつもの！」

フランスが人をかきわけて、車の窓をたたくと、

「あんたも乗る？」

クーののきな声が聞こえた。

結局、みんなでクーの車に乗った。車は人混みの中を発信し、よけていく人々の中をゆっくりと進み、離れて行った。

「まさかうちのエレノアが、一国の姫君とおつきあいしているとは」車に乗ってほっとしていたエレノアは、後ろから父ミゲルの声がしたので、驚きで飛びあがった。

最後列を見ると、なんと、ミゲル・フィリとヤエコ・ノルタが、ちやっかり車に乗っていた。

「いつのまに乗ったのよ!？」

「だってえ、大騒ぎになっちゃったし、姫様を一回生で見たかったんだもん」

悪びれもせずにヤエコが答えた。エレノアが呆れていると、「いいじゃない。面白くて」クーが後ろの座席を見ながら笑った。「せっかくだから、うちに遊びにいらっしやいよ」

「どうやって知り合っただよ？ん？姫様と？ああ？」

ミゲルがエレノアに詰め寄った。ピエロの顔で傍に寄られると怖い。

相手が姫君だと知っても態度が全く変わらない両親に、エレノアは困ったが、クーは逆に二人が気に入ったようだ。

クーの部屋に案内されてすぐ、ヤエコが、

「どうなの、うちの姫君には変な虫はついてない？」

と、フランススに向かって尋ねた。フランススがにやりと笑い、クーの部屋の電話を取った。

アンゲルが出た。

「エレノアのご両親がアルターに来ているの、6時に歓迎会をやるから、図書館のカフェに正装でいらっしやい。エブニーザも連れてね。遅刻したら殺すわよ」

そう言って電話を切った。

「フランスス！」

エレノアが叫ぶが、フランススはニヤニヤしている。

「ふふふ、大変ですよお母様。未来の旦那候補が二人来るわ。あ、先に言っておきますけど、ヘイゼル・シュツティファントにはかわらないほうがよろしくてよ」

「シュツティファント!?」ミゲルが大声を上げた「あのシュツティファントか？どんな顔をしているか見てみたいもんだな！」

困惑するエレノアだが、今度はクーが満面の笑みで電話し、

「6時から貸し切りにしてちょうだい」

と注文を始めた。

お嬢様たちは、いつだってやりたい放題だ。

7・9 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮の部屋

エブニーザが、図書館に行こうと部屋を出ると、そこには、受話器を持ったまま、凍りついたように立ち尽くしているアンゲルがいた。

「あのー、どうしたんですか？さっきから止まってますけど」

エブニーザは、本をアンゲルの目の前で上下させながら、心配そうに顔を覗きこんだ。

「エレノアの親父がここに来る」

「えっ？」

「お前も行くんだ！図書館のカフェで6時だぞ！遅れたらフランシスに殺されるぞ！俺はスーツを買ってくる！！！」

アンゲルが外に飛び出して行った。

エブニーザは何の話だかわからず、図書館に行こうとしたのだが、そこにヘイゼルが帰ってきた。

「エレノアのお父さんが来るそうです。フランシスがからんでるみたいなんですけど」

それを聞いたヘイゼルは、フランシスに電話をかけたが、誰も出ない。

「いないな……」

「6時にカフェに来て言ってましたけど……」

「ほほう」

ヘイゼルが何か企むようににやにやし始めた。

「シグノーの令嬢め、魂胆は読めたぞ」

歓迎パーティ。

エレノアの父ミゲル・フィリには、特別な才能がある。

『娘に気がある男を一瞬で見抜く』のだ！！

この日も、アンゲルがエレノアを見る目つきから、

『娘に気がある！！』

とすぐにわかり、（エブニーザについては『心配いらない』こともすぐに気がついた）酔ったふりをしてアンゲルに絡んできた。

「お前は本を読むのか」

「え？」いきなりからまれて驚き、アンゲルの声が引きつった「ああ、読みますけど……」

「小説は読むか？」

「えーと、読まないですね、学校では心理学とか医学が専攻なので……」

「最近の小説は何でもあからさまに描きすぎる」アンゲルの言葉が聞こえていないかのように、ミゲルは勝手に話し続けた「なあ、セックスとか恋愛っていうのは、ひどく個人的でデリケートな問題じゃないのかね？なのに、最近は簡単に、だれとやったとか、誰を妊娠させたとか書きやがる。自慢するようなことか？己の低俗さをひけらかしているだけさ。もっとウィットに富んだ話題や、上品で美しい表現があるだろう？本当に腕のいい作家ならね」

苦手な話題に青ざめているアンゲルに向かって、ミゲルはさらにこう言った。

「君はどうなのかね？女と寝たことはあるのか？まさかどっかのお嬢さんを妊娠させたりしてないだろうな？ん？」

……このオヤジ、俺の苦手な話題をわざとふってるんじゃないか？

管轄区では、こういう話題自体がタブーなのだ。前にも説明したが、女性の裸を想像しただけで『罪』で、人によっては延々と懺悔

するほどなのだ。

ミゲルが卑猥な話を（もちろん、わざと）している間、アンゲルはずっとイライラしていたが、もちろん顔には出さない……つもりだったが、目元と口元が引きつってピクピク震えていたので、それに気づいたヘイゼルが、ニヤニヤと笑いつつも、

「教会つ子にそういう話題はだめですよ」

と忠告した。そして、フランスに近づこうとしたが、フランスは彼を避けるようにクーのほうに歩いて行き、ワイングラスを手を取った。

「ご令嬢は機嫌が悪いのかな？」

「別に何でもないわよ」

ヘイゼルに背を向けたまま、フランスがつぶやいた。ヘイゼルは珍しく何も言わず、ニヤニヤしながらその場を離れて行った。

……変ね、いつもならここで言い合いが始まるのに。

「今日は物を投げないの？」

クーが素朴な疑問を口に出すと、フランスが無言で鋭い視線を向けてきた。

そのころ、エレノアの母ヤエコはというと、エブニーザの肩にがつちりと腕を回して、逃がさないようにつかまえて、

「かわいい子だねえ。こういう子はめったにいないわよ。うちのエレノアがいやなら私なんてどう？」

……要するに、遊んでいた。

彼女から見てもエブニーザは『天使のように可愛い美少年』なのだ。

しかし、エブニーザは、真っ青な顔でひきつった作り笑いを浮かべながら

……どうやって脱走しよう？

しか考えられなかった。

あまりにも気まますぎる両親に、エレノアは頭を抱えていた。

クーが傍に寄ってきて、愛しげな眼をしながら、

「おもしろいご両親ね。見てると笑えるわ」と、おもしろがって言った。

エレノアは、走って寮に逃げ帰りたいと思い始めた。

「あんたの親は面白くていいわね」

フランシスはうらやましさを隠さずに、気ままな両親を見つめていた。

「ヘイゼルはどこ?」

「ヘイゼルなんてどうでもいいでしょ」

「そうだけど……」

エレノアは『何か変……』と思ってあたりを見回したのだが、ヘイゼルの姿が会場になかった。

そうだ、アンゲル、電話してって言ったのに!!

エレノアがそんなことを思い出して会場を見渡したが、アンゲルと父ミゲルの姿も見えない。

母ヤエコに近づくと、エブニーザが飛びあがるように走りだし、外へ逃げて行った。

「あらやだ。うぶなんだからもう……」

逃げたエブニーザの方を見ながら、ヤエコが残念そうな顔をした。

「お父さんはどこ?」

「ああ、なんか、あんたに気のある少年を連れてどっかに行ったよ」「えっ?」

「かわいそうに、一晩中飲まされるよ。それで、変な話を吹きこまれて、あんたに近づかなくなるんだ……それとも、持ちこたえるかねえ」

ヤエコはそうつぶやくと、にやにやしなから、アケパリ語で、

「で、あんたはどの子が本命なの?」

とささやいた。

エレノアがぎょつとした顔を見ると、ヤエコはさらに楽しそうに、アケパリ語でエレノアに耳打ちした。

「白い目の美少年?管轄区の真面目な子?それとも、レズビアンの

お姫様？」

「えっ？」

「アケパリのワイドショーで言ってたよ。ノレーシユの姫君はレスだっつて」

「そんな話をここでしないでよ！」

「私は自由な人間だから、どれを選んでもあんたの味方。ささ、白状しなさい」

「どれでもないってばー!!」

エレノアはそう叫ぶと、いつまでもニヤニヤしている母から離れた。

お父さんも、きっと何かを疑っているんだろうな……。

だからアンゲルを連れて行ったんだわ！

違うのに。私は……。

私は？

私、誰が好きなの？

誰かが好きなの？

何でもないの？

いや、アルターに来たのは歌を歌うためのはず……。

眠い。

だるい。

頭が重い。

吐き気がする。

アンゲルはそう思いながらも、必死で眠気と戦いながら、本のページをめくっていた。

昨日、エレノアの父親につきまとわれて、ラベルも読めないような異国の酒をむりやり飲まされ、聞きたくもない猥談（普通の管轄区人に聞かせたら、発狂して死ぬかもしれない凄まじい話）を延々と聞かされた。

ヘイゼルも同じところにいたのだが、止めもせずに横でニヤニヤしているだけ（おそらく、面白い芝居でも見物しているつもりだったのだろう。要は、自分が楽しければ何でもいいのだ）で、全く助けにならなかった。

しかも、話をそらそうと、エブニーザの話をする時、

『ああ、あれは問題ない』

と真顔で言われてしまった。

問題ないって何だ？親公認か？

明け方になってようやく解放されたが、寮に帰って来てからも、アンゲルは全く眠れなかった。

幸い、あの『すさまじい両親』は、次の公演があるからと、早朝にアルターを離れたのだが……。

アンゲルは頭痛と眠気で、本の上に突っ伏した。

あんなとんでもない親父がいるとは思わなかった。

どうやって説得しよう……。

待て、

何を説得するんだ？

ああ、だめだ、頭が変になってきてるぞ……。
全く集中できないまま勉強していると、エブニーザが部屋から出てきて、

「僕のどこがおかしいのか、教えていただけませんか？」

と聞いてきた。アンゲルは、

「まず、その丁寧な話し方をやめろ。俺は国家元首でも雇い主でもない。ヘイゼルみたいに横柄なのもまずいけど、もっと普通に喋れよ」

「そうですか……」

「だからその『そうですか』をやめろって……何で急にそんなことを聞こうと思ったの？」

「普通の人間になりたい」

「は？」

アンゲルの呆れた顔を見て、エブニーザは落ち込んだような顔で自分の部屋に戻ろうとしたので、アンゲルはあわててその背中に向かって、

「あとで紙に書いて部屋に投げ込んでいてやる！」

と叫んだ。

勉強を再開したが、今のエブニーザの態度が気になって集中できない。

そのうち、ヘイゼルが戻ってきたので、その話をすると、

「それは面白そうだ」

と、自分の部屋から、金色の装飾が入ったきれいな便箋をもってきた。

「何だよ、この成金趣味な紙は」

「大事なことは、こういうのに書いたほうが気合が入るだろ？本物の金だぞ、このへんは」

二人でエブニーザの悪口を書きまくった。

最初は二人とも楽しんでいたのだが、部屋中を便箋だらけにしてしばらく書かれたものを眺めていると、とんでもない意地悪になっ

た気分になってきた。

「なあ、これだけじゃなんの解決にもならないから、対策も書いてやるっ」

そして、また二人で好き勝手に書き始めた。

そのうち、ヘイゼルが、アンゲルの悪口を別な紙に書き始めたので、アンゲルも対抗してヘイゼルの悪口を書きまくった。

そんなことをしているうちに、夜がふけていく……。

7-12 エレノア 襲われる

フランススは、エレノアの服の趣味の古さに呆れていた。

ポートタウンに買い物に行こうと誘ったら、また古い衣装を広げはじめ、

「これは80年前の舞台衣装で、この布地は貴重品だから今は手に入らなくて……」

などと言い始めたからだ。

「古物商の品定めじゃないでしょ！！100年戦争はとつくの昔に終わったのよ！！」

フランススは、エレノアをまたセカンドヴィラに連れて行った。

もちろんクーもついてきた。ちょうどロックミュージシャンの衣装が流行っていて、あまりの露出の多さにエレノアはびっくりするが、試着室から出てきたクーが、かなり派手なパンクロックスタイルの服を着て、変なポーズをつけたので、

「あんだ、その格好をおたくの国民が見たら泣くわよ」

フランススはおもしろがっていた。

フランススは、エレガントなドレスや『上流階級にふさわしい上品なもの』が好きで、エレノアにもそれを勧めたが、クーは、

「そんなの似合わない。もっとかわいらしいのが似合うわ」

と、レースをふんだんに使ったドレスを持ってきた。

二人とも、自分の服選びよりも、エレノアの服を選んで着せるのが楽しいようだ。

エレノアは、つぎつぎと服を持ってくるフランススと、着替えを覗きこんで、

「手伝いましょうか？」

「ブラがはずしたくなったら言って」

ニヤニヤするクーに困惑しながらも、ショッピングを楽しんだ（と言って、エレノア自身はほとんど買い物はしなかったのだが）

セカンドヴィラにはシグノーの別荘があるので、三人でそこに泊まった。

事件はその夜に起きた。

夜中に、エレノアの部屋にクーが入ってきて、エレノアが寝ているベッドにもぐりこんできた。

「どうしたの？」目を覚ましたエレノアが寝ぼけた顔で言った「眠れないの？」

エレノアは、前にフランシスが部屋に入って来た時の事を思い出してそう言ったのだが、クーの事情はそれとはだいぶ違っていた。

クーは黙って、エレノアを抱きしめ、驚いている両目を愛しげに覗きこんだ。

「エブニーザのような、美しい少年に生まれたかったわ。そしたら……」クーがエレノアの頬を撫でる「あなたをものにできたのに」

頬を撫でていた手が下に降りてきた。肩から胸を伝って、腰、そして……。

エレノアは、心臓が、早鐘のようにがんがんと打つのが感じた。

二人の身体がぴったりとくっつき、クーの胸が自分の胸に押し付けられていた。

クーは両手でエレノアの顔を包むようにして、キスをしはじめた。

エレノアはショックを受けてしまい、抵抗できない。悲鳴を上げて逃げようかと考えるが、体が全く動かない。

「冗談よ」

怯えきっているエレノアに向かって、クーは笑いかけ、身を離すと、ベッドから起き上がり、出て行った。

混乱したエレノアは、当然、いつまでも眠れなかった。

7 - 13 エレノア フランシス 朝

朝。

エレノアがコーヒーに口をつけるのを、ニヤニヤと待ち構えていたフランシスは、

「で？クーと何してたの？」

とささやいた。

エレノアのカップから『ゴボツ』という音がした。

「あ、ごめん、間違えたわ。クーに何されたの？」

「フランシス……」

楽しそうなフランシスを、真っ赤になったエレノアがうらめしそうな目で睨んだ。

「何よ、まさか本当にやられたんじゃないでしょうね？」

「フランシス！」

エレノアが叫びながら勢いよく立ち上がった。フランシスは驚いたのか、

「ごめん」

とつぶやいて下を向いた。

クーは早朝に用事があると言って出かけたそうだ。

帰ってきたらどうしよう？

エレノアは悩む。そして、

「で？ほんとは何されたの？」

と興味津津のフランシスを、強烈な目つきでにらみつけた。

7-14 アンゲル ソレア レストラン

7-14

朝、便箋が散らばっている部屋の電話が鳴り、アンゲルが半分ねぼけて出ると、エレノアだったので、一気に目が覚めた。

アンゲルが『エブニーザの欠点』を聞いてみると、

「うーん、綺麗なのに、人に会うとびくびくしているところ？あの顔で堂々としてたら、すごくステキよね。きつともてるのに」

セカンドヴィラのお土産は何がいいか、と聞かれたので、てきとくに答えて電話を切ると、アンゲルはエブニーザの欠点一覧から、『びくびくしすぎ……もつと堂々とふるまえ!』

と書かれている紙を取り出し、ゴミ箱に投げ捨てた。

ヘイゼルの姿が見えないことに気がついたアンゲルは、エブニーザの部屋のドアをたたいてみるが、こちらも反応がない。

アンゲルは、エブニーザについて書かれた便箋を集めてドアの前に置き、自分は着替えて寮を出た。

バイト先ではまたソレアに『一緒に映画に行こう』と誘われたが、『映画にいい思い出がない』

ヘイゼルが暴れ、映画館の職員に睨まれたことを思い出した。

「ねえ、別に付き合ってたなくて、ちょっと一緒に遊ぶくらいいいじゃない!」

ソレアはなかなか引き下がろうとしない。

「そんなこと言うんなら、私がアルターに行つてやる」とまで言われ、アンゲルはぞつとした。

「なんでそんなに強引なんだよ？教会つ子らしくないな」

「アンゲルだつて」

アンゲルは相手にしないことにした。しかしソレアの話はまだまだ続く。

「アンゲルの好きな子ってどんな子？」

「うるさい」

「ねえ、私たちは管轄区の間人よ？ファナティ様の信徒なのよ？今イシユハにいるけど、いずれ帰るのよ？帰ったら、またつまらない、代わり映えのしない人生しか送れない。同じような家の人と結婚して、同じように子供ができて、同じように同じ時間に仕事に行って帰ってきて、同じように死んでいく」

「同じじゃない、一人一人違うよ、人生は」

アンゲルは、自分で言いながら『うそくさい』と思った。

アンゲル自身も思っているではないか。

『つまらない国だ』と。

「どうせ同じような人生を送るなら、少しでもましな相手を選びたいと思わない？アンゲルも私も、あの国とは違う文化を知ってる。

少なくとも、国を一度も出たことがない女の子より、私の方が面白いわ。違う？」

「俺は管轄区に帰らない」

アンゲルは無表情でつぶやいた。

「帰らない？」

「こっちで就職するよ」

「本気？」

ソレアは疑っているようだ。アンゲルは答えない。

「じゃあ、私も残る」

「はあ？」

「こっちで結婚したって言えば、うちの親だって帰ってこいとは言わないかも」

「おい、どうしていきなりそんな話になるんだ？」

「だめ？」

「俺はいやだ！」

「そんなにはつきり言わなくてもいいじゃない！」

「こっちで、店主に『うるさいぞ！しゃべってないで手を動かせ！』と怒られた。」

帰り、やっと解放されると思つて店を出ようとしたアンゲルに向かつて、ソレアが、店中に響く大声で叫んだ。

「ねえ、管轄区人は不気味がられてるから、他の子に手を出しても相手にされないわよ！潔く私にしなさい！」

店にいた客がヒューとひやかす声が聞こえた。

アンゲルは、全力疾走で、その場から逃げ出した。

7 - 15 エレノア エブニーザ 図書館内

帰ってきたエレノアが、おみやげを持って図書館に行くと、いつもの資料室で、エブニーザが、紙の束を見つめながら難しい顔をしていた。

「それ何？」

と覗きこんだエレノアに驚いて、エブニーザは束を胸元に隠したが、エレノアにはもう何行か見えていた。

悪口？

「何なの？誰か書いたの？ひどいわね」

「違います。アンゲルとヘイゼルに頼んで、僕の欠点を書いてもらったんですよ」

「……どうして？」

「直そうと思って」

「見せて」

「嫌です」

「あの二人が書いた内容なんて、正しいかどうかわからないじゃないの！」

エブニーザが嫌そうに紙の束を差し出す。

エレノアはそれをざっと読み……。

「何よこれ！ただの悪口じゃないの！」
怒りだした。

「でも、ちゃんと対処法も書いてありますよ」

「だめよ、こんなの信じちゃダメ！」

「じゃあ僕はどうすればいいんですか？」

エブニーザが泣きそうな顔をしていた。

エレノアは一瞬言葉に詰まった。

「どうって……ねえ、まず敬語で話すのをやめるの。それと、もう少し堂々とする。それだけで十分よ。今のあなたはもう、いいとこ

るをたくさん持っているわ。物静かで、知的で、ヘイゼルみたいにすぐ人をからかったり怒鳴ったりしないし……」

エレノアは紙の束を持って立ち上がった。

「これは没収します」

「えっ……」

呆然としているエブニーザを置いて、エレノアは早足で部屋を出て、図書館の出口にあるゴミ箱に、乱暴に紙の束を投げ捨てた。

「一体何を考えてるのよ！ヘイゼルも、アンゲルも……そうだ、アンゲルがこんなことをする人だとは思わなかった！！」

エレノアに紙の束を取られ、ぼーっとしていたエブニーザのところに、思いつめた表情のクーがやってきた。

クーは、無言でエブニーザのとなりのイスに座り、エブニーザの目を覗きこんだ。

「何ですか？」

尋ねたとたん、クーはエブニーザにキスしようとした。

エブニーザが後ろに飛びのき、

「何を……」

と怯えた顔を見ると、クーは、

「私には相手がいない、あなたの『彼女』はどこにいるかわからない…… ちょうどいいでしょ」

妖しげな目つきでエブニーザに詰め寄った。

「ここなら、誰も来ない」

「でも、ヘイゼルが来るかもしれないし」

エブニーザは壁際まで後退したが、クーは追いつめるように寄ってきてエブニーザに手を伸ばした。

その瞬間、エブニーザは、何か別のものが見えたかのように目を見開いたかと思うと、

「僕は女の子じゃない！」

と叫んで、クーを思い切り突き飛ばした。

クーは床に崩れ落ち、衝撃を受けた顔でエブニーザを見上げた。

「知ってたの？」

エブニーザは震えながら荒い息をしていて、落ちつこうとして息を深く吸ったが、失敗してむせ始め、床に座り込んでしまった。

クーはエブニーザのそばまではっていき、激しく咳き込んでいる背中をさすった。

そのうちに、クーの目から、涙がとめとなくあふれて来て、床に

ぼたぼたとしずくが落ちた。

「クー……」

ようやく咳がおさまってきたエブニーザは、クーが泣いているのに気づき、クーの肩に手をまわして、抱きしめるように自分の肩に引き寄せた。

二人はしばらく、無言で寄り添い合っていた。

形は違うが、二人とも、この世界との、どうしようもない不協和音を抱えていて、静寂のなかに身をひそめてそれを和ませようとしているようだった。無限の夢、有限の静寂。

無駄な試みだとは、二人ともわかっていた。

でも、無駄だったら、何だと言っただろう？

どうしようもなくとも、何かせずにはいられない……。

少なくとも、この時の二人はそうだった。

数時間後、ヘイゼルがエブニーザを探しに来たところには、二人ともいつものように、古代の怪しげな本をめくりながら、ノレーシュ語で、二人にしかわからない昔話をしていた。

7-17 アンゲル エレノア カフェ

次の日。

アンゲルは、図書館のカフェで、ソレアの話を思い出してぼんやりしていた。

『管轄区人は不気味がられてるから、こっちの女の子には相手にされないわよ!』

本当にそうなんだろうか。

確かに『狂信的なフアナティ信者』はみんな不気味で気持ち悪いと、アンゲル自身も思っていたのだが、自分だけは違うと思っていた。

でも、イシュ八人から見れば、アンゲルも立派な『管轄区人』なのだ。

……そういえば、エブニーザも管轄区の間人だよな。そんな感じがしないな。妙に綺麗だし、祈ってるのを見たことがないし……。

そして、エブニーザが『普通の人間になりたい』と言っていたのを思い出す。

『普通』って何だ？

何を基準にしてそんなことを言ったんだ？管轄区か？でも、ソレアや『気味の悪いフアナティ教徒』が『普通』だとは思いたくないな。

イシュ八人か？

イシュ八人って普通か？ヘイゼルはどう考えても普通じゃないし、イシュ八が正しいとも思いたくないな……。

考えれば考えるほど、いろいろなことが複雑に絡まって、わけがわからなくなってしまうた。

アンゲルが憂鬱な顔で座っていると、エレノアがやってきて、

「一体何を考えてるの!」

と、エレノアらしくない甲高い声で叫んだ。

何の事だろうと思っただら、エブニーザに渡した紙の束の話だった。「違っつて、あいつが書いてくれっつて頼んできたんだよ。普通の人間になりたいとかどうとか……」

「あなたがそんなことをする人だとは思わなかったわ!!」

「そんなことっつて……あのなあ、半分はヘイゼルが書いたんだぞ。」

それに、どうしてエレノアが怒るんだよ？そんなにエブニーザが……」「アンゲルが目をそらした「いや、そんなことはどうでもいいやでも『普通の人間』って何だろうな？俺は今日それをずっと考えてて、授業をほとんど聞いてなかった。たぶん『こういうのがまともな人間だ』というイメージがあいつの中にある。でも、そのイメージと、今のエブニーザ自身が合わないんだ。自分じゃない何かに必死に合わそうとしてる感じがする」

「まともな人間……」

エレノアも怒りが収まったようだ。静かに、アンゲルの向かいの席に座った。

「エブニーザじゃなくて、ヘイゼルに自覚してほしいんだけどな。」

どう考えてもあいつはまともじゃないだろう？」

「その通りね」

二人とも黙りこむ。カフェでは、カップルや友達同士で、仲良くおしゃべりをしている学生がたくさんいる。

「たとえば、ああいうのかな」

「ああいうの？」

「人と仲良く喋ってる」カフェにいる学生を指さしながら「そういうエブニーザを、俺は見たことがない。図書室にこもってクーと喋ってるか、部屋でヘイゼルにまとわりつかれてるのは見たことがあるけどな」

「そういえば、そうね」

エレノアは、セカンドヴィラで買ってきたネクタイをアンゲルに渡した。

「俺のことも覚えていてくれたとは、嬉しいね」アンゲルは、踊り

だしたい気持ちを抑えて、できるだけクールにネクタイを受け取った。「てつきり、エブニーザのことしか考えてないのかと」

「そんなことないわよ！しばらく見かけなかったし、この前だって父さんと一緒に姿を消したから、心配してたのに」

「ああ、あれね」アンゲルは苦笑いしながら変な声を出した。「変わった親父だね」

「心配してるのよ、前、公演先まで男がついてきたことがあったの」「虎を怖がって逃げてった奴？」

「それもあるけど、他にも何人がいて……」エレノアは話題を変えたかった。「それより、前、倒れたんでしょう？もう大丈夫なの？」

アンゲルは、エレノアが何を言いたいのが一瞬わからなかった。倒れた？ずいぶん前の話じゃないか？

「もう平気だよ。長期休暇の時だけタフサのところに行つて、それ以外は勉強に専念することにしたから」

「いつも勉強してるのね」
「エレノアだつていつも歌ってるだろ？同じことだ。必要だからやってるんだ」

アンゲルは当然のことのように言った。

エレノアの動きが止まった。

「私、もう帰らないと」

突然立ち上がると、エレノアは、足早にその場を去っていった。

何か、心の中で、いつもと違う感触がする。

でも、それが何なのか、エレノアにはわからなかった。

アンゲルは、エレノアの後ろ姿を見つめながら、

やっぱり、俺も不気味な管轄区人だと思われているんだろうかと、寂しげな目で考えた。

音楽科の芝生。

エレノアとケンタが芝生で話をしている。

ケンタは、アケパリの小学校の話始めた。

冬の休暇に、いとこの子供が出る寸劇を見に行ったというのだが、

「『番長その6』なんだ、配役が」

ケンタが、目の端を歪めて言った。

「番長？その6！？」

エレノアが『ありえない！』という声を上げた。

番長というのは、アケパリ独特の、不良グループのリーダーの事である。リーダーが6人もいる非行少年の集団を想像できるだろうか？

「つまりね、何でも平等にしなきゃいけないから、みんな番長なんだ。ぜんぶで12人男子いるんだけど、みんな番長」

「えええええ」

「その前の年は、全員王子で、女子は全員お姫さん」

「そんなの変よ！劇として成立しないじゃないの」

「実際アケパリは変になってきてるよ。『おちこぼれちゃかわいそうだから』なんて言って、かけっこでも全員同じ1等をもらったりするんだ。おかしいだろ？だいいち、小さいころから『全員王子様でお姫さん』なんて育ち方をしたらどうなると思う？現実の世の中は、召使とか普通に働いてる地味な奴で成り立ってるだろ？みんな王子様だと思っただま成長した奴が、そういう普通の人たちを見て、ちゃんとした大人として認識するかな？ずっと自分だけが偉いと思っただま育つてしまっんじゃないかな？」

「不気味ね」

「不気味だよ」ケンタが神妙な顔で言った。「だから、俺の仲間内でも、アケパリがいやになって、イシュハとか、ノレーシュに移住す

る奴が増える。俺も、今のところは、アケパリに帰る気がしないんだ。こっちでギターやろつと思ってる」

「そつ……」

「一緒に組まねえ？」

「えっ？」

「冗談」ケンタが寂しそうな顔をした。「ギターが必要だったら、いつでも言っつて」

ケンタは立ち上がると、エレノアに笑いかけて、去って行った。今のは何か意味があるんだろうか。

エレノアが考えながら音楽科の校舎に入る。あいかわらず、先輩たちの目つきが厳しい。

エレノアはいつも孤立していた。

そして、自分の声が『古臭い』ということも頭から離れず、ケツチヤノツポ先生には、

「情熱が足りないわ！自己主張が足りないわ！」とか、

「最近心が歌から離れているんじゃないの？」と注意されていた。

このままでいいのだろうか。

エレノアは悩んでいた。

でも、声を変えるって、できるものだろうか。

自分の声で無理矢理ロックを歌ってもおかしいだけだ、それはわかってる。

でも、このまま、クラシック『らしい』曲ばかり作って歌っていて、未来はあるのだろうか……。

帰り道を歩く、雪がちらほらと振っている。

サッカー場の前を通りがかって、足を止めた。

……真っ白だ。足跡もない。

サッカー場には均一に、うっすらと雪が積もっていて、だれも練習していないせいか、足跡もなく、綺麗に四角い白い板ができてい

た、まるでキャンバスのようだ。

エレノアは周りを見回した。

だれもいない。

口元だけにやりと笑うと、サッカー場に入って、妙な姿勢でうろつろと歩き始めた。

図書館に向かっていたエブニーザが、サッカー場を一人でうろつろしているエレノアに気付いた。

近づこうとすると、

「ダメ！」

と、叫ぶ声が聞こえた。

エブニーザは立ち止まって、エレノアのつけている足跡を見ているうちに、あることに気がついた。

走って寮に戻り、不審がるアンゲルを連れて（ヘイゼルも勝手についてきた）サッカー場が見下ろせる校舎の3階に行く。

すると、サッカー場には、エレノアの足跡で

『Happy snow』

の文字ができていた。

「なにやってんだあ？」

アンゲルが呆れた笑い声を上げた。

「他の奴らに見られないうちに証拠隠滅しよう」

ヘイゼルが走りだした。

「おい！やめろ！」

アンゲルがあとを追いかける。ヘイゼルは寮からサッカーボールを持ってきた。

エブニーザは二人の様子を3階から眺めていた。自分の出る幕はないと、最初から知っていた。いや、知っていたというよりは『決めつけていた』と言うべきか。

そんなふうにご遊んでいられるのも、今のうちだよ、二人とも。

エブニーザが思っていたのはそんなことだ。

誰も見ていなかったが、彼の顔には、今まで誰にも見せなかったような、残忍な色が浮かんでいた。

……もう、何もかも、決まっているんだ。

結局、アンゲルとヘイゼルは二人でサッカーを始め、雪の上の文字は、二人の走りまわった足跡で、完全に消えてしまった。

そのころ、いたずらの張本人エレノアは、寮に帰って窓辺に座り、外の雪をぼんやりと眺めていた。

「何よ、またあの気持ち悪い白目のことでも考えてんの？」

フランシスが嫌味を言ったが、エレノアは、

「違う」

と答えただけで、そのあと何も話そうとしなかった。

アンゲルは、文字に気がついただろうか？

エブニーザはちゃんと教えに行ってくれただろうか？（彼が気付かないはずがない！）

エレノアはそんなことを考えて、歌の心配をするのを忘れていた。

囚人11番 25番 独房

ある日の事だ。

25番が掃除をしながら、自分の身の上について語りだした。彼は若いころ、教会から『女神像』を盗んで、宗教的重罪に問われたのだそうだ。

「俺は単に、金属の塊を盗んだつもりだったんだ。溶かせば売り物になるからな。でも、教会の奴らは『女神を冒とくした』って言うんだよ。それで、とほうもなく重い罪になったんだ。一生ここから出られないかもな」

「くだらない理由だな」

「えっ？」

25番がびくつと体を震わせた。私が口を開くのが珍しいからだろう。

「女神像を盗んだから重罪なんて、くだらない理屈だ」

あの鋭い、光る目が、私をとらえた。驚きの色で。

「……あんた、外国人かい？」

「いや、この国の人間だよ」

「へえ、意外だね」

「女神なんて、合理的に考えて、いるわけがない」

「おいおい、この国でそんなことを言っているのかよ」

25番が本気で慌てた声を出し、通路の看守の方を向いた。

全くどうでもいい、くだらない話だ。

さて、続きを聞かせよう。

8 - 1 アンゲル 襲撃される

バイトの帰り、夜道を歩いていたアンゲルが、何者かに襲われた。ポートタウン駅に向かって歩いている途中、後頭部に強い衝撃を受けて倒れた。

地面で痛みにもがいているとき、

『女神を冒とくするからだ』

という、男の声が聞こえた。そして気を失った。

目を覚ますと、病院で、ヘイゼルとエブニーザが自分を覗きこんでいた。

「医療費はシュッティファントで払ったから安心しろ」ヘイゼルが偉そうに言った「ここで死なれると、国際問題になって俺が困るんでね」

「そんな言い方あるか」

「ほう、じゃあ、何を言っただけだったのかな？」

「うるさい」

「誰に襲われたか、わかりますか？」

エブニーザが、妙に冷たい顔つきで尋ねた。

アンゲルは、襲われた時に聞いた会話から、犯人は『管轄区の狂信的なファナティ信者』だと確信していた。

「女神がどうか言っただけだから、管轄区の奴だと思っ」

3人も黙りこんだ。

幸い傷は浅く、アンゲルはすぐに寮に帰ることができたが、初めて来た病院の印象と、医師や看護師の姿が、アンゲルの脳裏にはつきりと残った。

こうというのが、管轄区にもあつたら……。

作れないかな？クレハータウンの近くとかで……いや、教会が近いとすぐ文句を言いに来そうだな。どこかに隠れてやるか……。

漠然とだが、
『管轄区で病院を作る』
というイメージが、アンゲルの頭の中にでき始めていた。

次の朝、母親から電話があった。

『教会の方々がうちにやってきて、あんたがイシユハで教会に逆らうようなことをしているって言うんだよ』

「……は？」

『どういうこと？あんたそっちで何をしてるの？学校は？』

母親の不安げな声が受話器から聞こえてくる……しかし、アンゲルは何が何だかわからなかった。

……教会がうちに来た？

逆らう？

何の話だ？

「別に何もしてないよ。大丈夫だから」

母親をなだめて電話を切った。

眠そうな顔で部屋から出てきたヘイゼルに、そのことを話すと、

「いずれそうなるだろうと思ってたよ」

特別驚きもしなかった。

「どういう意味？」

「心理学を専攻して、しかもタフサ・クロッチマーと親交があるだろ？知らないか？タフサは教会に破門されてるぞ」

「えっ」

アンゲルがあわててタフサに電話をするが、仕事で出られないと事務の女性に言われてしまう。

アンゲルは寮を飛び出して、タフサのいる大学に向かった。

「わざわざ行かなくても、俺が説明してやろうと思ってたのに」

ヘイゼルが、心底残念そうな顔でつぶやいた。実は、アンゲルに長々と説明してやろうと、いろいろ調べていたのだ。徒労に終わったが。

8 - 2 エレノア エブニーザ 図書館

エレノアは、レッスンから帰る途中でアンゲルを見かけたが、急いでいるのか、アンゲルはエレノアに気づかず、駅の方角に走り去ってしまった。

気になって、図書館にいるであろうエブニーザのところに行くことややはりエブニーザは嫌そうな顔をしたが、

「アンゲルが昨日襲われたんです」

と、エレノアが知りたいことをすぐ口に出した。

まるで、最初から聞きに来るのがわかっていたかのように。

「襲われた？どうして」

「襲ったのは教会の信者らしいですけど」

「……なぜ？」

「ヘイゼルは、タフサとつながりがあるからだって言っていましたけど」

「どうして、タフサとつながりがあると、教会信者に襲われるの？」

エレノアは事情がよく飲み込めない様子だ。

「フアナテイの教会は、医学も心理学も、進化論すら認めていないんです。だから、タフサもアンゲルも、教会に逆らっているとみなされてしまっんですよ」

「……信じられない」

エレノアは呆然と、エブニーザの向いの椅子に座りこむ。

「アンゲルはどこ？」

「タフサのところに向かったみたいです……大丈夫ですよ」

エブニーザはそう言いながらも表情が険しく、全く『大丈夫』には見えなかった。

「でも……これからどうするのかしら、アンゲルは」

「どうするって……希望通り大学に進んで、医師の資格を取って、たぶん、管轄区に戻ると思いますよ」

「えっ？」

エレノアは、聞き間違えたかと思った。

管轄区に戻る？

「僕にはそう見える」

「見えるって……でも、管轄区に戻ったら危ないんじゃない？」

「だから戻ったんですよ。あの国を変えたいんだ、アンゲルは……」

あ「エブニーザはしまった！という顔をした「今の話、アンゲルには言わないでください」

あわてた早口でそう言うと、エブニーザは、怯えた目つきでエレノアを見上げた。

「どうして」

「僕が勝手に見ただけだから。アンゲルはまだ自分の運命を何も知らないんです」

エレノアは、エブニーザが何を言っているのか理解できなかったが、

「わかった、言わない」

と約束した。

その頃、アンゲルはタフサから『管轄区からすさまじい嫌がらせと迫害』があつたと説明されて、シヨックを受けていた。

「だからイシュハの国籍を取って、無宗教を気取ってるんだ」タフサは深刻な顔でこう続けた「あまり言いたくなかったんだが、襲われたんならもう隠しておくのはやめるよ。あの教会は、海外に出た国民を監視してるんだ。普段から注意して生活したほうがいい」

「監視って……？」

「あまり、女神の話とか、管轄区の話は、しないほうがいい。ここはイシュハだけど、管轄区に近いし、けっこう会話を盗み聞きしてる連中がいるんだよ。残念なことだけだね」

アンゲルは、何を言われているか理解できなかつた。

でも、いくらあの国でも、そこまでするか……？

「信じられないだろうけど」タフサが、アンゲルの考えを見破つた「事実だよ。そういうことをするんだ、あの国は」

……俺はどうすればいいんだろう？

帰り道、首都の駅からアルターの寮までが、たまらなく長く感じた。

まわりを歩く人間が、みんな敵に見える。

道を歩いていても、ちよつとでも誰かが自分に視線を向けたり、ひそひそと話す声が聞こえると、まるでそれら全てが、自分を嘲笑っているように感じられるのだ。

疑惑が恐怖に代わり、足が地に着いた感覚が消え、目の前の景色はぐるぐると回りだし……。

重苦しい気分のまま寮に戻ると、エブニーザがソファアーに座ってアンゲルを待っていた。

「エレノアが探してましたよ」

アンゲルは反応しない。向かいに座ると、逆にエブニーザに、

「お前将来どうする？管轄区に帰るのか？例の女の子と一緒に暮らすのか？」

と質問した。

するとエブニーザは、悲しげにこう言った。

「僕には時間がないんです。将来もない。彼女が見つかったとしても、一緒に年を取ることは……できないんです」

「どういう意味？」

アンゲルは、エブニーザの言葉に何か、不吉なものを感じた。

エブニーザは、どこか投げやりな態度で、しかし、はっきりとした声で、こう言ったのだ。

「僕は、30代で、死ぬんですよ」

二人がいる部屋の空気が、その一瞬、固まったようにアンゲルには思えた。この場所だけ、時間が止まり、全く外界とは関係のない世界で、遠くから他人を観察しているような、そんな感覚に襲われた。

「それは、予言か？」アンゲルの声は動揺でかすれていた。「それともお前が決めたのか？」

「見える。もう決まっています。僕の人生はそこで終わりです」

エブニーザは、はっきりとした、自信ありげにすら思える口調でそう言った。

「それは、あの、ただの夢とか、妄想じゃないのか」

「違います」エブニーザの目が歪んだ。「アンゲル、いつも僕の言うことを妄想って言うんですね」

「いや、そんなことはない。いくつかは当たった。でも、でもな」アンゲルは必死に頭の中で言葉を選んで「人間って言うのは、たまたに、現実と関係ない夢みたいなのを、見ることが、あるんだよ。眠っていても、そうでなくても」

「そうでしょうね。でも僕は違う」エブニーザが顔をそむけた。「人間じゃない」

「人間じゃない」アンゲルはわけもわからずその言葉を繰り返した

「前にも聞いたが、どうしてそう思う」

「……上手く説明できません」

エブニーザが薄笑い　アンゲルがぞつとするほど不気味な　を浮かべながら、ドアに向かって歩き出した。アンゲルは、以前読んだ自殺者の事例を思い出した。

もしかして、自殺の予言か！？

「エブニーザ！」

アンゲルがヒステリックな大声で叫んだ。

「どうしたんですか？」　エブニーザが振り返って笑った「今の声、ヘイゼルとフランススを合わせたみたいでしたよ」

「あの二人と一緒にするなよ……なあ、あのさ」

「何ですか？」

「俺やヘイゼルの未来は見えるのか？　エレノアでもいい、他人のこととはわかるのか？」

エブニーザがこころもち上を向いた。何か考えているような、言うのをためらっているような……。

少しの間、目を空中に泳がせた後、エブニーザは、

「ヘイゼルしかわからないですね。自己主張が強すぎるからかな？　ヘイゼルは大統領になる。そしてこのイシュ八をもっと、悪い国にするんです」

そう言っつて、面白そうな、しかし、寂しそうな顔をすると、廊下に出て、静かに、ゆっくりとドアを閉めた。まるで中にいるアンゲルが病人で、眠っているから静かにしないと起こしてしまうと言っているみたいに。

8 - 4 アンゲル エレノア 道々男子寮の部屋

アンゲルが深刻な顔で林の中を歩いていると、向かいからエレノアが来るのが見えた。大きなキャンバス地のトートバッグを持っている。

「私、これからポートタウンに行くのよ」エレノアが彼に近づいてきて、バッグを振り上げて明るく笑った。「向こうでフランスと合流して、買い物するの」

エレノアは、アンゲルがあまりにも暗い顔をしているので、元気づけようと思って明るくしているのだが、アンゲルはぼんやりとした顔のままだ。

「フランスがなんでポートタウンに？」

「どうでもいいと思いますが、アンゲルは尋ねた。」

俺が襲われたことは聞いているはずなのに、何も心配してないみたいだな……？

「何か、慈善事業の話し合いつて言ってたわ」

「慈善事業ね」もつとどうでもいい話だな！「話したいことがあるんだけど」

「何？私急いでるのよ」

エレノアの歩くスピードが速まった。アンゲルはむっとして叫んだ。

「エブニーザのことだー！」

エレノアが立ち止まった。

ああ、やっぱりエブニーザだと立ち止まるんだな！

アンゲルはうんざりした。

いや、今はそんなことを考えている場合じゃない。

「さっき話してたら、あいつ『僕は30代で死ぬ』って言い出したんだ」

エレノアが不安げな顔でアンゲルを見た。

「どついつこと?」

「早すぎる自殺の予言ってやつかな?それとも単なる自己嫌悪からなる発言かな?あるいは、あいつは自信がなさすぎるから、そんな年まで生きていけないと思ってるのかな?どうも俺には判断がつかないんだ。どう思う?」

「ほんとに見えてるんじゃないの」エレノアが深刻な顔になってきた。「あの女の子のと同じで、まだ私たちは見ていないけど、でも、実際エブニーザの予想はおどろくほど当たるわ」

「そうなのかな……?俺は妄想だと思っただけだ」

「アンゲル!」エレノアが怒りだした。怒っても美しいんだから本当に魔物だとアンゲルは思った。「あなたがそうやって、エブニーザの話を『妄想』とか『でたらめ』って決めつけるたびに、エブニーザは苦しむのよ!心理学やってるんならいいかげんわかっただけだば!?!」

「そんなことは俺だっただけだ」アンゲルが怒鳴った。だが、自分の大声に驚いて声のトーンを下げた。「精神を病んでる連中もよく知ってるさ!みんな言葉はでたらめだ、私は王様だの、だれかが追いかけてくるだの、雷に乗ったことがあるだの、みんな空想話さ!でも言ってる本人は本当だと思ってる!」

エレノアは、アンゲルが怒鳴るのを初めて聞いて、かなり驚いたようだ。明らかに動揺した顔をしている。持っていたトートバッグを両手でつぶすように握り始めた。

「そついつのとは違うわよ、エブニーザのは……」

「違うないさ!」

アンゲルはエレノアに背を向けて、やたらに足音を立てて歩き始めた。

本当は彼も分かっているのだ。エブニーザの話が、嘘でも妄想でも、作り話でもないということ。でも、彼の立場ではどうしてもそれが事実だと断言できない、いや、したくなかった。犯罪の被害者、特に精神を病んだ被害者には、そういう妄想が継続的に表れ

ることはありうる、そう診断する以外に選択肢が見つからない。

予知能力？ありえない！

アンゲルは早足で歩きながら考える。

……いや、俺が今気に入らないのは、エレノアが、エブニーザのことになるとあんなに一生懸命になつてかばおうとするってことだ。それが気に入らないんだ！しかも、俺には『大丈夫？』の一言もない！危うく殺されるところだったっていうのに！

嫉妬、そして自己嫌悪。それは、アンゲルがもつとも陥りたくない心理状態だった。

ああ、だめだ、自分の間違いを認められない奴はいずれだめになるっていうじゃないか。

でも、俺は間違ってるのか？

だから襲われたのか？でも何が間違ってるんだ？

何が正しいんだ？

ああ、わからない！

寮に戻り、ソファーに倒れこむ。

時計を見る。

アルバイトに行かなくてはいけないが、まだ1時間くらいは寝ていても大丈夫だろう。

しばらくは、混乱した頭のまま、ああでもないこうでもないと考えていたが、だんだん落ちついて来るにつれて、自分の間違いが少しずつわかってきた。

……外国に来たからって、気が緩み過ぎたんだ。

あの国から逃げ出したい一心で、あのことなんて考えてもいなかった……いくらイシュハに来たからって、管轄区がなくなったわけじゃないんだ。しかも、ポートタウンもアルターも、電車に乗ればすぐに管轄区に到着できるくらい近い……そんな近くで『女神を信じてない』なんて言ったり、教会が禁止しているものに手を出したら、すぐにばれるに決まってる！管轄区からの留学生だっているし、監視までされているっていう話だ……。

ソファーから起き上がって部屋を見回す。もちろん誰もいない。まさか、ここまで監視されてないよな？

再びソファーに倒れこむ。

とにかく、甘すぎたんだ。考えが。

連中を騙してでも『女神を信じています』ってふりしておくべきだったのか？

不気味なコミュニケーションの連中とも仲良くして、情報収集をするべきだったのか？

アンゲルは、どちらも『やるべきだった』と思っただが、『そんなことできたか？俺に』と考えると、その答えははっきりと出た。

……そんなことできるか！！

いや、過ぎたことを考えても無駄だ。

これからどうするか……。

アンゲルは時間ぎりぎりまで考えたが、いい解決策が浮かばなかった。

8 - 5 エレノア フランシス ポートタウン

「30」

ポートタウンのカフェ『テラスヴオリ』

フランシスが、アイステイーを飲みながら、その数字を空中に指で書いた。

「恐ろしい数字だね。その年になったら、私たちって人間扱いされなくなるのよ」

「そんなことないわよ」

「エレノア、あんたはいくつになっても芸がお出来になるから、そんなことが言えるの。この世の大多数の女は、この進んだイシユ八でさえ、年を取ると、ほとんど人間扱いされなくなる、いや、自分を人間扱いしなくなるのよ。ぞうきんみたいな扱いをされても文句を言わなくなるの。私そういうの絶対いや」

「フランシス」エレノアは、話している間に溶けかけたアイスクリームをかき回した「あなたはたぶん、90になっても文句を言うてるわ」

「相手はヘイゼルか、どつかの男ね。ああ、男ってむかつくわ。勝手に世の中を悪くしておいて、何かまずいことがあると女に押し付けるか、泣きつくか……ま、こんな話つままないわ。エブニーザはきっと30どころか、あと数年で死ぬわよ。ヘイゼルが殺すかも」

「フランシス……」

「あ、違うわ。きつと、ヘイゼルに怒鳴りつけられて、ショックで心臓発作を起こすの」

「どうして何でもヘイゼルのせいにするの？」

「他に人が死ぬ原因なんてある？」

まるでヘイゼルが死神であるかのような言い草だ。

「わかってるわよ。私だってこんな自分をぶっ殺したいの」

「フランシス！」

「いちいち名前呼んで怒らないでよ！私が言いたいののはね、長生きなんてしたくないなあってことなのよ。30過ぎたら人間扱いされないのに、さらに40年も50年も、くたびれた雑巾みたいに生きるのって、どうなのよ？」

「人を雑巾と一緒にしないで」

「あんたは大丈夫よ、エレノア」フランススが手を上げて、ボーイを呼んだ。「ワインをお願い。何でもいいわ。強いやつ」

「昼間から飲むの!？」

「私はもう大人だし、ワインだからいいのよ」フランススが鋭い目でエレノアを睨んだ。「福祉団体のお婆さんがたのつまらないお話を4時間も聞いてやったのよ。酔わなきゃ疲れが取れないってのよ！」そのあと、まるまる1時間、老人方の悪口をしゃべりまくるフランススに向かって、適当な返事をしながら、エレノアは思った。

やっぱり、フランススって、ハイゼルとよく似てる……。

8 - 6 アンゲル ヘイゼル 男子寮の部屋

「大統領？」

「そうそう。エブニーザがそう言ってたんだ」

「おい！エブニーザ！」

ヘイゼルが、エブニーザの部屋に向かって怒鳴った。

「まだ帰ってきてないよ。図書館にでもこもってるんだろ」

「大統領なんて冗談じゃない」ヘイゼルが心底嫌そうにふんぞりかえって宙を仰いだ。「てきとーに国会議員か、まあ、せいぜいどっかの長官か、その程度でいいよ」

「お前らしくない発言だな！」

意外だな、とアンゲルは思った。ヘイゼルは常日頃「俺がこの世で一番偉い」という態度でいるので、てっきり大統領になると聞いたら喜ぶと思っていたのだ。

「だってめんどくさいだろ。常に国民に監視されてるんだぞ？」

「監視って……」アンゲルはあきれた。「政治家はみんなそうだろうか？」

そう言いながらもアンゲルは「監視されている政治家」という表現に違和感を感じた。ただ、少なくともイシュハの政治家は、常に記者に囲まれているイメージがある。普段の行動には注意しないとイケないのだろうということは想像がつく。

しかし、アンゲルは管轄区の人間だ。

管轄区を支配している教会の上位者は、めったに人前にも、マスコミにも出てこない。

そもそも、管轄区にまともな報道機関なんてない。

「政治なんて好きで専攻してるわけじゃない。だが、シュツタイプアントはみんな政治家になるって決まってるんだよ。親父もそうだし、その前もそうだ。でも、みんなせいぜい州知事か、国会議員止まりだよ。もともと金持ってるってこと以外にとりえのない一家だ

からな。商売だの技術だの、そんな才能は誰も持つてない。やたらに買収するのは好きだがね。要するに、自分には何も作る才能がないから、横から取るんだよ。だから政治家になるんだ。政界なんて、自己主張以外にとりえのないわがままの巣窟だよ。俺だってそうさ、弱気で自分のないやつらに怒鳴りつけるくらいしか能がない。無難な選択なんだよ、政治つてやつは」

「お前、意外と現実的だな」

「どつという意味だよ」

「てつきり、目標は世界征服なのかと」

「アホか！」ヘイゼルが心底つまらなさそうな顔になった。投げやりだ。「世界なんて征服して何かいいことがあるか？どこに行つてもバカどもが余計なことをしてるもんだ。イシュハも管轄区もノレーシユもアケパリもキュプラ何とかも、同じだ。どこにでもバカがいて、麻薬を売つたり女に売春させたり、気に入らない奴はとつとと撃ち殺したり、好き勝手に生きてるんだ。世界中どこだつてそんなもんだ。そんな世界手に入れて楽しいか？バカじゃないやつらも性根が腐つてるからな。善良そうに見える上流の紳士どもが影でとんでもない取引をしていたりするしな」

「とんでもない取引つて何だよ？」

「それは企業秘密だ」

「なんでそこに企業が出てくるんだよ？」

「とにかく、家の中には秘密ありだ。ああ、これも世界共通だな。」

世界中の家庭は冷え切つてるぞ」

「もういいよ、その話は」また長話が始まりそうだったので、アンゲルは話をまとめようとした。「とりあえず政治の道を進めよ。嫌々嫌々な。お前も嫌々心理学やつてるだろ？」

「俺は違う。昔からやりたかつたんだよ」

「今でもやりたいか？同じ気持ちか？狂った教会に襲われてまでやることか？」

ヘイゼルが、人を信用していない白けた顔で尋ねた。まるで『お

前だって何か隠してるだろう？違つか？』と探りを入れられているように、アンゲルは感じた。

「同じだよ。変わらない」

アンゲルはそう答えながらも、予想外に動揺している自分に気がついた。

どうしてこんなに頭がぐらぐらするんだ？襲われたから？いや、そうじゃなくても、最近ずっと、何かが頭に乗っているみたいに感じていた……心理学がいやになった？いや、そんなことはない……きっと疲れているだけだ……。いろいろなことが起こりすぎたから……でも、どうして教会は、医学や心理学をあんにも嫌うんだ？必要としている人がたくさんいるのに！毎年飢えと病気で何万人も死んでいるのに！エブニーザみたいな精神病の奴だってたくさんいるはずなのに！

どうすればいいんだ？今更専攻を変えろってのか？でも、このまま続けていたら両親のところにもまた変な人間が来るかも……俺だってまた襲われるかもしれない。

でもなぜだ？

こんなに目の敵にするのはなぜなんだ？

化学は良くて医学はどうして駄目なんだ？

たかが学問の一つにすぎないのに？

ああ！わからない！なにもかもわからない！

「あれって、エブニーザじゃないの？」

フランシスが怪訝な顔をした。

ポートタウンから帰ってきたエレノアとフランシスが女子寮に入ろうとすると、門の前でうろろろしているエブニーザらしき人影が目に入った。

「アンゲルの次はあんたに相談つてとこじゃない？エレノア？」

情けないわね、とでも言いたげなフランシスだが、エレノアの表情は硬い。

「エブニーザ……」

エレノアは、さきほどアンゲルに言われたことを思い出していた。

エブニーザはピクリと全身を震わせて、何か、怖いものでも見るようにそーっとうしろを振り返った。

「何かあったの？」

「あんたっていつも怯えているわよね」

「フランシス！」

エブニーザは二人を、恐怖にとらわれた目で見つめている。

「エレノアに、話があるんだ」

エレノアとフランシスが顔を見合わせた。

「フランシス、悪いけど、エレノアと二人で話をさせて」顔は怯えているが、いつもとはどこか様子が違う「すごく、深刻なことなんだ。今話さないといけないんだ」

何かおかしいと思った二人だが、突然気がついた。

エブニーザが敬語を使わないで普通に喋っている！しかもフランシスに！

「なんだか不気味だけど」フランシスが歩き出した「二人で話したほうがよさそうね」

去っていくフランシスの背中をじーっと見つめるエブニーザを、

エレノアは不安を抱きながら観察していた。

何が起きているんだろう？

「エブニーザ」エレノアはおそろおそろエブニーザに話しかけた「
どうしたの」

「アンゲルが殺される！」

エブニーザが突然エレノアの方を向いて叫んだ。

「えっ？」

「見たんだよ。患者に刺し殺されるんだ」エブニーザはがたがたと震え始めた「どうすればいい？アンゲルに、心理学をやめろって言えばいいの？でもそんなの無理だよ！アンゲルは僕の予知なんてみんな妄想だと思ってる！」

「ちよつと、待って！落ちついて！」

エレノアには、エブニーザが突然パニックを起こしたように見えた。女子寮の入口にいた学生がこちらを見ている。

「図書館に行きましょう、落ちついて話せるところに。ここじゃみんな見てるわ」

エレノアは震えているエブニーザの背中に手を当てて、ゆっくりと歩き始めた。エブニーザも抵抗せずに歩き出したが、震えはなかなか止まらなかった。

図書館の奥、資料室。エブニーザはいつもの席に座り、その向かいの棚にもたれて立っているエレノアに、ぼそぼそと自分が見た光景を離し始めた。

アンゲルが患者と向かい合って話をしている。突然、患者が懐から刃物を取り出し、アンゲルの胸に突き刺した。アンゲルが椅子から落ちて倒れ、犯人はドアを開けて走って逃げて行った……廊下から女性の悲鳴が聞こえた。そして……。

「エブニーザ」話の途中、エレノアが真面目な顔で割り込んだ「どうしてそれを、私に言おうと思ったの？」

「えっ？」

エブニーザは言葉に詰まった。

「どうしてアンゲルでもヘイゼルでもなく、私に言うの？」

「だって！刺されたアンゲルのところに最初に駆け付けたのはエレノアじゃないか！」

エブニーザはそう言いたかったのだが、よく考えたら、アンゲルが刺されたのを見たのも、その現場にエレノアが駆け付けのを見たのも、自分一人なのだ。

そこでエブニーザははっと気がついた。自分の過ちに。

そうか！エレノアはまだ何も知らないんだ！

どうしよう……。

僕の中では二人は常に一緒にいるから、現実と区別がついてなかった……いや、だって、どっちも現実じゃないか！

でも、今の二人にはまだ何も分かってない……。

「エブニーザ？」エレノアが心配そうにエブニーザの顔を覗いた。「聞こえてる？」

「あ、あの、だって」エブニーザは言い訳を必死で考えた。「こんなこと、本人には言えないし、ヘイゼルに言ったらすぐアンゲルに話すだろうし」

「アンゲルに話したほうがいいと思うけど？」

エレノアがそう言ったとたん、エブニーザが泣きそうな顔をした。「だって！アンゲルは！」エブニーザが叫んだ。「僕の言うことなんか信じないじゃないか！」

「大声を出さないでよ！」

エレノアが小声で注意して、まわりを見回した。幸い誰もいない。「本人に話すのよ。そしたら、防げるかもしれないじゃないの」

「でも……」

「それが嫌なら、私が言うわよ」

「えっ」

エブニーザが、息が詰まったような声を出した。今にも死んでしまいそうな顔色だ。

「とりあえず今日は寮に帰ったら？顔が真っ青」

エレノアは出口に向かって歩き出したが、すぐ立ち止り、振り返ってエブニーザに笑いかけた。

「アンゲルの事が心配なのね？」

エブニーザはしばらくぼんやりした目をしていたが、かすかにうなずいた。

「これ以上変なことを言ったら、友達を失くしそうで怖いんでしょっ？」

「僕はもともと」エブニーザが消え入りそうな、かすれた声でつぶやいた「友達だと思われていませんよ。アンゲルは僕が精神病だと思っっているんです」

「ああ、敬語に戻っちゃった……」エレノアは笑っていたが、目元が少し歪んだ「どうして友達相手にそんな言葉遣いするの？ま、いいけど。あなたは友達なのよ、私の、そして、アンゲルのね。少しは信用したら？」

「……ありがとう」

エブニーザが笑った。天使のような笑い顔だった。

ああ、やっぱり美しいわ！

エレノアは廊下を歩きながら考えた。

案外、ほんとに天使なのかもしれない。だから未来が見えるのかも。

でも、アンゲルが刺殺される？本当に？

エレノアは険しい表情で図書館の外に出ると、公衆電話のダイヤルを回した。

『誰だ？』

高慢な声が返ってきた。

「エレノア・フィリ・ノルタよ。アンゲルはそこにいる？」

『なんだ、エレノアか。てっきりエブニーザかと』

「エブニーザなら、さっき図書館にいたわよ」

『図書館だと！？』耳に刺さるような大きな声だったので、エレノ

アは危うく受話器を落とすところだった『今日は早く帰ってこいつ
て言ったのに！何をしとるんだあのバカは！』

「ヘイゼル……どこかの若奥様みたいで気味が悪いから、『今日は
早く帰って』なんてルームメイトに言うのやめてよ」

『だんだんシグノーの令嬢に似てきたな、エレノア』

「そんなことないわよ！」

エレノアが強く否定すると、ヘイゼルがへっへっへっへっと妙な笑い
声を洩らした。

『アンゲルもまだ帰ってないよ。せつかく俺が撃ち落とした鳥を、
ずらっとテーブルに並べてやったのに』

「撃ち落とした？」

『狩猟だよ。雉さ。フランシスにも送ってやったから、部屋に戻っ
て見てみるよ』

「何ですって!？」

『一番でかいのを、ドアの前に届けてやったから。煮るなり焼くな
りして食えよ』

今頃フランシスが部屋で金切り声をあげているかも……エレノア
は頭が痛くなってきた。

『まあとにかく、アンゲルはいないよ。伝言しとく?』愛してるわ
とでもメモに書いてからかってやるか?』

ヘイゼルは明らかに面白がっている様子だ。

「やめてよ。相談したいことがあるから、明日のお昼に図書館の前
に来てくださいって言っというて」

『おやおや、本当に愛の告白みたいだな』

「違っつてば！お願いだから余計なことと言わないで、私が言った
ことだけ伝えてよ！」

『わかったよ。歌手のエレノア様がアンゲルにどうしても打ち明け
たいことがありますからぜひ……』

「ヘイゼル！」

『わかったわかった。明日の昼に図書館だろ、怒るなって……あ！

エブニーザ！』ヘイゼルがまたすさまじい声で怒鳴ったので、エレノアは軽く身震いした。『早く帰ってこいって言っただろ！……じゃ、またね』

電話が切れた。

エレノアは受話器を握ったまま、電話の下に座り込んで深いため息をついた。

嫌な予感がする……。

エレノアが相談？

俺に？

何を？

部屋に帰ってくるなり、妙にニヤニヤしているヘイゼルから伝言を受けたアンゲルは、頭が真っ白になった。

しかも、勉強に使っているテーブルの上にはなぜか、鳥の死体が山のように積んである。

「おい、なんだこれは！新手のいやがらせか？外国人バツシングか？」

「いやがらせじゃない。狩猟に行ったんだ。雉だよ。俺が撃ったんだ。これから食うんだよ。旨いらしいぞ」

「はあ！？」

「エブニーザが今、食堂に、料理人を説得しに行ってるから」

「はあああ！？」

真っ白になったアンゲルの頭に、鳥が何匹も飛び交い始めた。つまり、大混乱だ。

「まあまあ、ゆっくり話そうじゃないか」一人楽しげなヘイゼルがソファアにどかっと、偉そうに腰を下ろした「ほんとは狐でも仕留めて剥製にしてやろうと思ったんだよ。でもな、最近異常気象で、前はたくさんいた狐が少なくてね。かわりに変な鳥がたくさん飛び始めた。どうも、アケパリから飛んできてるらしい。うちの召使にアケパリ人がいて、雉は旨い、あっちの国では普通に食べるっていうから、試しに撃ち落としてみたら、これが俺に合ってたんだな、バカみたいに獲れたよ。あまりにたくさん獲れたから、シグノーのご令嬢にも送りつけたがね」

「何い！？」アンゲルが混乱きわまって変な声で叫んだ「フランシスのところに！？つまりエレノアのところだろ？鳥の死体を送った

のか？お前は変態か！？」

「鳥の死体とは何だ！？雉だよ雉！食べるって言っただろ？鶏と変わらぬだろ？」

「鶏をまるごとテーブルに山積みにする奴がいるか！？」

「ヘイゼル」エブニーザが帰ってきた「食堂の人が言うには、調理したことないって」

「ああ？いい機会だろ。初挑戦しろって言ってこい」
「でも……」

「料理にしてから持ってこいよ！」アンゲルがまた叫んだ「どうすんだよこれ！？俺は今日どこで勉強するんだよ！？」

「今日は勉強なんかしなくてもいいだろ？」ヘイゼルがにやにやと笑い始めた「明日、エレノア様と大事なご相談があるんだろ？勉強なんかしてる場合か？」

「エレノア？」

エブニーザがアンゲルを見た。顔が不愉快そうに見えた。

「別に何でもない」

アンゲルは、エブニーザのその表情を見て不安になった。

まさかこいつもエレノアを……いや、こいつは妄想の女に夢中だしな、でも……。

電話が鳴った。ヘイゼルが受話器を取ったとたん、部屋中に聞こえるようなすさまじい金切り声が、受話器から放たれた。

『あんた！何考えてやがんのよ！雉をまるごと送るなんてバカじゃないの！？』

フランシスだ。

「耳が痛い！超音波を出すな！」ヘイゼルも負けずに大声で怒鳴った「まあ、雉ってわかったただけましたな。アンゲルなんか『鳥の死体を置くな！』だぜ？育ちが知れるってもんだよ」

アンゲルがヘイゼルに向かってサッカーボールを蹴りつけたが、ヘイゼルは口笛を吹きながら余裕で攻撃をかわした。

「それより、とつと料理にして食べよ。何にするんだ？そっちは

シグノーの料理人がすく飛んでくるだろ？ついでに俺の分も作ってくれって言っとけ。材料はまだあふれんばかりにあるぞ」

『なんでうちの料理人があんたの分まで……』

ヘイゼルは受話器を置いた。すぐにまた、電話がけたたましく鳴り始めたが、ヘイゼルは取らずにテーブルに戻ってきた。

「アンゲル、鶏を解体したことあるか？」

「あるわけないだろうが！」

「管轄区に住んでたんだろ？血は撃ち落とした後に抜いてもらったから」

「管轄区は関係ないだろ！？」

「未だに鶏を飼ってる家が多いんだろ？」

「俺の家には鶏なんかいない！」

「……僕、やったことありますよ」

エブニーザが遠い目をしてつぶやいた。ケンカをしていた二人の動きが止まった。

「えっ」

「はあ？」

「でも、この鳥は見た事ないですね」

驚いて目が点になっている二人を尻目に、エブニーザが部屋に戻って、ナイフを持って戻ってきた。

「おいおいおい、まさかほんとに……」

ビュッ。

二人の目の前で、エブニーザが鳥の尻から内臓を引きずり出した。「できそうだ」エブニーザがヘイゼルの方を向いた。「肉の部分だけ取ればいいんですよ？」

「へっ？」さすがのヘイゼルもこれには驚いたようだ。「あ、ああ、そうそう。たぶん内臓は食わないだろ。よく知らんが」

「わかりました。でも、羽を取るのにちょっと時間がかかりますよ」そう言うやいなや、エブニーザは、雉の羽根をむしり始めた。ピリッ、ピリッという音がリズムカルに部屋に響く。アンゲルはその

音を聞きながら、自分が切りつけられているみたいに顔をしかめて身を固くした。

エブニーザが机に乗っている鳥を次々と『解体』していった。羽をむしった後、ナイフで肉を腿、胸、手羽などに切り分けて行く。アンゲルとヘイゼルは、そんな作業を平然とこなすエブニーザを唾然として見守っていた。まるで肉屋の主人のようだが、見ようによつては凶悪な犯罪者にも見える。目つきから何も感情が感じられなからだ。終始無表情で、ひたすら、一定のリズムで鳥の羽をむしり、肉を切り刻んでいく。

「ヘイゼル」アンゲルはだんだん、目の前の光景が怖くなってきた。「こいつ、監禁されてたときに一体何をしてたんだ？」

「俺はてつきり重いものでも運んでたのかと」ヘイゼルがめずらしく困惑しているようだ。「牛の解体工場にでもいたのかな？」

「お前、思いつきで言ったのか？ほんとに何が起きてたか知らないのか？」

「昔の話をするとか泣き叫ぶって言っただろ？」

「ヘイゼル……」アンゲルがテーブルの上を見て顔をしかめた。「頼む、頼むから、これが済んだらあのテーブルは処分して、新しいのを買ってくれ」

「わかったよ」

ヘイゼルが文句を言わずに承諾した。珍しい。

アンゲルはますます怖くなってきた。

それから2時間ほど、エブニーザはその『羽をむしって解体』という作業を繰り返していた。いつもなら延々とおしゃべりをするヘイゼルも、今日は黙ってエブニーザを見つめて、何か考え込んでいるようだ。アンゲルに至っては、テーブルの上が内臓や羽や肉の山になっている光景に耐えられず、かといって他の部屋に逃げるわけにもいかず、ひたすら部屋の隅で実習の資料を見ていたが、もちろん頭にはなにも入ってこない。

電話がまた鳴った。アンゲルが、電話に向かったヘイゼルを突き

飛ばして受話器を取った。目の前の光景から逃避したかったのだ。

「アンゲルです！」

「エレノアですけど」

アンゲル、その声で固まってしまった。

「ねえ、聞こえてる？どうしたの？」

「いや、あの、ごめん」アンゲルは真つ赤になった。「ヘイゼルが鳥の死体を俺のテーブルに乗せて、それをエブニーザが切り刻んでるんで、気が動転して」

「ああ、雉ね。こっちにも来たわ。でもエブニーザ？意外だわ。動物に触るの嫌いそうに見えるけど」

「それが全然平気らしい。今目の前がちょっとした惨劇だ」

「惨劇？大げさね。こっちは私が羽をむしって調理室に持って行っただわ」

「えっ？」

「今焼いてもらってるの。私の母がアケパリ人だから、普通に食べるわよ……ハロー？アンゲル？聞いてる？」

「いや、うん、聞こえてるよ」アンゲルは軽いショックを受けた。「それはよかった」

「そういえば……管轄区の人って鳥は食べないのよね！」エレノアが突然思い出したように叫んだ。「大丈夫？」

「今頃思い出してくれて嬉しいよ」

アンゲルが弱々しい声で皮肉を言った。

女神ファナティの神話では、鳥は女神の使いであるため、絶対に食べても殺してもいけないのだ。ただし鶏と卵は例外である。空を飛ばないので使いにならないということと、貧しい管轄区では鶏が貴重な食糧であるため、簡単に禁止できないという事情らしい。

「明日の昼なんだけど……」

エレノアが言いにくそうに話した。アンゲルは胸の鼓動が早まるのを感じた。

「あ、明日、昼に図書館だろ。聞いたよ。相談って何？」

言ってからアンゲルは後悔した。

今聞いてどうするんだ!?

『電話で話せることじゃないの。あした話すから……さっき電話した時、ヘイゼルが出たのよ。心配だからかけなおしたの。どうせまた変なこと言ってたんじゃない? 違う?』

「いや、そんなことは、ないと思うな」

「おい、俺に代われ」

ヘイゼルが受話器を奪おうと手を伸ばしてきた。

「ああ、ティッシュファントムが俺を襲ってる! また明日な! エレノア!」

『また明日』

電話は切れた。

「お前、また俺をティッシュお化けにしやがったな?」

「そんなこと言ってる場合か……」

「全部終わりましたけど」

エブニーザの声がした。見ると、テーブルの上が肉と皮と内臓だらけになっていた。エブニーザの白いシャツも血と内臓の色に汚れている。

「どうするんですか、これ」

アンゲルは急に胃のあたりに激痛を感じ、うめき声をあげながら床に座り込んだ。今日はいろいろなことが、重なって起こりすぎたのだ。

「あー、とりあえず肉は焼いて食おう。ほかは捨てる」

ヘイゼルは平静を装っているが、目のまわりがピクピク痙攣している。

「どこに?」

「……今確認する」

ヘイゼルがどこかに電話をかけ始めた。

「大丈夫ですか、アンゲル?」

エブニーザが座り込んでいるアンゲルに近づいてきた。ナイフを

持ったまま。

「近づくな！俺に近づくなああああ！」

床に転がりながらアンゲルが叫んだ。まるで殺し屋にでも狙われているかのようだ。

「おい！電話中に大声を出すな！」

ヘイゼルがアンゲルに向かって怒鳴った。

アンゲルはエブニーザを避けるように転がり、ソファの前で立ちあがって、どさつと倒れこみ、テーブルの上が見えないように背もたれの方を向いた。

ああ、どうしてこうもわけのわからない奴が俺の周りに集まるんだ！？いや、それよりエレノアだ。『電話で話すことじゃない』っていったい何だ？そんなに重要な話か？もしかして……いや、そんなことは期待しないほうがいい。でも、そうじゃなかったら何だ？何を相談されるんだ俺は？

「エブニーザ。調理室の裏に生ごみを集めてるところがあるから、肉以外はそっちに持っていけ。ついでに肉も焼いてもらえ。さばいた後なら調理できるってよ」

「わかりました……でもこれ、一人で運ぶんですか？」

エブニーザがナイフで、目の前の肉と骨と皮の山を指した。

「アンゲル！行け！」

当然のことにようにヘイゼルが命令した。

「俺は嫌だ！死んでも嫌だああああ！」

「何だよ！？鳥のバラバラ死体くらいで怯えるな！教会っ子は軟弱だな！」

「お前だつてさっきまで困ってただろお！」

「あー調理師さん？悪いけど人手が足りんから、肉だけ取りに来てくれ」

ヘイゼルが電話の向こうに命令した。

『自分が持つていく』という選択肢は、彼の頭にないようだ。

次の日。昼。図書館。

エレノアが、エブニーザが予言した『アンゲルが患者に刺される』という話をする、アンゲルは期待した告白ではなかったことになりすが、自分が殺されると言われたので驚いた。

これがちよつと前なら『そんなの妄想だ!』と笑い飛ばせたのだが、今やアンゲルは一度襲われ、家には教会の人間がおしかけ……と、管轄区に目をつけられていることを知っているため、心の底から恐怖を感じた。

しかし、エレノアの前では動揺は見せなかった。見せたくもなかった。

「そんなの、俺じゃなくても、管轄区で心理学なんて言葉を吐いた時点で命が危ないよ」わざと軽い口調で答えた「フアナテイ教の信者は、医学も心理学も認めてないんだから」

「そんなの変だわ」

「変だよ」アンゲルは否定しなかった「だから俺は心理学を取ったんだよ」

アンゲルは、自分が発した言葉に驚いた。

だから心理学を取った？

「……どういう意味？」

「何でもない」アンゲルはあわてて話題を変えた「そういえば、エレノアは、何を信じてるの？家族がみんな違う国でなんだよね？」

「歌に決まってるじゃない」

アンゲルは困惑したが、エレノアはあくまで真面目にそう答えたらしい。

「父はドウロソのアニタ教……イシユハと違って厳しいのよ。祈るし、決まりも多いの。母はアケパリだからフレイグっていう闘神を信じているの」

フレイグは、アニタの恋人とされている男性の神だ。

「でも、アケパリの宗教は信者っていう言葉を使わないし、いちいち信じるかどうかなんて聞かないのよ。この世のあらゆるものが神聖なもので、フレイグは代表にすぎないの。象徴よ。何だってこの世のものは神聖なの。歌も同じ」

「何だって神聖ね……」

もっというろいろ話そうと思ったが、ふと横を見ると、管轄区出身の、ファナティ教の布教活動をしている、あの黒服の集団の姿があった。アングルの顔に緊張が走ったが、彼らは特に彼を見ることなく、通り過ぎて行った

アングルは、寮に帰ってからヘイゼルに、

「アニタ教は布教する人がいないのか？」

と聞くと、

「あまり聞いたことがないな。だいいち、イシユ八でほんとに女神を信じてる奴なんて、4割もないんじゃないか？ほとんどは無宗教だろ？」

「無宗教？」

「別名『金を稼ごう教』だ。教会っ子はみんなファナティ様の聖書をお持ちだろ？こつちじゃ誰の家にもグーファー・レコンタって奴の『金持ちになる30の知恵』っていう本がある。それが聖典さ」

「俺は聖書なんか読まないよ。親が勝手に送ってきたんだ。読んだって意味がわからない」

「へえ」ヘイゼルがうさくさい顔をした「じゃあなんで、時々変な目つきで本棚をじっと見ているのかな？あそこに聖書が隠れてるからじゃないのかね？」

アングルは気まずく口を閉ざし、視線をそらした。

「まあいいさ。しかし、『聖書が読めません』なんて、そんな奴が管轄区で生きられるとは思えないんだが。あつちじゃ女神を信じてませんなんてうかつに言えないんじゃないのか？宗教裁判がまだ続いてるんだろ？」

アンゲルは答えずに、借りてきた本をめくり始めた。

学校でみっちり教えられたので、聖書の内容はよく知っているのだが、アンゲルはそんなもの早く忘れてしまったかったのだ。そしてふと、エレノアに言われた『患者に刺し殺される』というエブニ―ザの予言を思い出す。

管轄区では十分ありうる話だ。

ヘイゼルが部屋に戻った後、アンゲルは音をたてないようにそうと立ち上がり、エブニ―ザの部屋のドアをノックするが、返答はなく、ドアを開けて中を覗いても誰もいない。

電話が鳴ったので取ると、ソレアだった。

「風邪引いたから今日は休むよ、ごめん」

とだけ言っただけだったが、すぐにまたかかってきた。

『お見舞いに行くわ』

と弾んだ声が聞こえた。

うっとおしいな……。

「だめだよ。男子寮だから女の子は入れない」

とまたすぐ切り、ソファ―に座ってため息をつく。

ややこしいことばかり起きるな、最近……。

8 - 10 エブニーザ ファナティ教会の前

そのころ、エブニーザは学校の敷地内にあるファナティ教の教会（管轄区からの留学生のために建てられた小さいもの）を、厳しい表情で睨みつけていた。

どうして、僕と『彼女』だけがこんな酷い目にあわないといけな
いんだ？

どうして他の人じゃなく、僕らなんだ？

どうして未来なんか僕に見せるんだ？

しばらく、恨みのこもった目を教会に向けていたが、通行する学生の笑い声で我に帰り、急にいつもの怯えた顔に戻って、図書館の方向に歩き出した。

8 - 11 エレノア エブニーザ 道

エレノアのところに、母ノルタから小包が届いた。中にはピンク色の石がはまっている指輪が入っていた。

『あなたの父さんがはじめてあたしに買ってくれたものさ。トルマリんだよ。あなたにあげる。誕生日おめでとう』

アケパリ語のメモが入っていた。

エレノアは指輪をはめて眺めながら、『ピンクのトルマリンド……？』と、昔エブニーザに言われたことを思い出して考え込む。

やっぱり、エブニーザには未来が見えてるの？

じゃあ、やっぱりアンゲルは、本当に患者に刺し殺されるの？

考え事をしながら歩いていると、エブニーザが歩いて来るのが見えたが、エレノアに気づかずすれ違ってしまう。

「エブニーザ！」

エレノアが声を上げると振り返るが、表情があまりにも暗く、いつもはない敵意が顔に出て、残忍に見えたので、エレノアは背筋が寒くなった。

「何かあったの？」

「何でもありません」

「これを見て」

エレノアが指にはまっているトルマリンの指輪を見せる。

「……それが何か？」

「前に、ピンクのトルマリンって言ってたでしょ？うちの父が母に送ったものなの、あなた、これが見えてたの？」

「……まだ持ってなかったんですか？」

エブニーザは困惑している様子だ。

「さっき届いたばかりよ。あなた本当に未来が見えるのね」

エレノアが興奮気味にそう言ったとたん、エブニーザが傷ついた顔をした。

「今まで信じてなかったんですね……」

「え？いえ、そうじゃないけど……」

エブニーザは、エレノアに背を向けて歩き出した。

8 - 12 アンゲル クー 電話

アンゲルは、どこにも行く気になれず、学校を休んでソファアールで横になっていた。

これから、どうするか……。

いくら考えても答えが出ない質問で、頭がいっぱいになっていた。昼頃まで悩んでいると、電話が鳴った。

『私が誰か憶えているかしら？』

クーだ。

「ノレーシュの姫君」アンゲルが思い出したようにつぶやいた「最近見かけないね」

『エレノアから何か聞いていない？』

「聞いてない。何かあったの？」

そういえば、クーはレズビアンだったっけ……。

『あなたが聞いたら確実に怒ることをしたわ』

「は？」

『冗談よ……ウフフフフ』クーが上品ぶった笑い声を上げた『今お暇？』

「悩むのに忙しくて、暇なんてない」

『エブニーザの話してもいい？』

クーがアンゲルにしたのは、ノレーシュの神話だ。

カーリー・フェイウという神が、人間の女と恋をして、双子が生まれる。ところが、双子のうちの一人が悪いことをしたため、女神ファナティが『殺してこい！』と命じて、カーリーを地上にたたき落とした……。

カーリーは言われたとおり息子を殺したが、この息子には娼婦の恋人がいて、嘆き悲しむ彼女を憐れんだ女神アニタが、息子の魂を探し出し、地上に送り返した……。

「知ってるよ」

ノレーシユだけではなく、管轄区でもイシユ八でも、誰でも知っている神話だ。なぜなら、この『事件』がきっかけで、女神フアナティと女神アニタは仲たがいし、住む世界を分けたのだから。おかげでフアナティ教は強固な一神教になり、時がたつにつれて狂信的になって、今に至るわけだ。

『ノレーシユでは、この神話が500年に一度『再来』すると信じられていて、実際、500年前に似たような事件があったのよ』

「……それが？」

『この神の子は、未来を予言すると言われているの。そして、貧しさのあまり娼婦に身を落とした恋人がいるじゃない？』

「……だから何？」

『私が何を言いたいかわからない？』

「全然わからない」

『双子のうちの一人が、エブニーザなの』

「は？」

『神話が再来しているのよ。ノレーシユの神話の擁護者として断言するわ。エブニーザは未来を予知できるでしょう？しかも、女の子が見える、その子は売春をさせられているのよ。神話と子と同じようにね』

「……あのさ、姫君には申し訳ないんだけど」アンゲルはできるだけ控えめに説明しようとした「そんな話は信じられない。確かにエブニーザは未来を予知してるかもしれないけど、だからって神の子って言われても……もしかしたら、エブニーザ自身がその神話を知って、自分の境遇と重ね合わせて夢を見てるだけなんじゃないか？」
クーは、アンゲルの言葉を厳しく否定した。

『エブニーザは夢なんか見ていない。残酷なほど思考がクリアなの。他の人には見えない凄まじい光景まで見えてしまうから、それで苦しんでいるのよ』

「そう言われてもなあ……」

実はアンゲルはこう思っていた。

『クー、お前も病気だろ？エブニーザよりひどいぞ、ある意味』
しばらく二人で話し合ったが、意見の一致をみないまま、電話は切れた。

「ちがう、ちつがーうー!!」

音楽科にこだまする、ケツチャノツポ先生の叫び声。

エレノアは慣れたつもりだったが、今日は妙に耳に障る。

「最近変よエレノアちゃん。心ここにあらず!しかも発声が変わってる」

「変?」

「喉で歌ってるでしょう?ちゃんとお腹から声を出さなきゃだめだよ」

「そうですか?」

エレノアは、自分の発声が変わったことを、全く自覚していなかった。

いつもと同じように歌っているのに……?

「もしかしたら、ロックとかポップスが気になってるせいかも」

「どういう意味?」

「オーディションのときに言われたんです。私の歌い方は古いつてクラシックの発声だって」

「そんなの気にしなくていいわよ!今までどおりの声で歌いなさい

!あなたにはそれが合ってるんだから!」

「でも……」

時代遅れになって、だれも聞いてくれなくなったらどうすればいいの?

「いいから、発声練習!」

ケツチャノツポが伴奏を弾き始めた。

そのあと、1時間ほど「ちがう!ちつがーうー!!」を連発された。ブースで一通り、発声練習や歌の練習をしたが、何がどう変わっているのか、やはり自分ではわからなかった。

しょんぼりと落ちこんで寮に帰ると、電話がけたたましく鳴って

いる。

『エレノア？』

クーの声がした。

エレノアは、前にされたことを思い出し、全身を硬直させた。

『お願い、怒らないで聞いて』本気で懇願するような声が聞こえてきた。『さつきアンゲルにも説明したんだけど、まるで理解できないみたいだから、あなたに聞いてほしいのよ。エブニーザの事なの……何の事かしら？』

クーはこわばった声で、アンゲルに話したのと同じ内容の神話の話のエレノアに聞かせた。エレノアは半信半疑で聞いていた。

フランシスが帰ってきて、電話に向かっていているエレノアを睨んだ。

「クーよ」

「ほんと？」フランシスが急に楽しそうな顔をした。「私にも聞かせるようにしてよ！」

フランシスがエレノアを押しつけて、電話のボタンを押した。

『ちよっと！エレノアと話してるのよ！』

スピーカーから発したクーの声が、部屋中に響いた。

「何の話よ？」

『神話の再来よ』

「またその話なの？」フランシスが不愉快そうに眉をひそめた。「どうしてノレーシュ人ってその神話が大好きなのかしらね」

『現実だからよ！』

当然のことだと言いたげにクーが叫んだ。

「ねえ」エレノアが冷ややかな声を出した。「それを、私やアンゲルに話して、どうするの？」

『理解してほしいだけよ。エブニーザは病気なんかじゃないし、女の子の話は妄想じゃないの。いずれわかるわよ』

「あんなのに入れ込んで何が楽しいのか、さっぱり理解できない。時間の無駄じゃないの？」

フランシスはどこまでもエブニーザが嫌いらしい。

「……悪いけど、今日は疲れてるの」

エレノアは冷ややかにそう言うと、受話器を置いて電話を切った。フランシスは驚いた。エレノアがこんなに冷たい態度をとるのを見たことがなかったからだ。

「何かあったの？」

「発声がおかしいの」

「発声？」

「声が変わったらしいの。でも、自分では全然わからないのよ、何が変わったか」

そう言うと、エレノアは立ち上がって、自分の部屋に入ってしまった。

一人になりたかったのだ。

エブニーザがどうか、神話がどうか、そんなことを考えている余裕がなかった。

声が変わってる？

なぜ？

どうしよう、今までみたいに歌えなくなったら……。

他にできることなんてないのに……。

エレノアは、体験したことのない不安にとらわれ始めていた。

9 囚人11番 25番 独房

「エレノアって名前には、聞き覚えがあるな」

ノートをめくっていた25番が、独り言のようにつぶやいた。

「よくある名前だ」

「確か、何年か前に、慰問演奏に来た音楽科の中に、そういう名前の歌手がいたような気がするんだが……」

私は慰問演奏など聞いたことがない。

きつと、私がここに入れられる前の話だろう。

なにせ、この老人は、もう40年近く、雑居房で暮らしているのだから。

「まさか、彼女の話じゃああるまいな？」

25番が好奇心のこもった声で尋ねた。

私は答えなかった。答えようがなかったからだ。

さて、続きを聞かせよう。

本屋でグーファー・レコンタのコーナーをあさっていたアンゲルは、イシュハで出されている『金儲け本』の種類の多さに圧倒され、呆れていた。

何だよこれ。医学の本より多いぞ！どっからどう選んだよ！？
とりあえず、ヘイゼルに言われた『金持ちになる30の知恵』を
探し出し、立ち読みしていると、

「そんなもの読むな！」

という声がした。振り向くと、予想通り、管轄区から来たらしき
学生が立っていた。

「イシュハを知りたいだけだよ、本くらいいいだろ？」

アンゲルが言い返すと、

「シュッティファントに取り込まれたな？」

などと悪口を言いながら学生は去っていった。アンゲルはため息
をつく。

何が『取りこまれたな？』だよ？たかが本だろ？どこまで人に干
渉すれば気が済むんだ？

本を買おうか迷ったが、やめた。

ヘイゼルに借りよう……。

そういえば、エブニーザも管轄区の間人だよな？宗教に疑問を持
ったことがないのか？

アンゲルは寮に戻って、エブニーザの部屋をノックしたが、返事
がない。

ドアも開かない。

あきらめて勉強に集中しようとする、電話が鳴った。

エレノアだった。

エブニーザの様子が変わったと言われ『またエブニーザかよ』と
思いながらも話を聞くと、トルマリンの指輪の話を聞かされた。

『ほんとに未来が見えているのよ』

「偶然じゃないのか？……それより、誕生日なの？」

『え？あ、そうよ』

ここで、フランシスがエレノアから受話器を奪った。

「図書館の隣のカフェでパーティーをやるから、3人とも6時までには正装でいらっしやい。プレゼント持参でね。言っとくけど、変なもの持ってきたら殺すわよ！」

いつか聞いたような怒鳴り声を発して、受話器を乱暴に置いた。

呆然としているエレノアにフランシスは、

「クーの発案よ。費用もあっちが出すの。ノレーシユの税金でただ飲みよ」

と笑った。

そのころアンゲルは、受話器を持ったまま顔をしかめていた。

またカフェに6時かよ……今からプレゼントって……3時間もないぞー！？

慌てているところに、ヘイゼルが大きな包みを持って入ってきた。

「エレノアの誕生日なのだが……どうして知らないのかな？」

「なんで俺が知ってるんだよー！？」

「それよりプレゼントはどうした？シグノーの令嬢は、殺すって言うたら本当に殺すぞ？」

「エブニーザはー！？」

「さあ」

アンゲルはあわてて財布をつかんで外に飛び出していった。

ヘイゼルは、ニヤニヤと笑いながらエブニーザの部屋のドアに近づくと、ドアをがんがん蹴りながら、

「いるんだろ！？出てこい！」

とすさまじい声で怒鳴った。エブニーザがそーっとドアを開けた。ネックレスの入ったケースと、帽子の箱が机の上に置いてある。

「アングルの分も、シュタイナー・メルケリ商会に用意させたくせに、どうして教えてあげないんですか？」

「自分で選ばせたほうが面白いだろ。あわてて走っていったぞ……クツクツクツ……教会っ子が何を持ってくるか見ものだな！」

愉快そうに大声で笑うヘイゼル。エブニーザは、悪いことをしているような気分になって、気まずそうに、開けっ放しになっているドアを見つめた。

9 - 2 アンゲル ポートタウンにて

勢いよく飛び出して、ポートタウンに着いたアンゲルだったが、何を探せばいいかわからなかった。

エレノアの好きなものっていうと、まず浮かぶのは帽子だ……でも、どういふの選べばいいかわかんないんだよなあ……。

帽子屋があったので、ウィンドウをのぞいてみたが、エレノアがかぶっているような、つばの広い帽子はなかった。

カジュアルなハンチングだったら18クレリンで売ってたな。でも、そんなもの買って行ったら、フランスに虐殺されそうだな……。

ポートタウンをふらふらと歩きまわって考えたが、何を選べばいいかさっぱりわからなかった。

通ったことのない道に入って、ぼんやり歩いていると、古本屋が目に入った。

入ってみるか、

俺はフランスに殺されるな。もういいや。

アンゲルがふらふらと中に入ると、入口近くに、たくさんの本が無造作に積んであった。

少し奥に進むと、本棚があり、専門書や楽譜、コミックの棚がある。

古本屋に楽譜なんて置いてるのか……と思つて通り過ぎたアンゲルだが、すぐに、あることを思い出し、飛ぶように引き返して来て、本棚からその楽譜を抜いた。

『フラネシア』

これ、エレノアが別荘で探してた楽譜じゃないか？ たしか、絶版になつてて本屋に売ってなかったって……。

アンゲルの胸が高鳴った。

これでいいじゃないか！ 欲しいって本人が言ってたんだから！

「うわあ、俺はついてるぞ!!」

古びた表紙に、クリップで値段がついていた。

手書きで書かれている数字は、200クレリンだ。

その値段を見たたん、高揚した気分が一気に谷底に落ちた。

高い、

高すぎる。

数分迷った末、アンゲルは、店の奥の店員に近づいた。コーヒ―を飲みながらグラビア雑誌をめくっていて、かなりやる気がなさそうだ。

「あの〜」

「買い取りならしてないよ」

店員が雑誌から顔を上げずに言った。

「いや、そうじゃなくて、これなんですけど……」

店員がめんどくさそうに顔を上げたが、すぐ笑顔になった。

「ああ、なんだ、買う客か。いやいやごめんごめん。最近、本を売りに来るやつらが多いんだけど、どいつもこいつもうさんくさいんだよ。同じタイトルの本を何十冊も持ってきたり、明らかに万引きしたような新品の本を持ってきたりさあ。あんたいかにもそんな感じの顔だからさ」

かなり失礼なことを言われた気がしたが、アンゲルは言い返さずに、楽譜を差し出しながら尋ねた。

「これ、もっと安くなりませんか？」

アンゲルがあまりにも必死な、見開いた目をして尋ねたので、店員は何かを怪しんでいる顔をした。

「……いくらに？」

「200クレリン」

「はあ？」店員は、冗談じゃないという顔をした。「だめだよ。それ、絶版になってて、今手に入らないんだから。貴重品なんだよ。オペラハウスにも原板が残っていないくらいしくてね、まあ、あまり人気のあるミュージカルじゃないからだけど」

「人気がないならまけてくれないじゃないですか！」

「そういう問題じゃない。あくまで稀少価値の問題だ。楽譜のコレクターも多いんだよ、イシユ八にはね。君外国人だろう？」

「イシユ八人の彼女が欲しがってるんですよ！」

店員がプツと、馬鹿にしたような声をあげた。

「いや、いや、必死になるのはわかるけどさ」

店員は手をぶらぶらと振って、多少は同情するけどさ、という軽い笑みを浮かべた。

「だからって、そんな大幅ディスカウントはできないよ」

「俺の人生がかかってるんだってばあああああああ！！！」

アンゲルはおばさんのような甲高い声でそう叫ぶと、身を乗り出して、かなりの至近距離で店員の顔を覗きこみ、血走った眼でダイレクトに相手の目をにらみつけた。

店員は、後ろに大きく身を引いた。

そして、相手は正気ではないと判断した。

「100」店員が口元を歪めてつぶやいた「それが限界だ」

「そんなに持ってないよ」

「じゃあいさぎよく振られるんだな」

店員がグラビア雑誌に目を戻した。

「待ってください」アンゲルが出口に向かって走り出した「銀行に行って降ろして来ますから！すぐ来ますから！お願いだからそれを別な人に売らないで下さいよ！！」

叫びながら飛びだして行ったアンゲルを、呆れた顔で見ながら、

店主は、

「こんなもん、100年経っても売れねえよ」

楽譜をかかげて、白けた声でつぶやいた。

「かわいそうになあ、イシユ八の女にひっかかるなんてさ。貢ぐだけ買いだら捨てられるに決まってるんだ」

9 - 3 カフェにて……

「どこにいったのよあのバカは！殺してやる！！」
カフェ。

時間を30分過ぎてもアンゲルが現れないので、フランシスが怒り始めた。

「ご令嬢が怒るたびに人を殺してたら、イシユハはあっというまに滅亡しますな」

「お黙り！」

ヘイゼルとフランシスがいつも通りのやり取りをしている中、エレノアと、クー、そしてエブニーザが、同じテーブルに座ってコーヒーを飲んでいた。

「プレゼントを探しに行っただんですよ。後ろでケンカしてる二人のせいで」

エブニーザが、落ち込んだ顔のエレノアにそう言うと、『ケンカしてる二人』が同時にテーブルの方を睨んだ。

「いいからいいから、あんたたちは二人でケンカしてなさいよ」クーが投げやりな声で二人に指図した「こつちも勝手に喋ってるから」

「だいいち、一週間も前に誕生日だって教えてたはずでしょう？何を当日になって慌てるのよ？」

「それは……」ヘイゼルが気まずそうに言った「俺が教えなかったからなのだが」

「えっ？」

「はあ？」

その場の全員が、非難の目でヘイゼルを見た。

「どういうことよ！？」フランシスがキンキン声を上げ始めた「ちやんと伝えとけって言ったでしょ？」

「いやあ、あのエンジェル氏のことだから、てっきり知ってるかと思っただな」

「ヘイゼル!?」
クーが叫んだ。

「知ってるわけないでしょう? 個人情報ですよ?」
珍しく、エブニーザまで怒りだした。

「単に忘れてただけでしょ!」フランシスがいつも通り怒鳴った。
「あんたっていつもそうなのよね!」

「いつもとはなんだ!? いつもとは!?!」

みんなが言い合いをしている中、エレノアは、一人コーヒーに口をつけながら、

『早く帰りたいなあ』

と黙っていた。

別に、わざわざカフェを借りて祝うようなことじゃないわ。寮の部屋で、ちよつとだけ豪華な食事があればそれでよかったのに……。どうして何でも大げさにするのかしら?

自分の誕生日なのに、エレノアは大いに白けていた。もともと、歌のレッスンで『声がおかしい』と言われたことがまだひっかかっていて、楽しい気分になれなかったのだ。

年に一度の誕生日なのに……。

でも、声が変わったって、どうして?

自分で聴いても分からないなんて、どういうことだろう?

暗い顔で周りを見回す。他の面々はまだ言い合いをしている(主に例の二人が)

それより、アンゲルはどこに行ったんだろう?

一体何を買ってくる気だろう?

悪いけど、あまりセンスがよさそうには見えないし……。

エレノアは、アンゲルのいつもの服装……ジーンズ、古着屋で拾って来たと思えないよれよれのシャツ、あるいは時代がかった、いかにも管轄区らしい薄緑色のワイシャツ(エレノアは古い時代の服が好きなので、このシャツの色は嫌いではない)

ま、仕方ないわよね。お金がないんだから。それに、私と違って、

服装が大事な職業を目指してるとは思えないし。

さらに20分後。

走りすぎて疲れた顔のアンゲルが、カフェにやってきた。

「いや〜ごめん遅れて〜」

軽い声で謝りながら入って来たアンゲルに向かって、フランシスがワインボトルを投げようとしたが、ヘイゼルに止められた。

「おめでとう。これ、古いけどプレゼント」

エレノアは、アンゲルが差し出した楽譜を見たたん、驚きのあまりカップを落としそうになった。

「どこで見つけたの？」

エレノアが頬を紅潮させた。

「古本屋。だからかなり傷んでる。悪いけど」

アンゲルの疲れは、エレノアの喜ぶ顔を見て吹っ飛んだ。

フランシスが冷ややかな視線をアンゲルに送っていたが、とがめる気はないようだ。ヘイゼルと言い合いの続きをしながら、アンゲルどころではないらしい。

クーとエブニーザも、エレノアにプレゼントを渡したが、エブニーザの用意した高そうな帽子とネックレスを見て、クーが嫌味を言った。

「シュタイナーと知り合いだと、プレゼント選びも楽そうね」

エブニーザがむっとした顔をした。

「悪気はないの。でも、シュタイナーからは早く離れたほうがいいわ」

「どうしていつも同じことばかり言うんですか？」

「大事なことからよ」

「うれしいわ。ありがとう」エレノアがエブニーザに向かって、にっこりと笑った。「こういう帽子って、今あまり売っていないのよね」エレノアが、渡されたばかりの帽子をかぶりながら言った。

隣では、アンゲルが、

ああ、やっぱり帽子の方が強いよなあ。それともエブニーザかなあ。と、さみしそうな顔をしていた。

クーのプレゼントは詩集だった。愛の詩。

「恋人に送るみたいじゃない」

「いいでしょ？これに曲をつけて歌ったら？」

エレノアは、セカンドヴィラでされたことを思い出し、プレゼントをつき返そうかとも考えたが、黙って受け取ることにした。

でも、もし本気だったら？どうすればいいんだろう？

「それにしても、どこを走りまわってたわけ？」クーがアンゲルにワイングラスを渡しながら尋ねた「来るのが遅いから、てっきりまた襲われたのかと」

「クー！」

エレノアが怒った顔をした。

「ああ、その可能性もあったね」アンゲルは軽く言い返した「すっかり忘れてたよ。自分が狙われてるの」

「……あなた、そんなことで大丈夫なの？」

クーが懸念の顔でつぶやいた。

「何が？」

「事態の重要性がわかってないんじゃないかしらと思って」

「そんなことないよ。十分わかってるさ」

アンゲルはまた軽く言い返した。

誰かに狙われている。深刻な事態だ。そんなことはもちろんアンゲルだってわかっている。

ただ、今ここで、そういう話をしたくなかった。

「だいたいけど」クーがエレノアにワイングラスを渡した「あなたが主演なんだから、存分に飲んで」

「ありがとう」

エレノアは笑ったが、口元がひきつっていた。アンゲルはそれを見のがさなかった。

「どうしたの？ワイン嫌いだったっけ？」

「違うの！」エレノアがあわてた様子で言った「誕生日を祝ってくれるのは嬉しいんだけど……」

エレノアが、アングルの耳元に顔を近づけた。

「こんなに大きさにする必要ある？」

すこし身を引いて、エレノアの顔を見ると、ものすごく不満そうな顔をしていた。

「まあ、そうだけど。でも、イシユ八人って何でも派手に祝うんだろ？」

「そんなことないわ。私だって去年までは、家族とおいしいものを食べて、プレゼントをもらって、それで誕生日は終わりよ。大騒ぎなんて好きじゃないもの。自分の部屋で、ちよつといい食事があれば十分じゃない？わざわざカフェを借り切ってやるようなこと？しかも、フランシスとクーが勝手に決めたのよ！」

エレノアが耳元で、かなりの早口でささやいた。かなり不満がたまっているのか、かなり激しい息使いで、アングルの耳に息が強く当たった。

「どうして何でも大きくなるの？私はもっと気楽にやりたかったのに！」

アングルは、真っ赤になりながらも、笑いながらこう言った。

「俺も、実は、同じことを考えてたよ。ティツシュファントムの別荘に行った時から、ずっとね」

9 - 4 アンゲル ヘイゼル 男子寮の部屋

パーティーが終わった後、ヘイゼルがアンゲルに、グーファー・レコンタの本を『やるよ』と言って差し出した。

アンゲル自身もヘイゼルに借りようと思っていた本だが、向こうから『読め』と差し出されるとなぜか不愉快だ。

「教会っ子は純粹だからこういうのはお嫌いだろうな。でもな、自分に合わない思想でも知っておくべきだ。イシュハのほとんどの人間はこういう発想で生きて、行動しているってことを知っておいた方がいい。お前がそれに賛成するかどうかは別の問題だ」

「不気味だな、なんで俺に本なんかプレゼントするんだよ」

「エレノアに楽譜買って、悲しきアルバイトで貯めた小銭が消えたり？」

「……ダイレクトに指摘されると痛々しいね」

「それに、お前、イシュハに移住するだろ？」

「は？」

「もう教会に睨まれてる。襲われただろ？戻れないだろ？」

ヘイゼルの目つきは同年代の学生のものではなく、権力者『シュティファント』の、脅すような目だった。

「覚悟しておけ。タフサみたいにな」

「ちよつと待て、俺はそんなつもりは……」

アンゲルの言葉を聞かず、ヘイゼルは部屋を出て行った。

アンゲルは本を見つめながら『なんか変だなあ……』と思ったが自分に合わない思想でも知っておくべきだ』には賛成だった。

言ってることは正しいんだけど、あいつに言われるとむかつくな。そう思いながら、もらった本をめぐってみたのだが、

「富は求める人間のところに集まる……本当にそうだったら苦勞しねえよ」

いちいち皮肉を突っ込みたくなる内容ばかり並んでいた。

すぐに投げ出して、ぼーっと考える。

イシュハに移住する？そんなこと考えたこともなかった……大学で資格を取ってからのことは、何も考えていなかった。

確かに、管轄区では心理学の資格を持っていても仕事はない……仕事どころか、また教会から言いがかりをつけられるかもしれない……どうすればいいんだろう？

エレノアはブースで、アンゲルにもらった楽譜を広げて、歌った。小さいころに少し聞いたきりで、ほとんど忘れていたのだが、歌っているうちに記憶がよみがえってきた。

これ、すごくいい曲ばかりなのに。どうして絶版になってるの？ 私が偉くなったら、『フラネシア』をもう一回上演するわ！

そんなことを考えて、舞台衣装や演出をどうしようか空想し、うきうきし始めたが、すぐに『声がおかしい』と言われたことを思い出し、また落ち込んでしまった。

今日のレッスンで、自分の声をテープにとって聞いてみたのだが、それが、自分の声とは思えない、妙な、気味の悪い声だった。

ブースで歌っているときは、そんな風には聞こえないのに。自分が認識している声と、実際にテープで聞いた『他の人が聞いているであろう声』のギャップに、エレノアは驚いていた。

小さいころから旅芸人として歌ってきたのに、自分の声を、こういう形で聴いたことがなかった。

……自分ではプロのつもりでいたけど、もしかしたら、全然ダメなのかもしれない。

エレノアは焦っていた。今のままではいけない。練習するしかない。

でも、元の声に戻るんだろうか？そもそも、元の声って何？

どんな声ならいいの？

ロツク？

声楽の声？

それとももつと別の？

悩みながらブースを出ると、ケンタが入口でエレノアを待っていた。

エレノアが誕生会のことを面白おかしく話すと、

「誕生日だったのか、もつと早く言ってくれればなあ」

ケンタがしみじみとそう言ったので、エレノアは慌てた。

「前にピックをもらったわ！別にいいのよ！誕生日の話なんてするべきじゃなかったわ。物欲しげに聞こえるわよね」

「その発想はアケパリのだな。こっちのやつらはみんな言いふらして回るだろ」

二人で笑った。

「それにしても、アンゲルは本気だな。エレノアが何を求めているかちゃんと分析してるんだ。心理学は怖いな」

ケンタが笑う。エレノアは、

「そうね」

と困った顔をした。

単なる心理学なんだろうか、それとも、本当に自分を思って、なのだろうか？

エレノアはずっと考えているが、当然答えは出てこない。

「最近、例の奴、つけてこないな」

「たぶんヘイゼルにからかわれたんじゃない？」

「それはあ気の毒にい」

ケンタが老人のような、変にしわがれた声を出した。

「全然気の毒に聞こえないけど？」

「じゃあアケパリ語で言いなおそう。『自業自得』」

ケンタがニヤケ顔でそう言うと、エレノアは声を上げて笑った。

9 - 6 アンゲル シギ 校舎内

アンゲルは校内でシギを見かけたので、声をかけて、グーファー・レコンタについて聞いてみた。

「ああ、でも、当たり前のことしか書いてないだろ」

無表情で、何でもないことのように言われてしまった。

「当たり前？」

アンゲルは露骨に疑問の顔をした。

「その手の本はみんな、同じことばかり書いてある」

「そうか？変なことばっか書いてないか？これ、語彙は簡単だけど、読んでも頭が痛くなってくるぞ？」

「それはお前が教会っ子……」

「わかった、わかったよ。おれはどうせ気持ち悪い管轄区人だよ」

「まだ何も言っていない」

シギはいつまでも無表情のままだ。

「でも、イシユハだっておかしいぞ。科学的にありえないことばっかり書いてあるぞ」

「そういう問題じゃない……最近エレノアに会ったか？」

「なんでそこにエレノアが出てくるんだよ！」

廊下で怒りだしたアンゲルを置いて、シギは次の授業に消えた。

校内は何も変わらない。授業や実習もいつも通り進んでいて、何も問題がないように思える。

しかし、アンゲルはどこにいても、自分に向かっていている視線を感じずにはいられなかった。生徒や講師の視線ではない。正体のわからない、管轄区の、あの狂信的な信者たちの視線だ……。

9 - 7 ソレア襲来

エレノアは新しい曲を書いている。

声が変わったなら、それに合う曲を作ればいいのでは……とふと思いついて、机に向かっていたのだが、なかなか曲の続きが思いつかない、

駄目よね、今の声じゃ何を歌っても……。
気晴らしに、散歩に出かけることにした。

音楽科の近くを通る。ケンタが路上で弾き語りをしていた。周りにアケパリ人が何人も集まっていた。エレノアが近づいていくと『おおー来た！噂の美人！』とアケパリ語の叫びが聞こえてきた。

エレノアは、苦笑いでそれに応えた。アケパリ人留学生にからかわれながらも、ケンタと一緒に音楽科のブースへ向かった。

同じころ、アンゲルが寮を出ると、入口に、なんと、ソレア・アイクが笑顔で立っていた。

「アンゲル！！」

両手を振って笑っているソレアはとてもかわいらしい……が、アンゲルが彼女の姿を見て真っ先に思い出したのは、管轄区のある、狂信的なフアナティ教徒でもある『真面目に勉強しない女の子たち』だった。

「授業があるから」

アンゲルはそう吐き捨てて走って逃げたが、ソレアは追いかけてきた。

音楽科に向かっていたエレノアは、凄まじい恐怖の形相で走るアンゲルと、そのあとを追いかけている、古風な、かわいらしい女の子を目撃。

「なんだろうね、今の」

ケンタが苦笑いした。

「さあ……」

エレノアはちょっと寂しそうな顔をした。ケンタはそれを見逃さなかった。

「アンゲルが気になる？」

エレノアは答えずに歩き出した。

「心配しなくても、あのすさまじい顔つきから見て、ストーカーに追いかけて逃走中ってところじゃない？」

ケンタは明るく冗談を言ったが、エレノアは反応しなかった。

9 - 8 アンゲル エブニーザ ソレア 図書館

逃走中のアンゲルは、図書館の一番奥、つまり、エブニーザがいる資料室に逃げ込んだ。

「あれ？珍しいですね、アンゲルがここに来るなんて」

「女に追われてるんだ！！」

「えっ？」

「隠れるから追いついてくれ！」

「ええっ！？」

アンゲルは戸棚に飛び込んで引き戸を閉めた。廊下から、

「アンゲル」

女の子の高い声が聞こえる。

エブニーザは、得体の知れない恐怖を感じ、自分もどこかに隠れようと考えたが、見回したところで他に隠れるスペースはない。

ソレアは、すぐに部屋を見つけて入って来た。

「ねえ、アンゲルを見なかった？茶色い髪で、丸顔で、緑色の目をしてる」

「し、知りませんが」

エブニーザは、明らかに引きつった声でそう答えた。

ソレアは出て行くとしたが、ふと、思いついたように振り返った。

「あなた、その目、どうしたの？真っ白ね。見えてないの？」

「見えています。生まれつきこういう色なんです」

怯えた顔でエブニーザが答えると、ソレアはじーっとエブニーザの顔を見つめ始めた。

「あなた、きれいね？どこの人？イシユ八人？こんなところに閉じこもってちゃ出会いがないわよ。せつかく綺麗な顔してるのに」

「余計なお世話です」

「何を讀んでいるの？」

「ロンハルトの魔術書ですよ」

「魔術書？」

「500年前には、ロンハルトには魔術を使う人間がいて、基本になる薬草や宝石、鉱石の知識が書かれた本と、それらを利用した呪術の手順を書いた本が、普通に流通していたんです。今で言う、基本教科の教科書みたいなものなんですが……」

「本当に？魔法が使えたの？」

「今でも使える人はいるみたいですよ。少ないですけど」

ソレアとエブニーザは、普通に会話を始めてしまった。

アンゲルは戸棚に隠れながら、

「なんでこいつと喋るんだよ！？追いついて言っただろっが！何が魔術だ！？」

と、頭の中で文句を言っていた。

一時間後、エレノアと、入口で会ったヘイゼルがエブニーザを探しに来た。アンゲルは戸棚の中で顔をひきつらせた。

「やばい、エレノアだ。誤解される！」

ヘイゼルは、ソレアから話を聞いてニヤニヤしはじめた。そして、アンゲルが隠れている戸棚を横目で見た。

「居場所をおしえてやれんこともないが……いいのかな？エレノア」
「えっ？」

ソレアが鋭い目でエレノアを睨んだ。

「どういうこと？」

エブニーザは今にも泣き出しそうな顔でヘイゼルに、

「やめてくださいよ！」

と小声でつぶやいた。

「私帰るわ」

エレノアは不機嫌な声でそう言うと、部屋を出て行ってしまった。

「お嬢さんも帰った方がいいんじゃないかな？」

ヘイゼルがにっこりと笑うと、ソレアが不満げな顔をした。

「今の人、誰？アンゲルと関係あるの？」

「あー、それは帰り道でエブニーザに聞いてくれ」

「えっ？」

エブニーザが引きつった声を上げて、ヘイゼルのほうを向いた。

「駅まで送ってやれ」

「だめよ！アンゲルを探すわ！」

「どうせバイト先で会えるだろ？」

ヘイゼルが二人をつかんでドアまで引っぱって行き、放り投げるように廊下に出すと、ドアを乱暴に閉めた。

そして、足音が遠のいたのを確かめると、アンゲルが隠れている戸棚をがんがん蹴り始めた。

「出てこい！臆病な教会っ子め！」

「出るから蹴るな！叫ぶな！ばれるだろ！」

アンゲルは、小声で文句を言いながら戸棚から出た。

「執念深いお嬢さんだな。シグノーの令嬢並みだ」

アンゲルがヘイゼルを睨んだ。

「何があつたのかな？」

「俺が聞きたいよ！」

アンゲルが叫んだ。

「普通に話でもして、穩便に帰ってもらえばよかつたんじゃないかな？いきなり走って逃げられちゃ、追いかけたくもなるさ」

ヘイゼルがまっとうなことを言った。アンゲルも少しだけ反省した。

確かに、逃げる必要はなかつたかもしれない……でも、何でこんなところまで来るんだ？

フランシスが買い物（憂さ晴らし）バッグをかかえて帰り道を歩いていると、エレノアが早足で歩いているのが見えた。

「エレノア！」

叫ぶが、聞こえていないようだ。追いかけて近づくと、かなり機嫌の悪そうな顔をしていて、眉間にしわがよっている。

「どうしたの。めずらしいわね。あんたがそんな顔するなんて」

「そんな顔？」

「今にも物を投げて叫び出しそうな顔」

「あなたじゃあるまいし」

「その話し方もあんたらしくない」

エレノアが、アンゲルを追いかけていた女の話をする、

「へー。あの変な顔にそんな女が」

「変な顔って……」

「でも、教会つ子にはおもしろいわね、その女。あそこって、従順でつまらない古き醜き母親候補みたいな女ばかりなのよ？きつと、きゆうくつになつてイシユ八に来たんでしょね。生まれる場所を間違つたのよ」

なぜか、フランシスは、知りもしない女に同情的だ。エレノアは黙っている。

「エレノア、どうしてあんたが機嫌悪くなるのよ。ただの面白い話じゃないの。アンゲルに気がある？」

「そうじゃない……どうしてみんな私とアンゲルを結び付けて考えるの？さっきのヘイゼルもそうだった」

「ヘイゼル……」

フランシスが立ち止った、そして、買い物バッグをエレノアに押し付けると、

「先に帰ってて」

と言つて、どこかへ走り去つた。
「フランスス……もしかして」
エレノアはあわてて後を追つた。
嫌な予感がする……。

カフェ。ソレアとエブニーザが話している。駅に向かおうとしたエブニーザを、ソレアが無理矢理引っぱってきたのだ。

「早く帰って下さいよ!」

エブニーザはさっきから繰り返しているのだが、ソレアは聞く耳を持たない。

「いいかげん白状しなさいよ!さっきのエレノアって女とアンゲルは何か関係あるんでしょ?」

「僕に聞かれてもわかりません!」

エブニーザはあせっている。アンゲルかエレノアがここに来てしまったら困るからだ。

「とにかく、ここを出ましようよ!」

エブニーザは必死だが、ソレアはその態度を不審に思ったようだ。「なんで?」ソレアは、ふてぶてしい疑問の顔で腕を組んで椅子にもたれた。「ここにいと何か起こるの?誰かを待ってるの?あなたの彼女?」

「違います!」

「じゃあ何、その変な態度は」

「僕が変なのはいつものことですよ!」

「はあ?」

そこに現れたのはフランシスだ。

ただでさえパニック寸前のエブニーザは、フランシスがこちらに近づいてくるのが目に入った途端、軽く悲鳴を上げながらカフェを飛び出して行ってしまった。

「ちよつと!どこに行くのよ!」

「あんた誰?」

エブニーザが座っていた席にフランシスが近づき、誰もが震えあがるあの威圧的な目でソレアを見おろした。

「あ、あのー」ソレアが後ろに身を引いた。「私は友達を探しに来ただけなんですけどお」

さすがのソレアもフランススは怖いらしい。

フランススの後を追ってきたエレノアは、外からカフェの中を覗き、フランススとソレアの姿を確認していた。

やっぱり……。

「買い物好きなんだ。意外だな」

後ろを振り向くと、ケンタが立っていた。茂みに隠れているエレノアと、その周りをとり囲んでいる、ブランドの名前が入った紙袋をじっと見ながら。

「全部フランススのよ!」

エレノアは険しい表情をして小声で叫んだ。二人でその場を離れた。

カフェの中の二人が、エレノアとケンタに気づいた。

「なんだ、彼氏がいるのね」

ソレアが安心したようにつぶやいた。

「違うわよ。あれは音楽科の友達でしょ?アケパリ人の」

フランススが冷ややかな声で言いながら席についた。

「じゃあ、やっぱりアンゲルと?」

「まさか。両目が離れすぎてるもの?」

「は?」

怪訝な顔をしたソレアに、フランススが、悪役めいたニヤケ笑いを向けた。

「あんだ、エレノアの顔をちゃんと見た?つりあわないでしょ?どう考えても。絶世の美女と爬虫類じゃ」

「何ですって?」

「あんだ、教会っ子の割にはまともなお顔をしていらっしやるからわからないんでしょうけどね、イシユハじゃ、見た目で人生の5割

が決まるの。残りの5割が財産よ」

「そんなの変よ。見た目やお金じゃわからないことだってあるでしょう」

「管轄区じゃそうでしょうけど、ここはイシュハなの」

「アンゲルも私もイシュハ人じゃないから、わかりません。大事なのは心よ。気持ち。愛情」

ソレアが胸に手を当てて、反抗的な目でフランシスを睨んだ。フランシスは、

「面白いわあ」

とつぶやいて、好戦的な笑みを浮かべた。ソレアは恐怖を感じたが、弱みを見せてはいけないうような気がしたので、フランシスを睨んだまま表情を変えない。

そこにヘイゼルがやってきた。

「美女二人で何を話しているのかな？」

「アンゲルをどこに隠したのよ？」フランシスが面白がっている声で言った「ここに連れて来なさい。面白いものが見られるわ」

ソレアもヘイゼルもびつくりだ。

「やだね。女の金切り声なんて、シグノーのご令嬢だけで十分だ」

「いいから連れて来いって言うてるの！」

「そうよ！連れて来なさいよ！」ソレアまでヘイゼルに向かって怒鳴り始めた「さっきから物知り顔でニヤニヤして、こそこそ人を隠すなんて、大した男じゃないわね」

「何い!？」

ヘイゼルが怒りだしたが、ソレアはかまわずに悪口を言いまくり、フランシスは、

「わあ、最高！アハハハハ!!」

と一人笑っていた。

9 - 12 エレノア ケンタ 音楽科の近く

エレノアは音楽科の近くにあるコーヒーショップで、ケンタと話していた。

「みんなで私とアンゲルをからかって面白がってるのよ。ただの友達なのに。アンゲルは誤解してるし、エブニーザも私とアンゲルをくつつけようとするし……」

「で、エレノアは誰が好きなの？」

「だから！みんな友達なんだってば！」

「悪いけど、男はそうは思わないよ。エレノアは美人過ぎる。しかも控えめで性格もいい。歌の才能まで持つてる。そんな子が自分に話しかけてきたら、何か特別なことが起きたと思ってしまってもんだよ。残念ながら、男というのはそういう生き物だ」

「じゃあなんでエブニーザは私をアンゲルとくつつけようとするのよ！？？」

「それは俺にもわからない。他に好きな子でもいるんじゃないの？絶世の美女が目に入らなくなるくらい好きな子が」

エレノアは黙り込んだ。エブニーザが誰を好きか、それはずいぶん前からわかっていたことだ。

「そういうエレノアも、自分の好きな奴ばかり見てて、そばで君を思ってる男には気がつかないんだな」

ケンタが静かにつぶやいた。エレノアがはつとしてケンタを見た。「心配しない。俺もただの友達だから。ご存じの通り、俺も控えめなアケパリ人だよ。高慢なイシユ八人と違ってそのくらい自覚できっから」

ケンタは少しさみしそうに笑った。

エレノアは何と答えていいかわからず、コーヒーカップを無意味に手で弄んでいた。

9 - 13 アンゲル エブニーザ 男子寮の部屋

寮の電話がさっきから鳴り続けているが。アンゲルもエブニーザも取ろうとしない。

「彼女と何かあったんですか？」

「何も無いって！」

「じゃあなんでこんなところまで来るんですか？」

「こっちが聞きたいよ！」

「エレノアに誤解されたらどうするんですか？」

「うるさいな！」

さっきから二人はこの問答を繰り返していた。

バイトに行かないと……いや、だめだ、今日は休もう……ああ、でも生活費が。

アンゲルは、時計を見ながら頭を抱えていた。

9 - 14 フランシス ソレア 女子寮

「出ないわね」女子寮の部屋でフランシスが電話を持って顔をしかめていた「ま、いいわ。今日はここに泊まって、明日の朝にでも待ち伏せしたら……ウフフ」

フランシスはとても楽しそうだ。

「でも……ここって、エレノアって人と一緒なんじゃ……」

ソレアが部屋を見回しながら心配そうにつぶやくと、

「いいの。エレノアには友達の家に行ってもらってから」

フランシスは常にニヤニヤしている。

「今夜も楽しみ、明日も楽しみ。フフフ……人生って面白いわあ」

9 - 15 エレノア クー ケンタ 女子寮の前

エレノアとケンタが女子寮の前で、クーの黒塗りの車を発見した。「遅かったわね！うちにいらっしやい！」

車の窓から顔を出したクーが叫んだ。エレノアとケンタは顔を見合わせた。

「なんで？」

「フランシスが部屋に友達を泊めるんですって、だから、あなたは代わりにこっちに来るのよ」

「えっ？」

「ずいぶん横暴な話に聞こえるけど？」

ケンタが怪訝な顔をしてつぶやく。クーがレズだということを知っているので、エレノアと二人きりにしたくないのだ。

「あら、あなたも来る？ゲストルームはたくさんあるもの」

二人が驚いていると、黒服の男が出て来て、車のドアを開けた。

「とりあえず二人とも乗って！レストランに行くから！」

「でも俺金ねえ……」

「おごるから安心して」

エレノアとケンタがしかたなく高級車に乗りこむと、車はゆっくりと発進した。

「ポートタウンに向かいます」

運転手が低い声で言った。エレノアとケンタは困惑して顔を見合わせたが、クーはそんな二人を見て楽しそうに笑っていた。

「ゲストルームのドアにカギがかかるか、まず確認したほうがいいよ。かからなかったらタクシーで帰るんだ」

ケンタがエレノアの耳元でつぶやいた。

エレノアは、セカンドヴィラで起こったことを思い出し、全身をひきつらせた。

「えっ？」

コイン投げ（アンゲルの私物・両面裏）に負けて電話に出たエブニーザが、真っ青になった。

「だめですよ！そんなことしちゃ！」

アンゲルはその様子をソファァーからじっと見ている。エブニーザは電話を切ると、

「出かけます！今日帰って来ないかも！」

と叫んで、部屋を飛び出して行ってしまった。

取り残されたアンゲルが呆然としていると、ヘイゼルが入ってきた。

「おい、あれは何だ？管轄区の魔女か？どうしてあんな恐ろしい奴を連れてきたんだ？」

「俺が連れて来たんじゃない！勝手に来たんだよ！」アンゲルが叫んだが、ヘイゼルの様子がおかしいことに気がついた「……何があった？」

「さんざん悪口を言われたぞ。あの口の悪さは悪魔級だ！シグノーの令嬢が二人いるようなものだぞ？つたく冗談じゃない！なんで俺があんな連中を相手にしなくちゃいかんだ！？」

「普段の行いが悪いからだろ？」

「おおお、エンジェル氏、人の事が言えるのかな？そもそも魔女をこのアルターまで呼び寄せたのはどこの誰だったかな？」

「俺は呼んでない！！勝手に来たんだよ！」

「勝手に来るような態度を今まで取ってたんじゃないのか？女は簡単に誤解するからな」

「うるさい！ティッシュファントム！」

「ティッシュファントムじゃないって言ってるだろ！！」

「いちいち細かいことで怒るなよ！！」

「人の名前を間違えるのは礼儀に反してるだろ!!」
「お前に礼儀なんて言われたくない!」

レストランに3人が着いたとき、入口にエブニーザが立っていたので、みな驚いた。

クーは、エブニーザを見たとき、冷やかな笑いを浮かべた。

「来るような気がしてたわ」

結局4人で食事することになった。

ケンタはやはり、エブニーザの目の色を不審に思ったようだが、

エレノアに小声で、

「本人が気にしてるようだから、目の色については尋ねないほうがいいよね？」

と言った。エレノアは驚いた。しかも、エブニーザが図書館で読んでいた薬草辞典の話を始めると、

「ああ、俺の実家に生えてるよ、それ」

ケンタが平然とそんなことを言い出した。

「俺のばあちゃんがよく摘んできて、餅に混ぜて食ってた」

「体にいいですからね。イシユ八ではあまり見かけませんけど……」

エブニーザのオタクめいた話にまで、ちゃんとついていく。これにはクーも驚いていた。

「アンゲルよりこっちのほうがお勧めじゃない？今頃管轄区の子と遊んでるんでしょう？」

クーがエレノアに耳打ちした。

エレノアは暗い顔で立ち上がり、「トイレに行く」と、誰にも聞こえないような小さな声で言うと、席を離れた。クーがあわてて追いかけた。

エレノアとクーがいなくなっすぐ、ケンタは、

「姫さんがエレノアに手出ししないか、心配で来たんだらう？」

とエブニーザに言った。エブニーザは、怯えた顔で視線をそらした。

「エレノア好きか？」

「違います。僕じゃありません。僕はただ……」

エブニーザは気まずそうに横を向いていた。

「まあいいや。とりあえず目的は一致した」

「えっ？」

「姫さんには悪いけど、二人でエレノアを守るう」

そのころ、クーとエレノアはトイレで話をしていた。

「大変ね。もてて。誰が好み？顔はエブニーザの方が明らかに綺麗だけど、あのアケパリ人はそうとうなテクニシャンよね。ギターのベッドではどうか知らないけど……」

「クー！！」

エレノアが怒る。

「やだ、怒らないでよ」

「怒るわよ！」エレノアが珍しく大声で怒鳴り始めた。「セカンドヴィラで自分が何をしたかわかってる？あれからずっと怖くてたまらなかつたんだから！男が同じことをしたら犯罪じゃないの！！訴えてたわよ！！」

「ごめんなさい、お願い、怒らないで！二度としないから……」「クーが泣きそうな顔で懇願した「それに、今日は私だって、驚いたんですからね。いきなりフランススが電話してきたと思ったら、エレノアを泊めろっていうんだから」

「フランスス……」

エレノアは、頭に上った血が急に引いて行くのを感じた。いや、怒りの矛先が、クーからフランススに移ったと言うべきか。

きっと今頃フランススは、あのソレアだか何だかと一緒にいるのだろう。

「きつと、何か企んでいるのよ。私とアンゲルをからかって遊ぶ気なんだわ……どうしてあんな性格なのかしら？躁うつ病？親のせい？」

「あら、アンゲルも呼ぶ？あなたに気のある男が勢揃い……」

「クー！！ちよつとは反省してよ！！」

「ごめんなさい、もう言わない」

二人が席に戻ると、ケンタがギターを弾きながら変な歌を、変な抑揚で歌っていた。

『ぼくのママには愛人が三人

奥さんは強くて柔道が黒帯

家事をサボると投げられる

皿を洗うと視界がかすむ」

ああ〜一生に一度でいいから〜

大人しくて優しい子に〜出会ってみたい〜』

アケパリの芸人の歌を勝手に翻訳したものだ。周りの客が『うちの女房だ！』と叫びながら爆笑していた。エブニーザも楽しそうに笑っていた。

「ほんと、笑ってるって天使みたいね」

エレノアはつぶやいた。でも、エブニーザの笑った顔（かなり珍しい）を見たにもかかわらず、最初に出会ったころほど心は騒がなかった。どうしてだろう？

9 - 18 エレノア エブニーザ ケンタ 寝室のドアの前

夜中。エレノアの寝室のドア。

ケンタとエブニーザが、ドアをふさぐように座りこんでいた。

実はエレノアも起きていて、中で二人の話を聞いている。

「で、俺はほんとにすげえギタリストになるんだな？」

「間違いないですよ。見えますから。イシユ八中のギター少年が、ケンタと同じギターを欲しがるんです」

「真似されるのは好きじゃねえし、ギターが良ければいいってもんでもないけど、まあ、悪い気はしねえな」

ケンタはエブニーザの『未来が見える』という話を普通に、ジョークだと思って聞き流しているようだ。

「エレノアじゃなかったら、むしろ大歓迎なんだけどなあ」ケンタが、背中のドアを親指で指した「美女が二人、からんでいちゃいやしてるのを見られんだから、最高だぜ？」

「やめてください」

エブニーザが露骨に嫌な顔をした。

「わかってるよ。ああ、俺たちは何をやってるんだろうな」

「ケンタもエレノアが好きなんですか？」

「そうだよ」

ケンタは迷わずに即答した。中でエレノアが身震いしたのを知らずに。

「でも、俺は自分が圏外だって知ってるよ……俺はギターと結婚するさ」

「ギターと結婚？」エブニーザが真面目に驚きの声を上げた「そういう手続きが、アケパリにはあるんですか？」

ケンタは驚き、背中を丸めてうずくまると、声を殺して笑い始めた。

「どうして笑うんですか？」

「おまえ、面白い」

ケンタがアケパリ語で呟きながら、低くうなるような笑い声を洩らした。

結局、二人が心配したこと（クーがエレノアの寝室に入ること）は起きなかった。

「久しぶりに徹夜した。眠い」

「ケンタ」

朝、あくびしながら部屋に戻ろうとするケンタにエブニーザが声をかけた。ケンタがふり返ると、エブニーザはどこかさびしそうな顔をしていた。

「アンゲルは長生きしないよ」

ケンタはそれを聞いて、無言で眉をひそめた。エブニーザはさらに続けた。

「僕もそんなには生きられない。だから、その時にもまだエレノアが好きだったら、エレノアを守って」

エブニーザが敬語を使わないのは珍しいことで、それだけ内容が深刻だということなのだが、ケンタはそんなことは知らずに、

「覚えとくよ」

とだけ答えて、歩き出した。

エレノアは部屋の中で、ドアの前に呆然と立ちつくしていた。

……今のは一体どういう意味？

9 - 19 アンゲル 男子寮の部屋

朝、電話が鳴ったので、寝ぼけたアンゲルが受話器を取ると、

『入口に例の子がいるから、そこから出ないで下さい！』

エブニーザだ。

アンゲルはぞーっとして、またソファーに倒れ込んだ。どうしてこうなったんだろうかと考え始めた。

たしか、管轄区はつまらないと言ってたな。『どうせ帰ったら誰かと結婚させられる』『どうせ不気味がられるから』……管轄区がいやでたまらないんだな。

アンゲルにはその気持ちが痛いほどわかった。

「わかるけどさあ」

つぶやいて途方に暮れる。

俺だってあの国が嫌で抜け出してきたようなものだからな。……だからって俺に迫られても困る。しかもエレノアに……ああ！絶対誤解されてる！

アンゲルは起き上がって着替え、しばらくドアの前に立ち止まって考えたが、思い切って外に出て見ることにした。

今はつきりしておかないと、もっとまずいことになるような気がする……。

男子寮の入口にいるソレアを、遠くの道に停めた車の中からクーとケンタとエレノアが見ている。

「本気ね。思いつめてるわね。怖いわね」
とクーがささやいた。

「そんなにいやならはつきり嫌だって言えばいいのに、どうしてアンゲルは逃げるんだ？どっちもキープか？」

ケンタが不満げに言った。エレノアは黙ったまま、ソレアの姿を見つめている。

電話をかけに行ったエブニーザが帰ってきて、車に乗り込んだ。

「寝てたみたいです」
「のんきねえ」

クーが呆れた。そのうち、寮からアンゲルが出てきたのでみな注目するが、何か話をしたあとに、ソレアが泣きながら走っていくのが見えた。

「あ、ふられたな」
ケンタがつぶやいた。エブニーザが突然ドアを開けて追いかけて行ったので三人とも驚いたが、クーがすぐに、

「何か見えたのね、未来が」
とつぶやいた。

「へえ、あんたにも未来の話したのか」
「だれにでもするわよ。何て言われたの」
「世界一のギタリストになる。当たり前だろ？」

そのあまりにも自信ありげな答えに、エレノアとクーは笑ってしまった。

車に気付いたアンゲルが近づいて来た。

「何やってんだよ」
アンゲルはケンタを睨んだ。ケンタは、

「俺帰るよ。昨日の夜は女二人の相手で眠れなかったからな」

ぎよつとした顔のアンゲルを置いて、あくびをしながら去って行った。クーが声を上げて笑い始めた。

「ねえ、何あれ？どういう意味？」

慌てているアンゲルに向かって、エレノアは苦笑いするしかなかった。

9・21 エブニーザ ソレア 駅の改札

駅で涙をぬぐいながら切符を買っていたソレアに、エブニーザが追いついた。

「何の用？」エブニーザに気がついたソレアは、攻撃的な声をあげた。「言つとくけど、これくらいであきらめないから」

「アンゲルは教会に睨まれているんです」

立ち去ろうとしたソレアが、その言葉でふり返った。

「タフサ・クロツチマーと心理学に関わっているから。バイトの帰りに教会の信者に襲われているし、実家に教会の人間が脅しに来たそうです。アンゲルとつきあったら、教会を敵に回すことになるし、ご家族とも別れることになるかもしれない。あなた自身が襲われるかもしれないですよ？アンゲルを思う気持ちに偽りがないとしても、そこまで本当に覚悟できますか？」

ソレアは驚きのあまり動きが止まってしまった。教会の事なんて全く知らなかったのだ。

「うそでしょ？たしかにあの教会は異常だし、おかしいけど、そんなことまで」

「そんなことまでするんです。残念ながら」

ソレアはしばらく立ち止まったまま考えていたが、

「……帰る」

とエブニーザに背を向けて歩き出した。

「あなたは国に帰った方がいいですよ。きっといい人が現れますよ。僕にはわかる」

エブニーザはそう叫んだが、ソレアはふり返らなかつた。

…… かわいそうだな。

エブニーザは、しばらくソレアの後ろ姿を見ていたが、若者の集団が、大声で笑いながら近づいてきたので、改札に背を向けて、逃げるように歩き出した。

カフェで『ソレアと何を話してたの？』『そもそもあれって何者？』とクーとエレノアに質問攻めにされたアンゲルは、

「俺は友達だとしか思えないって言っただけ！ソレアとはバイトが一緒なだけ！思い込みが激しいの！それだけ！関係ない！」

と、ずーっと叫び続ける羽目になった。

「かわいいそうねえ。かわいい子だったのに。うちに飾りたいくらい」
クーが残念そうに遠い目をしたので、エレノアはぞーっとしたが、アンゲルはその意味に気がつかず、

「やめてくれよ。たしかに、かわいいし、教会っ子にしてはぶっ飛んでるけど……」

と、心の底から嫌そうな顔をした。

「エブニーザはどこへ行ったのかしら」

エレノアがふと思いついたようにつぶやいた。またエブニーザか！とアンゲルが顔をしかめ、クーがにやりと笑った。

「さっきの女の子を追いかけて行ったのよ。何か見えたのね」

「どういう意味？」

「さあ？私はもう帰るわ……またね、エレノア」

クーがエレノアを愛しげに見つめて笑うと、優雅に車のドアを閉め、発進させた。

「ねえ、なんでケンタとエブニーザがクーの車に乗ってたの？しかもエレノアまで」

「フランスのせい……そういえば、すっかり忘れてたわ！フランスがあの子を部屋に泊めるから悪いのよ！」

「何だつて？」

アンゲルは驚き、エレノアは立ちあがった。

「私帰るわ。文句言わなきや」

エレノアが走っていく。一人残されたアンゲルは、

「みんなして何だよ？」
「いじめられた子供のような、弱り切った顔をした。」

エレノアが寮の部屋に入ったとたん、フランシスが抱きついてきた。た。

「ごめんね！エレノア！よかった！帰ってきたのね！もうこんなことしないから許して！」

エレノアが、何が何だかわからず黙っていると、フランシスが「まいましそうに叫んだ。」

「管轄区の女はやっぱり気違いだわ！」

要するに、フランシスの予想以上に、ソレアは曲者だったらしい。『敬虔なる女神ファナティの信者』であるソレアは、寝る前も起きた後も、食事の前も後も『意味不明な祈りの文句をぶつぶつつばやいて』フランシスにまで『ファナティ教の聖書の説明をして、改宗させようとした』というのだ。

「そこまでするの？すごいわね」

「しかも、布教するのが相手のためになると本気で思いこんでるから怖いよ。ああ、気持ち悪い！もう二度と教会っ子には関わらないわ。ええ、冗談じゃないわよ。そういえば、気違い女が作ったサンドイッチとスープがあるけど、朝食にする？」

「味は普通？」

「サンドイッチは祈らないし、スープは布教活動しないわよ」フランシスが笑った。「ところで、クーの家で何されたの？やっぱり脱がされ……」

「フランシス！」

エレノアがすさまじい大声で怒鳴った。

フランシスは両手を前に出しながら、キッチンまで後退した。エレノアはそのまま自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

ああ、どうして、よくわからないことばかり起こるの？

アンゲルには変な子がついてくるし、

声が変わってるし……。

エレノアは、突然あることに気がついて、起き上がった。

昨日の事件のせいで、自分の声に悩んでいることを、すっかり忘れていた!!

信じられない。

クーのせいだわ!!

エレノアはまたベッドに倒れた。でもわからなかった。

どうして、アンゲルが女の子に追いかけられていたからって、私が声のことを忘れるほど動揺しなきゃいけないの？

答えは、わかるような気がした。

でも、エレノアは、考えるのをやめた。

わかりたくなかった。

レッスンの開始時間が、近づいていた。

でも、疲れていたエレノアは、そのまま眠りこんでしまった。

鉄格子の窓から、ぼんやりと外を見ていた。

手元のノートができてしまつて、書くものがない。

壁にでも書いてやろうかと思つたが、看守に見られるのは避けたい。

仕方なく景色を眺めて、ぼんやりと昔を思い出していた。

ただ、記憶というものは、実にあいまいだ。

本当に起きたのか、空想しただけなのか、その境目も危うい。

いや、もう二度と起こらないという点では、過去も空想も、大して変わらない。

どちらも、幻のようなものだ。

どこにもない、なのに見える。

そして人々を幻惑する。

草原の緑が、少しずつ、枯れ葉色に変わり始めていた。

「おい」

25番が、モップと、頼んだものをかかえて入つて来た。

「ノートと、シャープペンと、芯をもらつてきた」

「シャープペン？」

聞いたことのない言葉だ。

手渡されたのは、鉛筆に似た形の、金属の冷たい感触が印象的な道具だった。

「鉛筆は見つからなかった」25番がおどけたような、こまつたような顔をした「使う奴がないんだつてよ。今はこれが主流なんだ

と

時代はいつの間にか変わっていたようだ。

さて、続きを聞かせようか。

最近、エレノアは桜模様のワンピースをアケパリから輸入して、毎日着て歩いている。

いつもそうだ。エレノアは、気に入った服があると、何日でも着続け、周りの人（たとえば、アンゲルとか）に、

「似合うけどさ、そろそろ、着替えてもいいんじゃないかな？」

と、遠まわしに注意されたりするのだ。

今回は、フランススが、珍しく文句を言わなかった。子供っぽい花柄は好きではなかったが、『100年前の乗馬服』よりはましだと判断したのだろう。

それに『声が変わった』問題で、最近エレノアは落ち込んでいて、不安がフランススにも伝染していた。

……おバカなダサイアケパリプリントの服でも、エレノアが気に入ったなら、しょうがない。暗い顔をされるよりはよっぽどいいわ。フランススはこう考えていた。

実際、エレノアは毎日レッスンを受け、練習し、自分の声を録音して聞いていたのだが、いつまでたっても自分の声から『気味の悪さ』が抜けてくれない。

どうしてだろう？

エレノアが悩んでいるうちに、季節が少しずつ変わっていた。

サッカーの季節だ。

シギとエボン、そして、無理矢理チームに割り込んだヘイゼルが、サッカー場をかけまわっている姿が、頻繁に見られるようになった。

ある日のことだ。音楽科に向かっていたエレノアが、サッカー場を通りがかった時、遠くから、試合をぼんやり眺めているアンゲルを発見した。

「アンゲル？」

「え？ああ、エレノア」ふり返ったアンゲルは元気がなさそうだ。「練習？」

「そうよ」

フェンスの向こうでは、ヘイゼルが反則プレーをして、全員に怒鳴られていた。

「あなたは入らないの？」

「そんな暇ないよ」アンゲルが時計に目をやった。「そろそろアルバイトに行くから」

アンゲルはその場を立ち去った。ひどく寂しそうだった。

なんだか、いつかのエブニーザみたい……。

エレノアも音楽科に向かって歩き始めたが、アンゲルの様子が見えずと、頭から離れなかった。

敷地内の教会前を通った時、エレノアはあることを思い出した。

そういえば、アンゲルは、管轄区の人に襲われたことがあるのよね。

今でも、狙われているんだろうか？

それなら、サッカーなんてやっている余裕はないかもしれない……。

でも、どうしてそうなるんだろう？

管轄区って、そんなに怖い国なんだろうか？

疑問に思いながら、エレノアは、教会の前を通り過ぎた。

エブニーザが近くにいて、すさまじい目つきで教会を見上げていたのだが、それには気がつかなかった。

10-2 アンゲル ヘイゼル エブニーザ 男子寮

夜。男子寮の部屋。

「エンジェル氏。恐怖の日が近づいてますぞ」

ヘイゼルが、いつのまに飾ったのか、壁の大きなカレンダーを見ながらつぶやいた。

「おい」アンゲルがカレンダーに手を伸ばした。「ここは俺の部屋だろ？」

「だから何かな？」

「カレンダーは自分の部屋に貼れよ！！」

「いいじゃないか。エンジェル氏、カレンダーなしでどうやって日付を把握しているのかな？」

「なくたってわかるよ」

「フランスの誕生日が来るんです……」

暗い暗い、地の底から響くような低い声で呟いたのは、エブニーザだ。

さつきから、ソファアに座って、青ざめた顔でうつむいている。

幽霊でも来るような言い方だな。

アンゲルが怪訝な顔でヘイゼルを見ると、ヘイゼルは真面目な顔でカレンダーを睨んでいた。

「まさか、またパーティじゃないだろうな？」

「シグノーのご令嬢がやらないと思うかな？」

「おいおいおい、またプレゼント買えとか言わないよな？」

アンゲルが心配したのは、もちろん、金がないということだ。「ご令嬢がいららないなんて言うと思うかな？」

ヘイゼルがふり返った。表情が全くなかったので、アンゲルはぞつとした。

「俺は行かないぞ。命を狙われてるんだからな！」

アンゲルは実際ウンザリしていた。自分はやっぱりかいな国に狙われ

て、考えなければいけないこともやることもたくさんあるのに、ソレアは追いかけてくるし、目の前のティッシュユファントムは何でもかんでもおもしろがって好き勝手なことばかりしているし、エブニザはあいかわらず病的に暗い。

「どうせまたとんでもないことが起こるに決まってるんですよ……」
エブニザがぼそぼそつぶやいた。「それで、みんなが怒鳴ったり叫んだり、何かが割れたり飛んだりするんです……僕は行きたくない」

「だめだ。引きずってでも連れて行くぞ、二人ともな」

「ヒイツ」

エブニザが、喉の奥からひきつったような声を上げた。

ヘイゼルはカレンダーを見たままだ。

アンゲルは、エブニザの暗い態度より、ヘイゼルの様子が気に入った。

おかしいな、いつもなら、ニヤニヤ笑って何かおもしろそうなことを企んでるはずなんだけど……。

そのころエレノアも、フランシスからパーティの話聞いてウンザリしていた。しかも、当のフランシスが嫌がっているのだ。

「どうせうちの親は来ないわ。代わりにあの白ひげを送りこんでくるのよ！私はやりたくないのよ！」

「じゃあ、やめたら？」エレノアが静かな声で忠告した。「私の時みにカフエで、仲のいい友達だけでやるとか、ここで、クーと私だけでやるとか」

「だめよ」

「どうして？」

「プレゼントがもらえないじゃない！」

エレノアが呆れた顔をしたので、フランシスが詳しい説明を始めた。

「学校の生徒だけじゃないのよ。各界の有名人がたくさん来るの。それぞれ、みんな、プレゼントと、コネを持ってくるわ。有名ブランドはほとんど来るのよ！ねえ、これは仕事なのよ、私の。シグノの人間として、社交の場を提供するの。私の存在を見せ付ける絶好の機会なのよ」

「どうして存在を見せ付ける必要があるのよ？」

「あんただって歌手でしょ？有名にならないと誰も歌なんか聞いてくれないわよ」

「そうだけど……」

何かが違うような気がしたが、エレノアは何と言えればいいかわからなかった。

「どうせ私はシグノの人間よ？黙っててもまわりに勝手に有名にされるのよ。それに、あんたも音楽に関係のある人に会えるわよ」

「別に会いたくないわよ！」

またそれか。

エレノアは目元をひきつらせた。

フランスは前にも、勝手にパーティーへの出席を決め、分野の違うオーディションに勝手に申し込んだりした。そんな勝手さにエレノアはうんざりしていた。もちろん、フランスが自分のためを思っただけのことだ。わかってはいたのだが。

ただでさえ今は『声がおかしい』ということだけでエレノアの頭はいっぱいなのに、こんな話まで聞かされては、とてもパーティーを楽しむ気分にはなれそうになかった。

「そんなこと言わないで」フランスが哀願するような声をだした。「それに、ヘイゼル達も来るのよ。これでパーティーを中止しますなんて言ったら、あのヘイゼルに何を言われるか」

「勝手に言わせておけばいいじゃないの。そうだね。ヘイゼルに頼んで、パーティーを中止してもらえないかしら？」

「えっ？」

「人の邪魔をするのは、得意でしょう？ヘイゼルは」

エレノアが立ちあがって、電話に向かった。

「ちょっと、エレノア、だめよ。何をやる気なの？」

フランスが後ろからエレノアに組みついた。電話の呼び出し音が聞こえる……。

「誰だ？」

不機嫌な声が返ってきた。

「あら、ヘイゼル、ちょうどいいわ」エレノアはわざと気取った声を出した「お願いがあるの」

「何かな？」

「フランスの誕生パーティー、中止にできない？」

「何だって？」

「本人が出たくないって言ってるの」

さすがのヘイゼルも驚いたようだ。

「エレノア、正気かな？」半笑いの引きつった声が返ってきた『そんなことをしたらどうなるかわかっているのかね？各界の著名人が集

まる集会なのだぞ？そこらへんのガキンちよのお誕生パーティーとはわけが違っ」

「あなたらしくない、常識的な発言ね」

エレノアの声は冷ややかで、いつもの、相手に気を使っやわらかさがまるでない。

『何かあったのかな？エレノア。ご令嬢なみに怖い声に聞こえるのだが』

「フランスは怖くないわよ」

『ほほっ』

受話器の向こうから、アンゲルの『代われ！何の話だ！？』という叫び声が聞こえる。

「そうね、アンゲルに代わってくれるかしら？」

ハイゼルが、不満そうな顔で、黙って受話器を差し出したので、アンゲルは、

あれ？変だな？いつもなら絶対渡さないで切るのにと、その行動を不審に思った。

「何の話をしてたの？」

『フランスの誕生パーティを中止にしたいのよ』

「何だつて？」

受話器の向こうから『エレノア、やめなさいよ、もういいわよ』というフランスの声がした。彼女らしくない弱り切った声だ。

『私のパーティの時にも言ってたじゃない、大げさにやる必要なんかないって』

「確かにそうだけど……」

パーティが中止になれば、プレゼントを買わなくて済むしなあ。アンゲルは、頭の中で、浮くであろう金額を数えていた。

1. プレゼントの代金と、ハイゼルが暴れた時の対応にかかる手間（というより、精神的苦痛）

2. ハイゼルが変なことをしたときのための脱走タクシー代（実費）

3. ワインを振り回して服を汚されたときのための買い替え費用（高い服は着て行かないことにしよう……持ってないけどな！）

……などなど。

『面白い話だと思わない？なのに、ハイゼルは珍しくためらってるのよっ』

エレノアの声が妙に攻撃的だ。

なぜこんなにいらいらしているんだろう？

「アンゲルはそれが気になったのだが、理由を聞いてもいいものかどうか判断がつかなかった。」

「そういえば、ヘイゼルの様子が変なんだよ。」

「代わりに別な話題を出した。」

『変?』

「おちやらかさないし、おもしろそうでもないし、なんか、真面目な顔でカレンダーを見つめてるんだ。」

『……ヘイゼルもパーティーが嫌なんじゃない?』

「そうかもね。エブニーザは100%行きたくないっていう顔してるし。」

「受話器を持ったままアンゲルがソファの方を見ると、エブニーザは、暗い顔でぶつぶつと何かをつぶやき続けていた。何かの黒魔術のようだ。」

『ねえ、ヘイゼルを説得してみてよ。どうすればいいか。私はフランスと話すから』

「わかったよ。」

「電話を切った。」

「言つとくが、ご令嬢のパーティーを潰すのは不可能だぞ。」

「ヘイゼルがアンゲルに向かって、先手を打った。」

「何だよ。本人がいやがってるし、またカフェかどっかでやればいいだろ。」

「僕は逃げます。」

「エブニーザ!」

「ヘイゼルが怒鳴った。エブニーザがびくつと全身を震わせた。」

10-5 エレノア フランシス クー パーティ会場

パーティーはやむなく実行された。

エレノアは出たくなかったのだが、フランシスに押し切られて、ついていくことになってしまった。

どうしても強硬に物事を決めるフランシスが、肝心な時に人のいいなりになってしまうのか、エレノアにはどうしても理解できなかった。

人の予定は勝手に決めるくせに……。

不満に思いながら車に乗った。社内ではフランシスも無言で窓の外を見ていた。とても自分の誕生パーティーに行く人間には見えなかった。全く楽しくなさそうだし、かといっていらいらしている様子でもない。

無表情なのだ。

フランシスの無表情は、怖くて冷たい印象を人に与える。

一時間ほどで、首都のホテルにある巨大ホールにたどりついた。大げさなデザインの花飾りやブーケ、ワイン、ごちそう、あらかじめ送られてきたプレゼントの箱が山積みになっているステージ（どの箱にも企業名が大きく入っているから、目的は宣伝なのだろう）までである。

フランシスとエレノアは、会場に着くなり、ステージの前に立つよう、白ひげに言いつけられた。

「ここから動かないで下さいよ」白ひげは気難しいしかめっ面を崩さない。「今日一日くらいは、シグノーの人間としてふさわしい態度でいていただかなくては」

「言われなくてもわかってるわよ」

いつも以上にきつい声でフランシスが答えた。

エレノアはいたたまれない気分でフランシスの隣に立っていた。どうしてこんな楽しくないことをわざわざやるんだろう……？

白ひげとフランススを交互に見ながら、エレノアはそう思っていた。

そのうち、招待客が会場に現れ始めた。ほとんどはイシユハの上流階級の間人で、いかにも『私はセレブ、私こそがセレブ』と全身で訴えているような、自信に満ちた、不自然なほどキラキラした人々だ。

「久しぶりだね、フランスス」

羽振りのよさそうな、太った、にこやかな紳士が近づいてきた。

「元気そうだね」

「おかげさまで元気でありますのことよおほほほほ」

フランスス、顔はにこやかだが言葉がおかしい。無理矢理、自分とはほど遠い『大人しいご令嬢』を装っているせいだろうか。

だからやめればって言ったのに……。

きつと今日帰ってから、また文句を言いまくるだろうなあ……。

エレノアはフランススを横目で見ながらそう考えていた。つまり、今日、エレノアがこの会場で疲れ果てて帰っても、フランススは気が済むままですさまじい愚痴と悪口を言い続けるに違いない。それに付き合わなくては眠れないということだ。

エレノアは憂鬱になってきた。

一通りの来賓が挨拶を終えた……と思ったら、会場の入口あたりからどよめきが起こった。

ノレーシユの姫君、クウエンティーナが、豪華なドレスと、数人のセキュリティガード（全員黒服にサングラス）を連れて入ってきた。

クーは、美しいが動きにくそうな長いドレスのすそをひきずってフランススに近づくと、いかにも来賓らしい社交的笑顔で笑いかけた。

「お誕生日おめでとう、フランスス」

いかにも王族らしいおごそかな、しかしよそよそしい声で言った。フランススは、

「ありがとうございます」
と言ったが、目元が引きつっていたのが隣のエレノアにはわかった。

何だか今日、二人とも変だわ……。
クーは、エレノアが考えていることがわかったのか、去り際にエレノアに近づき、小声で、

「今日のご来賓の役なの。仲良くできなくて残念だわ」とつぶやいた。一瞬だが、寂しそうな顔をして。

そのあと、前のパーティと同じように、フランスの『もとルムメイトたち』がつきつきと現れ、おそらく本心からではないであろう笑顔と甲高い声であたりを取り巻き始めた。

そのうち何人かはエレノアを覚えていて、親しげに声をかけてきたが、エレノアは、まわりに響き始めたきやあきやあ言う声でめまいがし始め、できるだけにこやかにやりすぎしながら、少しずつ人の輪から外れ、飲み物がある場所にふらふらと辿り着いた。

疲れる……。

来るべきじゃなかった。

そもそも、あんなに嫌そうなのに、どうしてパーティなんかするのよ、フランス！

並んだグラスの前でため息をついていると、

「どうかしましたか」

隣に誰かいた。エレノアが横を向くと、上等なスーツを着た、やさしそうな青年が、ワインの入ったグラスを差し出して笑っていた。

「ありがとう。なんでもないの」

グラスを受け取りながら、エレノアも笑った。

「あなたはシグノーの親せきですか？見かけない顔だけど」

「フランスは友達よ。ルームメイトなの」

「それは大変だ」

青年は同情するつもりでそう言ったのだが、エレノアの勘に障ってしまった。

「何が大変なの？」エレノアが冷たい目つきと声で言った。「フランシスの何を御存じなの？」

「いや、あの」青年が慌てた様子でまくしたてた。「よく物を投げたり叫んだりするっていう話を聞いたことがあるし、実際、去年の『セレブリティ』に、ワインボトルを来客に投げつける瞬間を写真に撮られてるんだよ。知らない？」

「それは知らなかったわ」

……フランシスがものを投げる所なら、何度もこの目で見てるけど！？それが何？

エレノアはそう言いたかったのだが、代わりに、

「知り合いを探しに行きますから、失礼するわ」

冷やかな声を残して、その場を立ち去った。

アンゲルか、エブニーザを探そうつと。

エレノアが通路に出ようとした時、会場の隅に、ワイングラスを持ったまま鋭い目でフランシスをにらみつけている『白ひげ』の姿を発見した。

会場を見回す。フランシスの親や親せきらしき人間は見当たらない（エレノアは彼らの顔を知らないから、探しようもないのだが）ほとんどが若々しい、あるいは、中年の、どこかの業界で活躍しているような風貌をしていた。会場の隅に置かれているピアノから、やせぎすのピアニストが奏でる、妙に小難しい曲が聞こえてきた。

パーティーにふさわしい曲じゃないわ。きつと、自分の腕を自慢したいだけなのね。

エレノアはため息をついた。ここは『フランシス・シグノー』の誕生パーティーの会場のはずだ。誕生日は、家族か、エレノアみたいに、親しい友人が集まって祝うべきだ。でも、この会場には、本当にフランシスと親しい人間はいないのではないか？みんな、単なる暇つぶしか、自分のビジネスのためにだけ来ているのではないか？再び会場を見回すと、フランシスのそばに、ヘイゼルが立っているのが見えた。赤い服装が異様に目立つ。なぜいつも赤い服を着て

いるのだろうか？一緒に笑顔で客と話しているが、二人とも、目元と口元が不自然に引きつっているように見えた。

暴れるのも、時間の問題かもしれない……。

エレノアは、何かを視界から振り切るように、勢いよく通路へのドアを開けた。

10 - 6 アンゲル フランシス パーティ会場

今日のあの二人、不気味だな。

遅れて到着したアンゲルは、少し離れた席で、着慣れないスーツのほこりを払いながら（別に汚れてはいないのだが、真新しい服を着ると、アンゲルはどうしてもそういう動作をしてしまう）『本日の主演』フランシスと、その隣でひきつった笑顔を浮かべているヘイゼルを眺めていた。

エブニーザは、到着したとたん、どこかに走って行ってしまった。もしかしたら、そのままアルターまで逃げ帰ったのかもしれないとアンゲルは思った。

ヘイゼルは明らかに楽しくなさそうだ。しかし、ずっとフランシスの隣から離れようとしさない。

一体何を考えているんだろう？

そういえば、この前、キスがどうか言ってたな……やっぱりフランシスを狙ってるよな、そうとしか思えないよな。でも、もっといい女はいくらでもいると思うけどなあ……。

そういえば、エレノアはどこへ行ったんだ？

フランシスの取り巻きの中にもいない……。

アンゲルが、エレノアを探しに行こうかと考え始めたころ、ヘイゼルが『ちよつと失礼』と言って、会場から出て行った。

そしていつまでも戻って来ない。

「フランシス」

アンゲルは、取り巻きをかきわけて、フランシスに近づいた。

「あら、来てたの？」

作り笑いを浮かべていたフランシスが、アンゲルを見たとき真顔（すごく怖い顔）に戻った。

アンゲルは『プレゼントを持ってこなかったのがばれませんように』と心で祈りながら、

「エレノアを探してるんだけど？」

と早口で言った。

「エレノア？」

フランシスがあたりを見回し始めた。どうやら、エレノアがいなくなったことに気づいていなかったらしい。

「どこに行ったのかしら…… あんた、探してきてよ」

横柄な態度でこんなことを言われたので、アンゲルはむっとした。

「言われなくても探すよ。でもここには連れてこないからな！」

「どういう意味よ!？」

「自分の態度に聞け！」

二人とも大声を上げていたので、周りの客が驚いてどよめき始めた。

アンゲルは全員を無視して会場の出口に向かった。

「ついでにヘイゼルも探してよ！」

後ろからフランシスの叫び声があった。

絶対探してやるものか!とアンゲルは息巻いた。

アンゲルが廊下に出ると、建物の従業員らしき紫色の制服を着た集団が、奥の通路にたむろしていた。あるドアの前に集まって、不満げに何かをささやきあっている。

「なんだあれは」

「警備を呼んだ方がいいんじゃないか」

「あれって、シュツティファントだよね？」

通り過ぎようとしたアンゲルが目をむいた。

「あのー」一番おだやかそうな女性の従業員に話しかけてみた「何かあったんですか？」

「休憩室に突然変な人が入ってきて『出て行け！』って怒鳴り始めたの」

「えっ？」

アンゲルがあわてて中を覗くと、見覚えのある赤い人物が椅子にふんぞり返っていた。

「何をしてるんだお前は！？」

アンゲルは甲高い声で叫ぶと、荒々しい足取りで中に入り、ヘイゼルの腕をつかんで引つ張った。

しかし、ヘイゼルは動きたくないらしい。

「いいじゃないか、ここは休むところだろ？」

「従業員が使う部屋なんだよ！お前が入る所じゃないっつもの！」

「エンジェル氏はあいかわらず頭が固いな！」

「お前が非常識なだけだろ！？」

「また常識か。本当にその言葉がお好きだね。お宅の国の教会にも言っただらどうかかな？」

「うるさいな！早く出る！」

従業員が、言い合いをしている二人を、ドアの向こうからそーっと思守っていた。その中に、エレノアがやってきた。

何してるんだろっ、あの二人……。

「何があつたんですか？」

エレノアは、隣で中を覗いているメガネをかけた従業員に尋ねてみた。

「いやあ、休憩中にあの変な赤いスーツの男が入ってきて『出て行け！出て行け！』って騒ぎだしたんだ」

「えっ？」

エレノアの顔が引きつった。

ヘイゼル、とうとう気が狂ったの？

それともとから変だっけ？

エレノアは、今までのヘイゼルの奇行……いや、行動を思い出した。

……ああそうだ、変だったわね！もとから！

エレノアは深いため息をついた。

「怖いからみんなで外に出たんだけど、そこにあの茶色い髪の男が来て」

「ああ、あれは友達なんです。私の」エレノアは弁解のように言った

「あの、赤い人にいつも振り回されて大変なの」

「麻薬でも飲んでるの？」

他の従業員が尋ねた。エレノアはしかめっ面をした。

「飲んでないと思うけど……もともとハイな性格だから」

中では、ヘイゼルがしゃべり続けている。

「ご令嬢はな、自分が優位に立っている間は上機嫌なんだ。そういう風に育ったからな。ところが、ちよつとでも相手の方が優位になると、わけがわからなくなってパニックを起こすんだ」

「……それは、フランスの話じゃなくて、お前の話だろ？」

「いちいち突っ込むんじゃない……まあ、そうだな。今日はご令嬢の誕生日だから、もちろんフランス・シグノー様が圧倒的な優位に立っているわけだ」

「ああ、わかつたぞ」アンゲルがニヤけ笑いを浮かべた「だからお

前、ここんとこずつと機嫌が悪いんだろ？自分よりフランシスの立場が強いから」

「あゝうるさい、エンジェル氏がうるさい」ヘイゼルが、ハエでも追い払うように、手を顔の周りで振った「俺が何を言いたいかというのだな、シグノーの当主の娘として客を接待している間は、客の方が優位なんだよ。お嬢様らしく、大人しく控えめに礼儀正しく……うつつ」

ヘイゼルが、心から嫌そうに顔をしかめて、変なうめき声を上げた。

「こんな気持ち悪い言葉は世の中にないな。しかもあのご令嬢にだぞ？フランシスの本性にそんな性質はかけらもない。断言してもいい。求めるだけ無駄でもんだよ。今はまだ我慢して自分を抑えているがな、そのうちキレて暴れ始めるぞ、間違いなくな。今日遊びに来てるジジイババアどもは、そんなこともわからないのかね。何年無駄に生きてるんだよ？冗談じゃない」

「……お前もちょっとは控えるよ、態度を、ティッシュファントム」「ティッシュファントムじゃない！！シュツティファントだ！！」

ヘイゼルの声があまりにも大きかったので、アンゲルは後ろに軽く飛びのき、外の従業員たちもびくりと身を震わせた。

「どうでもいいから早くここから出る！」

アンゲルが呆れてそう言った時、後ろからコツコツという足音が聞こえた。

「一体何をしてるの？外で困ってる人がたくさんいるんですけど？」そこにいたのはエレノアだが、彼女らしくない、低く、不機嫌そうな声だった。表情も沈んでいて、疲れているように見える。

何かがおかしいと気がついたのか、ヘイゼルがめずらしく文句も何も言わず、黙って廊下に出て行った。外にいた従業員が一斉に身を引いた。

「何かあったの？」アンゲルがエレノアに尋ねた「今日、調子悪そうだね」

「何が？」

エレノアがアンゲルの方を向いたが、表情がうつろだった。

「何でもないよ」

アンゲルはそう言うと、逃げるように廊下に出た。ドアの外の従業員が、迷惑そうな顔でアンゲルを見た。

「すみません、俺もあのティッシュファントムには困ってるんです」
アンゲルが控えめに謝ると、後ろにいた若い従業員が噴き出した。
おそらく、この職場はしばらくの間『赤いティッシュファントム』
の話題で持ちきりになるだろう。

アンゲルが会場に戻ると、エブニーザとシギが、テーブルで何かを熱心に話しているのが見えた。

「ロンハルトからオーケストラが来てるんですよ！」

エブニーザが、近づいてきたアンゲルに気がつくなり、紅潮した顔でそう叫んだ。めずらしく嬉しそうだ。

「パーティの後半で演奏予定なんだが、たぶん実現することはないだろうな」

向かいのシギはあいかわらず平坦な、何の感情もこもらない声を発した。

アンゲルは、一体何を楽しみにシギがこんなところに来ているのか、さっぱり理解できなかった。

「なんで？」

「もうすぐフランススカ、ヘイゼルが暴れるからさ」シギはこう言うと、ワインを一気に飲んで、こう付け加えた「パーティにはつきものだからな、あいつらのケンカは」

「そう？」

アンゲルは横目でちらつとステージの方を見た。フランススカ、年配の、上品そうな身なりの婦人と話しているのが見えた。顔だけ見ると笑っていて楽しそうなのだが。

「だから！ヘイゼルをフランスに近づけちゃだめですよ！」

エブニーザが早口で勢いよくしゃべっている。そんなにオーケストラが楽しみなのだろうか？

「無理だよ。いつのまにか隣に現れるんだ。性格が悪いと超能力が身に着くんだろうな」

シギはどうでもよさそうな口調だ。

「そんな冗談言っていないで方法を考えて下さいよ！」

「ヘイゼルはどこに行った？さつき廊下にいたけど？」

「アンゲルは改めて会場を見回したが、赤いジャケットは見当たらない。」

「見当たらないな」シギが妙な目でアンゲルを見上げた。「エレノアはどこにいる？」

「アンゲルはぎょっとした。」

「何でそこでエレノアが出てくるんだよ！？」

「そんなことよりいい方法を考えて下さいよ！」エブニーザが非難するような口調でシギに向かって叫んだ。「めったに聞けないんですよ！ピアノ協奏曲第13番ですよ！」

「他に12曲もあるかと思うとめまいがするな。あんなつまらない曲が」

「つまらなくないですよ！！」

「とりあえずさあ」アンゲルが二人の間に割って入った。「二人はフランスのまわりにくっついてれば？俺がヘイゼルを探す（と見せかけてエレノアを探す）から」

「アンゲルはそれだけ言うと、二人の席から離れて、会場をうろろる歩き始めた。エレノアを探したのだが、見つからない。」

「まだ会場の外にいるのかな？機嫌悪そうだったしなあ。」

「アンゲルはまた外に出てみることにした。」

「しかし、ドアに手をかけようとした時、」

「ドウロソ人は帰れ！」

「というきつい怒鳴り声と、グラスが割れる音がした。」

「何だ？」

「人だかりができている方向に向かうと、そこには、」

「ふざけんじやないわよこのクソ野郎が！！」

「すさまじい怒りの形相で、客に向かって手当たり次第にグラスやワインボトルを投げつけているフランスの姿があった。」

「そして、床に座り込んでいるエレノアの姿も。」

「エレノア！」

アンゲルがあわててエレノアに駆け寄った。

エレノアは泣いていた。髪と服が濡れていて、アルコールのおいがした。

「何があった？」

「わからないの」エレノアが嗚咽しながら、小声でつぶやいた。「あの男が、私に『ドウロソ人か？』って聞いてきたから、父はドウロソ人だって答えたら、ワインをかけられたわ」

「何だつて？」

「紛争中ですからなあ」

後ろから、弾んだ声が出た。ふり返ると、例の赤い人物が、薄笑いを浮かべながら二人を見おろしていた。

「何がおかしいんだよ！？」

「いやあ、ここは麗しきイシユハですからな。ドウロソって単語を聞いただけでいきり立つ短気な国民が多くてね」

ヘイゼルはそう言うと、走りだした。ものを投げているフランシスに向かって。

「おい！何をやる気だ……」

ヘイゼルはフランシスの前を通り過ぎたかと思うと、暴言を吐いている男に体当たりを食らわせた。

「おい！」

「最悪」

胸元でエレノアがささやく声が出た、アンゲルが顔を覗くと、驚くほど真っ青で、小刻みに震えていた。

「最悪だわ」

「ここを出よう」アンゲルは、エレノアを支えながら一緒に立ち上がった。「こつちにまで物を投げてくるかも」

「なにやってんのよ！邪魔だつつの！！」

フランシスの声と、何かものが破壊される音。

悲鳴を上げて逃げて行く客と、逆に面白がってはやしたてる声。

フランシスとヘイゼル（すっかり元気を取り戻したらしい）そし

て例の男（彼もフランス並みに気が短そうだ！）が物を投げ合い、とつきみあいのケンカを始めてしまい、白ひげが彼らを止めようと怒鳴りながら走りまわっている。客はほとんど逃げて行ったが、中には一緒になって物を投げ始めたり、面白がってその場にとどまり、大声ではやし立てたりするのもいた。

そんな中、いつのまに到着したのか、ピアニストは淡々と、テンポの速いコミカルな曲を、軽快に演奏し続けていた。

入口に、楽器を抱えたスーツ姿の人々がたむろしているのが見える。オーケストラが到着していた。しかし、おそらく全員、何が起きているのか理解できないのだろう、立ちつくしたまま動く様子が見えない。

ああ、オーケストラは無理だ。

でもすごいな、まるで、曲に合わせてみんなが踊っているみたいだ。

エブニーザは、一番すみっこの安全な席で、クーと一緒に大混乱を見つめながら、そう思っていた。流れているのは彼の好きな曲だ。

音楽に乗って人が走り回っているように、彼の眼には見えた。まるでコメディの一場面のような。

「ビデオカメラを持ってくるんだったわね」

クーがニヤニヤと笑いながら、ワインに口をつけはじめた。

「駄目ですよ」

「だって、私がいなくても、ここにはタブロイドの記者が山ほど来ているのよ？きつと来週あたり、雑誌の棚が『イカれたシグノーのご令嬢』の写真であふれるでしょうね」

「『セレブリティ』の記者が来てるからな」

隣の席のシギが、どうでもいいような声で付け足した。

そのころ、会場の外に出たアンゲルとエレノアは、タクシーを探しに外に出ようとしていた。

しかし、タクシーはなかなかつかまらない。

「やっぱりこうなるんだなあ。あとでヘイゼルに交通費を請求してやる！」

「私のせいだわ」

「は？」

エレノアが、真っ青な顔でうつむいていた。

「あれでも、我慢していたのよ、フランシス。今日だけは暴れないで済まそうと思って。でも、私のせいで爆発しちゃったわ……」

消え入りそうな声だった。アンゲルはだんだん心配になってきた。目の前のエレノアが、ひどくショックを受けているように見えたからだ。

「エレノアのせいじゃない」

そう言いながら、アンゲルは通りがかかるタクシーに向かって勢いよく手を振ったのだが、タクシーは無視して通り過ぎてしまった。

「あの変な男のせいだろ？何だよ、いくら紛争中だからってこんなところで」

「私が不注意だったのかも。イシュハでむやみに『父はドウロソ人です』なんて言っちゃいけなかったのよ」

「エレノア、自分を責めるのはやめようよ」

いらいらし始めたアンゲルは、半ばやけくそ気味に、両手をぶんぶん振り回した。

タクシーがようやく止まった。

「アルターまで、いくらかかります？」

「アルター！？」「運転手が嫌そうな声を上げた「こっからじゃ、渋滞がなくても200クレリンはかかるよ」

「200って……」

「私。持つてるわ。300までなら大丈夫」

エレノアが低い声でつぶやきながら、タクシーのドアを開けた。アンゲルもあわてて後に続いた。

あの『恐怖のお誕生パーティ』から数日経った。

しかし、エレノアはずっと落ち込んだままだった。

ただでさえ朝に弱いのに、レッスンがある日にも、昼まで起き上がることができず、午後もぼんやりした顔をしていた。

「ダメ！駄目よ！どうしたのよエレノアちゃん！？」

ケツチャノツポの叫び声とする。

エレノアの耳には、目の前の先生の声すら、かなり遠くに聞こえていた。

……帰りたい。

「エレノアちゃん！！」

ひととき大きく鋭い声でしたので、エレノアはようやく我に返った。

「しばらく、レッスンは休みなさい！！」

「えっ？」

「そんな気の抜けた様子じゃ、何を教えても見に入らないでしょ？しばらくニッコリ先生の授業にでも出てなさい。こっちは来なくていいから！！」

エレノアの顔が引きつった。

もうレッスンが受けられない？

「でも、コンサートも近いのに……」

「そんな状態でコンサートなんて無理よ！！」

ケツチャノツポはそう叫ぶと、部屋から出て行ってしまった。

一人残されたエレノアは、しばらく動くことができず、その場に立ち尽くしていた。

私、そんなにひどいの？

コンサートなんて無理なの？

同じころ。カフェ。

アンゲルは『セレブリティ』をめくりながら、顔をしかめていた。

『シグノーのご令嬢がまた乱闘』

『ヒステリーに振り回される人々』

『同室のドウロソ人女性が襲われる』

『薬物使用の噂も』

こんなタイトルが並んでいて、悪魔の形相をしたフランシス（いつどこで見ても怖い！）の写真が大きく載っていた。

フランシス……やっぱり躁うつ病なのか？未だに薬飲んでないのか？

アンゲルは、いつか、ヘイゼルの別荘で見た大量の薬を思い出していた。

でも変だな、ヘイゼルもかなり暴れてたのに、写真に撮られてないし、文章にも一言も『シュツティファント』が出てこないな？なぜだ？

それに、フランシスが暴れたのは事実だとしても、きつかけは、あの男がエレノアに怒鳴りつけてワインをかけたからなんだよな……それが何も書いてないな。

肝心のあの、エレノアに怒鳴りつけた男のことは、記事はおるか、写真すら出ていなかった。

そして、エレノアのことが『シグノー』を利用しようとしている無名歌手』と書かれていることにも腹が立った。

エレノアがそんな理由でフランシスとつきあうわけがない！

エレノアと自分の姿も写真に撮られていて、記事の隅っこに乗せられていたが、アンゲルにはこの『写真の二人』がすごく不釣り合いに見えた。

泣いててもきれいなんだよなあ。

隣の俺は……やっぱカエルだなあ。

アンゲルは雑誌を閉じてため息をついた。
やっぱり俺とエレノアは釣り合わない……いや、そんなことを考
えている場合じゃない。

勉強しようと、アンゲルが教科書を開いた時、エレノアが歩いて
来るのが見えた。

「エレノア！」

呼びかけて見たが、エレノアは、ちらっとアンゲルに視線を流し
ただけで、立ち止まらずに、そのまま 図書館の方向に消えてしま
った。蒼白な顔で。

あれ？変だな？

しかも何だろう、あの深刻な顔は？やっぱりあのパーティの事が
ショックだったのか？

図書館内にはエブニーザがいて、黒魔術の本を熱心にめくってい
た。

遠くにいる人を見つけ出す方法が書いてあればいいんだけど……
そういうのはないみたいだな。

彼女はいつたい、どうしてしまったんだろう？

どうして見えなくなっただけ？

まさかもう生きていないんじゃない？

「エブニーザ」

早く見つけ出さないと……。

「ねえ！」

いつのまに来たのか、エレノアが目の前に立っていた。顔が真っ
青で、全く感情が見えない表情をしていた。

「どうしたんですか？顔色が悪いですよ」

「なんでもないわ」

エレノアが向かいの席に座った。しかし、エブニーザの視線を避
けるように、下を向いたり、窓の外を見たり、落ち着かない様子だ。

「エレノア？」

明らかに、泣きそうになるのをこらえているようだった。目元に涙が浮かんでいて、口元はきつく結ばれて、震えていた。一体これから何が起るのか、エブニーザはだんだん怖くなってきた。

「なんでも……ないの」「エレノアは立ちあがった。涙が頬を伝った」「ごめんなさい」

それだけ言うと、エレノアは逃げるように資料室を飛びだし、走り去ってしまった。

カフェで、アンゲルが本を眺めながらうとうとしていると、珍しくエブニーザがやってきた。

「眠いなら、部屋に帰った方がいいんじゃないですか？」

「いや、もうちょっとこれを読んでからにするよ」「アンゲルが手元の本を振った「それよりお前何してんの？人に慣れに来たのか？」

「エレノアが変なんですよ」

「エレノア？」

「さっき資料室に来たんですが、顔が真っ青で、泣きながらどこかに走って行きました」

「ほんと？」「アンゲルは顔をしかめた「そういえば、さっきここを通ったんだけど、無視されたんだよね……やっぱりパーティのあれがシヨックだったんじゃないか？」

「それだけだといいんですけど……」

「どういう意味？」

「何でもありません」

エブニーザはカフェから出て行った。

……わざわざ俺にエレノアの事を知らせに来たのか？

何を考えてるんだ？

アンゲルも立ちあがった。部屋に戻ることにした。眠いからではなく、エレノアの部屋に電話をかけるためだ。

「帰ってくるなり部屋にこもって、出てこないのよ」

電話に出たのはフランススだった。めずらしく気弱そうな、怯えた声だった。

「パーティからずっとそうなの。やっぱり私のせいだと思う？あんたもそう思ってるんでしょう？だからわざわざ電話したってわけね？」

「思っていないよ」アンゲルはうんざりした声で言った「パーティの帰りに、エレノアが、お前が暴れたのは自分のせいじゃないかって言ってたんだよ」

「何ですって？」いつもの勘に障る声に戻って来た「そんなわけないじゃないの。あのバカ男が悪いのよ！確かにイシユハとドウロソは紛争中で、どっかの道端では抗議行動とかしてるんでしょうけど、私のパーティでそんなことする資格は誰にもないんですからね！だいいちヘイゼルが余計な事をするからあんな大騒ぎになって……」

「わかった、わかったよ」話が長くなりそうなので、アンゲルはあわてて遮った「とにかくさ、しばらくほっといてあげなよ。きつとまだショックが抜けないんだ。面と向かって否定的なことを言われたんだから」

「あんたに言われなかったって、わかってるわよ、そんなこと」

電話するんじゃないかって、と思いながら、アンゲルは受話器を切った。

落ち込んでるんだなあ。

でも、あと2、3日すれば、きっと元に戻るだろうな。

アンゲルはそう思っていたのだが、甘かった。

一週間経っても、エレノアは元に戻らなかった。

昼頃まで、たくさん目ざましが鳴っても、フランシスがわめきちらしても起きようとせず、午後には一応学校に行くのだが、夕方には帰ってきてまた寝てしまう。

カフェの前を通っても、アンゲルには目もくれず、素通りしてしまふ。

ブースにも練習に行っていないのか、受付から『最近見かけないけど生きてるの?』という電話がかかってきた。

フランシスはそれを聞いて、事の重大さによろやく気がついた。

エレノアが、

あのエレノアが、歌の練習に行っていない?

まさか、音楽科のバカ共にまたいじめられたとか?

フランシスはそのまま、勢いに任せて部屋を飛び出し、音楽科まで行って、校舎から出てきたケンタを見るなり、つかみかかるようにして『何があつたのよ!』と問い詰めた。

「知らねえよ! そういえば最近見かけねえ……」ケンタがあたりを見回した「ケツチャノツポに聞いたほうがいいんじゃない? あれ? おい! マジで行くのかよ!」

叫ぶケンタには構わず、フランシスは音楽科の校舎の中に消えて行った。

10 - 11 アンゲル フランシス 夜中の電話

『歌のレッスンを断られたらしいのよ』

夜中の1時。

突然鳴った電話に起こされ、ぼうつとした頭で受話器を取ったア
ンゲルの耳に、いきなりこんな言葉が聞こえてきた。

『誰?』

『ケツチャノツポが、エレノアに、レッスンしたくないって言った
のよ!』

フランシスの声だ。いつもに増して甲高い、夜中には絶対聞きたく
ない声だ。相手の都合はどうでもいいらしい。

『……だから?』

『だからじゃないでしょ!それで落ち込んじゃって、一日中寝込ん
で一言もしゃべらないのよ!来月、大事なコンサートがあるのに』

『そう』

アンゲルはぼんやりと、昼間の、真っ青な顔のエレノアを思い出
した。

『エレノアの人生がかかっているのに。このままじゃ参加できないわ
……』

いつものまに起きたのか、ヘイゼルがアンゲルから受話器を奪った。
『こんな時間に電話とは、ご令嬢も欲求不満かな?……相変わらず

乱暴な受話器の置き方だな』

電話は切られたらしい。

『何の話をしていたのかな?』

『エレノアだよ。レッスンを受けられなくなって落ち込んでるとか
何とか』

『そういえば最近見かけないな』

ヘイゼルはそう言いながら部屋に戻った。アンゲルもソファーに
横になって寝ようとしたが、一度目が覚めてしまつとなかなか寝付

けない。

パーティの事で落ち込んでいるのかと思ったたら、違つんだな。それにしても、昼まで起きないって……同じような話をどこかで聞いたことがあるな、どこだったか……。

考えているうちにまた眠くなってきたが、突然あることを思い出し、跳ね起きた。

……うつ病だ！

うつ病の患者の話を読んでいた時に出てきたんだ。昼間起きられずに、ずっと眠っているって。何かに失敗した後に……何だったかな？

いや、でも、エレノアは違つよな？

一時的に落ち込んでいるだけだよな？

そうに決まつてる。レッスンを受けられなくなつたって、エレノアには才能があるじゃないか。

アンゲルはまた眠ろうとしたが、考えれば考えるほど、不吉な予感が胸をよぎり、なかなか寝付くことができなかつた。

午後三時。

エレノアはカフェにいた。頭がぼんやりしている。

すっかりしなきゃ、と自分に言い聞かせているが、すぐに、もうだめだ、という気がして気分が沈んでいき、目からは涙がとめどなく出てきて、なかなか止まらない。

「エレノア？」

声が聞こえる。

でも反応できない。涙を抑えるのに必死で、誰かの顔を見たら我慢できなくなりそうだ……。

「エレノア？ねえ？どうしたの？聞こえてる？」

エレノアは何も答えずに立ちあがり、出て行こうとした。

アンゲルはあわててあとを追って、女子寮まで一緒に歩いて行ったが、その間、エレノアはずっと泣きじゃくっていて、一言もまともには話せないようだった。

やっぱり、うつ病かもしれないぞ……。

アンゲルは寮に戻り、『患者への対処の仕方』という本を手にとって、どうしようか考えていた。

そこにヘイゼルが帰ってきた。

「サツカーの試合があるのだが」

「悪いけどそれどころじゃないんだ」

アンゲルは本から顔を上げずに言った。

「エレノアか？」ヘイゼルがアンゲルの本を取り上げた。「何をそんなにいつまでも落ち込んでるんだ？おかげでシグノーのご令嬢の機嫌も悪くてね」

「フランシスが不機嫌なのはいつものことじゃないのか？」

「今回は特別におかしくてね。どうも、エレノアのことを聞きに、」

音楽科に怒鳴りこんだらしい」

「ハア？」

「それが、あの夜中の電話の原因さ」

「音楽科まで行ったのか」アンゲルはヘイゼルから本を取り返した

「すごいな。そこまでエレノアが心配なんだな」

「まさか」

ヘイゼルが、胡散臭そうな顔で目元をしかめて、手をぶらぶらと振った。

「そうじゃないさ。あのご令嬢は、一度気に入ったものに異常に執着するんだ。それだけさ。他人の心配なんてしない。自分が何かを失うのが心配なだけだね。断言してもいい。友達なんてエレノア以外誰もいないからな、執着もするさ」

「お前は友達じゃないのか？」

「お友達なんて冗談じゃないね」

「じゃあ何なんだよ」

「何だっついていいさ」ヘイゼルがドアに向かった。「サッカーに行くよ。つたく、どいつもこいつも辛気臭くて嫌だね」

ドアは乱暴に閉じられた。

夕方。

エレノアは部屋にこもって、ぼんやりと窓辺を見つめていた。外は晴れていて、空はすがすがしく、窓からの光も明るい。

影の中にたたずんでいる自分とは、世界はあまりにも対照的だ。エレノアが、いつも以上に人目を避けて部屋に閉じこもってしまったので、フランシスはひたすら困っていた。どうしていいかわからないからだ。

「ねえ、食事しに行かない？あんだ昼も食べてないでしょ！？」

ドアの前で叫んでみるのだが、返事はここ数日、いつも『いらない』だ。

「ちよつと！いいかげんにしなさいよ！」フランシスがキンキン声で怒鳴り始めた。「あんだ声楽やってるんでしょ！？飢えたら声なんか出ないじゃないのよ！とっとと出てこいっつもの！！」

「……もう歌はだめかも」

消え入るような声の中から聞こえてくる。

「は？」

「もう歌わないかも」

エレノアの言葉に、フランシスは心底ぞつとした。

飛びあがるように電話のところまで走って行き、

「クー！今すぐ来てちょうだい！エレノアが変なのよ！変過ぎるの！」

凄まじい声で受話器に向かって叫んだ。

姫君クーは、ものの15分で女子寮に現れた。しかし、

「エレノア！エレノア！出てらっしゃいよ！ドアを開けてよ！」

姫君でさえ、エレノアの部屋のドアを開けることはできなかった。

「まさか中で死んでるんじゃない……」

フランシスがつばやいた。クーは飛びあがって、

「やめてよ……！」

と、彼女らしくない甲高い声で叫んだ。

次の日。

バイトの帰りに駅前を歩いていたアンゲルは、エレノアが向こうから歩いて来るのを見つけた。

「エレノア〜！」

呼びかけて手を振ると、エレノアがアンゲルの方を向いた。しかし、やはり表情がない。

「どうしたの、元気ないね」

「なんでもないわ」

「そう？パーティの前からちょっと変じゃなかった？何かあったら相談してよ、これでも一応心理学の学生なんだから……」

「これは私の問題なの！」

アンゲルの言葉を遮るように、エレノアは突き放すようなきつい声を発して、走り去ってしまった。

おい、今の本当にエレノアか？

フランシスが乗り移ったのか？

やっぱり病気か？

アンゲルはそう思いながら帰り道を歩いていたが、そのうち『単に自分が嫌われているだけなのではないか』という後ろ向きな考えが浮かんで頭から消えなくなり、気分がどんどん沈んでいった。

いや、俺は関係ない。レッスンが受けられないから落ち込んでるだけだ。

アンゲルは、自分に一体何ができるのかと考えたが、どうしていいかさっぱりわからず、寮にたどり着いたころには無力感に襲われていた。

一体、何のために俺はここにいるんだ？

とりあえず毎日、カフェの同じ場所にいる（つまりいつも通りにふるまう）ことにしたが、エレノアはアンゲルを見つけても、無視

して通り過ぎて行ってしまっ……そんな日が何日も続いた

落胆しながら寮に戻ると、ヘイゼルがソファアの上で新聞を広げながらふんぞり返っていた。

「ここは俺の部屋だろ？」

「まだそんなこと言ってるのか？」

ヘイゼルは人をなめた目つきでアンゲルを見て、楽しそうにニヤけた。

「エレノアはどうしたんだ？ご令嬢の機嫌が悪くて俺まで迷惑しているのだが」

「お前の迷惑なんかどうでもいい」

アンゲルは、向かいのソファアに座って、本を手に取った。

「たぶん、レッスンを受けられないのがショックだったんだよ。パティのこともまだ抜けきらないんだろっし……あまり人と話したくないみたいだ」

「それくらいでショックを受けて、プロとしてやっていけるのかな？」

「四六時中怒鳴り合って平然としてるお前らとは違うんだよ」

「機嫌が悪いですな、エンジェル氏」

ヘイゼルが向かいのソファアに座って、アンゲルの顔を覗きこんだ。

かなりうっとおしい。

「俺も困ってるんだからほっといてくれよ。どうすればいいか考えてるんだ」

「どうやって考えるのかな？」

からかわれているのかと思って、アンゲルは半ば睨むような目でヘイゼルを見たのだが、相手はいつものからかうような顔ではなかった。

「それ、真面目な質問か？」

「大いに真面目だね」ヘイゼルがソファアにもたれて偉そうにふんぞり返った。「女なんてただでさえ不可解なのに、そこにあの魂の抜

けたような状態だ。ご一緒の令嬢も今までになくうるたえておいで
でね。どうしようもない」

「どうしようもないじゃなくて、そこでどうするか考えろよ」

「だからどうやって考えるのかな？」

「どうやって……」

アンゲルも言葉に詰まった。今のエレノアをどうすればいいのか
？アンゲル自身何もわからない。

「エブニーザの言うとおり『ほっておく』しかないんじゃないのか
な？」

「あいつは何だっけほっとくだろ……何でも予言通りになるとしか
思っていないだから。とにかく、相手のために自分ができることが
何か、思いつくだけやってみるしかないだろ」

アンゲルはふたたび本に向き直り、ヘイゼルもそれ以上何も云わ
ず、部屋に戻って行った。『ショック状態の患者のケア』という文
章があったので一気に読んだが、今のところは、やはり、時間が立
つのを待つしかないようだ。

どうしたらいいんだろう？

そもそも、俺がこんなことを考えてること自体、無駄なのか？おせ
っかいなのか？

今エレノアは何を考えているんだろう？

「俺さ、最初のライブでぼろくそにけなされて、ムカついてギターをたたき壊したぜ」

こんな話をしているのは、ケンタ・タナカだ。

音楽科の裏の芝生で、チューナーをいじくっているところに、暗い顔のエレノアが近づいてきて、

「レツスを断られたの」

と言いだしたので、なぐさめようと思って話し始めたのである。

「おかげで、バイト代をはたいて買ったギターが丸つぶれでさ、次に買い直すまで近所の兄ちゃんに借りる羽目になった、しかも使用料取られたんだぜ?……まあ、だれでも乗り越えないといけないところじゃね?しばらく悩んでればそのうち気分も収まっから」

ケンタはそう言っただけだったが、今のエレノアには、この沈んだ状態から浮き上がれる日が来るとは、どうしても思えなかった。

帰りにカフェの前を通り、天使の姿を見かけた。やはり本を呼んでいる。

何のためにあんなに熱心に勉強しているんだろう?

『エレノアの歌と同じで必要だからやっている』

と、前に言われたことを思い出した。

今の自分に、歌は必要だろうか?

そもそも、歌以外にできることなんてないのに、どうしたらいいのだろうか?

この日も、エレノアは、天使を無視して、カフェの前を通りすぎた。

首都の病院。

アンゲルがタフサに、エレノアの事を話した、すると。

「学校で習ったことやカウンセリング事例は全て忘れて、友達として接するんだね」

タフサは、いつも通り深みのある声でそう言った。

「どうのことですか？」

「対等に、友人として、ということさ」タフサが独特の柔らかい笑みを浮かべた「言葉で言うのは簡単だけど、これは最も難しい態度なんだよ。高みから見おろすのも、下からへりくだるのも簡単だ。残念ながら、現代人の生活はたいていこの二つの態度から成り立っている。君の周りにもいるだろう、常に他人を高みから見おろして人を不快にさせて、それでいて本人はいいことをした、あるいは友人だという顔をしている人が」

アンゲルの頭に、即座に、ある赤い人物の顔が浮かんだ。

「要するに、カウンセリングをしてやろうなんて思わないで、普通に友達として話を聞いてあげることだね」

それじゃあ、今まで勉強したことは何だったんだとアンゲルは思うが、タフサはアンゲルの不満を見抜いたのか、こんなことを言った。

「カウンセラーは本人の問題を解決できない。それができるのは本人と、実際に本人に関わっているまわりの人間なんだ。僕らができるのは、まず話を聞くこと、引き出すこと。そして、混乱したり怒ったりしているクライアントを落ちつかせて、考える余裕を与えることくらいだ。カウンセリングに救済を期待するのは間違っているし、カウンセラーが『お前の問題を解決してやろう』『救済してやろう』なんていうのはそもそも不可能なんだよ」

「そうですね……その通りです」アンゲルが今まで感じていた違和

感と、その返答は一致していた「でも、エレノアがこんなことで悩むとは思ってなかったな」

「どうして？」

「どうしてって……美人で才能もあって、性格も穏やかで、管轄区の人間みたいに誰かに監視されているわけでも、狙われているわけでもないし」

「まあ、狙われてないのはいいことだけどね」タフサが苦笑いした。自分も追われた経験があるからだろう「ほとんどのクライアントは自分が人より恵まれているとわかっているんだ。食うに困らない金があり、家があり、妻や夫、子供、孫がいる人もいる。人がうらやむような仕事や地位を持っている……それでも、悩むんだ。そして自分の悩みや不安をどう扱っていいのか、わからないんだよ。それで、精神科医だのカウンセラーだの、占い師だの、なにかにすがろうとする。でもね」

タフサが真面目な、それでいた半ば白けた顔でこう言った。

「結局、自分の不安に対応できるのは、自分自身でしかないんだ」

図書館の資料室。

エブニーザとクーが話をしている。

クーはエレノアが心配でたまらないが、全く会ってもらえず、寂しいらしい。

「あなたも本当は気になっていないのでは？」

「そうですね……」エブニーザが視線を上に向けた。「エレノアは、だれにとっても特別ですから」

「あなたにとっても？」

クーがエブニーザの顔をじっと見つめた。エブニーザは少しだけ顔を赤らめた。

「そう……ですね、でも、変な意味じゃないですよ」

「わかってるわ」クーが窓のほうを向いた。「例の女の子は」

「最近見えないんです……」エブニーザはうつむいた。「生きているのかも、わからない」

「大丈夫よ」

窓辺に視線を向けたまま、クーがつぶやいた。

何が大丈夫なのかは彼女にもわからなかった。他に言いようがなかったのだ。

10 - 18 アンゲル 狂人たち そしてロハン

アンゲルはまた作業所の『見張り』のバイトをすることになったが、以前と違い、脱走する患者が続出した。

「どつちに行つた？」

一緒に監視していた学生も走つて来た。

「たぶん裏口の方だと思います！」

アンゲルはそう言いながら、裏口に向かって走って行く。外に出ると、はるか向こうに白衣を着た後ろ姿が見えた。あわてて追いかける。

「待って！」

「お前もやつらの手下だな!？」

追いつかれた患者が、いきなりアンゲルのむなぐらをつかんだ。目が血走っている。

「奴らつて何ですか!？」

「お前宇宙人だろ!いかにそんな顔だ!」

「何い!？」

アンゲルも逆上して相手につかみかかり、そのまま二人で地面に倒れた。

「おい!何をしてるんだ!」

あとから来た監視員に引き離された。患者は両脇を押さえられながらも、わけのわからないことをすさまじい声で叫び続けていた。

「患者とケンカしちや駄目だろう?」

「すみません」

作業所に戻ると、他の患者は、何も見ていなかったかのように、黙々と自分の作業を続けていた。もしかしたら、自分以外の人間の存在を認識できない人たちなのかもしれない。

「おお、また来たか」

例の『王様』がアンゲルを見つけて近づいてきた。狂人だが、少

なくとも他人は認識できるようだ。

「お元気でしたか」

「わしは待遇がいいからな」声は大きく偉そうだったが、顔にはあまり表情がなかった。「脱走者を追いかけるのは大変そうだな」

「ええ、まあ」

アンゲルは一つ不思議に思ったので、聞いてみた。

「王様は逃げないんですか？自分の国に帰りたくないんですか？」

「わしは人質のようなものだ」

『王様』が遠い目で、アンゲルの後方のさらに遠くを見るような顔つきでつぶやいた。

「人質ですか？」

「わしがここで妙な動きをしたら、わが国民にも類が及ぶではないか」

「……そうですか？」

「さよう」

『王様』が少しさびしげに目を伏せた。

「まあ、イシユハとて、よその国王をぞんざいに扱ったとなれば、国益を損ねるからな。人質としてはよい待遇だ。飯は3度出る。趣味も出来る……それに、反体制派から身を守るには、ここに隠れているのが一番なのだ」

「はあ」

「こんどは反体制派か……」。

『王様』がまた彫刻に熱中し始めたので、話はこれで終わったが、アンゲルは言い知れぬ暗い疲れを感じていた。

しかも、この日のアンゲルの苦労はこれだけではなかった。

首都から帰る途中で、突然誰かに肩をつかまれた。

ふり返ると、そこには『黒服のファナティ教の集団』がいた。5

6人、葬式のような真っ黒な衣装に身を包み、手にはあの『聖書』をお持ちだ。

「お前、管轄区人だな？」

一番背の高い男がそう尋ねてきた。

「違います」

アンゲルはとっさにそう答えてしまった。

「違う?」

「イシユ八人です、急いでるんです!」

そう言いながら、アンゲルは全力で駆けだした。

「おい!待て!」

……誰が待つか!!

駅まで全力疾走し、出発寸前だったアルター行き列車に飛び込んだ。

荒い息をしながら、周りをうかがってみたが、黒服の人間はいないようだった。

……あいつらのことをすっかり忘れてたな!

息を切らし、ドアにもたれながら、アンゲルは、自分の立場を思い出して暗い気分になっていた。

あいつらあそこで一体何をしてたんだ?俺に何をやる気だったんだ?

お説教か?それともまた暴行する気だったのか?

考えているうちにアルターにたどり着いた。

悪いことは重なるものだ。

駅前を歩いていると、突然、誰かがアンゲルの目の前に飛びだしてきた。足取りがふらふらしていて、酒に酔っているようだ。

「お?」

男がアンゲルの顔をうつろな目で見るなり、動きを止めた。

「久しぶりだなあ」

それは、ロハンだった。

「久しぶりだなあ〜じゃないだろ!」アンゲルは自分でも驚くような大声で叫んでいた「何やってんだよ!?!」

「話せば長くなるんだあ」

ロハンがふらふらと近寄って来たかと思うと、アンゲルに組みつ

いてきた。酒の匂いがぶんぶんする。

「おい！」

店の方から声がした。振り向くと、エプロンをした太った男が立っていた。

「あんた、そいつの友達か？」

「は？え、ええ、まあ」

「40クレリン払ってくれ」

「ハア？」

「あいにく財布をわすれてさあ」

酒臭い男は、そうつぶやくなり、脱力して地面に落ちた。

「おい！ロハン！起きろよ！」

「ったく」エプロン男がしゃがんで、ロハンの顔を覗きこんだ「こいつ、毎日のように来ては、ツケにして帰るんだよ」

アンゲルがぎょっとして店主の顔を見ると、怒ってはいないようだった。ただ、心の底から呆れているようだ。

「本当ですか？」

「本当さ」エプロン男がアンゲルの目をまっすぐ見た「40クレリン払ってくれよ」

「なんで俺が！？」

「本当は2400クレリンつけがたまってるんだが、とりあえず今日の分でいいさ」

「2400!？」

アンゲルが変な声で叫んだ。寮費が何ヶ月分も飛んでいく金額だ。エプロン男はかまわずに手を差し出し、

「40」

と、有無を言わさない目つきでアンゲルを睨んだ。

「そんなに持ってないよ」

「じゃあ、あるだけよこしてくれよ。このままじゃ仕入れもできやしねえ」

アンゲルは顔をしかめながら財布の中を探り、18クレリンを渡

した。

エプロン男は不満げな顔をしたが、黙って金を受け取って立ち上がり、店の中に戻って行った。

……今月は本が買えないな……。

アンゲルはそう思いながら、目の前で気を失っているロハンをゆすぶった。

「おい！起きろって！未成年が酒飲むんじゃねえよ！こら！」

しかし、ロハンは起きる気配がない。

アンゲルは、以前ロハンの部屋に行った時に見た、大量の酒瓶を思い出した。

やっぱりアルコール中毒だな！

しかも2400クレリンだって！？どれだけ飲んだらそんな金額になるんだよ！？

結局、アンゲルはロハンをひきずって『安い寮』まで行く羽目になった。ロハンのルームメイトの、褐色の肌のノレーシユ人が、嫌そうな顔で入口まで出迎えに来た。

「放置して死なせてやった方が幸せだろうに」

ノレーシユ人がそんなことを無表情でつぶやいたので、アンゲルはぎよっとした。

「なんてこと言うんだよ！？……ロハンって、やっぱりアルコール中毒？」

「誰が見ても明らかなる中毒者だ」全く同情も心配もしていない声が返ってきた「知り合いか？」

「バイト先でね」

そういえば、バイトに最近来てなかったな。寮費はどうやって払ってるんだ？

バイト代も出ないうえに酒飲んで2400クレリンも……。

「アル中の母親が、先月亡くなったんだ」

ノレーシユ人がつぶやいた。アンゲルははっとして、ベッドに横たわっているロハンを見た。顔が異常に赤いが、それ以外は、普通

に眠っているように見える。

「母親の死因もアルコール？」

「他に何かある？」

……いちいち冷たい返答しかできないのかなあ、ノレーシユ人つて。

アンゲルは、暗い気分で『安い寮』を出て、帰り道を歩いた。

何だっってみんなおかしくなってるんだ？ロハンに、エレノアに……いや、理由はあるんだよな。母親がなくなれば落ち込むだろうし、エレノアにとって歌は女神みたいなもんだし……そうだ、『何を信じているんだ』って聞いたなら『歌』って答えていたっけ……。

でも、信じるって何だよ？

俺だっつて、狂信的な女神の信徒に追っかけられて大変だっつてのに……。

女神なんて信じてないのに……。

アンゲルは立ち止まった。

急に、自分が、エレノアやロハンと同じところにいるような気がしてきたからだ。

いや、違う。

ロハンもエレノアもおかしくなってるが、俺はおかしくなってるわけじゃない！

おかしいのは管轄区だ！

そう思い直してふたたび歩き出したが、一度湧きあがった疑問はなかなか消えてくれなかった。

俺はおかしいのか？

いつも周りに気を使って優しいエレノアが、最近は自分と歌の事しか考えられずに落ち込んでいます。

音楽科のニッコリ先生のところには通っている様子だが、帰ってきてても、フランシスには話しかけず、まっすぐ部屋に直行し、そのまま出てこない。

「やっぱり重い精神病なんだわ。エレノアがこのままだったらどうしたらいいの？」

怯えたフランシスが電話をしている相手は、シグノーの医者だ。

『予約なしに電話しないで下さいって言いませんでしたっけ!?!』

医者もうんざりしていた。フランシスが毎日のように電話をかけてくるからだ。

「何よ！あんたシグノーの医者でしょ！患者である私の話を聞く義務があるのよ！」

『お友達は私の患者じゃない』

「いちいちうるさいわね！……それよりどうしたらいいのよ？呼びかけても反応しないし……コンサートが近いのよ？このままじゃ大きなチャンス逃してしまうわ」

『たぶん一時的にシヨックを受けているだけでしょう』

あなたと同じ部屋に住んでちゃ、ストレスも大きそうですからね！と医者は言いたかったのだが、もちろん口には出さない。

「あんたは毎日『一時的』っておっしゃるけどね、もう何週間経ったと思ってるのよ！ちよっと！聞いているの！まあ！勝手に切りやがったわ！あんな医者クビにしてやる！」

フランシスが受話器に悪態をついている頃、エレノアは音楽科にいた。

ニッコリ先生の、南国の打楽器を使った音楽療法の授業に出ているのだ。

精神病の患者もいっしょにいて、にっこり先生の合図に合わせて、マリンバやティンパニ、ドラムを叩く。

……とうとう自分も病気だと思われるようになったのか。

エレノアは暗い気分で木琴を叩いていた。気が乗らないので、どうしてもリズムが合わない。

そこでリハビリしているおばあさんに、アンゲルらしき実習生の話を聞く。脱走した患者を追いかけて回しているが、暴れられて大変そうだと。

「管轄区から来た学生らしいのよ。大丈夫なのかしらね」

「何がですか？」

「管轄区は、医学と心理学は禁止でしょう？捕まらないのかしら？前にも、イシユハで医学を専攻した生徒が殺されたことがあるのよ」「そうなんですか？」

知らないふりをしたが、エレノアもそのニュースは旅先で聞いたことがあった。

ニッコリ先生がまたリズムの合図を始めたので、婦人もエレノアも話すのはやめて楽器を叩き始めた。

アンゲル……なぜ、そんなに危険なのに、心理学を専攻したんだらう？

目の前にはニッコリ先生がいる。

音楽療法って、どうなんだろう？

歌ができなくてもそれならできないかしら？

そんなことを思いついたエレノアが、帰りに、ニッコリ先生にそのことを尋ねると、

「まず自分が元気にならないといけないし、あなたは華やかだからスターの方が向いてるわ」

と、あいかわらずの笑顔で言われた。

エレノアはそれを聞いて、

ああ、私には無理なんだ。

と、相変わらず暗い方向に思考を向けていた。

10 - 20 アンゲル 首都のバイト先

首都。

バイト先のレストランに、ソレアの代わりに年配のおばちゃんが入って来た。

「ソレアは？」

「やめたよ」店主が不満げな顔をしていた「学校もやめたらしいな、故郷に帰ったそうだ」

「えっ？」

まさか、俺が原因じゃないだろうな……？

新しく来たおばちゃんも、管轄区の人だそうだ。

「もう帰るつもりはないよ」手際よく皿を拭きながら笑った「こっちのほうが豊かだからねえ。驚くよ」

「でも、あの、いいんですか？」アンゲルは気になることを控えめに聞いてみた「こちらのイシユ八人はみんな無宗教ですよ？あの、女神も信じてませんよ？」

「そんなの今時誰が信じるよ？」

当たり前のようにきっぱり言われて、アンゲルはぎょつとした。

おい、そんなこと言つと襲われるぞ！？

「あの、こっちでそういうことは言わないほうが」

「あんた若いのにずいぶん保守的なんだねえ？」おばちゃんが呆れた顔で近づいてきて、アンゲルの顔を覗きこんだ「どこの人？ちっちゃい町？」

「クレハータウンの近くですが」

「ああだからだろ？首都や都会の人間はだれも信じてないんだよ……何だつて？」

アンゲルの動きが止まったのを見て、おばちゃんはおかしそうに笑いだした。

「アッハッハ！確かにあの教会はうるさいけどね。でも、大きな町

にはもう、イシュ八人もノレーシユ人もたくさん移り住んで商売してるからね。大事なのは金を稼いで暮らすことだけなんだよ！女神なんて建前だよ。まあ、祈るのも教会に行くのもただの習慣だね」

アンゲルは絶句し、また考え込んでしまった。
こつちに来た管轄区人が、教会に監視されてるのを知らないんですか？

と言いつづになったが、不安になるだけだろうと思ひ、黙っていた。

こんなにあつぴろげに「誰も信じていない」なんて言えるということは、もう知っているのかもしれない。

でも、そうなら、俺が悩んでるのは何のためだ？

何で俺は襲われるんだ？

「なあ」

裏口の方向から声がした。宅配のアルバイトが入って来た。

「君はアルターの学生だろう？ロハン見なかった？」

「いや……」

『会ったけど酔っぱらってました』と言っているのだろうかとアンゲルが悩んでいると、

「もう何か月も見かけないんだよ。クビにしてやるって店長が怒ってたから、会ったら伝えといてくれない？」

「……会えたらね」

アンゲルは重い気分のため息をついた。

バイトを休んで、しかも飲んで2400クレリン（アンゲルはこの金額がどうしても忘れられなかった）も使って……。

学費ちゃんと払ってんのか？何してんだ本当に！

そうだ、この前取られた18クレリンもいつか返してもらおうぞ！
そついきり立ったアンゲルは、バイトの帰りに、前にロハンにからまれた所に行ってみたが、いなかった。店の様子をつかがっていると、前に会ったエプロンが出てくるのが見えたので、あわてて走って逃げだした。また金を取られては困るからだ。

そして、帰り道ではまた、誰だかわからない視線を感じた。周りの人間がみんな、こちらの様子をうかがっているような気がする……。

電車の中をきよろきよろと見回す。管轄区の間人らしい人影はない。

嫌だな、ずっとこんな心配をしながら暮らすのは……。

アンゲルは重い気分で、窓の外の夜景を眺めていた。故郷にいたころには想像もできなかったような、街頭や、窓の明かりの、はてしない連なり……。

なぜだろう？まるで街そのものが、なんの命も持たない、無機物であるかのような静けさ、冷たさを、人に感じさせるのは……この無数の明かりの下には、たくさんの人が、生きた人間が、それぞれに人生を送っているはずなのに。

10 - 21 エレノア オペラを見に行く

エレノアは一人で、ポートタウンに向かっていた。オペラの公演を見るためだ。

イシユハ歌劇の古典とも言える、今のエレノアの心情にふさわしい悲劇で、代表曲も「私には絶望しかない」という、どん底の歌である。

エレノアは、オペラの間中、ずっと泣いていた。

公演が終わっても、エレノアは立ち上がれなかった。

涙が止まらなかった。

やっぱり歌いたい！

でもどうしたらいいんだろう？

いつまでもいつまでも嗚咽が止まらないので、不審に思った会場の係が近づいてきて、エレノアを外のタクシー乗り場まで連れて行ってくれた。

「彼氏にでも置き去りにされたのかい？」

不審に思った運転手が聞いて来たが、エレノアはずっと泣きじゃくっていて、何も答えられなかった。

首都。

驚くほど日差しが強く、さわやかな日で、大学周辺の林や公園には、散歩や日光浴を楽しむ人であふれていた。

アンゲルはタフサの病院で実習（患者の話し相手になるだけだが）をしていた。この日話した患者はほとんど、がんや内臓疾患など、精神以外のいわゆる「本当の重病」（イシユハでは、心理学を軽視している人がよくこういう言い回しをするのだが、アンゲルはこの言い方が好きではなかった。精神病だって立派な「本当の病気」じゃないか！）の患者が多かった。中にはもう手の施しようのないほど病気が悪化した人もいた。それでも、アンゲルや他の看護士には、驚くほど明るく、礼儀正しく接する人ばかりだ。

死を前にすると、人間変わるんだろうか。それとももともと礼儀正しい人たちばかりなのかな？

そんなことを考えながら廊下を歩いていた時、

キヤアアアアア！！！！

という、すさまじく甲高い悲鳴が、窓の外から聞こえてきた。

廊下を歩いていた別な職員が、窓を開けて外を覗いた。

「おい！どうした？」

「カラスが私の頭を蹴ったのよ！！！！」

女性の声と、おもしろがってけらけら笑う子供のような声が同時に聞こえた。

「なんだ、そんなことか……おい、君、どうした？」

職員が見つけたのは、真っ青な顔で廊下につづくまっているアンゲルの姿だった。

悲鳴。

悲鳴だ。

下を向いてうずくまっているアンゲルが見ていたのは、廊下の床ではなかった。

台風で飛ばされた屋根、妹、近所の人々。

そして、その後、何日も続いた、悲鳴。

悲鳴。

それは、止まらずに、アンゲルの頭の中で聞こえ続けていた。

台風のアとの、あの悲惨な叫び声。

誰にも、どうすることもできなかった、あの。

看護師が、アンゲルをベッドのある部屋に運んだ。しばらく横になっっているように、と言い残して出て行った。

30分ほど経って、ようやく震えがおさまった。

「大丈夫？」

「大丈夫です。すみません」

「先生を呼ぶ？」

午後から、タフサと話をする予定になっていた。

……何も聞かれたくないな、今日は。

アンゲルは、タフサには知らせないようにと看護師に頼み、今日は帰るとだけ言って、ふらふらと外へ出た。

何年も前だ、もう過ぎたことだ。

なんで今頃思いだすんだ？

きつと疲れてるだけだ、最近忙しすぎたからだ、きつとそうだ。

アンゲルは自分にそう言い聞かせようとした。しかし、頭の隅が、締め付けられているように痛みだし、寮に帰って横になっても治らない。

もしかしたら、自分もまだ、あのときのショックから抜け出せていないのか？

ふと、そんなことが浮かんだ。

本に手を伸ばそうとして、ソファから落ちた。

頭がよけいに痛む。

がきながら起き上がると、エブニーザが部屋に戻って来た。

「どうかしましたか？」

「何でもないよ」

「台風ですか」

アンゲルがぎよつとしてエブニーザを見ると、いつも通りの顔色の悪い無表情だった。

「まだ去ってないんですね」

「どういう意味だよ」アンゲルが声を荒げた。「お前に何がわかるんだよ？」

「僕には何も分かりません。見えただけです」

「見えただけってどういう……」

アンゲルが抗議しようとしたが、エブニーザは無視して自分の部屋に戻り、すばやく、しかし、音はたてずにドアを閉めた。

まだ去ってない？

どういうことだ？何を見たんだ？

……いや、ばかばかしい。てきとうに言ったのかもしれない。台風の話は、ヘイゼルにでも聞いたんだろうな。だからってお前に何ができるんだよ？

でも。

なぜ、あのときの光景が、悲鳴が、今になっても自分に取りついてるのか？

妹が飛ばされるのを、自分は黙って見ているしかなかった。

あの悲鳴も、どうすることもできなかった。

あまりにも無力だった。

自分にできることなんて何もなくて……。

そういえば。

アンゲルはそこで気がついた。

「……無力感か？」

エレノアも、今まで努力してきたことが、全部無駄になったと思ってるんじゃないか？

これから何をしても、変わらないと思っ
ているんじゃないか？
もちろん、台風の犠牲者と、音楽では、
全然種類の違う話だ。
アンゲルはソファーに座りなおし、目
を閉じて下を向いた。

駄目だ。

一度『何をしても無駄だ』と思
い込んだら、そんな状態になつた
ら、外から何を言っても通じない。
たとえ女神の言うことだって、
通じない。

でも、本当にここで終わりか？

違うよな。

まだ出来ることはいくらでもあるはず
だよな？

でも、それって、どうしたら実感で
きるんだ？

理論的には、人生はまだ続いてる、
可能性はいくらでもある。

でもなぜか「もう駄目だ」という声
が聞こえ続けて、根拠もない
のに、やたらに頭に強く響いて来る
……。

実際、死んだ人は戻って来ないし、
失敗を取り消すことはできな
い。

でも。

何だ、何かが引つかかっているみたい
だ。

何かがわかりそうなのに、はつきり形
が見えない。

アンゲルは頭を抱えたまま、ずっと、
考え込んでいた。答えは全
く出てこなかったが、『考えろ！』と
自分に言い聞かせていた。

今、この問いに応えておかないと、前
に進むことができないと思
ったからだ。自分も、エレノアも。

10・23 エレノア 音楽科のブース

エレノアは、久しぶりに音楽科の練習ブースに向かっていた。
もうずいぶん練習してないわ……。

昼過ぎまで寝ていたので、まだ頭がぼんやりしていた

図書館の近くを通った時、やはりカフェにアンゲルがいるのが見えた。大きな本で顔が隠れていたが、よれよれの服装と本の題名（心理学がどうか）からアンゲルだとわかった。

……どうして毎日カフェにいるんだろう？

エレノアはしばし立ち止まり、カフェのほうを眺めながら考えた。
やっぱり私を待っているんだろうか？

本気で心配しているんだろうか？それとも、心理学を取っているから、患者として興味があるのかしら？好奇心？

アンゲルに話しかけようか迷ったが、カフェに近づく勇気が出なかった。

また泣き出してしまったら困る……。

エレノアは歩き出した。アンゲルが本の影でこっそりため息をついているのも知らずに。

考え事をしながら音楽科の校舎に入ったエレノアは、受付の、

「あら、久しぶりね」

という笑顔にも反応せず、無言でカギを受け取ると、ブースに向かった。

途中で、あの、けたたましいギターの早弾きが聞こえた。エレキギターで、遠慮なくポリリズムを出しているらしく、防音ブースの外にまではつきり音が聞こえてくる。

ケンタは、私がいじけて寝てる間にも、ずっと練習してたんだわ……。

大きく引き離されたような気がした。エレノアは指定のブースまで早足で歩き、入るなり、思いつきで 適当なメロディーを歌った。

最初は全然声が出なかった。

やっぱり、毎日練習しないとだめなんだわ……。呼吸ってどうするんだっけ？

昔教わった腹式呼吸や、立つ姿勢などの指導を思い出しながら、エレノアは少しずつ、声を出す感触を思い出そうとしていた。

古い歌を、出来る限りの呼吸で、四角い空間に放つ。

もう何も起こりませんように。

打ちのめされた人間が願うのはそれだけ

浮かれ騒ぐ時 心安らぐ時は

もう過ぎた

そうして私たちは 現実を知り

空想の樂園から

少しずつ離れて行った

悲しむことはない

苦難を分かち合う人が傍にいる

それだけで、世界はどんな樂園より

優しい光に満ちて行く

もろ手を挙げて 奇跡を願う

そんな時代はもう過ぎた

これからは 愛しい人と

自らの手で 荒野を歩き始める時

エレノアは歌うこと、歌詞の世界に夢中になって、自分自身の存在をすっかり忘れてしまった。今までの事をすっかり忘れてしまい、歌うことそれ自体に幸せを感じていた。

我に返った時にはもう夜中の2時を過ぎていて、受付がブースのドアを叩きながら『もう閉めますよ』と叫んでいるのが聞こえた。

アンゲルはいつも通りカフェでエレノアを待っていた。が、久しぶりにエレノアが近寄って来たのがわかると、とたんに意識しすぎて、

「やあ〜元気？」

と変な声を上げてしまい、

なんだそのわざとらしい言い方はあああ！！！！

と頭の中で自分に文句を言っていた。

しかし、エレノアはあまり気にしていないようだ。

あいかかわらず表情がないが、前よりは顔色がいいように見える。

「一つ聞いてもいい？」

「何？」

「いつも勉強してるけど、こんなこと続けても無駄だと思ったことはない？」

アンゲルは返答に詰まった。

「歌を続けていていいのか、私、初めて迷ったの。今でも迷っているの。」

「なんで？」

「今は、ロックとか、ヒップホップの時代でしょう？」

「……そうなの？」

管轄区育ちのアンゲルには、ロックもヒップホップも何の事だか分らなかった。

「そうなの！」ちょっとうんざりした声でエレノアが言った。「オーディションも、イベントも、だいたいそんな感じよ。でも私の声はオペラなの。クラシックなの。オペラの声と他のジャンルの声は…違つものよ、発声と言うか、なんて言うか…わかる？」

「まあ…街中で流れてるうるさい音楽と、オペラの違いならわか

るよ」

「私には、その『街中で流れてるうるさい音楽』に合う声は出せないの。自分で作る歌もクラシックに近い……でも、そんな曲、今時聞きたがる人がいるのかしらって……」

管轄区ならいくらでもいるよ！！オペラが大好きな人ばかりだから！

とアンゲルは言いそうになったが、黙って考えているふりをしていた。

「だから、このまま曲を作って歌い続けていいんだろっかって」

エレノアが下を向いて黙り込んだ。

アンゲルは、個人的なことを話していいのだからと思いつつながら、余計なことかもしれないけど

と前置きをして、こんな話をした。

「台風で家の屋根が飛ばされた時、妹も飛ばされて亡くなったんだ」
エレノアの表情がかすかに動いた。

「でも俺は助かったんだ。親父が右腕で俺をつかまえて、左腕で柱にしがみついていたから、飛ばされずに済んだんだ。でも、妹は何日も後で、川に浮かんでるのが見つかった。誰だかわからないくらい、遺体が損傷してた。何日か経って、ようやくみんなが立ち直ろうとした時に、親父が『右腕が2本ほしかつた。そしたら、娘は死なずに済んだのに』って、変な目つきでつぶやいたんだよ。頭がおかしくなったのかと思っただけで、そうじゃなくて、自分のせいで娘が死んだと思っただけだ。助けられなかったから」

本当はそれだけではなく、絶え間なく聞こえてくる『叫び声』で、家族全員が神経をやられていたのだが、それは話さないことにした。
「お父さんのせいじゃないわ」

エレノアの視線が、今日はじめで、アンゲルのほうに向いた。

「だよ。右腕が2本ある人間なんているわけないし……でもさ、エレノアも同じことを言ってるよ」

「えっ？」

「自分にはないものばかり見てる」アンゲルは笑った、少しわざとくさかった。「確かにロックの声は出ないかもしれないけど（俺もちょっと想像できないんだよね、エレノアがロックを歌ってる姿って）だからって、エレノアがもともと持っている才能までつぶすことはないだろ？クラシックでいいじゃないか。ない声なんて求めないで、自分の声で歌えばいいんだよ、自分で曲作ってさ。俺はそう思うけど」

アンゲルは話しながらエレノアの様子を見ていたのだが、表情がほとんど変わらない。

聞こえてないのかな？余計なお世話だったか？

突然、エレノアは無言で立ち上がったかと思うと、ふらふらした足取りで席を離れて行った。

「エレノア？」

後ろ姿に向かってアンゲルが呼びかけたが、エレノアは振り向かずに行ってしまった。

ああ、やっぱり俺、余計なことを言ったのか？

アンゲルは落ち込んで、テーブルに突っ伏した。

それから考えた。

どうしてエレノアに、そんな暗い話をする必要があったのかと。

自分の事を知ってほしかっただけか？俺は。

何考えてんだ？

寮に帰ったエレノアは、テーブルで読書をしているフランシスに向かつて、

「セカンドヴィラに行きましょう」

と言った。フランシスが驚いて本を置いて立ち上がった。エレノアはさらに続けた。

「コンサートのドレスを買わなきゃ。もう日にちがないし」

「コンサートに出るのね！」

フランシスが歓喜の声を上げると、エレノアは無表情のままどこを尋ねた。

「明日、行ける？」

「行けるわよ！もちろん！今デザイナーに電話するから！」フランシスが電話に飛びついて、凄まじい速さで番号を押した。「フランシス・シグノーよ！明日そっちに行くから、デザインを出しておいて！え？エレノアのドレスに決まってるでしょ！前から言ってるじゃないの！人の話の何を聞いているの！？それと……」

すさまじい早口で、興奮気味にまくしたてているフランシスを置いて、エレノアは自分の部屋に戻り、ベッドに座って、長い間さぼっていた譜面読みを始めた。

自分にはないものを見る。

エレノアは、アンゲルに言われたことを思い出していた。

自分の声で歌えばいいんだよ。

言われなくてもそんなことはわかっているし、前から自分の声で歌って来たのに。

どうしてだろう？

心が騒ぐ……。

10 - 26 コンサートにて

一週間後。

首都で、才能ある若手音楽家を集めたコンサートが開かれ、エレノアもそこに参加するため、大ホール裏の楽屋に入っていた。そこにはフランスと、アンゲル、エブニーザがいた。

「夕方からパーティーですからね」フランスがうきうきとしゃべりだした「なんとって、イシユ八最大の新人発掘イベントなんですからね。ここで成功して、有名にならなかった演奏家はいないのよ！もうエレノアは成功したも同然よ」

「そんなことないわよ」

エレノアの表情は硬かった。ここ数日、前のように泣きだすことはなかったが、やはり元気いっぱいというわけにはいかないようだ。「ヘイゼルはどこに行ったのかしら？あいさつにも来ないなんて失礼ね」

「来られてケンカされても困るだろ」

アンゲルがそう言うと、フランスが釣り上がった目で睨みつけてきた。

「あの〜」エブニーザが小さな声でつぶやいた「そろそろ僕らは席に戻った方が」

「あんただけ戻れば？」

「おいおいおい」

出る出ないで3人がもめ始めた時、係り員が楽屋に飛び込んできた。

「エレノア・フィリ・ノルタさんは？」

「私ですけど」エレノアが軽く手を上げた「何か？」

「お母様が」係り員は肩で息をしていた「大けがをしたそうです」

「えっ？」

「高いところから転落されて、重体だと連絡がありました。タヴィ

ールの競技場です」

エレノアが立ちあがって、外に飛び出そうとしたが、フランシスが飛びついて止めた。

「どこに行くのよ!!」

「だって、お母さんが!」

「歌い終わってからにしなさいよ!」

「でも!」

「だめよ!あなたの将来がかかっているんですからね!親ならそれくらい承知してるはずでしょ!」

「でも!」

アンゲルは呆然としながら、3人が揉めているのを見ていた。

母親が重体?コンサートの前に?

なんだよその、下手な芝居みたいなベタな展開は!?

そして、すぐ我に返った。エレノアがフランシスを振り切って、廊下に飛び出そうとしたからだ。

「エレノア!」

アンゲルはエレノアの前に立ちはだかり、まっすぐに顔を見て、こう言った。

「歌えよ。ヤエコ・ノルタだって芸人だろ?今、エレノアが客を置いて逃げたら、お母さんは怒るぞ」

エレノアは歌った。大成功だ。直前に慌てていたとは思えない出来だった。会場は総立ち、拍手は何分も鳴り響いた。その間エレノアは退場できず、ずっと舞台の上で、笑顔を保ったまま礼をしたり、客に向かって手を振ったりしていた。

プロなんだなあ……。

アンゲルはその様子をステージ袖から見ている。今日の前に見ている余裕たっぷりの歌手と、彼が知っている、最近の怯えたエレノアのイメージが、どうもうまく結び付かない。

やっとステージから解放されたエレノアは、着替えもせずに廊下を走り始めた。アンゲルは慌てて追いかけて、外でタクシーを拾っているエレノアに追いついた。

「大丈夫だよ」

何の根拠もないなあと自分でも思いながら、アンゲルは励ましの言葉を探していた。

「見たことないけど、ヤエコ・ノルタだってプロなんだろ？今日のエレノアみたいなの」

エレノアは黙りこんでいる。心配なのだろう。

「こんなことがあっても、何事もなかったかのように歌えるなんてすごいことだよ。エレノアは本当にプロなんだよ」

エレノアはやはり黙りこんでいる。アンゲルも話すのをやめた。これ以上話し続けると、どんどんわざとらしくなっていく気がしたからだ。

一時間半ほど経って、タヴィールの競技場に着いた二人を待っていたのは、入口に立って、ばつが悪そうに笑っているヤエコ・ノルタ本人だった！

「お母さん!？」

「来ちゃったんだねえ」ヤエコがすまなさそうに話し始めた。「何でもないんだよ。サーカスのテントの屋根がちよつとめくれてはがれたから、直してやるうと思ってね、骨組みを伝って登って行ったらさあ、ことのほか太ってたんだねえ、それか、骨組みが弱ってたのかねえ。突然テントごと崩れちゃってさあ……」

「……お怪我は？」

ポカーンとしているエレノアの代わりに、アンゲルが尋ねた。

「腰打っただけ。昨日はかがめないくらい痛かったけど、今困るのは靴ひもが結ばないくらいかねえ……イテテ」

ヤエコが前かがみになつて顔をしかめながら笑った。

「なんともないのにさあ、サーカス一味が慌てちゃってさあ、あげく支配人まで『お嬢さんに連絡しましたよ!』なんて言うからびっくりしちゃって……エレノア」

エレノアの肩がびくつと震えた。

「あんだ、首都のコンサートに出たんだよね？まさかおっぽり出してこなかったらうね？」

エレノアが不安そうにアンゲルの方を見た。アンゲルはなぜかそれが嬉しかった。

「ちゃんと歌ったわ」

「俺も聴いてました」

「そりゃあ良かった」

ヤエコがにんまりと笑った。そして、せつかく来たんだから泊まっていきなさいと二人に勧めたが、父ミゲルがアンゲルを『今にも殴りかかりそうな目』で睨んでいたので、エレノアは『授業があるから』と言って帰ることにした。

二人は、疲れた顔で帰りの列車（タクシー代はもう残っていないかった）に乗った。

「伝言ゲームだな、人から人に伝わっていくうちに、どんどん話が大きくなっていくんだ、きつとそれだ」

勝手に解釈して、一人納得しているアンゲルの隣で、エレノアは

列車の窓の外（夜遅いので真っ暗だ）を見ながら、

「二人で列車に乗るのは2回目ね」

と、つぶやいた。

「えっ？あ、ああ、そういえば、そうだね」

アンゲルは、アルター行き列車の中で、エレノアに初めて会ったときのことを思い出した。

信じられないくらい、美人に見えたっけ。

隣のエレノアは、窓の方を向いているが、ガラスに移っている顔はあいかわらず、少し疲れた様子だったが、美しかった。

じーっと見つめていると、

「あのときは、こんなことになるとは思わなかったわ」

エレノアが低い声を発したので、アンゲルはあわてて視線をそらした。

「そ、そうだなあ、まさか同じ部屋にあんな変人どもがいるとは！」

気まづくなったアンゲルは、ヘイゼルとエブニーザの最近の話を、わざとふざけた調子で話し始めた。

でも、エレノアはぼんやりしていて、話が聞こえていないのか、ずっと生返事だった。

10 - 28 エレノア アンゲルをコンサートに誘う

数日後。

バイトが久しぶりに休みになり、ソファーで本を読みながらうとうとしていたアンゲルは、電話の音で跳ね起きた。

「アンゲル？」

エレノアからだった。

「そうだけど、何？」

「この前は、ありがとう」

「……何が？」

「何がって……コンサートよ。あなたがいなかったら歌わずに飛び出していたかも」

「俺じゃなくて、組みついて止めようとしたフランシスにいいなよ」

「フランシスは、パーティーがつぶれたって未だに文句言ってるわ」

「らしいなあ……」

ここ数日、アンゲルはヘイゼルから、フランシスが用意していたパーティ会場の話をさんざん聞かされていた。わざわざ大きなパーティ会場を予約していたのに、当のエレノアがいなくなってしまったため、急遽フランシスとクーだけで飲み会を始めてしまったのだが、そこで起きたのはやはりヘイゼルとフランシスの大げんかだったという……。

「あさって、クラシックのコンサートがあるんだけど」

「また出るの？」

「私が出るんじゃないの。聴きに行くのよ」

「ふうん」

「一緒に行かない？」

アンゲルの思考が止まった。

「……ハロー？アンゲル？聞こえてる？」

「聞いてるよ」

「嫌ならいいけど……」

「いや！行く！行きます！絶対行く！」

「じゃあ、あさつての夕方6時に、アルター駅の前で」

「6時にアルター駅、わかった」

電話は切れた。

エレノアが。

エレノアが俺を誘ってる！！

有頂天になったアンゲルだが、またこっそりヘイゼルがついてきたら困るので、誰にも話さないことにした。そして、

『どうか、どうか、この日だけは、ファナティ教の変な信者に出会いませんように』

と本気で祈った。

しかし。

おい、俺は女神を信じてないんだぞ？

いったい誰に向かって祈ってた？アホか？

すぐに自分を責め始めた。

と同時に、こんなに切実な気分になったのは久しぶりだとアンゲルは思った。最近、管轄区の間からも何も言ってこないし、襲われてもいなかった。もちろん、狙われていることに変わりはないのかもしれないが……。

それにしても、俺は誰に向かって祈ってたんだ？

いや、それより、俺は何を着て行くんだ？

スーツはどこだ！？

そこでアンゲルは始めて気がついた。クラシックのコンサートなんてものに行くことが、自分にとっては初めての経験だということに。

何か、マナーとかあったっけ？

とりあえず服はスーツだろ？あと何かあったか？

エレノアの前で失敗なんてしたくないからな！

「今日は一人芝居の日かな？」

いつのまにか、ヘイゼルがドアの前に立っていた。

「さっきから一人で小躍りしているようだが……」

「スーツ貸して……!!」

アンゲルがヘイゼルに飛びついた。

「コンサートで着てたスーツはどこへ行ったのかな？」

「あんな安物じゃ駄目なんだよおおお!! クラシックっばいやつない?」

「クラシックこそあんな安物で十分ではないかな?」ヘイゼルが露骨に呆れた顔をした。「何かな? 教会っ子はクラシックを宗教儀式か何かと勘違いしているのかな? 特別なスーツが必要だとしても? アホか」

「……ほんとにあのスーツでいいと思う?」

「あーうるさい」

ヘイゼルは自分の部屋に戻ろうとしたが、

「あ! お前また俺を騙そうとしてるだろ!」アンゲルがまた飛びかかった。「この前のパーティーでも、俺だけ普段着でみんなスーツ着てたんだぞ!!」

「それとこれとは別な問題だ!」

「お前は信用できないんだよ! テイツシュファントム!!」

「ティツシュファントムじゃない! シュツティファントだ!!」

二人は言い合いをしながら部屋を駆け回り、隣の部屋から『うるさい』と苦情が入ったため、また職員が部屋に現れてお説教を『今度やったら罰金取るぞ』と宣言をして出て行った。

そして当日。

アンゲルは仕方なく、自分の安いスーツを着て、アルター駅に向かった。エレノアは、ドレスではなく、いつかの乗馬服に似た、女性用のスーツを着ていた。

似合うなあ……。

「何を着て行けばいいのかわ、すごく迷ったよ」

アンゲルがそう言うと、エレノアはきよとんとした顔をした。

「何って、スーツしかないじゃないの。クラシックのコンサートなんだもの」

「そうだけど……」

この日、アンゲルを悩ませたのは、意外にも、コンサートそのものだった。

楽器演奏はすばらしいが、歌い手の声がかごとく甲高く、オペラに慣れているはずのアンゲルでさえ、その声が苦痛だった。

なんだよこれは、プロの演奏なんだろう？

一人くらいエレノアより上手い歌手が出てきてもいいだろう？

そう思って耐えていたのだが、出てくるのはかごとく、

『ミス金切り声』

そして、

『ミスター絶叫』

……だった。

幸い、エレノアは演奏に夢中で、となりのアンゲルが、耳をふさいで苦痛にうめいていることには、全く気がつかなかった。

演奏が終わってから、二人は、会場のラウンジでコーヒーを飲みながらこんな話をした。

「今日のコンサートはクラシックでしょう？みんな熱心に聞いてい

るわよね。それが、歌になったとたん、現代的なロックやポップスじゃないと『ダサイ』っていうことになるのはどうしてなの？」

「どうやら、エレノアはまだ『ロックとポップス』が気になっているらしい。」

「うーん、俺にはよくわからないけど」

「アンゲルはやたらに耳を触りながら話していた。まだ耳がジンジンと痛んでいた。」

「正直言って、今日歌ってた歌手の声なんて、みんな、ただの金切り声にしか聞こえなかった」

「アンゲル！」

「エレノアがあわてて回りを見回す。演奏者に聞かれたら大変だ！

」でもさ、エレノアの声はちゃんと歌に聞こえるし、素晴らしいと思うよ。俺は音楽なんてわからないけど。フェスティバルで聞いた時も、レコードで聞いたプロの声だと思ったんだ。別世界の人間みたいだと思った。本当に。お世辞でも何でもなく。何か特別なものを持つてる。そういう声だよ」

「アンゲルがとぎれとぎれにこんなことを言ったとき、エレノアが、きよとんとした、何か、わかるような、わかってないような、微妙な顔をした。」

「俺、なんか変なこと言ってる？」

「何でもないわ」

「エレノアは、ガラス張りのロビーの外に顔をそむけた。」

「二人が会場を出ようとすると、オーケストラの団員らしき格好の男が、エレノアとアンゲルの間に割って入って来た。」

「君、エレノア・フィリ・ノルタだね？」

「え？ええ……」

「エレノアは戸惑ったような声で答えた。」

「何だ、ナンパか？俺は無視か？」

「アンゲルが、突然現れた男の背中を睨みつけていると、

「私はヘニング・エツカー。オペラハウスの運営の一人だ」

「オペラハウス？」

エレノアの声が高くなった。あこがれのオペラハウスの人間だ！

「君の歌をコンサートで聞いた。ぜひ入団テストを受けてほしい」

エッカーが、名刺と応募用紙をエレノアに渡した。

「待ってるよ」

キザったらしい態度でそう言うと、エッカーは出口の方に消えて行った。

「今の聞いた？」

アンゲルが半ば飛びあがりながらエレノアの前に回ると、エレノ

アは、書類を持ったまま、呆然と立ち尽くしていた。

「受けるよ！絶対受ける！こんなチャンスめったにないぞ！」

アンゲルは一人、興奮して叫んだ。

エレノアはやはり動かない。

囚人11番 25番 独房

25番が、独房に入るなり、

「悪いが、こないだのシャープペンは没収だ」

と言った。

「なぜ」

「雑居の連中がケンカしてね」25番が呆れたような、面白がっているような顔をした「逆上した奴が、あれの先で相手の目を突き刺したのさ」

「そんな理由はばかげてるな。鉛筆でも同じことはできるだろ」

「ばかげてるさ」25番がぎよろっと目を回して見せた「しかし、ここで、ばかげていないことなんてあるかね？」

「それもそうだな」

私は黙ってシャープペンを25番に渡した。

彼は懐にそれをしまいこむと、かわりに、鉛筆を2本、取り出した。

誰かが使っていたのだろう、長さが奇妙に異なっていて、表面の塗装がこすれ落ちていた。

がさがさの紙も何枚か、渡された。

この国の製品は何でも質が悪い。

もちろん、ないよりはましだ。

これで、続きを書くことができる。

続きを聞かせようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5457q/>

アンゲルとエレノア

2011年10月28日10時15分発行